

博士論文

**韓国チョッパン居住者の生活と地域福祉
ー 散在型チョッパン地域を中心にー**

2015 年度

日本女子大学大学院人間社会研究科社会福祉学専攻

黄英遠 (Hwang, yeong-weon)

<目次>

序章	8
第一節 研究の背景と目的	8
1. 韓国における居住脆弱層の問題	8
2. 研究の対象としてのチョッパン	11
3. 本研究の目的 - 「チョッパン生活」とは何か	14
第二節 研究の方法と視角	16
1. 研究方法と対象	16
2. 考察の視点	19
第三節 本論文の構成	25
 第一章 居住脆弱層問題に関する先行研究	 26
第一節 韓国における居住脆弱層に関する先行研究	26
1. 居住脆弱層への注目	26
2. 韓国都市研究所による居住脆弱層に関する実態調査	29
3. 先行調査研究からみたチョッパン居住者の生活	31
第二節 日本における居住脆弱層に関する先行研究	37
1. 居住脆弱層問題と調査研究	37
2. 無料低額宿泊所等の新たな問題	42
 第二章 韓国における社会福祉及び地域福祉事業の展開	 48
第一節 居住脆弱層向け政策の現状	48
1. 韓国の住宅政策の変化	48
2. 公的団体による居住支援	49
3. 非営利組織による居住支援	52
4. チョッパン居住者向け支援の最前線「チョッパン相談所」	54
第二節 韓国における対象別社会福祉制度および事業の現状	58
1. 低所得層を対象とする主な制度及び事業	58
2. 老人を対象とする主な社会福祉制度及び事業	66
3. 障害者を対象とする主な社会福祉制度及び事業	69

第三節 チョッパン居住者の利用できる主な社会福祉施設	71
1. 社会福祉施設の種類	71
2. 釜山における社会福祉施設の現況	76
第四節 韓国における地域社会福祉計画	77
1. 地域福祉計画の概要	77
2. 釜山広域市における地域福祉計画	78
第三章 散在型チョッパン居住者の生活	80
第一節 釜山市と散在型チョッパン	80
1. 釜山広域市の概況	80
2. チョッパン相談所がある二つの区	90
3. 釜山市の「チョッパン」の散在性	96
第二節 過去:チョッパンに来るまで	103
1. お金がなく、流れついたところ	105
2. 情報—チョッパンを知った経緯	113
第三節 現在:チョッパン暮らし	116
1. 日課と生活圏域	116
2. 基礎生活保護者であること—仕事と健康	128
3. チョッパンの選択、チョッパンの隣人や家主との関係	132
4. 転居	140
5. 家族関係	145
6. 人付き合い	148
第四節 未来:今後の生活について	151
1. 心配事	151
2. 希望していること	152
第四章 散在型チョッパン居住者の生活Ⅱ	154
第一節 元チョッパン居住者たちが語るチョッパン生活と現在	154
1. チョッパンへの流入	154
2. 買上賃貸住宅への転居と、そこでの生活	159
第二節 チョッパン運営者が語るチョッパン居住者たち	169
第三節 ゴシウォン居住者と居候の場合	175

第四節 ある日のチョッパン相談所とその周辺	180
第五節 チョッパン相談所のスタッフが語るチョッパン居住者たち	185
1. チョッパンの生活、そして買上賃貸住宅への転居	185
2. チョッパン居住者たちの勤労・自活	188
終章 散在型チョッパンの生活と地域福祉の課題	192
第一節 考察	192
1. 「働くこと」と制度及び福祉資源の活用	192
2. チョッパン生活者の生活戦略：‘節約’ ‘時間つぶし’ ‘情報’	193
3. 散在型チョッパンと生活圏の‘個別形成’	195
4. チョッパンからの居住上向の可能性：二つの生活戦略	196
5. 誰かを遠ざける：自分自身の排除	198
6. これからも‘一人暮らし’：心配事	200
第二節 地域福祉としての課題	201
＜引用文献＞	204

＜表目次＞

表 1	韓国における居住脆弱層の現況(名)	10
表 2	チョッパン居住者の現況(2011. 6)	14
表 3	研究範囲の違い	16
表 4	インタビュー対象と項目	18
表 5	参与観察のうち、参加の程度による分類	18
表 6	韓国における都市貧困居住地の変化	27
表 7	居住脆弱層の特徴	30
表 8	チョッパン居住期間	32
表 9	社会保障としての住宅施策について	43
表 10	単身世帯の住宅手当支給額	44
表 11	韓国における住宅政策の変化	49
表 12	居住福祉事業	50
表 13	居住脆弱層向け居住支援事業の推進現況	52
表 14	居住分野における主な非営利組織の活動	53
表 15	チョッパン相談所の運営現状	55
表 16	チョッパン相談所の事業内容	56
表 17	2014 年度国民基礎生活保障制度の給与額(単位：ウォン)	59
表 18	2014 年度標準世帯(4人世帯)の最低生計費費目別構成	60
表 19	教育給与の内容(2014 年度)	60
表 20	緊急福祉支援制度の所得・財産基準(2014 年度)	60
表 21	緊急福祉支援制度の支援内容(2014 年度)	61
表 22	医療給与の受給者の類型及び選定基準(2014 年度)	62
表 23	医療給与受給者の本人負担額(給与に該当する項目にあたる)	62
表 24	伝統的社会福祉サービスとの違い	63
表 25	高齢者総合見守り事業のサービス利用額(政府支援金および本人負担額)	64
表 26	基本給与上の本人負担金	64
表 27	自活給与の基準	66
表 28	老人就業事業の類型	67
表 29	老人長期療養保険制度上の等級区分	68
表 30	障害者年金支給額(単身世帯の場合)	69
表 31	障害児童手当(単位：ウォン/月)	70
表 32	韓国における社会福祉施設の種類	72
表 33	地域自活センター現況(2014 年 5 月時点)	73
表 34	社会福祉館の主要事業	74
表 35	釜山における社会福祉施設の現況(2014 年 1 月基準)	76
表 36	第 2 期釜山広域市地域社会福祉計画の重要推進事業	78
表 37	各市道における市・郡・区の数(2013 年 12 月基準)	81
表 38	行政区域別 面積及び人口(2014. 1. 1 基準)	83
表 39	釜山広域市における行政区域及び人口現況(2013 年度)	85
表 40	釜山広域市の産業大分類別事業体及び従業者数(2012 年度)	86
表 41	財政自立度及び社会福祉予算の割合(2013 年度)	87
表 42	釜山広域市の基礎生活保障受給世帯及び受給者(2011 年度)	88
表 43	釜山広域市の住宅現況及び普及率(2012 年度)	89
表 44	釜山のチョッパン現況(2014 年 6 月基準)	96
表 45	チョッパン居住者の現況(2014 年 6 月基準/単位：名)	96
表 46	釜山地域チョッパンの暖房現況(2014 年 6 月基準/単位：チョッパン数)	96
表 47	各チョッパン相談所がサービスの提供している区別チョッパン居住者現況	97
表 48	鎮区チョッパン相談所がサービスの提供しているチョッパン居住者の区別・洞別分布	98

表 49	住宅類型別チョッパン居住者現況	100
表 50	インタビュー対象(概要)	104
表 51	買上賃貸住宅居住者の概要	155
表 52	インタビューしたチョッパン相談所のスタッフの概要	185

＜図目次＞

図 1	ホームレスの流出入の状況	42
図 2	買上賃貸住宅の入居手続き	51
図 3	運営機関を通じた買上賃貸住宅の入居手続き	51
図 4	野宿人施設の構成(2012. 6. 7 以前)	54
図 5	同 (2012. 6. 8 以後)	55
図 6	自活勤労事業のシステム	65
図 7	韓国における行政区域	82
図 8	人口密度(2013 年度)	83
図 9	全国財政自立度(2013 年度)	84
図 10	全国基礎生活保障受給世帯及び人数(2012 年度)	84
図 11	釜山広域市の行政区域	84
図 12	釜山広域市における釜山鎮区の位置	90
図 13	鎮区チョッパン相談所付近の地形図	91
図 14	鎮区チョッパン相談所付近の交通	91
図 15	釜山広域市における東区の位置	93
図 16	東区チョッパン相談所付近の地形図(相談所との距離)	94
図 17	チョッパン居住者の区別分布図	97
図 18	A さんのライフストーリー	111
図 19	B さんライフストーリー	111
図 20	C さんライフストーリー	111
図 21	D さんライフストーリー	111
図 22	E さんライフストーリー	111
図 23	F さんライフストーリー	112
図 24	G さんライフストーリー	112
図 25	H さんライフストーリー	112
図 26	D さんの一日	116
図 27	E さんの一日	117
図 28	A さんの一日(日曜日)	118
図 29	F さんの主な生活圏	126
図 30	A さんの主な生活圏	127

＜写真目次＞

写真 1	チョッパン集中型地域の様子(ソウル及び大田市)	12
写真 2	チョッパン散在型地域の様子(釜山広域市)	12
写真 3	板子村(パンジャチョン)の様子	28
写真 4	ビニールハウス村の様子	28
写真 5	地下居住の様子	28
写真 6	釜山鎮区チョッパン相談所付近	92
写真 7	東区チョッパン相談所付近	94
写真 8	東区チョッパン相談所の外観	95
写真 9	東区チョッパン相談所の内部の様子	95
写真 10	大田市とソウルのチョッパンの様子	101
写真 11	釜山市のチョッパンの様子	101
写真 12	O さんが運営しているチョッパン近所の市場	169
写真 13	N さんが運営しているチョッパン	170

序章

第一節 研究の背景と目的

1. 韓国における居住脆弱層の問題

1) 新たな居住問題の登場

韓国の大都市には「板子村（パンジャチョン）」¹、「ダルドンネ」、「サンドンネ」²と呼ばれる低所得層が密集している居住地が1950年代初³から広範囲にわたり存在していた。このような地域は、貧しい人々が集まって暮らす都市下層の象徴地域であったが、都市開発によりこれらの地域は徐々に解体され減り続けている。しかし、低所得者が減少しない以上、当然ながら他の安価な居住を求める人々があり、そのために、従来の低質な居住形態に加えてビニールハウスを改造し居住として使用するなどの新しい形態の不法な不良居住地⁴が現れ始めた。

こうした新たな形態の不良居住地は、板子村やサンドンネに比べ大規模化・集団化されないため、当時は社会的な注目を集めるには至らなかった。しかし、1997年末に勃発した経済危機以降、急増する路上生活者に対する支援政策を施行する過程において、ビニールハウス、ゴシウォンのような都市貧困者が暮らしている劣悪な居住形態が多様に存在していることが注目されるようになった。当時、韓国政府は急増するホームレスのため、冬季対策の一環として施設を建てたが、その施設へ予想をはるかに上回る人々が集まった。そのなかには都市貧困者が宿泊する「チョッパン（一種の未認可宿泊所）」から来た人々があり、その数が予想以上に多かったこと、またチョッパンの人々はホームレスと同様に深刻な貧困を経験している階層であることが認識されるようになった（韓国都市研究所 2005）。さらに、ホームレスに対する無料給食やシェルターを提供するなどの対応策は一時的支援策に過ぎず、ビニールハウス、ゴシウォン、チョッパンなどを含めた居住問題が解決されていない状態では、これ

¹粗末な素材で建築された住民の集住地である。

²直訳すると「ダルドンネ」とは月のまち、「サンドンネ」とは山のまちを意味する韓国語表現である。前者は月に最も近いということ、後者は高い丘陵地の斜面に林立しているということを比喻しており当時の代表的な都市貧困層の集住地を象徴している。ほとんどの場合は国公有地の割合が高く、それを無許可で占有していた（全泓奎、2004）

³ 韓国戦争（1950～1953）以降、大都市に押し寄せた避難民と離農民が河川や山の斜面などの遊休の国・公有地を無断で占有し、大量の板子村を形成していた（国土研究院 2006）。

⁴ビニールハウスは建築許可を受けずに居住用として建設された不法建築物であり、他人の土地を無断で占有する特徴がある。非登載・無許可で形成された居住地であるため、居住者の所有権および占有権が法的に保証されない（大韓住宅公社 2005）。

らの人々の根本的な生活安定は実現しないという事実があらためて浮き彫りにされた。また、上記の経済危機は、それまで自力でようやく居住問題を解決してきた低所得層全般の居住不安も高めた。その結果、これまで放置されてきた低所得層の住宅問題や劣悪な居住環境を改善するために政府の介入が求められることになった(ユ・ヨンウ 2009)。韓国ではこれらを居住脆弱層、非住宅住民などと呼んでいる。

たとえば、韓国の公的扶助制度である「基礎生活保障制度」では、住民登録の問題により所得及び資産調査が困難であり、また頻繁な移動などの理由で管理が難しい人々を、これまでは基礎生活保障から除外していたが、2007年から「特別保護対策」の対象とした。これらにはビニールハウス、パンジャクション居住者、チョッパン居住者、シェルター居住者、更生保護施設居住者、ホームレスなどが含まれており、これらを居住が一定的ではない「脆弱階層」と分類している。韓国都市研究所と国家人権委員会は、社会的に“住宅”と認められないほどの劣悪なところで生活している人を意味する「非住宅住民」という用語を用いている。この用語は政策的にも学術的にも明確に定義された概念ではないが、広義のホームレス、隠されホームレスを含む、早急な対応が必要な居住貧困層を把握するための用語として使用されている。なお、統計庁が5年ごとに実施している人口住宅総調査で「住宅以外の住まい」という用語を使用しているなど、多様な用語が使われているが、本研究では韓国の基礎生活保障制度に基づき、不安定・不適切な居住環境で暮らしている人々を「居住脆弱層」と呼ぶことにする。

2) 居住脆弱層の問題

韓国では、これまで住宅問題に対する政府の介入は主に住宅の量的不足問題を解消することに重点が置かれてきた。たとえば1989年から1992年にかけて政府が推進しようとした「住宅200万戸建設計画」は、低所得層のための住宅供給戦略と永久賃貸住宅の供給案を含んでいた(キム・ヘスン 2012)。2003年には住宅供給率が100%を上回り、住宅不足問題が解消されたと言われたが、むしろ、これに対して質的問題は解消されていないという反論があった(ホン・インオク 2006)。住宅供給率が100%を超えても過密住宅やトイレ、台所などの施設が備えられていない住宅が相当存在しており、住宅供給率の指標では居住実態を適切に評価することができず、適切な政策も立てられないとの批判もあった(ナム・ウォンソップ 2006;キム・ナングン 2003)。

そこで、住宅の量的確保だけではなく質的保障の側面から低所得層向けの住宅政策の効率化をはかる必要性を感じた韓国政府は、居住権保障の前段階として2000年に人間らしい生活を営むための最小限の生活基準である「最低住居基準」を設け、2004年に法制化した。

しかし、法制化された「最低住居基準」は、面積及び部屋の数と施設基準が含まれているが、国連人間居住会議などで「適切(adequate)」と言われる居住権の要素の一部だけが規定されたものに過ぎ

ず、居住権の全体を包括しているとはいえない⁵。

また、この中で言及されている構造・性能・環境基準は、基準自体が曖昧であり、実際にはそれが適用されていない状況であると批判されている(ユ・ヨンウ 2009)。このような韓国の住宅の量と質に関する議論のかたわらで、「住宅」というカテゴリーにも入らないところで暮らしている居住脆弱層の問題が浮き彫りにされだしたわけである。

2011年にはじめて行われた韓国都市研究所⁶の居住脆弱層全国実態調査によると①野宿、浮浪者・野宿者施設・PC房(ネットカフェ)、②チョッパン、旅館・慮人宿、③ビニールハウス・コンテナ、④ゴシウォン(考試院)などで生活している居住脆弱層が全国に20万人以上になると推定されており、全国人口の0.5%、ソウル人口の1.2%が居住脆弱層であると述べている(表1)。

表 1 韓国における居住脆弱層の現況(名)

①	野宿	2,600	②	チョッパン	6,600
	浮浪者、野宿者施設	11,000		旅館、慮人宿	13,000
	PC房(ネットカフェ)等	60,000	④	ビニールハウス	3,000
③	ゴシウォン	120,000		コンテナ	14,000

ソ・ジョンギョン(2012)より

すなわち、住宅一般の量的解消と質的の向上の問題とともに、実は表1のように「住宅」とは言えないところで生活をしている居住脆弱層の問題をどう考えるのか、という重要な問題が明らかにされ始めたのである。このような居住脆弱層に対し、国家人権委員会(2008)は基本的権利としての居住権を強調している。

居住が権利とみなされる理由の一つは、それが様々な権利を実現するための基本的な土台であるからである。安定的で適切な居住は、適切な生活のために必ず必要なものであり、単なる‘生存’のためではなく、人間らしい生活ができるようにする基本的な土台である。住

⁵ 国連人間居住会議(Habitat II Agenda)によると‘適切な居住’は①どんな形態の居住であっても居住に関する一定の法的な保護がされていること、②水、暖房、衛生設備などの基本的な資源へアクセスする権利があるということ、③負担可能なコストで居住できるということ、④健康に影響しないような居住条件であること、⑤不利な立場の人々(高齢者、障害者、災害被害者など)は一定の優先的な配慮を受ける権利があること、⑥雇用、医療、学校などへのアクセスを保障するものであること、⑦文化的なアイデンティティを考慮した家であることを意味する。

⁶ 韓国都市研究所は、1988年から都市貧困地域の現場で主に活動してきた「都市貧民研究所」が、既存の現場性に政策研究機能を強化するために、関連分野の進歩的な学者を迎え入れて1994年10月に創立された。本研究所は韓国都市が抱える問題を科学的に分析して、これを解決するための合理的な政策モデルを提示し、市民が主体となる都市社会運動を模索するための、民間研究機関(非営利社団法人)である。設立以降、毎年このような目的に合う内部基本研究課題及び政府、自治体などの外部受託研究課題を遂行しているなど、韓国の都市研究分野においては先駆的で代表的な研究機関である。

居は生活の基盤であり、人間が享受できるほとんどの権利は、居住の影響を受けると言える。居住権が実現されないと、他の権利の保障も難しくなると言える。そのため、居住権は、基本的な人権の一つであり、他の権利と分離され存在しえないとされる(国家人権委員会 2008)。

だが、このような権利の強調にもかかわらず、韓国において新たな形の居住脆弱層問題は拡大しつつある。

2. 研究の対象としてのチョッパン

本研究は居住脆弱層の中でも居住極貧層と言われるチョッパン居住者に焦点を当てる。

チョッパンは保証金を必要とせず、家賃は日払いまたは月払いという形で運営されている未認可宿泊所である。“チョッパン”という言葉の由来は明確に知られていないが、‘チョッ’という言葉の辞典的意味をみると‘割れた物の一部’‘小さい’との意味を現している。また、‘バン’と言う言葉は‘部屋’を現している。‘チョッパン’は‘断ち割って使う部屋’、または一般的な部屋より‘はるかに小さい(狭い)’という、形と形成過程を現している言葉であると思われる(ソウル市・保健福祉部 2000)。

チョッパンに住む人々は働く場所を求めて頻繁に住む場所を変える傾向がある。また、普段は路上生活をしているが、臨時収入を得たときや、天候が悪いときなどに限ってチョッパンを利用する者もいる。そのため、居住の安定性は著しく低いといえる。このように、移動性の高い日雇などの不安定な職業「階層」をその顧客としている「営利事業」としての宿泊業という特徴がある。この点では、日本の簡易宿泊所(ドヤ)に類似しているが、日本のドヤが、いちおう旅館業法で規制されているのに対して、チョッパンは未認可宿泊所であり、営業行為が行われているにもかかわらず、制度的な規制が行われていない「行政的に放任、黙認」されている宿泊所である(国家人権委員会 2004)。

家賃は、日払いで約7,000～8,000ウォン(600～700円)、月払いで15万～20万ウォン(13～18千円)程度要する。部屋の広さは約1.7～3.5㎡で、大人ひとりがやっと横になることができる程度であり、高さは1.7～2メートル程度で身長の高い人なら立つことも難しい高さである。部屋の中には、テレビや荷物を置く棚、布団などがある。トイレ、洗面所、台所は全て部屋の外にあり、共用となっている⁷。また、ほとんどの場合、建物は老朽化し、煉瓦やセメントブロックの構造が多いが、土や板で造られたものもある。このようなチョッパンは、劣悪な住宅環境それ自体が大きな問題である。だが、後に詳しく述べるが、階層の下落移動する人々にとっての「最後の寝床」としての役割や、野宿からのステップアップの「踏み台」という二つの役割を果たしているという議論もある。

チョッパンへの流入経路は二つのタイプに分けられる。一つは農村の貧困化などにより都市に流入

⁷ チョッパンにより規模は異なるが、10室以下のチョッパンから、大型の場合は数十室まである。

する経路、もう一つは都市での生活が困難になり、家族関係も解体された人々が流入していく経路である(国土研究院 2006)。地域によってチョッパンの分布形態は異なるが、ソウルや大田市においては一定地域に集中する傾向が見られ、密集型チョッパン地域を形成している。これに対して、釜山市では住宅地の中に、何戸かのチョッパンが現れる散在型となっている。その様子は、以下のようである(写真1、2)。

写真 1 チョッパン集中型地域の様子(ソウル及び大田市)



写真 2 チョッパン散在型地域の様子(釜山広域市)

2-1 釜山港がある西区の草梁洞にあるチョッパン

	: A ビルのすぐ後ろにある チョッパン
	: 上の写真「A」の拡大
	: A ビルのすぐ後ろにある チョッパン(B)

2-2 ^{ブック}^{グボドン} 北区の龜浦洞にあるチョッパン(Cの建物)



上の〈写真1〉はソウル及び大田市にあるチョッパン地域であり、チョッパンが密集して形成されている様子である〈写真2〉はチョッパン散在型地域である釜山市にあるチョッパンの様子であるが、2-1、2-2の写真のように集中型地域と比べ、商業地区や一般住宅街の中にチョッパンが単独で、あるいは数件で散らばっている⁸。

ところで、ナム・ギ Chol(2012)によると、チョッパン居住者のうち50.9%が基礎生活保護受給者であり、7.7%は住民登録もされていない(表2)。特に、釜山の場合は、2014年6月時点でチョッパン居住者の71.6%が基礎生活受給者である(釜山広域市内部資料 2014)。なお、全国チョッパン相談所協議会(2012)によると、高齢化が進んでいるといわれるチョッパン生活者たちは、家族がいない単身世帯が93%で、平均年齢は55歳、そして15%ほどが障害を持っている。配偶者の有無をみると既婚(52%)と未婚(48%)がほぼ同じ割合であるが、既婚者のほとんどが離婚などの家族解体を経験(45%)したことがあるか、家族との連絡もほとんどしていない。これらの59%は仕事がなく、仕事があっても日雇労働(28%)に従事しており、全体の76%が月平均収入50万ウォン未満で、収入源も基礎生活保護(56%)が最も多い部分を占めている低所得層である。このようにチョッパン居住者は劣悪な居住環境で、最低限の生活水準の確保もできない居住極貧層である(韓国都市研究所 2011)だけでなく、仕事や家族から切り離されて、基礎生活保障制度に依存せざるをえない貧困層であるといえる。

なお、全泓奎(2011: 83)はチョッパンに居住する状態を「不安定で不適切な住まいに居住する状態(insecure and inadequate housing)」と述べている。EUの公式の諮問機関でヨーロッパ規模のNGOである「ホームレスと共に活動する各国組織のヨーロッパ連合体(FEANSTA)は、「ホームレス状態」の定義として下記のようなカテゴリを提示している。すなわち、「ホームレス状態」とは、①野宿状態(rooflessness=rough sleeping)、②家のない状態(houselessness)、③不安定で不適切な住まいに居住する状態(insecure and inadequate housing)、④不安定居住状態(insecure housing)、⑤不適切な住まいに居住する状態(inadequate housing)の五つの状態を含む広義の概念である。FEANSTAによる定義は広範囲に亘っており、現に路上にいる人々に加え、より包括的かつ予防的な概念となっている(全泓奎 2011)。この定義からすれば、むしろチョッパン居住者は広義のホームレスであるが、本研究ではホームレス問題一般としてではなく、不安定・不適切な住まいに居住している居住脆弱層としてチョッ

⁸ 釜山におけるチョッパンの散在性については第三章で記述する。

パン居住問題を取り扱うことにする。

表 2 チョッパン居住者の現況(2011. 6)

地域		建物数	チョッパン数	生活者数	住民登録		生活保護	
					有	無	受給者	非受給者
ソウル	永登浦	67	541	506	470	36	354	152
	南大門	33	708	755	738	17	293	462
	龍山	45	975	875	564	311	366	509
	鍾路	87	757	670	733	-	231	439
	東大門	56	527	314	276	38	105	209
仁川(インチョン)		256	353	646	646	0	138	508
大田(デジョン)		375	1498	900	894	6	772	128
大邱(デグ)		136	1461	814	760	54	394	420
釜山	鎮区	47	462	276	272	4	185	91
	東区	91	656	347	180	1	163	18
合計		1, 193	7, 938	6, 103	5, 533	467	3, 001	2, 936

ナム・ギチョル(2012)より

3. 本研究の目的 - 「チョッパン生活」とは何か

チョッパンは劣悪な居住環境などでそれ自体が居住福祉の大きな問題であるが、野宿あるいは関連施設から脱却する場合の「踏み台」の役割や、居住水準の下降移動を経験する低所得層が野宿という極端な居住貧困状態に陥らないようにする「安全網」の役割を担っているとの肯定的な見方(韓国都市研究所2000；国家人権委員会 2004；全泓奎 2004；国土研究院2008；キム・ソンミ2011)がある。

国政調整会議の調査報告資料(2007)によると、チョッパン居住者がチョッパン生活をする理由として、事業失敗などの所得減少が21.9%、路宿生活から抜け出すためが17.9%、疾病や事故などにより財産がなくなったからという回答が13.9%の順に示された。チョッパン居住者の中で58.4%は野宿経験があり、さらに最近1年以内に野宿経験がある人も37.2%にのぼる。つまり、ここからも野宿者とチョッパン居住者は密接な関連性があることが再確認できるという(ユ・ヨンウ2009)。この関連は、チョッパンの2つの機能を示唆している。一つは野宿や施設の生活から抜け出して、屋根のあるところで生活を営もうとする人々が最も手軽に利用できる場所がチョッパンである。チョッパンは、それ自体は適切な居住といえない問題があるが、他方で野宿や施設生活を繰り返す悪循環を断ち切って、一般生活へ戻るための「踏み台」の機能を内包していると考えられる。

また、チョッパン居住者の中には、経済水準の悪化や家族崩壊が原因でチョッパンに移住してきた者もいる。この場合、チョッパンのように最低限度の居住費だけで居住できる安い住宅が存在するために、野宿という極端的な居住貧困状態に陥らずにすんだと考えることも出来る。その意味では、

チョッパンは野宿に陥る寸前の貧困層の最後の寝床として、一種の「安全網」の役割を担っていると
する、もう一つの見方が成り立つ。

だが、このような「踏み台」や「安全網」としての「チョッパン」の居住者は、基礎生活保障利用
者が多いなど、少なくとも「踏み台」の機能は十分働いているようには見えない。また、その「安全
網」という観点からみた場合も、チョッパン自体の居住環境の質の悪さをどう考えるかという問題が
ある。さらに、キム・ソンミ(2007)の調査では66.3%が、ハ・ソングユ(2007)の調査では48.7%が、
全泓奎(2007)の調査では約半数が継続的にチョッパン地域で暮らしたいと答えており、居住期間が長
期化するなどの結果がでており、それはなぜかを問う必要がある。

このため、本研究は「踏み台」や「安全網」仮説の検証ではなく、以下の三つの目的を設定した。
第一にチョッパンに暮らす人々の「チョッパン生活」を彼ら自身と周辺の関係者(チョッパン経営者
や相談所スタッフ)の言葉で記述し、またチョッパン相談所や近隣での参与観察から、その特徴を明
らかにすることである。また第二に、それらの人々は、なぜチョッパンに来たのか、将来はどうした
いと考えているか、すなわちその過去と未来について、チョッパンに暮らす人々と、すでにチョッパン
から抜け出た人々から直接彼ら自身の考えを聞き出すこと。第三に、既存の制度や支援の現実と、第
一と第二で明らかになる彼らの制度利用の実際を踏まえて、チョッパンに住む居住脆弱層に対して、
どのような社会支援の展開がありうるかを、地域福祉の観点から検討することである。この場合、本
研究は散在型チョッパンとして区分される釜山市を取り上げるので、商業地区や住宅街の中に点在す
るチョッパンで暮らす人々の生活圏が地域社会の中にどう形成され、どのような社会関係がそこに展
開されているかを地域福祉の観点から検討することが出来ると考える。

第二節 研究の方法と視角

1. 研究方法と対象

研究方法は、釜山市における散在型チョッパンをフィールドとした質的研究である。まず、この質的研究の前提として韓国の居住脆弱層の現状とその支援に関する研究のレビューを行う。

質的研究は、チョッパン居住者とその関係者に対するインタビュー調査と、チョッパン相談所・チョッパン近隣地域の観察から構成される、エスノグラフィーの方法で実施する。

本研究の目的は実際にチョッパン居住者や彼らと関わり合う人々の「考え」やそれを取り巻く地域や制度環境から、チョッパン生活とは何かを探索的に探ろうとするものであり、その目的から、このような質的研究が有効であると考え⁹。

エスノグラフィーは文化を記述する仕事であり (James P. Spradley=2010 : 21)、「現地の人のももの見方、彼らの生活とのかかわりを把握し、彼らが彼らの世界をどう見ているかを真に理解すること」であるといわれている (P. Spradley=2010 : 3)。このようなエスノグラフィーは、研究対象の単位によってマクロエスノグラフィーとマイクロエスノグラフィーと区別される。箕浦康子 (2009 : 11) はマイクロエスノグラフィーについて「人々の生きている意味世界を微細なユニット、たとえば、母子間の言葉の掛け合いとか対面的な日本語教授場面とか、教室での生徒同志のやりとりとか、一人一人の行動や語りなどに着目して読み解く」と述べている。本研究はチョッパンと、そこに居住する人々が日々通うチョッパン相談所を中心とするやや狭い社会単位を取り上げるので「マイクロエスノグラフィー」の手法を採用した (表 3)。

表 3 研究範囲の違い

研究範囲	研究対象となる社会単位
マクロエスノグラフィー	複雑な社会
	複数のコミュニティ
	単一のコミュニティ
	複数の社会集団
	単一の社会集団
	複数の社会的状況
マイクロエスノグラフィー	単一の社会的状況

James P. Spradley (2010 : 39) より

⁹ 質的研究は“どのような”という質的な問いに答えるのに適する方法であり (澤田・南2001)、未開分野の探索的研究において有効であると認められている (能智2000)。「散在型チョッパン居住者の生活」という先行研究の少ない分野における探索的研究である本研究にはふさわしい研究方法であると思われる。

とはいえ、このマイクロなフィールドを構成する外的な環境として、韓国の基礎生活保障制度やチョッパン相談所などの制度枠組みがあり、またすでに述べたような経済危機や家族の変貌などが背景にある。チョッパンという小さなフィールドは、そうしたマクロな制度枠組みや社会構造の中に成立しており、その意味で言えば、箕浦の言うようなマイクロマクロ連携モデルとして考察する必要があることはいうまでもない。

後述するように、チョッパン居住者の生活は、チョッパンとチョッパン相談所が、その中核となっている。現在チョッパン相談所が設置されている全国の5ヶ所の地域のうち、ソウル、大田、仁川の場合は密集型チョッパン地域であり、大邱、釜山は散在型チョッパン地域として知られている。従来のチョッパン研究のほとんどは韓国の首都である「ソウル」地域の研究であり、ソウル以外でも主に「集中型」と呼ばれるチョッパン地域の研究がほとんどである¹⁰。

本研究は、チョッパンが分散されている地域のチョッパン生活に着目した。散在型と集中型では、チョッパン生活者の生活、社会関係などに異なる特性があるかもしれない。たとえば、見えないバリアに取り囲まれている密集地域と比べて、普通の住宅や商業地域の中に分散されている散在型の場合は、チョッパン居住者以外の住民との交流があるかもしれない。とりわけ、釜山地域のチョッパンは主要道路、鉄道駅、地下鉄駅の付近や交通が便利な草梁洞（釜山駅付近）、水晶洞（釜山鎮駅付近）、チャチョンドン佐川洞（釜山鎮駅付近）、ボミルドン凡一洞（中央市場・デパート付近）、ボムチョンドン凡川洞、ブンジョンドン釜田洞、ジョンボドン田浦洞などに広く分布している。また、釜山港に隣接している中区の中央洞（ジュンアンドン）、ヨウンジュドン（ソク）、西区の忠武洞（チュンムドン）、草梁洞（チョリャンドン）、南富民洞（ナムブミンドン）と快法洞（クエボップドン）（バスターミナル付近）、北区の龜浦洞（ブックグボドン）（龜浦駅付近）などにも分散している（全国チョッパン相談所協議会内部資料2009）。このような一般住宅地や市場、商業地区などのなかに「溶け込んでいる」チョッパンでの生活は、どのようなものなのだろうか。

本研究のインタビューと参与観察の対象はチョッパン居住者だけではなく、チョッパンからステップアップして買上賃貸住宅に住んでいる人々、チョッパン運営者、チョッパン相談所のスタッフを対象とし、様々な角度からチョッパン生活を捉えるように工夫した（表4）。なお、チョッパン居住者と買上賃貸住宅居住者、ゴシウォン居住者へのインタビュー内容はチョッパンへ来るまでの過去、またはチョッパンに来てから買上住宅やゴシウォンへ移るまでの過去、現在の日々の暮らし、未来をどう考えているか、という時間軸を設定して、主に表4の項目に沿った半構造化面接で自由に語って貰った。

¹⁰ チョッパン居住者を対象とした質的研究のうち、散在型チョッパン地域の居住者を対象とした研究は見当たらない（韓国国会図書館の資料基準、2014. 3. 1時点）。

表 4 インタビュー対象と項目

対象	インタビュー項目
ア. チョッパン居住者(8名)	<ul style="list-style-type: none"> ・「過去－現在－未来」の時間的な枠組み -過去：居住歴、職歴、家族歴、野宿経験、チョッパンへ来た理由、買上住宅へ移った経緯 -現在：日々の暮らし、毎日行くところ、社会関係、就労・経済状況、制度利用、健康・医療など -未来：どうしたいか、チョッパンを出る可能性(現在の居住地から居住向上をする可能性)
イ. ゴシウォン居住者(1名)及び居候(1名)	
ウ. 買上賃貸住宅居住者(3名) (元チョッパン居住者)	
エ. チョッパン運営者(2名)	<ul style="list-style-type: none"> ・チョッパン運営のきっかけ、チョッパン居住者に対する認識、関係、運営上の問題など
オ. チョッパン相談所のスタッフ(3名)	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事のきっかけ、チョッパン居住者に対する認識、関係、業務の方向、仕事上の問題など

もう一つの手法は‘参与観察’であるが、これはチョッパン相談所とチョッパン・チョッパン近隣において消極的な参加(passive participation)を通じて行った。

チョッパン相談所は、狭い面積であるが、事務室内には5～8名程度が座ってテレビを見たり、会話をしたりすることができる小さなテーブルやソファがあって、お昼過ぎから夕方までの間はいつも何人かのチョッパン居住者たちがそこで時間をすごしている。この事務室内で、居住者たちと相談所のスタッフなどの様子を観察する‘消極的な参加’を行った。

消極的な参加を行うエスノグラフィーは、活動の場面にはいるが、そこに参加したり、人々とかかわったりはあまりしない。すべきことは、そこで起こっていることを観察し記録するための「観察の場」を見つけることである。消極的な参加者が社会的状況の中で何らかの役割をとるとすれば、それは「見物人」か「傍観者」、または「あたりをぶらつく人」といった役割だけである(P. Spradley 2010:75)。本研究は、チョッパン相談所内での様子、チョッパン内での居住者と運営者の様子、チョッパン近隣の様子を消極的な参加を通じて観察した(表5)。

表 5 参与観察のうち、参加の程度による分類

かかわりの程度	参加のタイプ
高い	完全な参加(complete participation)
	積極的な参加(active participation)
	中程度の参加(moderate participation)
低い	消極的な参加(passive participation)
かかわらない	参加しない(non-participation)

James P. Spradley(2010 : 74) より

インタビューは2012年7月末から8月末までの期間に集中的に行った。参与観察は2011・2012年度の7月から8月まで不定期的にチョッパン相談所とチョッパン地域、チョッパンを訪問して実施したが、集中的にはインタビューとともに2012年7月から8月まで行われた。

インタビューの場所は、チョッパン相談所内にある相談室、本人が居住しているチョッパン、あるいは近くの道端など、研究協力者が希望する場所で行われた。チョッパン居住者8人のうち、5人は自分の部屋(チョッパン)へ訪ねることを嫌がったので、彼らの希望によりチョッパン相談所内の相談室で行った。2人は自分が居住しているチョッパンで、1人はチョッパン 近くの道端でインタビューを行った。また、本人希望により、ゴシウォン居住者(1名)、居候(1名)、買上賃貸住宅居住者(3名)、チョッパン相談所のスタッフ(3名)はチョッパン相談所内の相談室で、チョッパン運営者(2人)はそれぞれのチョッパンへ訪問しインタビューを行った。なお、前述したようにインタビューは半構造化面接で自由に語って貰い、時間は1回あたり70分~120分程度行われており、協力者によって1~2回実施された。

さらに、インタビュー内容は研究協力者たちの承諾¹¹を得たうえで録音し、その内容は削除や変形なく逐語録を作成し、その逐語録を元に記述し考察する。また観察内容は研究ノートに記録した後、インタビュー内容とともに記述・考察の素材とした。

インタビュー協力者の選定は、一部は参与観察をするため訪ねたチョッパンで巡り合ってインタビューを行ったが、居住者たちのプライバシーを侵害する恐れもあり、知らない人に対する拒否感などの問題で現実的に限界があったため、主にチョッパン相談所から紹介して貰った研究協力者にインタビューを行った。

2. 考察の視点

本研究は、釜山のチョッパン地域及びそこでの生活者の生活をエスノグラフィーの手法で記述していくが、これを考察していくに際して、先にも述べたようなマクロな視点との連携が必要である。これらを含めて、本研究では、あらかじめ以下の三つの視点を設定しておく。一つは‘居住と地域福祉’という視点、もう一つの視点は‘社会的排除’のプロセスの視点、三点目はチョッパン居住者自身の「生活戦略」という視点である。

1) 居住と地域福祉

「住む」という行為について「住宅」、「住居」、「すまい」、「家(いえ・うち)」「居住」などの言葉が使われている。一般的に日常生活において「住宅」と聞くと建物の構造などのハードの側面の意味を思い浮かべることが多い。一方、「すまい」や「家」という使い方をすると「住宅」というハー

¹¹ インタビュー承諾書にサインを貰って実施した。

ドの側面よりも、より深くそれぞれの人間の住宅内における生活模様が映し出されたものとして捉えられ、ソフト面に重きがおかれる(飛永高秀2008:79)

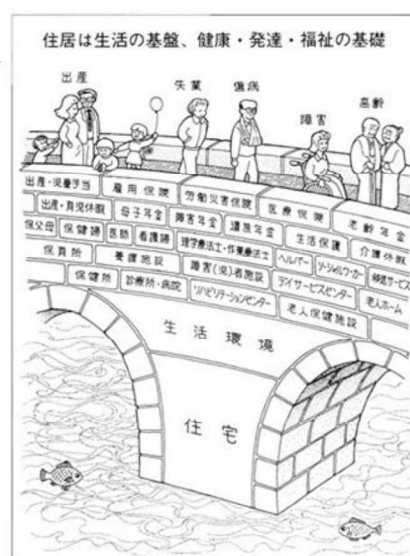
早川和男(1997:128)は「住居」を、人間生存の基盤であり福祉の基礎であると、以下のように表現している。「人生は一つの橋をわたるのに似ている。人としてこの世に生を受け、たえざる自己発達を遂げ日々の充足を感じながら生活を送ることが、生き甲斐であろう。だが、ながい人生にはさまざまな生活上の事故が起きる。傷病、障害、失業、老齢のようなとき、暮らしを支えてくれるのが福祉国家における社会保障・社会福祉等の諸制度である。だが、劣悪な居住条件の下ではこれらは十分機能しない」。

加えて「居住」とは、生活の場である住居やコミュニティを拠点とする人間の生活を包括的に捉えようとする視点が強い。「居住」には、持続的にある場所に住み暮らす、定住という意味が含まれている。「居住する」ことは「生活する」ことであり、すべての社会生活の根本にある人間の営為である。したがって、安全かつ平穩に、人間としての尊厳をもって生活する場所をもつことは、居住権として認められた基本的人権であり、その権利はだれもが住みなれた地域で安心して暮らし続けられる仕組みづくりをめざす地域福祉の基本的要件といえるだろう(小田川華子 2008:112)との指摘もある。

ここでいう地域福祉は、施設中心であった福祉から、地域に視点を移した‘あらたな社会福祉’であるとされる(右田紀久恵 2011:96)が、韓国における地域福祉の概念は、外国から流入され使われており、韓国独自の地域福祉の概念ではない。韓国の「地域社会福祉論」の教材を中心とし、地域社会福祉の理論的知識と価値を分析したヤン・マンジェ(2012:105)の研究によれば、韓国の地域社会福祉は主に日本と米国の研究に依存している。その中でも日本から流入された概念がよく使われているという。ところが、日本でも地域福祉は統一された概念ではなく、地域福祉を捉える視点・立場によってさまざまな見解に分かれている。

まず、地域福祉の用語は「地域(社会)」と「社会(福祉)」との合成語であり、ここでいう「地域」に対応する英語として「コミュニティ(communitiy)」が使われているが、そもそもコミュニティ(communitiy)という言葉は、ラテン語のコムニス(communis)を語源としており、「共同の」とか「公共の」といった意味をもつ単語である。

社会福祉事典によると、コミュニティは2つの主要な構成要件からなる概念であるという。1つは一定の空間的範囲をもつという意味での‘地域性’であり、もう1つは人々の社会的共同生活という意味での‘共同性’である。コミュニティは、前者を強調すると地域、近隣、居住地などの‘場所’としての『地域社会』に関わる意味合いをもつが、後者を強調すると、同じ信念や関心を共有してい



出所：早川和男(2011:84)

る人々がつくる『共同社会』の意味合いになるという(社会福祉事典 1999 : 326)。なお、阿部志郎は、「ここでいう地域とは地理的区域を指すのではない。共に重荷を担い合う活動の範囲を言うのである。Neighborとはnigh(neas)とgebur(farmor)の合成語で、近くの農民の意味であるが、隣りとは、距離的に近いだけでなく、心と心の結び合った仲間になることである。自分たちの住んでいるところを住むに価するところにする努力によってコミュニティは生まれる。したがって、コミュニティの規模は行政区画によって決められるのではなく、それは、住民の生活圏であり、共同行動が可能で、相互に知り合い、ぬくもりを感じられる範囲と言うことになる。つまり、コミュニティとは単に快適な生活をエンジョイする場ではなく、人間が人間を相互に守る場と認識するところから始まる(阿部 2011:58)」と述べている。また、地域福祉を「地域内の公私の機関が協同し、各種社会福祉のための施策・施設などの資源を動員することによって、地域の福祉ニーズを充足するとともに、住民参加による社会福祉活動を組織し、地域の福祉を実現してゆく具体的努力の体系(阿部 2011 : 53)」とも述べている。

右田紀久恵(2011:96)も地域福祉を「あらたな質の地域社会を形成してゆく内発性(内発的な力の意味であり、地域社会形成力、主体力、さらに、共同性、連帯性、自治性をふくむ)を基本要件とする。この内発性は、個レベル(個々の住民)と、その総体としての地域社会レベル(the community)の両者を含み、この両者を主体として構築するところに地域福祉の固有の意味がある」と記述している。

上のように、地域福祉の概念においては地理的意味合いよりも、共同性を、その実現においては住民参加及び連帯性が強調されている。しかし本研究では、チョッパンという劣悪な居住の場所、またそれが密集したり散在したりしているという意味での「地理的意味合い」にも注目し、その上で連帯性・関係性に基づいた「地域」の概念が、チョッパン居住者たちの地域生活の中に形成されているかどうかを問うてみたい。

2) 社会的排除論

居住脆弱層が不安定・不適切な住居で生活するようになった背景としての彼らの人生の軌跡を把握する視角として「社会的排除」論を取り上げる。

社会的排除という用語は、1980年代のフランスにその源泉をもち、その後ヨーロッパ全体に広がって、ヨーロッパ連合の社会政策を基礎付けてきたタームである。欧州委員会(EU)が、1992年に発表した、『連帯の欧州を目指して：社会的排除に対する闘いを強め、統合を促す』という文書では、社会的排除を脱皮し、社会的包摂(social inclusion)を達成することが、ヨーロッパ全体の政策課題として揚げられた。この文書では、社会的排除の概念は、「もっぱら所得を指すものとしてあまりにもしばしば理解されている貧困概念よりも明確に、社会的な統合とアイデンティティの構成要素となる実践と権利から個人や集団が排除されていくメカニズム、あるいは社会的な交流への参加から個人と集団が排除されていくメカニズムの有する多次元な性質を浮き彫りにする」と定義付けられている(宮崎理 2014 : 35)。

社会的排除概念の特質を貧困概念や剥奪概念と比較して検討する議論が数多く蓄積されているが、それらが共通して指摘するのは、社会的排除概念の問題認識が多次的かつ動態的であることであろう(福原宏幸 2007)。すなわち、それは一方では労働の不安定さや失業をふくみ、他方では福祉国家の危機、フレキシブルな「資本」蓄積のパターン、個人主義の台頭、そして第1次的連帯(たとえば家族のネットワークの弱体化などを通じた、社会的なつながり(social bonds)の崩壊をふくんでいる(Ajit S. Bhalla・Frederic Lapeyre=2005:2)。なお、貧困や剥奪が分配の側面を重視するのに対して、社会的排除概念は関係の側面も重視するため、分析の対象は個人・世帯だけでなくコミュニティや社会全体にまで広がる点も特徴的であるといわれる(福原 2007)。

岩田(2008)は、社会的排除を「社会諸活動への参加の欠如」と、以下のように述べている。

社会的排除という言葉は、それが行われることが普通であるとか望ましいと考えられるような社会諸活動への「参加」の欠如を、ストレートに表現したものである。別の言い方をすると、社会関係が危うくなったり、ときには関係から切断されている、ということである。貧困が、生活に必要なモノやサービスなどの「資源」の不足をその概念のコアとして把握するのに対して、社会的排除は「関係」の不足に着目して把握したものであることが強調されている。二つめに強調されているのは、社会的排除がさまざまな不利の複合的な経験の中に生まれているということである(岩田 2008 : 23)

このような社会的な排除は居住と密接な関係がある。岡本祥浩(2010)は「社会的排除を受けることによって不適切な空間で居住することになり、あるいは居住する空間の属性によって社会的排除を受けることがある」と述べており、韓国の国家人権委員会(2004)も「居住は社会的排除の原因と結果である」と述べているなど、居住は社会的排除と関係があると把握されている。さらに、岩田(2008)は「社会的排除はしばしば特定の集団を特定の場所から排除し、その結果排除される人々が特定の場所に集められる。また、その結果として、特定の場所それ自体が、排除された空間として意味づけられていく」と空間的な社会的排除について述べている¹²。

¹² たとえば、移民相の集積するフランスの校外、ゲットーと呼ばれるような場、あるいは日本では日雇労働者の労働市場であり簡易宿泊所の街である「寄せ場」などを例に挙げることができる。バーンはこの空間的側面が社会的排除をもっとも明瞭に示すと指摘し、二重のダイナミックス(動態)に注目する必要性を示唆している(Byrne 1999)。第一は、ジェントリフィケーションと呼ばれるような、都市再開発政策によって誘導された地域の高級化、中流化の動きである。第二に、こうしたジェントリフィケーションの動きは、当然人々の地域移動も促していく。高級化された地域は豊かな層をそのショッピングモールへ、オフィスへ、また居住者として誘導していく傍らで、貧しい人々は、貧しい住宅から、あるいは公園や駅舎から「立ち退き」を迫られる。立ち退きを迫られる人々は、立ち退き先からも再び移動を迫られるなど、頻繁な地域移動を経験する。もともとある空間に住まいを定めるといことは、安定した地域関係や社会資源、たとえば学校教育などへのアクセスの基盤になるものであるが、こうした頻繁な地域移動が子どもの将来まで含めて重大な影響を与えるとバーンは述べている。なお、この空間における排除と関わって、パーシスミスは、社会的排除とは社会的資本(ソーシャル・キャピタル)の不足と言い換えられると述べている。ここで社会的資源とは、①地域ネットワークの存在、②このネットワークへの市民の

韓国の居住脆弱層を対象とし、社会的排除と居住の関係に関して行われた研究として、全泓奎(2004)の研究があげられる。この研究では社会的排除と居住との関係に関する理論的レビューを行い、ここから「地域効果 (areaeffects)」と「住居と社会的排除との関係」について各々検討を行っている。このうち、特に、居住と社会的排除との関連性に着目し、ソウルを中心として、居住貧困層である 20 名へのインタビューを実施した¹³。全は、住居と社会的排除との関係を「社会的排除の原因としての住居」、「適切な住居や居住安定に関連するサービスからの排除」、そして「社会的排除の結果としての住居」の三つの関係のメカニズムの分析を行った。

まず、①「社会的排除の原因としての住居」においては、劣悪な住宅により不健康をもたらす「住居の貧困」と、生活拠点としての社会的関係を構築するための安定的な「場」の形成が阻害される「居住の貧困」の両者により居住貧困化がもたらされているという。前者では具体的に燃料及び暖房問題による不健康状態の誘発や家計費用の増加が居住貧困をもたらしていること、日照・通風不良と基本的な住居設備の不備、そして劣悪な周辺環境による生活環境の悪化や衛生問題をもたらす不健康と家計費用を増加させていること、また、劣悪な周辺環境や住居の構造的脆弱さによる各種事故の危険と居住貧困との相関について確認している。後者では、過密・狭小住居は不健康だけでなく、家族・社会関係の葛藤を誘発する問題を生み出しており、これらが貧困克服意志を低下させる要因としても機能しているという。次に、②「適切な住居や居住安定に関連するサービスからの排除」に関連しては、まず公共賃貸住宅ストックの絶対的な不足問題と、世帯の特性が考慮されていない画一的な住宅設備及び平面・規模等の問題点を指摘でき、また管理のレベルでは世帯所得が反映されない賃貸料体系の問題点があるという。また、低廉な民間賃貸住宅の不足問題が取り上げられ、これも居住貧困を悪化させる要因として作用するという。他方で、単身ホームレスなどの場合、そのような住居へのアクセスが最も閉ざされていることを指摘している。最後に、③「社会的排除の結果としての住居」については、雇用、健康、家庭崩壊、教育等、様々な領域からの社会的排除によってもたらされる居住貧困「化」のプロセスに焦点をあてて、事例分析を行っている。そこでは、所得源喪失、信用不良、健康と家庭崩壊、DV 等の「世帯内的な要因」と、社会的弱者に対する差別、再開発等による「世帯外的な要因」による居住貧困化、そしてそれらの要因が複合化されて居住貧困化につながっていくことが示された(全 2004 : 252)。

全(2004)の研究は、住居は社会的排除の「原因」となると同時に「結果」となり、また適切な住居や居住安定に関連するサービスから排除されているメカニズムを明らかにした、韓国の数少ない居住貧

参加、③地域アイデンティティや連帯感、④他のメンバーとの間の相互扶助や信頼の規範の存在、を意味している。社会的排除は、個人がその人生で利用すべき何らかの「資本」の不足、とくに地域空間に展開されるネットワークや、連帯感の不足として把握されることが少なくない(岩田 2008 : 23-30)

¹³ 地下住居(3名)、永久賃貸住宅(2名)、マンション博覧(1名)、月賃(1名)、開発地不良住宅(1名)、新発生無許可住宅(ビニールハウス、4名)、未認可宿泊所(チョッパン、3名)、脱野宿施設(1名)居住者や、家族シェルト(1名)、野宿者(2名)、20名を対象と実施した。

困層研究において意味のある研究といえる¹⁴。このような研究を参考としながら、社会的排除というマクロな視点と釜山のチョッパン居住者の生活やコミュニティのマイクロエスノグラフィを関連させながら考察してみたい。

3) 居住者の生活戦略

最後の視点は居住者自身の「生活戦略」という視点である。都市人類学を提唱する、イギリスの研究者 S・Wallman は、『Eight London Households』（日本語訳『8つの家庭の資源』で家庭問題を「資源」という新しい角度から捉え直している（Wallman, 1984=1996, 福井正子訳）¹⁵。この著書は、ロンドンのインナーシティに暮らす8つの家庭を取り上げ、それぞれの家庭のもつ資源とその管理運営者の戦略に着目し、それによって生活の危機の乗り越え方も異なっていることを示した。Wallman によれば、「資源(リソース)とは、人々の生活運営に利用されるいっさいのことがらをさしているが、資源は、土地・労働力・資本といった一般の経済学が対象としてきた物理的、構造的な資源(ストラクチャル・リソース)のほか、時間・情報・アイデンティティという生活の編成にかかわる資源(オーガナイズ・リソース)に大きく分けられる」という。すなわち、「生活とは、たんに住まいをさがしたり、建てたり、お金をつかっていろいろなことをしたり、食べ物をテーブルに並べたり、市場でものを買ってきたりすることではけっしてない。情報の所有と伝達、家庭に関係することの管理、個人の尊重と集団へのアイデンティティの是認、そうしたことが他に及ぼす相互関係といったこともひとしく対象となる」（Wallman=1996: 40, 福井正子訳）。ここで Wallman が強調しているのは、特に時間、情報、アイデンティティという、生活を編成する資源であり、たとえ物的な資源の欠乏によって家庭が危機に陥っても、編成資源を動員した生活の「管理」によって、それを乗り越えようとしているという。

インナーシティは、当時のイギリス・ロンドン市においては貧困を象徴する地域であるが、Wallman は、むしろネガティブに貧困生活を描くのではなく、それをどうやって乗り越えていくかの資源編成と主体的管理に着目したのである。本研究においても、チョッパン居住者たちの生活をその居住脆弱の側面だけで把握するのではなく、チョッパンや基礎生活保障制度、チョッパン相談所などの「ハード」な資源と、時間や情報、社会関係、などの「ソフト」の資源をどのくらい持っており、どのようにそれらの資源の選択や編成を「主体的」に選び取っているのかに着目してみたい。つまり、資源を中心としたチョッパン居住者の生活戦略に視点をあてる¹⁶。

¹⁴ 分析において①集住型地域Ⅰ（開発地域の不良住宅地、新発生無許可住宅地）、②集住型地域Ⅱ（未認可宿泊所地域）、③集住型地域Ⅲ（永久賃貸住宅団地）、④混在型地域（地下住宅）のような地域類型による「住居」を中心とし社会的排除のメカニズムを把握している。

¹⁵ Sandra Wallman(1984) Eight London Households(=1996, 福井正子『家庭の三つの資源—時間・情報・アイデンティティ ロンドン下町の8つの家庭』河出書房新社

¹⁶ その「生活」がどのように運営されているのか、その守備範囲はどのようなもので、どんなときに変化していくのか、のようなプロセスとして「生活」をみる。

第三節 本論文の構成

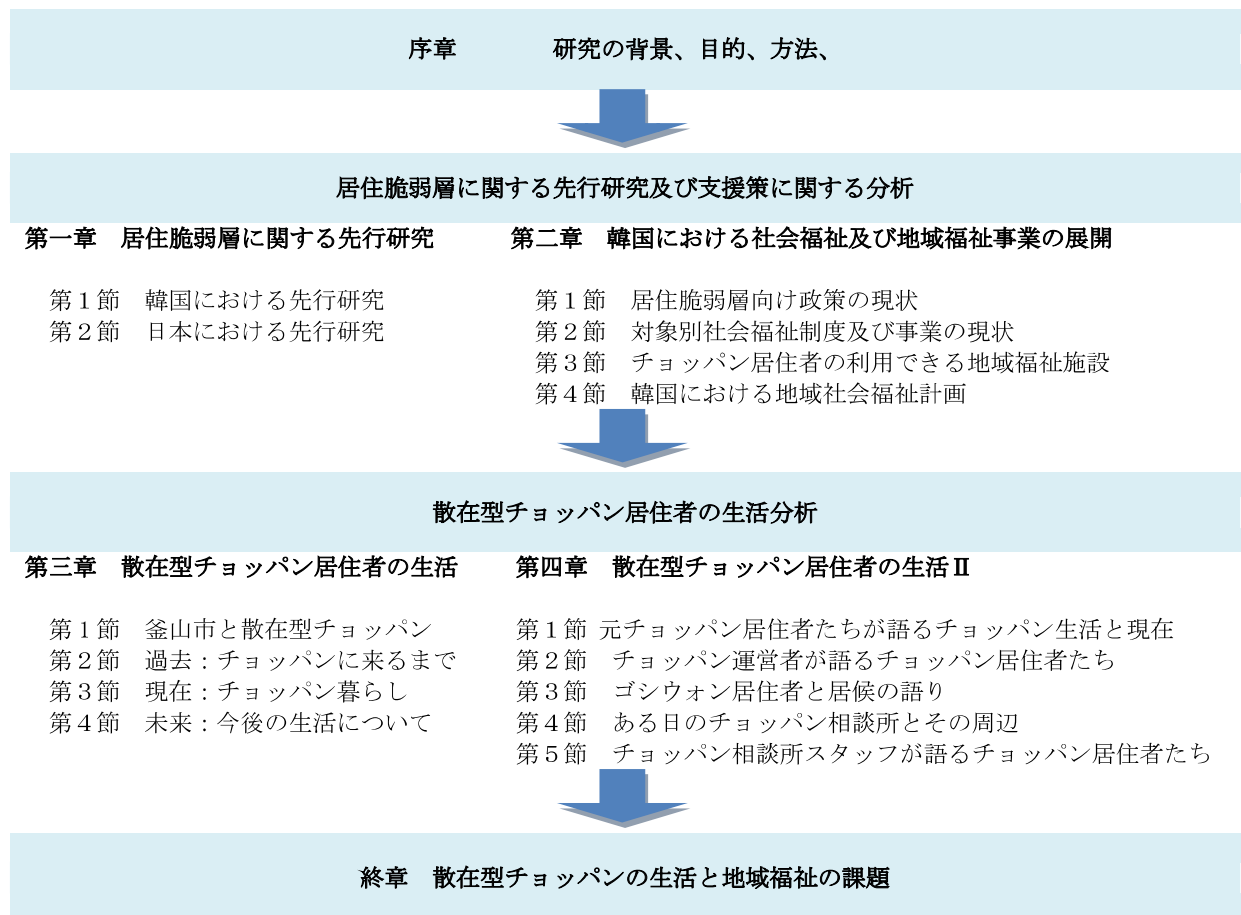
第一章では、居住脆弱層に関する先行研究及び支援策に関するレビューを行う。韓国における居住脆弱層の問題と、それに伴う主な先行研究からチョッパン居住者の生活をみて、韓国の居住脆弱層に関する研究との比較の上で、日本の同様の研究についてもみる。

第二章では、韓国における居住脆弱層向けの政策及び支援、地域社会福祉計画の展開について分析を行う。さらに、研究の対象であるチョッパン居住者が利用できる地域福祉施設の現況を把握する。

第三章では、散在型チョッパン居住者たちの生活を、居住者たちの語りを通じて探ってみる。釜山市の散在されているチョッパンの形態を背景に、彼らがチョッパンへ来るまでのストーリーや、現在のチョッパンでの暮らし、またこれからの生活について、彼らが語っていることをみる。

第四章では、様々な角度からチョッパン生活をみるため、チョッパンからステップアップして買上賃貸住宅に住んでいる人々、チョッパン運営者、チョッパン相談所のスタッフの語りや参与観察を通じて分析を行う。

最後の終章では、第三章・第四章で見てきた散在型チョッパンの生活を考察する。彼らの語りから主にみられている様子や表現から彼らの生活の特徴を明らかにし、地域福祉の視点から課題を探る。



第一章 居住脆弱層問題に関する先行研究

第一節 韓国における居住脆弱層に関する先行研究

1. 居住脆弱層への注目

韓国社会に新たな住宅問題が浮かび上がったのは、1997年から始まった、いわゆる IMF 経済危機を発端とする。IMF¹⁷経済危機は、韓国の全般的な社会の安全網がどんなに脆弱なのかを確認させてくれたが、住宅部門も例外ではなかった。

一瞬に仕事を失い、住まいから追い出された人々は行くところがなくなり、路上や駅で寝るしかないホームレスに転落した。急増するこの問題へ緊急対策として無料給食の実施や一時的に寝床を提供するなどが実施されたが、家族とともに安定した生活ができる住宅を提供することはできなかった。住宅問題は緊急対策で対応するのには限界があり、住宅問題が解決されていない状態で根本的な生活安定対策を整えることは難しいという事実が経済危機を通じて再確認された。特に、これまで政府の支援なしに自力でようやく住宅問題を解決してきた低所得層にとって経済危機は住宅不安を高めた。その結果、これまで放置されてきた低所得層の住宅問題や劣悪な居住環境を改善するために政府の介入が求められることになった(韓国都市研究所 2011: 5)。これらの人びとは居住脆弱層として把握された。

IMF 経済危機により居住脆弱層が注目されたが、むしろ、居住脆弱層はその前から存在していた。特に、韓国戦争(朝鮮戦争)後の都市化により形成された貧困居住地(スラム)が存在していた。都市化の初期には、韓国戦争などによる避難民、農民などが都市のスラムに流れ込み、都市化中期には産業化の過程で農村から都市へ流出する人口が増加したため、^{バンジャチョン}板子村・サンドンネのような低所得層が密集し居住する不良老朽住宅地域が多く形成された(国土研究院 2010)。低賃金労働者の住まいとして機能していたこのような不良老朽住宅地域は、産業化の中で、国家により黙認・放置され、広がっていった(イ・ソジョン 2006)。だが、都市化中期の後半には住宅供給の拡大政策と住宅再開発事業が活性化されて、既存の不良住宅地域も解体されはじめ、マンション団地などに変更されていった。これによって低所得層が密集する老朽住宅地域は減っていく一方、低所得層は大都市の外部へ散らばって、半地下・地下の部屋、ビニールハウス、屋根部屋のなどの「普通ではない」住居空間に暮すなど、不

¹⁷ IMFとは、国際通貨基金(International Monetary Fund)をいう。1997年度の経済危機により、韓国政府がIMFに救済金融を要請した事態をIMFと略して呼んでいる。

安定な居住状況に置かれていた(国土研究院 2010)。韓国における主な都市貧困居住地域の変化過程を先行研究からまとめると表 6 のようである。

表 6 韓国における都市貧困居住地の変化

	バンジャチョン 板子村	チョッパン	ビニールハウス村	地下居住	永久賃貸住宅
形成の背景	-産業化 -都市化	-都市化 -野宿者などの 極貧階層の登 場	-サンドンネ(山の 村)の解体による低 所得層の住宅問題	-都市の住宅難 -多世帯向け住宅建 設のブーム	-低所得層の深刻な 住宅難
主な形成時期	-1960-70 年代	-1960-70 年代	-1980 年代前半以 降	-1980 年代後半以降	-1989 年導入 -1992 年中断
立地	-寄せ場 近所の河 川	-駅、寄せ場の 近隣	-市内の空き地 -都内のグリーンベ ルト地域	-居住地全域	-都市外部
形態	-板など	-狭い部屋	-ビニールハウスを 居住用に改造・新 築	-家族単位の日常生 活が可能 -湿気、採鉱、浸水な どの深刻な居住環境 問題	-大部分が対規模の 団地形態 -低所得層の集中に よるスティグマ問題
主な居住者	-低所得 世帯(避 難民、離 農民)	-単身日雇労働 者、野宿者	-低所得世帯 一部は偽装転居	-都市低所得層、 -相対的に良好な住 宅居住者は庶民	-生活保護者中心
法的な性格	不法	不法	不法(一部合法)	合法(一部不法)	合法

ナム・ギ Chol(2006)、イ・ソジョン(2006)より再構成

バンジャチョン
板子村は板などの粗末な素材で建てられた家が集まって形成された居住地である。1950 年代の韓国戦争以降、大都市に押し寄せた避難民と離農民が河川や山の斜面などの遊休の国・公有地を無断で占有し、大量の板子村を形成していた。ビニールハウス村¹⁸は、最初は営農用で使ったビニールハウスを不法で用途転換し、居住用で使っているところである。地下住居は、ほとんどが一戸建ての地下にあった地下室や駐車場など非住居用のスペースを居住用に改造して賃貸したことから始まった。1984 年、建築法の改正により地下階の規制が緩和され、採光、換気などの地下階の環境も以前に比べて改善された。ゆえにこれらを地下と区分して‘半地下’と呼んでいる(国土研究院 2006)。

このように、産業化により大規模の低賃金労働力が必要になり、その労働力の安定的供給のため国によって黙認・拡散されてきた無許可板子村、80 年代以降に、国と資本の必要性によって板子村が解体される過程で新たに発生したビニールハウス村、80 年代後半、急激な住居費の上昇の中で提起された労働力再生産の問題と国家の正当性の問題によって、建設された公共賃貸住宅等、居住脆弱層の居住形態変化には、韓国社会の階級間の力学が現れていると、イ・ソジョン(2006)は強調している。

¹⁸ 法律又は行政的に一般化されていない用語であるため、その対象も明確ではない(国土研究院 2006)。

この住宅の様子を以下のように。

写真 3 板子村（パンジャチョン）の様子



1960～70 年代の板子村



ソウル地域の板子村 (2010 年)

写真：韓国経済新聞 (2013. 1. 17) より

写真 4 ビニールハウス村の様子



暖房のためビニールの上に
黒い布地などを被せたりする。

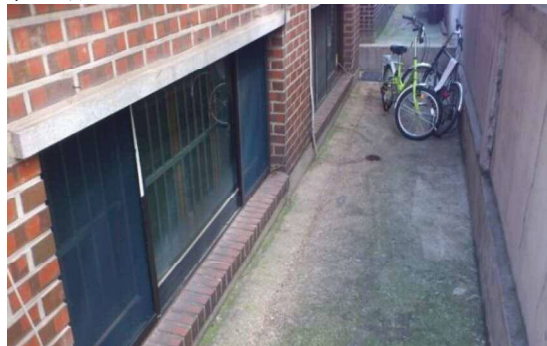


写真：スポーツ朝鮮新聞 (2008. 5. 7) より

写真 5 地下居住の様子



地下住宅の入り口



半地下住宅の窓

これまで政府は上のような居住脆弱層の問題に対応するため、最低住居基準制度の導入(2003年)、チョッパン・ビニールハウス居住者住居支援対策(2007年)、居住脆弱層むけ支援策(2010年)などを通じて住宅改修の支援、公共賃貸住宅供給、買上賃貸住宅の拡大などを支援を行ってきた。しかし、低所得層の実質所得は減少するか、あるいはほとんどそのままなのに家賃は大幅に値上がりしていく中で、むしろ相対的な居住貧困問題が浮かび上がっているとの指摘もある(ジン・ミュン2013:43)。このような相対的な居住貧困の問題は社会の二極化の問題でもあり、居住脆弱層の問題がこのような視点から社会問題として注目されている。

2. 韓国都市研究所による居住脆弱層に関する実態調査

このような居住脆弱層問題の社会問題化を背景に、韓国都市研究所は2011年度に全国居住脆弱層の実態調査を実施した¹⁹。これまで、統計庁が5年ごとに実施している人口・住宅総調査や、国土研究院が1996年から3回実施した居住実態調査のような標本調査を通じた全般的な居住実態調査はあったが、全国の「居住脆弱層」を対象とし、その「属性」を把握した調査は、これが始めてであった。この調査では、居住タイプにより居住脆弱層を9つに類型化し、主な属性と種類間の移動の頻繁性を中心に5つのカテゴリーに分けている(表7)。

第一のカテゴリー(单身路上型)は、①単身で路上生活をしている野宿者、②浮浪者²⁰/野宿者施設、③PC房(ネットカフェ)、サウナなど非宿泊用大衆利用施設²¹に居住する者である。主に男性であり、家族関係が断絶され一人暮らしをしており、40代後半から50代前半の年齢で中卒と高卒の中間程度の学歴者が多いとされている。①から③までの三つの居住タイプの間には頻繁に移動が生じており、類似した属性を持っているが、非宿泊用大衆利用施設居住者は路上生活者や浮浪者・野宿者施設居住者より年齢が低く、無職者が少なく、収入が高いという違いが見られる。

第二のカテゴリー(单身有料居住型)は一応屋根のある場所で生活するタイプで④チョッパン、⑤旅館・慮人宿が挙げられる。主に単身の50代半ばから後半の男性が多く、家族関係が断絶された場合が多い。学歴は第一カテゴリーより低い小卒と中卒程度の学歴である。この④と⑤の居住間にも移動が比較的に多く、類似な属性を持っているが、チョッパン居住者の方が旅館・慮人宿居住者より無職が多く、収入が低いという違いが見られる。チョッパン居住者の64.6%が公的扶助(基礎生活保障)受給者であり、平均居住期間は6.3年で、10年以上の長期居住者も21.4%に至っている。

第三のカテゴリー(家族単位の居住)は家族単位で生活する場合が多い⑥ビニールハウス村²²や⑦ビニ

¹⁹ 韓国都市研究所が保健福祉部の依頼を受け、委託調査を実施したことである。

²⁰ 野宿者は一定の住居がなく、相当の期間、路上で生活している人を意味しているが、浮浪者は一定の住居と“生業の手段がなし”相当の期間、路上で生活する人を意味する(保健福祉部「浮浪者および野宿者保護施設の設置・運営規則」)

²¹ 不特定多数が使用する営利を目的とする有料利用施設であり、宿泊を目的としない大衆利用施設である。茶房、PC房、漫画房、チムチルバン(一種のサウナ)、サウナなどがある。

²² ビニールハウス村とは新発生無許可住宅が5戸以上に集団化された居住地をビニールハウス村と称す(国土研究

ールハウス・コンテナ・穴蔵（倉庫、小屋を含む）が、これに属する。家族世帯が多いので他のカテゴリーより女性を含むことが多く、家族関係がいちおう維持されている。年齢は60代前半で比較的高く、小卒と中卒程度の学歴が多いとされている。⑥と⑦の二つのタイプ間の移動は頻繁にあるが、ビニールハウス村がビニールハウス・コンテナ・穴蔵居住者より所得が高いという違いがあるという。

第四のカテゴリーは⑧ゴシウォン（考試院）である。ゴシウォンの居住者は単身男性が多いが、家族関係が維持されているということが1カテゴリーや2カテゴリーと区別されると指摘している。なお、年齢が40代前半で他の集団より相対的に若く、他のタイプの居住経験も少ないことから独立したカテゴリーに分けられている。近年、最も著しい増加傾向が見える。

表 7 居住脆弱層の特徴

居住カテゴリー (5)	居住の類型 (9)	重要属性の類似性	重要属性内の差異性	相互間の移動 頻度
1. 単身路上型	①路上 ②浮浪者・野宿者 施設 ③非宿泊用大衆利 用施設	-男性多数 -単身者 -家族関係断絶 -40代後半～50代前半 -中卒と高卒の半ば程度の 学歴	-非宿泊用大衆利用施設 居住者は浮浪者・野宿者 ・野宿者施設居住者より 年齢が低く、無職が多く 、所得が高い。	-三つの類型内 移動頻繁
2. 単身有料居住型	④チョッパン ⑤旅館、慮人宿	-男性多数 -単身者 -家族関係断絶 -50代中後半 -小卒と中卒程度の学歴	-旅館、慮人宿の場合、 チョッパンより無職者が 少なく、所得が高い。	-二つの類型内 移動頻繁
3. 家族単位の居住	⑥ビニールハウス 村 ⑦ビニールハウス 、コンテナ、仮小 屋	-女性も多数 -家族単位 -家族関係維持 -60代前半 -小卒と中卒の半ば程度の 学歴	-ビニールハウス村が ビニールハウス、コンテ ナ、仮小屋より所得が多 い。	-二つの類型内 移動頻繁
4. ゴシウォン (考試院)	⑧ゴシウォン	-男性多数 -単身者 -家族関係維持 -40代前半 -高卒と専門学校卒程度の 比較的高い学歴		-他の住処への 移動経験は少 ない。
5. 施設	⑨児童、青少年、 障害者、女性、医 療、矯正施設	-性別の偏重は見られない -単身・家族・同僚 -家族関係維持 -30代半ば -中卒と高卒の中間程度の 学歴		-1カテゴリー への移動が比 較的高い。

韓国都市研究所(2011)より

院、2006)。一般的に住宅として使用されないと思われる形の建物に居住している場合であり、5号未満の集団化されず分散されている無許可居住を意味する。

第五のカテゴリーは⑨入所施設である。表にあるようなさまざまな対象の福祉施設や医療施設、矯正施設などから退所予定の人は性別に偏りはなく、単身だけでなく家族・仲間と一緒に暮らすケースなど多様に分布している。また、家族関係も維持されており、入居者の年齢は30代半ばで、中卒と高卒の中間程度の学歴である。相対的に路上か野宿者施設のような1カテゴリーへの移動経験が多い特徴があるという。

3. 先行調査研究からみたチョッパン居住者の生活

韓国における居住脆弱層に関する研究はようやく2000年頃から始まり、2で述べた韓国都市研究所の包括的な調査(2011)以外にも、国家人権委員会(2004)、韓国都市研究所(2005、2011)、国政調査会(2007)、保健福祉部(2009)など政府機関の調査研究及び政策提言がある。また、民間の居住福祉活動と事業の評価および改善策を提案する研究(グォン・テスン2007;ナム・チョルカン2007;ナム・ギチョル2012)なども進みつつある。

これらのうち、韓国都市研究所の全国調査は、先にも見たように居住脆弱層への本格的な調査研究であり、その脆弱な居住状況をカテゴリー区分したことで、本研究にとっても、その基礎となるものである。また、このような全国的な量的調査とは別に、チョッパン地域やその住人への参与観察やインタビューによる質的調査も近年いくつか実施されている。その中にはチョッパン運営者を対象として実施されたチョッパン居住者および地域に関する意識調査(キム・ソンミ2011)、チョッパン居住者の連帯意識と空間構造との関連性の研究(キム・ヨンオック、クジョ・ヒウン2012)などのような、新たな視角からの研究や地域再生への提言なども行われ始めている。

ここでは、まず都市研究所の調査の中で、チョッパンへの居住者がどのように捉えられているかを検討する。次いで、チョッパンについての質的調査研究を概観しておく。

1) 量的調査を通じてみたチョッパン居住者の生活

韓国都市研究所は、チョッパンが社会的に関心を注目し始めた2000年にも実態調査を行っている。そこで、まずこの調査と、前節で述べた2011年調査、つまりほぼ10年後の調査、においてチョッパン居住者の生活がどのように把握されているかを見ておこう。ソウル地域のチョッパン居住者を対象とした2000年調査によると、チョッパン居住者は様々な形態の居住貧困を経験してきており、彼らの中には建設現場や食堂など職場で居住した経験のある人が70%にのぼる。住み込みは典型的な単身労働者の不安定な居住形態であるが、このうち建設現場で居住した経験のある人が40%に達しており、野宿をした経験も71.1%に達している。チョッパン居住期間を見ると、1年以下の人は31.7%で、彼らはほとんどIMF危機以降、ホームレスやチョッパン生活を始めた人と見ている。一方、チョッパンとホームレス生活の期間が10年以上の人の割合も31.7%で、長期間に亘り野宿やチョッパン生活をしてきている人の割合も少なくないと述べている。チョッパン居住者の年齢はほとんど30~50代であるが、

60 代以上の高齢者も 14.2%で少なくない。チョッパン居住者は成人になった後、家族を形成した経験がなかったり、そのような経験があっても離婚や家出、死別などで家族が解体され、ひとりで生活する人がほとんどである。チョッパン居住者のうち、婚姻の経験が全くない人が 50%、結婚をした経験のある人は 34.4%、同居の経験がある人は 15.6%であった。チョッパンの人々は夫婦を中心とした家族関係が解体されただけでなく、他の家族や親戚との連携も非常に微弱である、実際に家族と全く連絡をしない場合が 72.9%に達している。

同研究所の 2011 年度調査は、すでに述べたように全国の居住脆弱層を調査しており、この中でチョッパン居住者は 551 名であった。2000 年調査がソウル市のみであったことと比べて、この調査は全国調査なので、単純な比較は出来ないが、その結果を見ると次のようである。チョッパン居住者のうち、男性は 87.2% (482 名)、女性は 12.8% (71 名) でほとんどが男性である。年齢は 30 代未満が 0.2% (1 名)、30 代が 4.9% (27 名)、40 代が 19.2% (106 名)、50 代が 39.1% (216 名)、60 代が 23.9% (132 名)、70 代以上が 12.8% (71 名) と現れ、2000 年度の結果と比べ 60 代以上の高齢者の割合が増えていることが分かる。

平均居住期間は 6.3 年であるが、これは、チョッパンと類似した居住地と言われている旅館、旅人宿、ゴシウオンの平均居住期間 2.3 年、3.3 年、1.8 年と比べると平均居住期間は長いほうである。居住期間を具体的にみると、表 8 のようである。

表 8 チョッパン居住期間

期間	1年未満	1年以上 ～2年未満	2年以上 ～3年未満	3年以上 ～4年未満	4年以上 ～5年未満	5年以上～ 10年未満	10年以上 ～15年未満	15年以上 ～20年未満	20年以上 ～25年未満	25年 以上	合計
%	14.1	11.7	11.7	9.3	9.1	22.7	11.9	2.9	3.5	3.1	100
名	77	64	64	51	50	124	65	16	19	17	547

韓国都市研究所(2011)より

上のように、1 年未満居住者は 14.1%に過ぎなく、5 年以上居住している人が過半数である。

居住者の雇用状況をみると、29.1%が勤労をしていると答えたが、居住者の日雇い労働が 15%、自活勤労・公共勤労などの政府支援勤労をしている割合が 10.5%と、勤労をしていても不安定な勤労をしている。なお、81.7% (452 名) が就職活動をしておらず、73.2% (405 名) が月 50 万ウォン未満である極貧層である。なお、その収入の 49.8%が基礎生活保障受給費である。支出の 35%程度が家賃であり、居住者の 47.0%が借金がある。

以上の都市研究所の調査以外では、居住脆弱層のうち、チョッパン、旅館、旅人宿、ゴシウオン（考試院）を中心に調査し、その特性を比べているソウル特別市(2013)の研究がある²³。比較により、チョッ

²³ ソウル市を対象としているので地域的な特性があると思われるが、居住貧困層の生活実態について調査したのもとも最新調査である。

パン居住の特徴が示されているので、これも見ておきたい。この調査では、まず、住民登録が現在の住まいとなっている人の割合をみると、「チョッパンが 93.0%、旅人宿が 57.5%、旅館が 41.7%、ゴシウオンが 33.5%」となっており、チョッパン居住者の場合は住民登録をした「住居」として使用している長期居住者が多いことが示されている。

現在の住まいを知った経路は、ゴシウオン、旅館、旅人宿は‘安く暮らせるところを探して歩き回ったりして’知ることになった場合が多いが、チョッパンは知り合いからの紹介で知ったとの割合が多い。これは、集中型地域であっても他のところより目立たないところに形成されているチョッパンの位置的な特性に関係していると思われる。

現在の住まい以外に居住できるところがあるかについては、チョッパン居住者の 94.0%、旅人宿居住者の 92.5%が‘ない’と答えている。ゴシウオンの場合は‘現在の居住地以外にも行くところがある’との答えが 53.5%で最も高く、旅館居住者も 37.1%と多い方である。つまり、チョッパン居住者は居住脆弱層のなかでも、他に行き場のない人々と言えよう。

転居意志に関して、チョッパン及び旅人宿居住者は‘経済的負担のため’という理由で転居できないとの回答が最も多く、旅館は‘経済的負担’とともに‘現在の居住地が仕事探しに良いところだから転居したくない’との回答が多い。ゴシウオンは、他のところとは異なり‘現居住地に満足しているため、転居したくない’との割合が 42.5%で最も多かった。むしろ、経済的負担のために移住が難しいという回答も 28.7%に達しているなど、居住脆弱層のほとんどが経済的な問題で転居できない状況である。そのうち、チョッパン居住に関しては2つの異なった回答がある。まず、社会福祉サービスへのアクセスが便利で現在の住まいに暮らすとの答えと、廉価の旅人宿やゴシウオンと比べて賃貸料はあまり差がないが‘暖房設備がないところもあり、昼にも街で酒を飲む人が多い’との劣悪な周辺環境の理由でチョッパンには入りたくないとの答えである。割合から見ると前者が多い。なお、チョッパン密集地域の居住者は‘近所に親しい隣人もいるし、慣れた地域から離れたくない’との理由で転居しない人もいる。また、住居環境より管理人がどれほど親切か、あるいは隣部屋の居住者たちに邪魔されずに過ごすことができるか、が住まいの選択にもっと考慮するケースもある。

より良好なところへ転居ができるかについて、調査対象者の主観的判断を見ると、二つの対比される集団が存在する。一つの集団は、居住費の負担能力がなくて長期間非住宅に居住していて、他の住まいへ転居できる可能性もほとんどないと思っている人々である。彼らが暮らしている住まいは非住宅の中でも相対的に劣悪であるが、所得が低くて廉価の住まいしか選択できないと考えており、中高年層の割合が高い。もう一つは、一時的に非住宅で生活しているが、近いうちに他のところに転居すると考えている集団である。これらは相対的に若く、学生の割合が高く、チョッパンより環境が良い、ゴシウオンなどに生活している場合が多い。

転居するためには保証金(敷金)が要るが、そのための貯蓄についてみると、すべての類型で貯蓄をしている人の割合は低い。ゴシウオン居住者が相対的に高い割合で 33.5%が貯金しており、チョッパン居住者は 27.0%、旅館居住者は 20.0%、旅人宿居住者は 5.0%が貯蓄していると回答したにすぎない。

ゴシウォンの場合、相対的に若い年齢で、移住の意思も高い集団であるため貯蓄率が高いと思われる。なお、調査対象者全体の消費支出の 35%程度が家賃として支出されており、またチョッパン居住者の 47.0%が借金があるという。

2) 質的調査を通じてみたチョッパン居住者の生活

上記のような量的調査は、実態の表面的な分析にすぎないという限界も言われている。そのため、最近ではチョッパンに居住する人々の暮らしを探る質的研究が行われはじめている。だが、前述したようにまだその数が少なく²⁴、しかもチョッパン集中地域を中心としている。

まず、グォン・ジソン(2008)はチョッパン居住者の日常生活を理解するため、チョッパン地域とチョッパン居住者たちの日常生活を、参与観察及びインタビューによって検討した。この研究は、ソウルと同様に代表的なチョッパン密集地域である大田市(デジョン)を対象とし行われ、チョッパン居住者の日常生活を主体・空間・時間・生活様式の四つのカテゴリーに分析し、政策、行政、実践への提言をしている。四つのカテゴリーの中で、チョッパン居住者たちが認識している「空間」を、グォンは「チョッパン」「チョッパン地域」「チョッパン相談所」とに分けている。大田地域の場合、チョッパン密集地域であるため、他の地域よりチョッパン居住者たちが利用できる社会福祉施設がその地域に入っているのだが、チョッパン居住者たちはチョッパン相談所と最も緊密な関係を形成しているという。

チョ・ンヨジュとキム・チョンドウク(2013)の研究結果もグォンのものと似ている。この調査はグォンと同様の地域の男性老人に焦点をあてた調査研究であり、チョッパンとチョッパン居住者に対する近隣住民のつめたい眼差があって心理的に萎縮する傾向があるが、他方で福祉機関やボランティアの助けを受け、彼らに感謝し、厳しい生活ではあるが隣人たちと互いに支えながら共同体を形成していくという。このように、これらの調査が対象としたチョッパン居住者たちは彼らが居住しているチョッパンが環境的に劣悪で、外部からの視線も冷たく、楽ではないにもかかわらず、そこでの生活に慣れてきて、隣人と緊密な絆を築くようになり、新しい心の故郷として認識することになるという。

密集型チョッパン地域と呼ばれるソウルの永登浦(ヨンドゥンポ)チョッパン地域を中心に研究したキム・ヒョジン(2009)も、永登浦チョッパン村²⁵は、外部と物理的、視覚的に遮断されており、チョッパン住民たちはチョッパン村の中とは違ってチョッパン村の外では不便さを感じて行動が萎縮されるという。かれらはチョッパン村を「人が住むところではない町」と表現しているが、よく似たもの同士が集まって住んでいる空間'において情緒的な安定感を感じているという。

ホ・ソヨン(2010)もチョッパン地域の単身高齢男性を対象とし調査した。かれらは家族関係を断た

²⁴ 2014年3月時点で、韓国国会図書館、韓国学術情報(KISS)、DBpiaなどの学術DB機関と先行研究の参考文献を通じて調査した結果、チョッパン居住者を対象とした質的研究は約10編程度しかない。

²⁵ 密集地域の場合「村」をつける場合が多い。たとえば、ビニールハウスの密集地域もビニールハウス村と呼んでいる。

れ、1日の飲み仲間にとどまる付き合いしかない、寂しい人間関係の中に置かれており、けして十分ではない支援を受けて、ようやく生活を営んでいるという。また、偏見と差別によって萎縮しているものの、一人暮らし生活をどうにか維持し、独立して生きていこうとしていると分析している。

イ・ヒョンジュ、オン・ミョンヨン(2013)はチョッパンを管理²⁶している単身女性高齢者たちのチョッパン村での経験と、その意味について調査した。彼女らは生計のためにチョッパン村に流入しチョッパン賃貸業をし始め、生計を維持してきた。ところが、地域の衰退によって、より良い地域へ行く機会と能力を喪失した単身女性高齢者たち自身が貧困層に転落し、チョッパン村の管理人として残るしかない状況になったという。この研究も集中型の地域である大田駅付近を中心に実施されたが‘チョッパン村周辺には男性たちが、路地には女性たちが集まって時間を送っている、この地域特有の雰囲気がある’と述べている。

3) 地域連帯感及び人付き合いについて

ジョ・ヒウン、キム・ヨンウク(2012)の調査研究は、ソウル市のチョッパン密集地域を対象²⁷とし、チョッパン居住者たちの連帯意識と空間構造との相互関連性を把握した。チョッパン密集地域の空間構造を定量的に分析した結果、周辺地域とは隔離されているが、内部的には接近性が高い空間構造になっており、このような空間構造は居住者が居住地を認識する空間的な範囲だけでなく、心理的な範囲を規定することにまで影響を及ぼしているという。周辺地域と空間的に分離されているため、居住者は社会的排除と心理的な断絶感、疎外感を感じているが、接続性の高い内部の空間構造は、このような断絶感を感じる居住者間の帰属意識と連帯意識の形成に影響を及ぼし、強い連帯意識を持っており、チョッパン地域を自分の生活空間として認識していると述べている。たとえば、一般的な住宅を見ると、ほとんどが家族のコミュニティスペースであるリビングルームが存在し、それを中心に部屋がある形態が多い。チョッパン住民は、チョッパン地域を自分の住宅が拡張された生活空間として認識しており、地域が一般住宅のリビングルームのような役割を果たし、その中でコミュニティを形成しているという。なお、エスノグラフィーでチョッパン住民の暮らしを把握したキム・ヒョジン(2009)もチョッパン地域は外部と物理的、視覚的に断絶されており、住民たちはチョッパン地域内では安らぎを感じているが、外では不便さを感じていると述べている。

先の量的調査では、チョッパン居住者の中で家族と全く連絡をしていない場合が58.1%に達しており(国家人権委員会2008)、チョッパン居住者の中で親しい人がいない場合も約30%で、社会的関係を

²⁶ 賃貸もしくは売買を通じた本人名義の建物のチョッパンを運営する場合は‘家主’あるいは‘運営者’と称しており、建物主に雇用され、居住費減免、また手数料などを貰いながら‘与えられた仕事’をしているので‘管理人’と表現している

²⁷ ソウルのチョッパン密集地域のうち、商業地域と混在して形成されている東子洞(ドンジャドン)、南大門(ナムデムン)地域を除く、敦義洞(ドンウィドン)、永登浦(ヨンドウンポ)、昌信洞(チャンシンドン)を対象とした調査である。

形成するのに消極的、閉鎖的である場合が多いと報告されている(韓国都市研究所2000)。しかし、上で見てきたように、特に質的調査においては、チョッパン地域への帰属性の高さや、チョッパン地域内の居住者間の関係は緊密であることが、共通に強調されている。例えば、チョッパン居住者間の助け合いがあったとの答えが53.1%で、チョッパン居住者相互間の関係は緊密なものとされる(キム・ソンヒ2011)。チョッパンは、外部でよく言われているようにチョッパンが不安定で断絶された空間ではなく、韓国の最貧層が集まって住んでいる、一種のコミュニティとして機能している(イ・ソジョン2006)という。他方で、国土研究院(2006)と国家人権委員会(2008)によると居住者間の関係は金銭や生活用品を借りたり、悩みごとの相談をしたりするなどではなく、ただ暇なときにおしゃべりする程度の疎い関係であると述べている。

このように、比較的大規模な量的調査と、エスノグラフィーのような質的調査では、地域内部の居住者同士の付き合いや、内部空間の意味、あるいは帰属性等の点で異なった結果を見いだしている。調査手法の違いや、研究者の視点の違いの反映でもあろうが、ここで注意したいのは、現在まで行われてきた研究、特に質的調査のほとんどはソウル、大田のような密集地域を対象としており、大邱市(デグ)、釜山(プサン)のような分散地域での研究はあまり行われていないことである。帰属性や地域内部空間の捉え方は、密集地域ならではのことかもしれない。

以上のように、韓国の居住脆弱層問題への研究は、IMF 経済危機からの注目された野宿者を中心に、チョッパン、ビニールハウスなどで居住している人々の実態を調査したものと、それを基盤とし政策を提案したものから、居住脆弱層の暮らしに関する質的研究や前述したような住居と社会的排除との関係について検討したものなど、多様なアプローチが進んでいる。ところで、序章でとりあげた全(2004)の研究は社会的排除という視点からのすぐれたものであるが、居住の中でも物理的な「住居」の脆弱性と社会的排除のプロセスに焦点をおいており²⁸、量的調査や質的調査の研究対象がチョッパン集中型地域を中心に行われている。このため、チョッパン分散型地域での人々の生活やコミュニティー、特に居住者の主体的な生活戦略などについての言及はなされていない。

²⁸ 分析において①集住型地域Ⅰ(開発地域の不良住宅地、新発生無許可住宅地)、②集住型地域Ⅱ(未認可宿泊所地域)、③集住型地域Ⅲ(永久賃貸住宅団地)、④混在型地域(地下住宅)のような地域類型による「住居」を中心とし社会的排除のメカニズムを把握している。

第二節 日本における居住脆弱層に関する先行研究

ここでは、韓国の居住脆弱層に関する研究との比較の上で、日本の同様の研究についても見ておきたい。

1. 居住脆弱層問題と調査研究

1) 日本の「寄せ場」＝「ドヤ」街とその衰退

戦後日本の居住脆弱層問題は、敗戦直後の「浮浪者」「浮浪児」あるいは戦時中の避難壕を利用した壕舎生活者などの問題から、経済再建のためのデフレ政策の中で公有地を不法占拠して生まれた「仮小屋」生活者などの問題があった。また「不良住宅」と呼ばれる地域が数多く存在していたという。これらの歴史的経緯については、戦後東京の「不定住的貧困」（居住脆弱層の貧困）について検討した岩田正美の研究に詳しい(岩田1995)。

高度経済成長期になると、大都市においては、労働者が日々の就労先を探し、他方で港湾や土木建設業等へ労働力供給を行う業者が労働者を探しにくる「寄せ場」に注目が集まった。「寄せ場」は、しばしば「青空市場」ともよばれる労働市場であり、同時に、これらの労働者たちへ宿を提供する「ドヤ」と称される簡易宿泊所が軒を並べた「ドヤ街」を形成し、日雇労働者たちの生活の場ともなっている(西澤晃彦1995: 19-21)。「ドヤ街」は不良住宅地＝スラムのひとつの類型としても捉えられ、経済学、社会学、社会福祉学、社会病理学など多くの研究分野の研究者がこの研究に取り組んだ。

「寄せ場」＝「ドヤ街」の中でも特に規模の大きい大阪の釜ヶ崎、東京の山谷、横浜の寿町は日本三大ドヤ街等と言われてきた。「ドヤ」という言葉は、元来、宿(ヤド)を逆さまにした言葉である。それは宿に対する賤称語であるという議論もあり、研究者の中には「簡易宿泊所」という言葉を使用する人もいるが、実際の生活者(日雇労働者)は自分の住む宿や街を「簡易宿泊所」とか「簡易宿泊街」などとは呼ばない。生活者は「ドヤ」、「ドヤ街」、「寄せ場」、あるいは「カマ(釜ヶ崎のこと)」、「ヤマ(山谷のこと)」、「コトブキ(寿町のこと)」等というふうと呼ぶのが一般的であるという(中根光敏1993: 6)。大阪や東京のドヤ街は、戦前から貧しい行商人や移動労働者たちの集まる地ではあったが、いわゆる日雇い労働市場「寄せ場」が形成されたのは第二次世界大戦の敗戦後から高度経済成長期にかけて、港湾労働や土木建設労働に従事する肉体労働者を簡単に調達できる場が求められたためである。たとえば山谷の場合は、東京都が稼働能力を持った「浮浪者」対策の一つとしてドヤ経営者に優先的に建設資材を提供する等便宜を図ったことから、急速に多くの「ドヤ」が復興して行った(岩田1995)。横浜寿町は、戦後新たに港湾事業への労務供給のために、「ドヤ街」が作られるなど、その経緯には相違がある。

山谷は最盛期には250軒以上のドヤが立ち並び、その日その日の寝場所と手配師を持つ日雇い労働者のまちなった。この山谷に関しては多くの研究があるが、その古典とも言うべきものは、江口英一

等が1966年から1967年にかけて、いわば最盛期の「山谷地域」²⁹の生活を、簡易宿泊所居住者及び運営者、宿泊所建物、地域調査等を通じてその全般的状況を調査した研究である（江口英一ほか1979）。この調査によると、居住者のうち、不就労者は5.3%で、91.6%が日雇労働者であり、長期日雇経験者も多いなど、「日雇労働者のまち」であった当時の山谷地域の特性がよく現わされている。また、「寄せ場」労働者の失業とホームレス問題の関連性があることも指摘している。つまり、失業＝「アブレ」すなわち「所得の喪失」の常習化した生活は、体力と気力の年齢相応以上の低下、社会生活からの孤立と脱落、そして定住すべき住居を失った“家族なし” Homelessを生む。行政用語ではこれを「住所不定」者と言うが、要するにそれは「浮浪者」ということである。「山谷」の「日雇労働者」は、宿泊すべき簡易宿泊所（ドヤという）がある日は「住所不定」ではないが、だからと言って明日そうではない保証は何もない存在である（江口英一ほか1979）。つまり「ドヤ」という仮の宿の確保は、その日の労働の確保を前提としており、その意味で今日は労働者であっても、明日はホームレスになるかもしれないような存在だと、鋭い指摘をしている。

しかし、寄せ場は、日雇労働力供給機能を次第に弱体化させてきた。それは、寄せ場で求人を行う産業が1970年代後半に建設・土木に特化していったことが原因である。つまり、1960年代後半よりは港湾が、1970年代中頃よりは製造・陸上運輸がそれぞれ寄せ場での求人から撤退したことにより、その労働力供給先が建設・土木産業だけに限定されてしまったわけである（狩谷あゆみ 他2006）。

1960年代に大阪釜ヶ崎、東京山谷地域で起きた暴動により、両都市は「寄せ場」対策として労働センター、福祉センターを作り、また正月休み等に臨時宿泊所を作る等を実施してきた。当初、これらの地域には家族世帯も存在しており、子どもの教育等も問題になっていた。そこで「寄せ場」対策の一環として、家族世帯を公営住宅に優先的に入居して行く道が開かれ、この結果、寄せ場＝ドヤ街は次第に単身男性に特化した街となり、労働力の再生産がなされなくなったと狩谷らは指摘している。そのため、寄せ場での労働力は、もっぱら都市における失業層の流入によって支えられるようになった。寄せ場における日雇労働者の単身男性化は、1980年代に入る頃には、日雇労働者の高齢化現象として顕在化することになる（狩谷あゆみ他2006）。また、磯部力ほか（1999：8）は、60年代の山谷地域の問題であった「職業の不安定性と生活の無計画性、悪質手配師の存在、売血行為、とばく、女性保護問題、子供を持つ家庭における教育問題、簡易宿所の居住問題など」が変化したことにより、山谷対策も変化し、例えば、①労働施策（職業斡旋、雇用の創出、労働関係の適正化等）、②福祉施策（生活保護、越年・越冬対策、応急援護等）、③保健衛生施策（健康相談・結核健診等）、④住宅施策（都営住宅の特別割当）等の分野に及んだ総合性に基づき実施されてきた」と述べている。

他方、下田平裕身や玉井金五は、1980年以降の日本の雇用構造転換の中で、労働全体が全般的な「カジュアル化」「フロー化」に向かうことによって、それ自身最も「カジュアル」で「フロー型雇用」

²⁹日本三大寄せ場のひとつ「山谷」は、東京都台東区と荒川区にまたがり、およそ0.5*2kmの中に「ドヤ」と呼ばれる簡易宿泊所群が散在する。ここには東京都独自の「山谷対策」とそのセンターが置かれている。1966年以後、住居表示からその名は消えた（阪東美智子他2003）。

の先駆形態であった「寄せ場」労働は、もはや失業者が流入する「避難場所」にすらなくなっていると、その本質が変化していることを指摘している（下田平1988、玉井1998）。

この他、「寄せ場」について狩谷あゆみほか(2006)は、かつて活気に溢れていた寄せ場の情景と、1990年代の新宿駅西口地下における「居場所」と「共同性」をめぐる攻防という二つの過去を対比して論じている。また「外国人」と「女性」という、従来の寄せ場・野宿者研究において周縁化されてきた存在についても取り上げている。西澤晃彦(1995)は、「寄せ場」に流れ込んだ都市下層の歴史と現実、また外国人労働者たちの実態についてもとり上げながら、社会の中でのその位置を確かめようとしている。

2) バブル崩壊後日本のホームレス問題の「再発見」と調査研究

主に「寄せ場」＝「ドヤ」街研究として蓄積されてきた、不安定就労と居住脆弱層の問題はバブル崩壊後大きな展開を遂げる。早くも1992年の暮れから、「寄せ場」からホームレスが拡大していき、次第に「寄せ場」からは離れた大きな駅の周辺や公園に野宿する人々が増え始めた（岩田、2000）。1998年の社会政策学会では「日雇労働者・ホームレスと現代日本」を共通論題に設定し、日雇労働の変化とともに、新たに再発見されたホームレス問題への研究的関心を示した（社会政策学会編、1999）。その後も、失業率は2001年に5%を越え、路上生活（野宿）をしている人々は増えていき、ホームレスは、現代の日本の社会問題となっていく（菊池馨実 2009：107）。このホームレス問題については、各地で多数の調査研究が行われている。

90年代前半からこの問題に着目し、ホームレスへのインタビュー調査を行っていた岩田は、この調査結果を現代社会または福祉国家との関係で分析した（岩田、2000）。ここで岩田は、ホームレス問題をその貧困状態からだけではなく、ホームレス自身のアイデンティティに一つの焦点を当て、次のように記述している。「…A・Kさんは、自分は『本当のホームレス』ではない、『労働者』だということを強調して、『あいつら』と『俺』を区別するが、RさんやZさんは『俺』『俺たち』も『ホームレス』の一員だということを十分自覚しながら、しかし『ホームレス』にも区別があって、『ぶらぶらしているやつら』と『俺』や『俺たち』は違うと言いたいのである」（岩田2000：254）。なお、岩田は別の論文(2004)で、東京都内のホームレス調査の集計結果を分析し、ホームレスを①最長職が安定職で、野宿直前住居が一般住宅またはその他の住宅である安定型、②最長職が安定職で、野宿直前の住居が飯場・社員寮などの労働型住宅である労働住宅、③最長職が建設日雇労働に代表される不安定職である不安定型の三つのグループに類型化した。その上で、従来不安定な労働者を社会にキープしてきた三つの「場」（寄せ場、労働住宅、家族）が解体あるいは不安定化しつつあることを、ホームレスの三類型に照らし合わせながら指摘している。

なお、先にも述べたように、岩田(1995)は、戦後から1980年代前半までの、野宿する人々を含む「不

定住的貧困」³⁰とそれへの社会福祉制度の対応の特徴をまとめている。戦後直後に社会問題化された大規模な「仮小屋集団」「浮浪者集団」に対しては、生活保護制度の枠内及び枠外において、「かりこみ」による＝施設収容の対応がなされた。以降は、公営住宅地区やドヤ街（寄せ場）などの「特定地区」の問題として引き継がれていく。とりわけ、60年代に頻発した山谷や釜ヶ崎といった巨大な寄せ場における「暴動」によって、その援護・治安対策として、各種労働・福祉センターの建設をはじめとした「総合的」対策が着手される。これらの地区に集中するとされた「住所不定者」もまた、その延長での対応が行われた。岩田は、このような90年代以前の「ホームレス」対策は、治安管理等という要素を強めつつ、基本的には既存の生活保護法の法内、および応急的な法外援護と宿泊所などを利用した部分的救済の「つぎはぎ」によって対応がなされてきたと指摘している。

これに対して90年代半ば以降は、増大するホームレスへの国・自治体の調査及び対策が進められざるをえなかった。東京都では2000年4月に「山谷対策の今後のあり方について」という報告書が出された。この報告書は1999年に東京都福祉局に設置されていた「山谷対策検討委員会」の検討結果である。報告書では、それまでの「山谷対策」の大きな見直しがなされ、「山谷問題」が「最終局面」を迎えているとの基本認識のもと、諸対策の方向性が示されている。つまり、寄せ場対策としての「山谷対策」の終結と、「ホームレス対策」へのシフトがめざされたものであったと、狩谷らは指摘している（狩谷あゆみ他2006）。

大阪では、一足先に「寄せ場」対策とホームレス対策は合体をすることになるが、このような政策変化に関して、福原宏幸・中山徹（1999：35）は、大阪の日雇労働者—特に高齢日雇労働者—および野宿生活者の労働・生活の実態を分析し、政策課題を提案している。彼らは労働施策としては新たな職業紹介機能の充実はもちろんのこと、緊急対策としての雇用創出が望まれ、また高齢労働者には特別の対応策も必要であると述べている。

ホームレスの顕在化は、東京都、横浜市、川崎市、名古屋市、大阪市といった大都市部に集中した。このため、これらの自治体が一般的な相談、援助等を実施したものの、抜本的な対策とはいえず、財政負担も大きくなっていった。こうした中で、国レベルで対応すべきとの要請がしだいに高まり、2002（平成14）年に至り、ようやく「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」（以下でホームレス自立支援法）が成立した（菊池馨実 2009：107）。この法律は、自立の意思がありながらホームレスとなることを余儀なくされた者が多数存在し、健康で文化的な生活を送ることができないでいると

³⁰ ここで「不定住的貧困」とは、歴史的には「浮浪」「ルンペン」などと称され、あるいは近年は「ホームレス」「住所不定」などと呼ばれるような、「慣習的住居や職業をもたない」状態にある貧困を総称している。このような形態の貧困は、社会福祉の源流としての救貧法や慈善事業の眼前に形成されていた「下層社会」の一構成要素であり、都市のスラムなど「集住的貧困」の周辺にあって、スラム居住の「貧民」とともに、その困窮救済の中心的な一つの「対象」となった。ただし、それは「定住的」な貧民とは区別され、処罰と救済の境界上にあるもっともデリケートな「救済対象」であったと言われている。なぜなら、彼らの多くが失業者、半失業者であり、あるいは遠隔地からの職を求めての来訪客でありながら、その稼働能力の基準から、労働を忌避した者、ならず者と混同されがちであったからであり、また居住地が明らかでない者の救済は、地域の過重な負担として拒否されがちであったからである（岩田 1995：11）。

もに、地域社会とのあつれきが生じつつある現状にかんがみ、ホームレスの自立の支援、ホームレスとなることを防止するための生活上の支援等に関し、国等の果たすべき責務を明らかにするとともに、ホームレスの人権に配慮し、かつ、地域社会の理解と協力を得つつ、必要な施策を講ずることにより、ホームレスに関する問題の解決に資することを目的とした法律である。この法律で「ホームレス」の定義がなされているが、それは「野宿」や「路上生活」に狭く限定したものであり、この路上からの脱却＝自立が目指されたのである。これ以降ホームレスの自立・支援に関する研究が行われるようになる。

この自立支援について、山田壮志郎(2009)は、ホームレス支援における「就労自立アプローチ」及び「福祉的アプローチ」双方の施策の実態を包括的に分析している。特に、ホームレス問題の基本的構造を、仕事と住居と関係性の三者の喪失として捉え、ホームレス対策が最優先になすべきことは、住居の確保を通じたホームレス状態からの脱却支援であり、しかもそれは、無条件で保障されることが望ましいと述べている。中島明子(2005)も、ホームレス支援において、日本のホームレス対策における就労支援は、自立支援センターに入所することを前提とした自立支援事業を中心に展開されているが、ホームレスの人々への支援において、居住の場を確保した後に、個々の人に応じた支援サービスを行う仕組みである“ハウジング・ファースト”アプローチを強調している。

3) 広範な「ホームレス」の存在の指摘

日本のホームレスについて、極端な二つの見方がある。一つはバブル崩壊による失業一般からこれが現れているという見方で、したがって誰でもホームレスになる可能性がある、というものである。これに対して、ホームレスを「寄せ場」労働者の特殊な失業＝野宿化に焦点化して捉える見方がある(岩田 2004 : 50)。しかし、岩田(2009)は、ホームレス自立支援法の定義するホームレス以外に多様に広がりはじめた「ホームレス問題」について以下のように述べている。

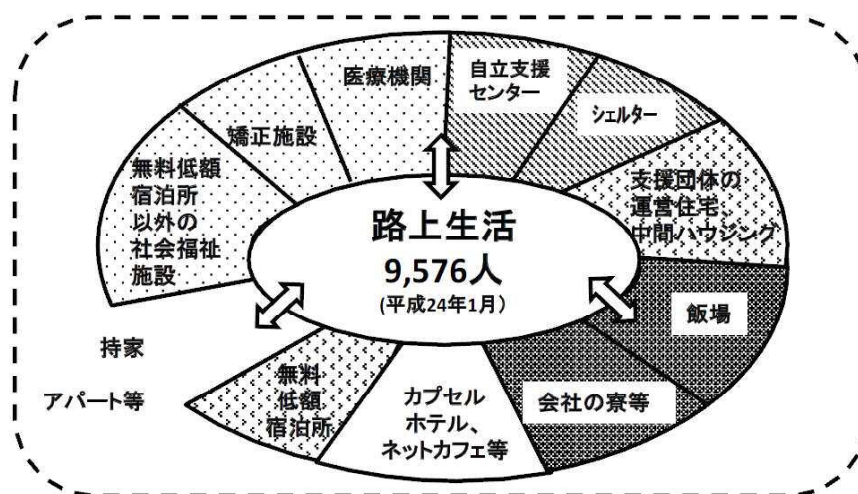
「ホームレスの実態に関する全国調査」によると、毎年ホームレスの数は減っている。2009年では、2003年時点の約2万9千人から1万6千人弱にまで下がっているなど、目に見えて減少している。だが、注目すべきは、単にこうした数の減少やその地域格差ばかりでない。むしろこのホームレスの数の縮小が進んだ時期に、別の「住居喪失」問題が提起されたことではなかろうか。その一つの典型は、24時間営業の飲食店や遊技施設などのなかに隠された住居を失った人々の存在であり、マスメディアによって、「ネットカフェ難民」などと名付けられた。もう一つは、昨年秋から暮れにかけて注目された、派遣労働者など企業の寮にいた労働者が解雇にあつて、住居も同時に失う危険にさらされた、という問題である。これは政府の緊急雇用対策の中に、住宅確保の問題を、かなり限定的な形ではあれ、追加させる結果をもたらした。さらに近年では、敷金も礼金もない、いわゆる「ゼロゼロ物件」と呼ばれるような「貧困ビジネス」が賃貸住宅分野に出現し、家賃滞納者への強引な取り立

てや法外な違約金請求などのトラブルまで含めて、「住宅問題」への注目が拡大している(岩田 2009 : 94-95)

このような、広義のホームレス問題に関しては、厚生労働省職業安定局(2007)が住居を失いインターネットカフェ・漫画喫茶等の店舗で寝泊まりしながら不安定就労に従事する「住居喪失不安定就労者」等の実態を、店舗利用者に対する調査を通じて明らかにした。

これは、ホームレスの実態に関する全国調査検討会(2012)の調査でも示された。ホームレスの数は、平成24年の概数調査では9,576人と数えられ、平成19年の18,564人の約6割に減少している。これはホームレス自立支援施策や生活保護適用などによる施策の効果と考えられるが、一方で路上には現れないが、慣習的な住居をもたないでネットカフェや簡易宿泊所などで寝泊まりしている人々や、家賃を滞納してアパートから退去させられる寸前の人々、契約満了になれば会社の寮から退去しなければならない人々、病院や刑務所から退院・退所しても行き先のない人々など、いわゆる広義のホームレスは、むしろ拡大しているとの指摘もある。つまり、ホームレスの背後には、もっと大きな「予備軍」があって、絶えずそこから流入、あるいは流出していくダイナミズムがあると述べており、それを図1のように示している。

図1 ホームレスの流入出の状況



ホームレスの実態に関する全国調査検討会(2012)より

2. 無料低額宿泊所等の新たな問題

以上のように、ホームレス問題研究は、ホームレス自立支援法の成立によって、各地のホームレス実態調査から、自立支援研究や、広義のホームレス研究へとシフトして行っている。さらに近年では、無料低額宿泊所や未認可のゲストハウスや宿泊所などの問題が指摘されている。これについての研究を見に行く前に、日本の近年の住宅保障についてまず確認しておきたい。

1) 近年の住宅保障政策

日本では、社会保障としての住宅政策は遅れており、ヨーロッパの福祉国家のような意味での、一般的な住宅手当はまだ存在していない。現存の政策は、以下の表9のようである。主な対象は低所得者や高齢者、障害者などの特定のニーズを持っている人々であり、支援方法は、現物支給と現金給付がある。

表 9 社会保障としての住宅施策について

主 な 施 策 対 象	政策手段				
		現物支給			現金給付
		市場環境整備 ・市場誘導	住宅供給	福祉施設等の供給	
	低所得層	入居の円滑化のための 枠組みの整備	①公営住宅制度	③無料低額宿泊所	⑤生活保護 (住宅扶助)
				④ホームレス 緊急一時宿泊事業 (シェルター事業)	
	特定の ニーズへの 対応 (高齢者、障害 者など)		②公的賃貸住宅 (地域優良賃貸 住宅等)	その他 (施設供給)	⑥住宅手当

厚生労働省ホームページより

まず、現物支給として、低額所得者、高齢者、障害者などの民間賃貸住宅への円滑な入居を促進する「入居の円滑化のための枠組みの整備」と、公営住宅制度、公的賃貸住宅、無慮低額宿泊所、ホームレス緊急一時宿泊所(シェルター)がある。まず、①公営住宅制度は、国と地方公共団体が協力して、住宅に困窮する低額所得者に対し、低廉な家賃で供給するものである。入居者は、収入分位50%を上限として、政令で規定する 基準(収入分位25%)を参酌し、条例で設定する入居収入基準及び住宅困窮要件を充足するものである。家賃は、入居者の家賃負担能力と個々の住宅の便益に応じて補正する「応能応益制度」に基づき、地方公共団体が決定する。住宅の供給は、都道府県及び市町村が地域の住宅事情に留意して供給しており、国は供給する地方公共団体を財政的に支援する。

②公的賃貸住宅は、地域優良賃貸住宅と民間住宅活用型住宅セーフティネット整備推進事業がある。まず、地域優良賃貸住宅は、高齢者世帯、障害者世帯、子育て世帯等地域における居住の安定に特に配慮が必要な世帯の居住の用に供する居住環境が良好な賃貸住宅を供給することであり、民間住宅活用型住宅セーフティネット整備推進事業は、民間賃貸住宅の空家を、耐震改修・省エネルギー改修又

はバリアフリー改修などを行い、有効に活用することにより、高齢者世帯、障害者世帯、子育て世帯等向けの賃貸住宅を供給することである。③無料低額宿泊所施設は、生計困難者のために無料又は低額な料金で宿泊所等を利用させる施設である。社会福祉法に定める第2種事業であり、事業を開始したときは、都道府県知事等への届出が必要である。なお、ホームレス緊急一時宿泊事業は、ホームレス等に対して、緊急一時的な宿泊場所を提供し、健康状態の悪化を防止する等により、その自立を支援することである。

現金給付としては、住宅扶助と住宅手当の二つがある。⑤住宅扶助は生活保護の扶助の一つであり、その支給は、金銭給付を原則とし、民間賃貸住宅の家賃等を支給する。金銭給付によることが適当でない場合等は、現物給付として宿所提供施設(※)を利用させる方法で支給する。住宅扶助の基準額については、地域ごとに上限額を定めているが、たとえば、括弧内の金額は複数人世帯の場合の基準額 1 級地－1 (東京都区部) の場合は53,700円 (69,800円) であり、3級地－2 (熊本県八代市) の場合は26,200円 (34,100円) になる。

⑥住宅手当は、離職により住まいを失って、求職活動をしている人々対象としたもので、現在、住居がないか住居を失うおそれのある場合に限られる。支給は、対象者の収入、資産、就職活動の要件に該当すれば支給されるが、最長6ヶ月間である。ただし上記の就職活動要件を誠実に実施している者については、さらに3ヶ月間延長可能(＝最長9ヶ月間)である。支給額は地域ごとに生活保護の住宅扶助と同額の上限額を設定している。単身世帯の場合、支給額は表10のようである。

表 10 単身世帯の住宅手当支給額

区分	月収8.4万円以下	月収8.4万円を超える収入
東京都の1、2級地	53,700円を上限	住宅手当支給額 ＝家賃額－(月収－84,000円) ※家賃額は住宅手当基準額を上限 ※支給額は、100円未満を切上げ
大阪府の1、2級地	42,000円を上限	
富山県の3級地	21,300円を上限	

厚生労働省ホームページより

2) 無料低額宿泊所等をめぐる議論

ところが、最近、無料低額宿泊所や未認可のゲストハウスや宿泊所などの問題が指摘されている。これはまた、このような施設が集まっている最近の「寄せ場」の問題ともなっている。

先述したように、既存の日雇労働者の高齢化及び「寄せ場」の変化により、ドヤ街の宿泊所もその機能の変化が促されている。稲田七海・水内俊雄(2009)は、介護や医療の受け皿のない困窮した単身高齢者の受け入れ先として、無料低額宿泊所は一定の役割を担っていると述べている。

無料低額宿泊所は、前述したように社会福祉法第2条第3項に定める第2種社会福祉事業のうち、その第8号にある「生計困難者のために、無料又は低額な料金で簡易住宅を貸し付け、又は宿泊所そ

の他施設を利用させる事業」に基づき、設置される施設である³¹。ホームレスの急増に対応する形で、東京都や首都圏近郊の都市においてはホームレス支援を目的とした宿泊所が急増し、宿泊所利用者の8割が生活保護受給者となった。しかし、急速に宿泊所が増加する中で、宿泊所の運営や居住環境に多くの問題が生じてきた。そこで、東京都は、2003年4月に第二種宿泊所における居住環境の向上と経営面の透明性を確保するために、宿泊所に関する新たなガイドライン「宿泊所設置運営指導指針」を策定し、さらに2004年1月には「住宅扶助認定基準額」を設け、宿泊所の運営の適正化と居住環境の向上を誘導した。以上のような規制が設けられたことにより、一部の宿泊所における劣悪な居住環境と不透明な経営状態はある程度改善され、一時的に居室のみを提供する空間提供型の宿泊所と、支援スタッフを配置し宿泊所利用者の生活の安定と自立支援を積極的に行う自立支援型の宿泊所が明確に差異化されることになったという(稲田七海・水内俊雄 2009)。

厚生労働省の調査によれば、2010年6月末時点で無料低額宿泊所は、全国に488施設あり、14,964人が入居しており、そのうち91.5%が生活保護受給者である(厚生労働省 2011)。つまり、ほとんどの入居者は生活保護費のなかから家賃や食費、そのほかの経費を支払っている³²状況である。

2003年7月には「無料低額宿泊所の設備・運営等に関する方針」が策定されて、2004年には東京都が生活保護受給による路上からの生活再建、及び就労自立の図るため「地域生活移行支援事業」³³が実施された。「無料低額宿泊所の設備・運営等に関する方針」が策定され、居住環境の質は整えようとしたものの、無料低額宿泊所は「貧困層をターゲットにしている、かつ貧困からの脱却に資することなく、貧困を固定化するビジネス(湯浅誠 2008:193)」をしているとの非難が多かった。無料低額宿泊所はホームレスの人々が生活する環境として必ずしも適切ではないため、無料低額宿泊所は一時的な居住の場として機能させ、一般住宅への転居を促していくことが必要である(山田 2009)という意見

³¹ 宿泊所事業開始時には、都に届出なくてはならず、宿泊所に対するガイドラインも定められている。ガイドラインの主な内容は、①居室の床面積は一人当たり3.3㎡以上であること、②浴室は定員に見合った数を設置すること、③施設の開設前に都に対して事前相談を行うこと、等がある(堀川勝史他2008)。

³² これに関して、宿泊所は生活保護受給者をターゲットとした「貧困ビジネス」の温床となりやすい点が問題となっている。不透明な名目で多額の経費を徴収し本人の手元には月1〜2万円程度しか残らない一方で、食事の内容や居住環境が劣悪な施設もあるため、「生活保護受給者を食い物にし、生活保護費をピンハネする貧困ビジネス」と批判される場合があるが、路上生活を送り続けるよりは「マシ」なのであり、生活保護の申請を実質的に代行し、ホームレスをとにかく「畳の上に上げた」宿泊所の役割は、やはり十分に評価されるべき(鈴木亘2010)との見解もある。

³³ 東京都は「ホームレス」対策として、生活保護受給による路上からの生活再建、及び就労自立を目的として他の自治体に先駆けて実施した自立支援事業という2つのルートと併せて、平成16年度から平成21年度(事業の利用開始は16年度〜19年度)にかけて「地域生活移行支援事業」を実施することで、「ホームレス」状態から生活を立て直すために、3つのルートをつくった。この3つ目のルートである「ホームレス(公園等生活者)地域生活移行支援事業」は、民間賃貸住宅や都営住宅を利用して、居住の場の確保を優先させながら、「自立」に向けて必要な生活・医療・福祉・就労・居住等の支援について、生活支援、居住支援、就労支援を行う、“ハウジング・ファーストによる複合型支援”の事業といえる。換言すると、利用者を当たり前の人間として処遇して、一般住宅への入居を優先的に確保するもので、利用者の尊厳に基づく支援システムともいえよう。「地域生活移行支援事業」の目的は、①生活、住居、就労を一体的に支援することにより、公園等で生活をしてきた人々が地域で自立することと、②公園等の本来の機能を回復するものであった1。この2つの目的が絡み合って進行したことが本事業の底流になっている(中島明子 他2013)。

がある。

これに対し、稲田七海・水内俊雄(2009:158)は「救護施設をはじめとする生活保護施設、介護保険三施設などの第一種の施設が不足し十分に機能を発揮していない中、ホームレスのみならず障害や疾病を持ちかえる場所を持たず行き場を失った困窮者が増加する中、こうした人々の居場所を確保するためには、急場凌ぎとはいえ無料低額宿泊所や自立援助ホーム、そして無届の施設を使用せざるを得ない。対処療法的に問題を解消するためには、無料低額宿泊所の本来の機能と実情の乖離を埋めるための制度改革や規制改革が求められるが、より根本的な問題の解決には、行き場のない社会的入院患者や介護難民に対し、適切な居場所とケアを確保するような社会福祉と住宅施策をミックスした新たな構想に基づく対策が求められよう」と指摘している。

3) NPO による生活保護と住宅セーフティネットの試しとその評価

居住脆弱層に対する NPO 等の民間のセクターの活動は、入居者のニーズに合わせた、共同住宅・サポータティブハウス・支援付き住宅などの多様な形で運営されている。サポータティブハウスは、高齢や障害で労働能力を失っていく人々に居宅での継続を保証するため、居宅保護が認められていなかった簡易宿泊所から共同住宅へ転用したものの中で、居住水準の向上を指針とした民間の共同住宅のことを指す。サポータティブハウスの主な特徴は、①共同リビングがあり、②スタッフが 24 時間常駐して生活相談・支援を行っていることと、③ハード面において一部高齢者対応となっている点である。

サポータティブハウスの展開は釜ヶ崎で始まった。釜ヶ崎で活動するまちづくりグループである「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」は、生活保護を利用して居住の安定を図り、その後の生活をサポートするという支援策を提唱した。居住が安定しない限り、そのあとの生活は安定しないという考えが根本にある。まず、住まいを確保することで心身を休め、その後の就労を目指し、社会復帰することを目指す。居住を確保した労働者の生活がそれぞれ安定すれば、それが釜ヶ崎のまちの再生にもつながるという発想である。しかし、まちづくりのグループは、居住となる建物を持っていないし、ましてや買うことの出来るような財力もない。そこで、彼らが目につけたのが簡易宿泊所の建物であった。

その頃の簡易宿泊所は労働者のホームレス化によって宿泊客が激減し、空室がかなり目立つ正体になった。中には経営が立ち行かなくなり、廃業するものやまったく別の商売へと転換したりするものがみられるようになっていた。まちづくりグループは、このお客の減った簡易宿泊所を、ホームレス向けの住宅に転換できないかと考え始めたのである。簡易宿泊所を経営する立場としても、顧客が減っただけでも大打撃であるうえ、釜ヶ崎のまちを歩けば顔なじみの元宿泊者たちが路上生活をし、炊き出しに並んでいる姿を目にすることになる。その後 2000 年 8 月に、ホームレス支援に関心の強い一人の経営者が、簡易宿泊所を廃業して共同住宅に転換するという一大決心をした。簡易宿泊所から転換した共同住宅は「サポータティブハウス」と名づけられ、路上で生活するホームレスや元日雇労働者に生活保護（居宅保護）を利用した住宅支援が開始された。このようにまちづくりの中からうまれた「住

宅」と「生活保護」をセットにした支援は、釜ヶ崎の新たなセーフティネットとして機能し始めたという(稲田七海 2011)。

むろん、堀川勝史(2008)は、全体的に自分の部屋にこもって生活している人々が多く、他の居住者とあまり話をしない人が半数以上いるなど、他人との関わりも極めて少ないが、スタッフを有するサポーターハウスおよび宿泊所は、高齢となり収入も住まいもなかった労働者にとって生活保護を受給し、住まいを確保する上で一定の効果を上げていると述べている。

なお、滝脇憲(2010)は、困窮・単身・要介護高齢者/障害者など、地域居住が確保されていない問題を、「支援付き住宅」の制度化によって解決することを強調している。また、阪東美智子(2007)は、ホームレス等住宅困窮者に対する住宅問題と住宅扶助のあり方について、福祉分野のニーズを反映し、居宅保護に必要な条件を満たした住宅ストックの整備とそれによる住宅セーフティネットの実現を図る必要があると強調している。

以上のように、日本の居住脆弱層問題への研究的アプローチは、戦後からの「不定住的貧困」の推移とそれへの政策を論じたもの、「寄せ場」＝「ドヤ街」の労働者の生活やこれへの政策に焦点を当てたもの、その衰退について指摘したものから、90年代半ば以降のホームレスの増大から行われた各地の調査、ホームレス自立支援法による「自立支援」について掘り下げようとした研究、広義のホームレス(ネットカフェ等)についての調査、さらに「寄せ場」＝「ドヤ街」の「ドヤ」を利用した「サポーターハウス」による新たな住宅セーフティネットの可能性の示唆まで、多様な形で進んでいる。

第二章 韓国における社会福祉及び地域福祉事業の展開

本章では、基礎生活保障受給者・低所得者の割合が高いチョッパン居住層の生活を記述・分析する前段階として、まず居住脆弱層向け居住政策の状況を、韓国の住宅政策の特徴を踏まえながら述べる。次いで、居住脆弱層も利用できる社会福祉制度や地域福祉事業についても概観しておく。ここでは特に、チョッパン居住者の多数である低所得、老人、障害者向けの制度・事業を中心に取り上げる。

第一節 居住脆弱層向け政策の現状

1. 韓国の住宅政策の変化

韓国の場合、政府が世帯の特性を考えながら住宅問題に直接的な介入を始めた時期は、所得階層による住宅供給戦略の導入と永久賃貸住宅の供給等を含む住宅200万戸建設計画（1989-1992）の推進からである。その以前の1980年代末までの住宅政策は経済政策の一環として主に民間部門を通して住宅を供給したため、低所得層より支払能力のある中産層以上が新規住宅の需要層になっていた。これは中産層が使った既存住宅に低所得層が移住する住宅上向移動を期待している住宅循環理論（housing filtering theory）に基づいた政策だったといえる。

1980年代末、住宅200万戸建設計画と新経済5カ年計画（1993-1997）を通じて、公共部門が賃貸住宅と分譲住宅を低価で供給し、それなりに低所得、庶民層の住宅問題の解決において、公共の役割を強化させ始めた。しかし、この時期も住宅政策の根本的な目的は、住宅不足の問題を解消するための住宅の量的拡大にあったので、「居住福祉」に充実した住宅政策だとは言い難い。

住宅普及率が101.2%にのぼって、量的な側面で住宅問題が非常に改善された時点である2003年以降に登場した盧武鉉政府は量的指標である住宅普及率のほかに、住宅の質的側面を勘案するように最低住居基準を政策指標に制度化した。また、[住宅総合計画]（2003-2012）を策定し（2004年1月）居住福祉を重視する政策に転換するために制度を整備し始めた。特に、長期の公共賃貸住宅の割合を総住宅在庫の20%水準に拡大することを計画して、公共賃貸住宅の供給政策に最も大きな比重を置いた。キム・ヘスン³⁴は、この時期を、個人の居住ニーズを多量の公共賃貸住宅の供給を通じて解決しようとした時期であると、指摘している（キム・ヘスン 2012）。

2008年以降、李明博政権による住宅政策は、前政権と変わらぬ建設主義による供給政策である。名称が公共賃貸住宅から「ボグンジャリ³⁴住宅」と変わり、賃貸住宅だけではなく分譲住宅の供給までも

³⁴ ボグンジャリ(보금자리)とは、日本語の‘巢’‘ねぐら’と類似な表現であり、‘住み心地のよい場所’を意味している。

対象に入れていることは以前と異なる点であるが、基本的には供給主義の政策を前面に打ち出している。住宅改修支援や「ハッピーハウス事業」という、住環境の改善支援や、個別相談事業など居住サービス支援施策も展開しているものの、政策の優先順位は「ボグムジャリ住宅」においている。その中には93年以降中止となった「永久賃貸住宅」を再度供給することにしたなど低所得層への居住支援も成り込まれているが、中心基調は持ち家支援である。また、それまで政権が変わるたびに新たに作られてきた賃貸住宅を「ボグンジャリ」という名の下で並列的に統合したが、各住宅類型による居住世帯や家賃体系の違いにより混乱をきたしている。永久賃貸住宅に関しては制度自体を復活させたことに意義があるかもしれないが、依然として貧困世帯の集中による社会的差別問題が指摘されている(ナム・ウォンソップ 2012)。

2013年2月に新政府が発足し、新たな居住政策の展開が行われている。代表的には「ヘンボック(幸福)住宅」として公共賃貸住宅政策を推進している。「低所得層」の「家族」を中心対象としたボグンジャリ住宅と比べ、ヘンボック住宅は新婚夫婦、大学生などの1～2人を対象とする小型住宅を提供することである。しかし、既存の都市外部地域に建ててきた公共住宅とは違って、都心部に建設、または買上で提供することを目指しているため、土地確保などの問題に阻まれ、十分には進められていない状況である。

表 11 韓国における住宅政策の変化

1989年以前：	公共賃貸住宅政策の始まり
1989～1992年：	永久賃貸住宅の供給と中断
1993～1997年：	50年公共賃貸住宅導入及び民間参加活性化
1998～2002年：	国民賃貸住宅の導入及び 100万戸供給計画
2003～2007年：	公共賃貸住宅類型の多様化
2008～2012年：	ボグンジャリ住宅として公共賃貸住宅政策推進
2013～現在：	ヘンボック住宅として公共賃貸住宅政策推進

2. 公的団体による居住支援

低所得層や社会脆弱層にたいする住宅保障制度としては、すでに示してきたように、永久賃貸住宅等の公共賃貸住宅、買い上げ賃貸住宅事業、傳貴(チョンセ)賃貸住宅事業³⁵などが挙げられる。主な事業とその内容は表12ようである。

³⁵傳貴(チョンセ)とは韓国における不動産賃貸の一形態である。オーナー側が賃貸料として「傳貴金」を受け取り、一定期間不動産を使用させた後、不動産が返還される際に、傳貴金を返す制度である。傳貴(チョンセ)賃貸住宅は、当該住宅に対して韓国土地住宅公社または自治体が家主と傳貴契約を締結し、その後に入居者にサブリースする。また、入居者の申し込みの窓口は自治体である(株式会社日本総合研究所、2011)。

表 12 居住福祉事業

事業	内容
a. 国民賃貸	一般国民対象。政府(地方)財政と国民住宅基金の支援を受け、韓国土地住宅公社や地方公社が建設(または買上)して30年以上の長期間に亘って賃貸する公共建設賃貸住宅
b. 多世帯買上賃貸	都心部に居住する最低所得層が現生活圏で、現在の収入で居住できるよう、既存の多世帯住宅などを買い上げて低額で賃貸
c. 再建築買上賃貸	住宅建築事業により発生する賃貸住宅を韓国土地住宅公社が買い上げて賃貸する住宅
d. 既存住宅傳賃賃貸	都心部に居住する最低所得層が現生活圏で、現在の収入で居住できるよう、既存住宅を傳賃で借りて、低所得層に低額で再賃貸
e. 少年・少女家長等向け傳賃住宅支援	少年・少女家長、交通遺児などに賃貸住宅を提供し、社会脆弱層の児童・青少年の居住安定を図る
f. 新婚夫婦向け傳賃賃貸	都市低所得層の新婚夫婦が現生活圏で安定的に居住できるように、既存住宅を傳賃で借りて、低額で再賃貸
g. 居住脆弱層向け住居支援	チョッパン・ビニールハウス・ゴシウォン・旅人宿に居住する者や犯罪被害者を対象とし、住居環境改善や自立基盤を備えるよう、買上賃貸住宅、傳賃賃貸住宅、または国民賃貸住宅を低額で賃貸する事業
e. 公共賃貸	①5年の公共賃貸住宅②5年の賃貸期間終了後、分譲転換により所有権を受けることできる住宅③50年の公共賃貸住宅④分譲転換せず、賃貸料だけで居住できる住宅で2年(賃貸借期間)ことに契約が更新されて50年まで居住できる住宅(新規供給なし)
f. 永久賃貸	低額の賃貸条件(保証金、家賃)で永久的に居住できる住宅。(新規供給なし)

韓国土地住宅公社ホームページより

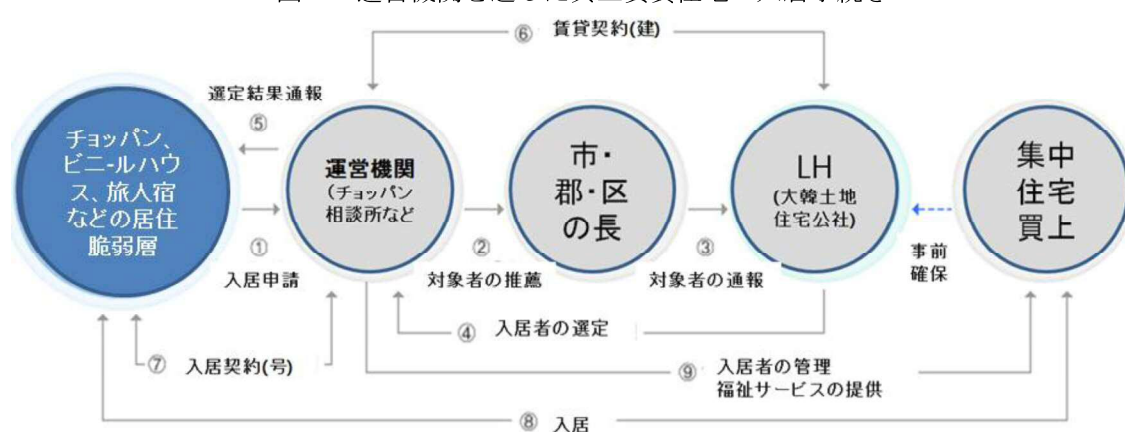
この中でチョッパン生活者を含む居住困窮者のための居住支援は「g. 居住脆弱層向け居住支援事業」である。この事業はチョッパン、ビニールハウス、ゴシウォン、旅人宿に居住する者や犯罪被害者に対し、居住環境改善及び自活の土台を備えるように、買い上げ賃貸住宅・傳賃賃貸住宅または国民賃貸住宅を低価で賃貸する事業である。最初は2007年9月に「チョッパン・ビニールハウス居住世帯に対する業務指針」として制定され事業が実施されたが、2010年3月に入居対象者をゴシウォン・慮人宿・犯罪被害者まで拡大させて、名称も「居住脆弱層向け居住支援事業」に変更された(居住福祉財団 2011)。入居対象基準は所得基準と財産基準があり、所得基準では①前年度の都市勤労者世帯の月平均所得の50%以下(2013年基準: 4,606,216ウォン以下/3人以下の世帯)、また財産基準では②5,000万ウォン以下の土地、及び③2,200万ウォン以下の自動車という3つの基準を満たす世帯が対象になる。契約期間は基本的に2年であるが、4回まで再契約(2年ごと)が可能であり、最長10年まで居住することができる。なお、地域別に若干異なるが、保証金(敷金)は100万ウォン、家賃は月8～10万ウォン程度である。事業は大韓土地住宅公社(LH公社)が既存住宅を買上て賃貸する。手続きは、図2のように住民センター

(役所)に申請する方法と、図3のように運営機関に申請する方法がある。

図 2 買上賃貸住宅の入居手続き



図 3 運営機関を通じた買上賃貸住宅の入居手続き



大韓土地住宅公社ホームページより

運営機関の選定・委託は、居住福祉財団が国土海洋部から委任を受けて行っている。民間福祉団体である運営機関は、入居者の選定および管理、入居者に対する福祉サービスの提供など自活支援、家賃及び公課金の徴収と管理の業務を行う。現在、全国に56箇所の民間団体がこの事業を委託運営している。釜山市には6ヶ所の運営機関があり、釜山のチョッパン相談所2ヶ所とも運営機関と選定されている。他の4ヶ所はホームレス支援に関する施設である(大韓土地住宅公社ホームページ)。

入居者の多数が運営機関を通じて申し込みをしているが、その入居手続きは図3のようである。まず、①居住支援を希望する者は運営機関に居住支援を申請すると、②運営機関は面接・実態確認などの居住支援申請者の基礎調査後、適格者に限り該当する地域の長(市・郡・区の長)に、入居者選定を要請する。③市・郡・区の長がLHに対象者を通報すると、④LHは入居資格を確認して、入居者を選定し、運営機関に通報する。⑤運営機関は入居者と選定された者に選定結果を通報して、⑥LHと運営機関が賃貸契約を結んで、⑦運営機関が入居者と号別契約を結び、入居案内をする。⑧入居者は契約日から50日以内に該当住宅へ入居して、住民センターに転居届けを出すことになる。

しかし、韓国土地住宅公社によればこの事業の移住数は目標の34.2%程度に止まっている。国土海洋部が2007年に発表した「最低住居基準未満世帯に対する支援対策」では、2012年まで5,173世帯に居住支援を行うことを目標として掲げたものの、2010年までの実績は目標の50%にも達しない状況である（表13）。

表 13 居住脆弱層向け居住支援事業の推進現況

		計	2007	2008	2009	2010. 8
目標	チョッパン	1,728	304	550	506	368
	ビニールハウス	1,087	132	200	244	511
	ゴシウォン・慮人宿	100	-	-	-	100
	犯罪被害者	71	-	-	-	71
	計	2,986	436	750	750	1,050
申請	チョッパン	1,274	304	177	644	149
	ビニールハウス	955	150	419	150	236
	計	2,229	454	596	794	385
契約	チョッパン	709	76	90	358	185
	ビニールハウス	635	43	253	198	141
	計	1,344	119	343	556	326

韓国土地住宅公社居住福祉処(2010)より

このような直接の住宅提供以外には国民基礎生活保障法による住宅扶助(2014年度基準：月107,532ウォン)がある。国民基礎生活保障法については第二節で詳しくみる。

3. 非営利組織による居住支援

前述のような公共の事業が展開される中、民間団体による居住福祉支援活動は、過去においては生存権保障獲得活動や政府に対する要求活動が中心だったが、次第に民間団体も住宅やサービスを提供する方向へと変わってきている(ナム・ギ Chol 2012)。近年の主な非営利組織の活動をまとめると(表14)のとおりである。

韓国Habitat、美しい財団、社会福祉共同募金会などが代表的な民間の活動組織として挙げられるが、この中で現在、最も注目されているのが居住福祉センターの活動である。

「居住福祉センター」は地域社会の居住ニーズに対応するには地域に根付いた活動が必要だということを認識した民間団体が社会福祉共同募金会からの助成を受けて全国に設立されたものである。現在、全国に12箇所が活動しており、地域内に居住問題のある低所得層を掘りおこして中央政府、地方自治体及び民間の居住支援サービスと連携しながら統合的なサービスを支援し、これらの福祉水準

を高めることを目的としている³⁶。この事業の場合、直接サービスを供給するというよりは、地域内の多様な民間団体が居住を中心としたネットワーク構築、情報や資源の共有、居住福祉に対する理解促進及び協力関係を維持することに力をつくして、地域社会内の居住福祉に対する関心を高めることに寄与しているという(キム・ヒュスング 2009)。

表 14 居住分野における主な非営利組織の活動

	設立背景 (設立年度)	事業内容	資金助成	特徴
1. 韓国 Habitat	無住宅低所得世帯に 住宅提供 (1994)	・住宅建設、家屋修理など	寄付金、 引換金、 その他	土地及び住宅の分譲
2. 美しい財団	寄付文化の拡大 (2000)	・社会福祉分野の多様な事業 に支援 ・居住支援事業が重要事業で はない (居住福祉分野：賃貸住宅に 居住する孤児家庭に居住費 支援)	寄付金	2004年から孤児家庭を対 象として開始
3. 社会福祉 共同募金会	寄付金の統合化 (1998)	・社会福祉分野の多様な事業 に寄付金分配・支援 ・居住支援事業が重要事業で はない (居住福祉関連：臨時居住費 支援を通じた野宿者の社会 復帰支援、住宅改良など)	寄付金	2001年から高齢者、障害 者などの脆弱層のための 居住環境改善事業から居 住支援が始まり 2006年から「居住福祉セ ンター」事業へ支援
3-1. 居住福祉 センター	社会福祉共同募金会 の居住福祉モデル事 業として始まり (2006年)	居住脆弱層のためのサービス (相談・資源連携・居住環境 改善・居住貧困地域の管理な ど)	社会福祉 共同募金 会	民間団体のコンソーシア ム方式で運営 (全国に12箇所/2012年6 月時点)
3-2. ホームレス 向け臨時居 住支援事業	社会福祉共同募金会 の居住福祉事業とし て始まり (2005年)	ホームレスを対象として家賃 (最長3ヶ月、平均2ヶ月) 及び生活に必要な物品提供 など	社会福祉 共同募金 会	民間団体のコンソーシア ム方式で運営

朴・シンヨン(2009)を参考に筆者修正

続いて注目されているのは、社会福祉共同募金会からの助成を受けて2005年に始まった「ホームレス向け臨時居住支援事業」である。この事業は路上生活をしているホームレスを対象に、家賃(最長3ヶ月、平均2ヶ月)及び生活に必要な物品などを提供して、居住支援や公共社会保障制度との連携及び就労支援などを、自立生活維持を目指すケースマネジメントの手法で提供する事業である。しかし、このような非営利組織の事業は、民間福祉財団の支援が継続的に行われることが難しい上に、事業に必

³⁶ ①居住福祉ネットワークの構築(民民、官民)、②地域社会の居住現況調査及び研究、③居住支援事業(緊急賃貸費の支援、家屋修理)、④資源の連携、⑤居住脆弱者のための養護・実践事業、⑥居住脆弱層向け居住支援事業、⑦特性化事業を行っている。

要な費用を非営利組織が自ら調達することはさらに困難であるため、定着するまでにかなりの時間と努力が必要である。

4. チョッパン居住者向け支援の最前線「チョッパン相談所」

非営利組織のうち、チョッパン地域においては「チョッパン相談所」が設置されている地域がある。全国に10箇所(うちソウルに5箇所)が設置されていて、民間のきめ細かな対応が居住者の生活の安心感を高めていると言われて、その役割が高く評価されている(ナム・チョルカン 2007)。

1) 「野宿人などの福祉及び自立支援に関する法令」による野宿人施設の変化

チョッパン対策には前述した官民の活動があるが、より具体的な居住者に対する生活支援はチョッパン相談所が拠点となってサービスを提供している。

これまで、チョッパン相談所は約10年にわたって法的根拠もないまま運営されてきたが、ようやく2012年6月から「野宿人などの福祉及び自立支援に関する法令」により野宿者施設として設置されるようになった。法令による施設の構成は図4、5のとおりである。

チョッパン相談所の設置・運営基準は、①92㎡以上の施設面積や相談室、事務室、トイレ、物品保管室、水道施設、災害用備蓄施設に関する設備基準、②施設長1名、行政責任者1名(施設長が兼職可)、相談員2名以上の人的基準が制定されるようになった。これは法律施行以前にあったチョッパン相談所のほとんどに該当するが、実は法令自体が現在のチョッパン相談所の実情に合わせて作った基準に過ぎないからである。

図 4 野宿人施設の構成(2012. 6. 7 以前)

設置根拠：社会福祉事業法及び浮浪人・野宿人施設の設置・運営規則

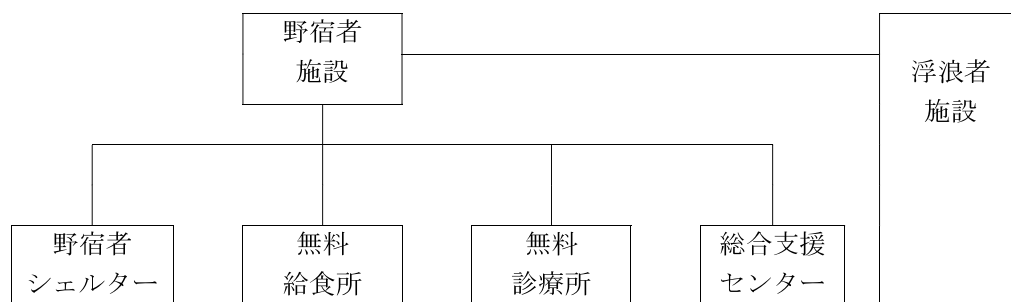
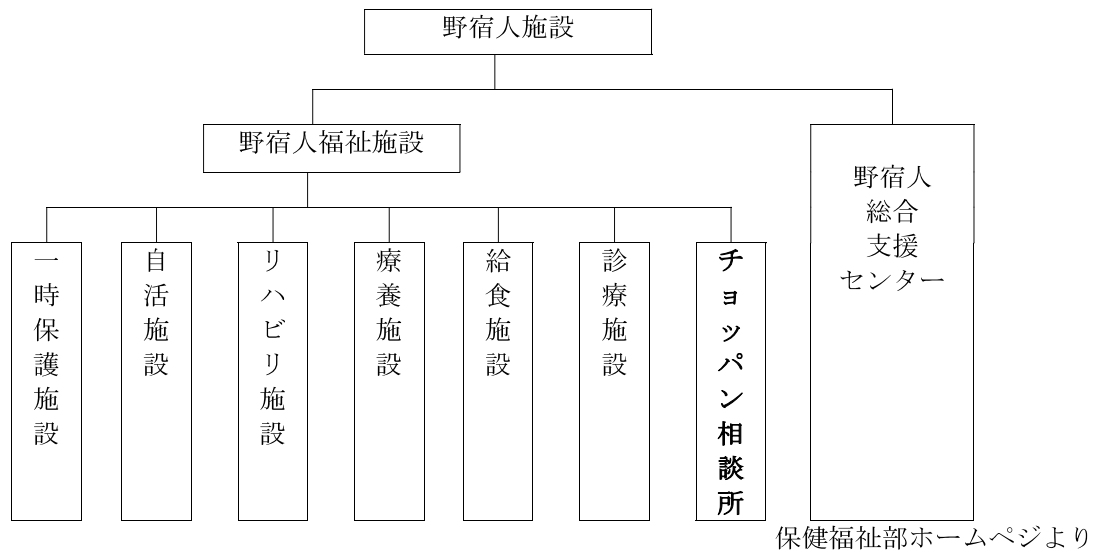


図 5 同 (2012. 6. 8 以後)

設置根拠：野宿人などの福祉及び自立支援に関する法令



2) チョッパン相談所の機能と役割

チョッパン相談所は基本的に保健福祉部の主導で設置されたものであるが、実際の運営は非営利組織に委ねている。しかし、大邱チョッパン相談所の2011年度予算をみると、国と自治体の補助金は予算の39.5% (運営費、人件費) 程度であり、実際の事業は社会福祉共同募金会や寄付金、寄付物品などの民間の資源で行っている。運営主体は宗教法人が多く、他は財団法人等である (表15)。

表 15 チョッパン相談所の運営現状

地域 (チョッパン相談所)		運営主体	開所
ソウル 特別市	永登浦	広野教会	2001. 3
	南大門	ナサロの家(社団法人)	2000. 3
	龍山	キリストの教会学院	2001. 1
	鍾路	救世軍(財団法人)	2000. 3
	東大門	ウリモヅ福祉財団(社会福祉法人)	2003. 4
仁川広域市		明日を開く家(社団法人)	2001. 1
大田広域市		デジョンホームレス協議会	2001. 2
大邱広域市		ボランティア開発院(社団法人)	2001. 2
釜山広域市	鎮区	大韓プロテスタント長老会	2001. 4
	東区	大韓プロテスタント長老会	2000. 8

ジャン・ミンチョル(2011)より再構成

事業は10箇所に通ずる事業のほか、チョッパン生活者のニーズ、機関の特性などによって様々な方式で行われている特化事業がある（表16）。

共通事業はチョッパン生活者の野宿予防、生活安定、自立・自活のための事業であり、主な内容は居住支援、相談及び行政支援、情緒的支援、保健医療・就労支援、生計支援、生活支援等である。最近ではチョッパン生活者のエンパワーメントの向上や住民参加を通じた組織化事業・地域福祉事業などが実施され始めた。例えば、住民組織化事業、共同作業所、週末農園の運営、共同体事業、生活協同組合、生活衛生支援センター、リサイクルショップ運営のような事業である。

表 16 チョッパン相談所の事業内容

	項目	事業内容
10箇所に通ずる事業	居住支援事業	居住向上サービス(上張り、網戸・屋根・ボイラー等の設置及び修理) 冷暖房支援(練炭・石油・ヒーターの支援、ボイラー交替(練炭・石油ボイラー)) 居住費・家賃支援、移住支援、居住情報提供、買い上げ賃貸住宅の運営 賃貸住宅入居者ケース・マネージメント、居住安全のチェック チョッパン賃貸事業、緊急支援(入院、手術、事故、刑務所から出所等)など
	相談及び行政支援	ケース・マネージメント、基礎生活保障の受給、住民登録・障害登録・戸籍取得などの業務支援、法律情報提供、生活相談など
	情緒的支援	ミニ図書館運営、遠足・登山プログラム、心理プログラム、自尊感情向上プログラム(自叙伝書き、人文学講義、当事者ボランティア団など)、映画上映、文化講演観覧、体育活動プログラム、AA(デジョン)など
	保健医療支援	無料検診及び診療、病院等と連携、無料診療所の運営、訪問看護サービス、漢方診療、メガネ支援など
	就労支援	あっせん、シェルター等と連携、就労情報提供など
	生計支援	炊き出し、物資援助(食材(米・野菜・キムチ等)) 寄付されたリサイクル品(衣服・家電製品等)
	生活支援	風呂(銭湯利用クーポン)・洗濯・理容、パソコン室の開放、休憩室の運営
地域によって行われている事業		<ul style="list-style-type: none"> ・住民組織化事業：永登浦、南大門、鍾路、大田、大邱 ・合同結婚式：永登浦 共同作業所：龍山、大邱、南大門、鍾路 ・町の祭り：東大門 週末農園の運営：大田、釜山鎮区 ・共同体事業：大田/就労、釜山鎮区/文化 ・生活協同組合、生活衛生支援センター：大田 ・リサイクルショップ、喫茶店の運営：大邱

ジャン・ミンチョル(2011)より

過去10年に亘り法的根拠もない状況で、民間の資源でチョッパン地域を守ってきたその業績と必要性は当然認める必要がある。しかし、政府や自治体は、これまで法的根拠がないことを理由に支援システム、連携システムなどネットワークにチョッパン相談所を参加させることを制限し、法律の根拠が必要な重要な問題の決定においてもチョッパン相談所は除外されてきた(ジャン・ミンチョル 2012)。そのため、チョッパン相談所は、事業マニュアル、事業評価を通じた業務改善などをほとんど行われていないまま現在に至った。去年から法令によって野宿施設の中に入るようになったが、まだその基準も詳しく設定されていないのが実情である。

加えて、チョッパン相談所の多様な事業について、一部からは事業内容が多すぎるのではないか、という批判もある。つまり、チョッパン相談所自体が、その本質的機能を把握しないまま事業を行っているという批判である。例えば、キム・ソンミの調査(2007)によるとチョッパン居住者が‘チョッパン相談所から支援を受けたいサービス’に健康検診及び医療支援(16.3%)、就労支援・あっせん(13.9%)、生活費の支援(11.8%)のような結果があるにもかかわらず、就労支援に関する支援(あっせん及び自活支援センターとのネットワークなど)はごく少数で、物品支援が事業のメインになっている相談所が多い。ホームレス化を防ぎ、あるいはホームレスから脱却するステップとなるためには、住民のニーズそれ自体の深い調査が必要であり、これを前提としたチョッパン相談所の方向性についてより深い論議が必要である。

第二節 韓国における対象別社会福祉制度および事業の現状

1. 低所得層を対象とする主な制度及び事業

1) 基礎生活保障制度

韓国における最低生活保障水準を具現化している制度は、国民基礎生活保障制度(旧生活保護制度)である。同制度の骨格は日本の生活保護とよく似ており、日本と同様の一般扶助制度である。イ・テジン(2008)によると、2010年度を基準として総人口の約2.8%(140万人)が本制度の保護下にいるという。

本制度の扶助は、生計給与(生活扶助)、住居給与(住宅扶助)、医療給与、教育給与、解産給与(出産扶助)、葬祭給与、自活給与(生業扶助)の七つである。このうち、医療給与は国民基礎生活保障法とは別に医療給与法で規定されている(五石敬路 2013: 34)。

まず本制度の対象は、世帯の所得認定額が国が設定した最低生計費以下の世帯のうち、勤労能力の有無・扶養義務者の基準などの調査を通して選定される。ここでいう最低生計費とは、健康で文化的な生活を維持するのに必要な最低限の費用をいう。算定方式は全物量方式(Market Basket方式)であり、地域別、世帯規模別、世帯の類型別で計測する³⁷。

扶養義務者基準は、扶養義務者がいないか、扶養義務者がいても扶養能力のない場合や扶養義務者から扶養が受けられない場合は対象となる。

所得認定額は所得の評価額と財産の所得換算額を足した金額となり、この金額が最低生計費以下になることが主な要件である。

所得認定額=所得の評価額+財産の所得換算額

※所得の評価額=(実際の所得-家具特性別支出費用と勤労所得控除)

※財産の所得換算額=[(財産-基本財産額-負債)X所得換算率]

保健福祉部(2014a)より

調査を通じて基礎生活保障受給者になると上で述べた七つの給与が受けられる。

まず、生計給与(日本の生活扶助にほぼ相当)は、受給者に衣服、飲食物や燃料費、その他日常生活に基本的に必要な金品を支払うことを意味する。金額は現金給与基準で世帯の所得認定額を差し引き

³⁷ 具体的な算定手順は次のようである。①全国の世帯のうち、550ヶ所の調査区から2万2千世帯を抽出し‘生活実態調査’を実施、②標準世帯及び世帯均等化指数(世帯人数の変化による支出額の変化率)決定、③4人世帯(父42歳、母39歳、息子12歳、娘10歳で構成)を標準世帯に決定して、世帯均等化指数を導出、④標準世帯のマーケット・バスケットを決定、⑤最低生計費を導出する(保健福祉部 2014)。

て算定した金額から、さらに住居給与額を差し引いた額である³⁸。

$$\text{生計給与額} = \text{現金給与基準額} - \text{世帯の所得認定額} - \text{住居給与額}$$

ここでいう、現金給与の基準は、最低生計費のうち現物で支給される医療費・教育費及び他法の支援(住民税、TV受信料など)を差し引いた金額で、所得がない受給者が受けられる最高額の現金給与水準である。単身世帯の場合、現金給与の最大額は488,063ウォンであり、世帯員数により表17のように異なる。

表 17 2014 年度国民基礎生活保障制度の給与額(単位：ウォン)

世帯員数	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人
最低生計費(A)	603,403	1,027,417	1,329,118	1,630,820	1,932,522	2,234,223	2,535,925
他の支援額(B)	115,340	196,391	254,060	311,731	369,402	427,071	484,742
現金給与基準(C=A-B)	488,063	831,026	1,075,058	1,319,089	1,563,120	1,807,152	2,051,183
住居給与(D)	107,532	183,094	236,860	290,626	344,391	398,157	451,923
生計給与額(E=C-D)	380,531	647,932	838,198	1,028,463	1,218,729	1,408,995	1,599,260

保健福祉部(2014a)より

住居給与は、受給者に住居安定のために必要な賃借料、維持修繕費などを支給することであり、現金給与基準で世帯の所得認定額を差し引いて算定した金額のうち住居給与(17.8%)に該当する金額である。すなわち、表18のように標準世帯(4人世帯)の最低生計費を費目別構成を分析した金額が290,626ウォンで全体の17.8%を占めてあることに基づき、世帯員数によって住居給与を算定したことである(表18)。

つまり、単身世帯が現金で実際に受けられる最大給与額は、生計給与(生活扶助)額である380,531ウォンである。その他に、小中高により副教材代や文具代が支給される教育給与(教育扶助)、出産時60万ウォンが支給される解産給与(出産扶助)、死亡時葬7万5千ウォンが支給される葬祭給与(葬祭扶助)、医療給与法が定める基準に従う医療給与がある。そして、国民基礎生活保障受給者のうち、勤労能力のある働ける人は‘条件付き受給者’とされ、自活勤労事業³⁹に参加することを条件に生計費が支給される自活給与がある。つまり、自活勤労事業への参加を伴った自活給与を条件化される。

³⁸ 入所施設のような、保障施設の受給者は別途の給与基準によって施設に支給される(保健福祉部2014)。

³⁹ 「自活」に関する事業は1-5のところで詳しく説明する。

表 18 2014 年度標準世帯(4人世帯)の最低生計費費目別構成

項目	細部項目	金額(ウォン)	割合(%)
消費支出	食料品費	605,423	37.1
	住居費	290,626	17.8
	光熱・水道費	116,178	7.1
	家具・家事用品	46,338	2.8
	被服・履物	67,854	4.2
	保健医療費	68,256	4.2
	教育費	74,910	4.6
	娯楽費	31,483	1.9
	交通・通信費	153,411	9.4
	その他の消費支出	91,591	5.6
非消費支出		84,750	5.2
最低生計費		1,630,820	100

保健福祉部(2014a)より

表 19 教育給与の内容(2014 年度)

区分	副教材代(ウォン)	文具代(ウォン)
小学生	38,700	-
中学生	37,700	52,600
高校生	129,500	52,600

保健福祉部(2014a)より

2) 緊急福祉支援制度

緊急福祉制度とは、突然の危機状況で生計維持が困難な低所得層に対し、生計・医療・住居支援など必要な福祉サービスを速やかに支援し、危機的状況から抜け出すことができるよう支援する制度である。

表 20 緊急福祉支援制度の所得・財産基準(2014 年度)

①所得:最低生計費150%(4人基準2,446千ウォン)以下

ただし、生計支援は最低生計費120%(4人基準1,956千ウォン)以下

②財産:大都市(13,500万)、中小都市(8,500万)、農村・漁村(7,250万ウォン)以下

③金融財産:300万ウォン以下

保健福祉部(2014a)より

対象となる「突然の危機状況で生計維持が困難な低所得世帯」とは、①主な所得員の死亡、家出、行方不明、刑務所収監などの理由で所得を喪失した場合、②疾病や負傷を受けた場合、③世帯員から放任・遺棄されたり、虐待などを受けた場合、④家庭内暴力・DVまたは世帯員から性的な暴力を受けた場合、⑤火災などで居住する住宅・建物で生活することが困難になった場合、⑥離婚による所得

喪失、⑦断電1ヶ月経過の際、⑧失業(雇用保険費加入者など)で生計維持困難、⑨刑務所の出所後(基礎生活保障事業優先の連携)の生計困難・居所のない場合などが含まれる。このような対象のうち、所得・財産基準が表20に示した世帯は、調査を通じて受給者として選定される。ここでは最低生活費の1.5～1.2倍の基準が採用されている。このような基準によって緊急福祉制度の対象になると生計・医療・住居などの支援が受けられる(表21)。

表 21 緊急福祉支援制度の支援内容(2014 年度)

種類		支援内容	支援金額	最大回数
金銭・ 現物 給与	生計支援	食料品費、被服費など1ヶ月の生計維持費	108万ウォン (4人基準)	6回
	医療支援	検査、治療などの医療サービス支援 ~300万ウォン以内 (本人負担金及び一部の非給与項目)	300万ウォン以内	2回
	住居支援	臨時居所提供又はこれに該当する費用	最大59万ウォン (大都市, 4人基準)	12回
	社会福祉施設 利用支援	社会福祉施設入所、利用に必要な費用	134万ウォン (4人基準)	6回
	教育支援	小・中・高校生のうち、授業料などが必要 と認められる人に学費支援	小20.5万ウォン 中32.6万ウォン 高39.9万ウォン及び 授業料、入学金	2回
	その他	危機により生計維持が困難な者に支援 -冬期(10月~3月)燃料費:88,800/月 -解産費(60万ウォン)・葬祭費(75万ウォン)・電気料金(50万ウォン): 各1回		1回 (燃料費 6回)
民間機関・団体との 連携支援など		社会福祉共同募金会、大韓赤十字社などの民間緊急支援プログラムで 連携		制限 なし
		相談などの支援		

保健福祉部(2014a)より

なお、民間機関及び団体と連携し、サービスを支援している。たとえば、家族からの遺棄及び生計困難などでホームレスになる危機に直面した場合は、ホームレス施設やホームレス総合支援センターの相談を通じて支援内容が決まり、その機関・団体のサービスが支援される。

3) 基礎医療保障

前述したように医療給与は国民基礎生活保障法とは別に医療給与法で規定されている。その選定基準は国民基礎生活保障受給者⁴⁰のうち、世帯の勤労能力によって1種と2種と分けられている。労働能力のない世帯は医療給与1種、労働能力のある世帯は医療給与2種にあたる(表22)。

⁴⁰ 受給権者とは法により給与が受けられる要件を満たす者を言い、受給者は法により給与を受けている者をいう。

表 22 医療給与の受給者の類型及び選定基準(2014 年度)

	1種	2種
類型	<ul style="list-style-type: none"> ・国民基礎生活保障受給権者のうち、労働能力のない世帯 ・被災者、義死者⁴¹、国家有功者、無形文化財保有者、北朝鮮離脱住民、光州(クァンジュ)民主化補償者、養子縁組を結んだ子供(18歳未満)、行旅患者(行路病人) 	<ul style="list-style-type: none"> ・国民基礎生活保障受給権者のうち、労働能力のある世帯
選定基準	<ul style="list-style-type: none"> ・国民基礎生活保障法による受給者 	<ul style="list-style-type: none"> ・国民基礎生活保障受給者のうち、医療給与1種受給権者基準に該当しない者

保健福祉部(2014a)より

医療給与受給者はその種類によって本人負担額が異なる。非給与項目は全額本人が負担するが、医療給与に該当する項目の本人負担額は表23のように1種が2種より負担額が低い。

表 23 医療給与受給者の本人負担額(給与に該当する項目にあたる)

種	医療機関区分	1次 (医院)	2次 (病院, 総合病院)	3次 (指定病院)	薬局
1 種	入院	なし	なし	なし	－
	外来	1,000ウォン	1,500ウォン	2,000ウォン	500ウォン
2 種	入院	10%	10%	10%	－
	外来	1,000ウォン	15%	15%	500ウォン

国民建國保險公団ホームページより

韓国の場合、医療機関の機能・規模などによって1次、2次、3次医療機関と分けている。1次医療機関は外来治療、または1～2日程度の最短期入院・診断・治療が可能な小型医院、保健所などが上げられる。そして、2次医療機関は入院・診療などの難易度が中程度であり、1次診療に適合したことで2次診療が必要な合併症が発生した場合は受け入れる病院、総合病院が上げられる。3次医療機関は、診断と治療の難易度が高く、高度医療設備が必要なこと、診断、治療に細部の専門医たちの共同協力が必要なこと、致命率の高い疾患を扱うこと、1・2次診療に適合した疾病でも3次診療が必要な合併症が発生したことなどに対応する指定病院、大学病院などがあたる。

⁴¹ 「義死者」とは、職務外の行為として他人の生命、身体または財産を急迫した危害から守る過程で死亡した人を意味する。

4) 社会サービス

社会サービスとは、人間らしい生活を保障することや国民の暮らしの質の向上を支援する制度を包括する概念で、従来の社会福祉サービスを「社会サービス」と言い替えたものである。社会保障基本法第3条によると、社会サービスとは、国家・地方自治体及び民間セクターの支援が必要なすべての国民に、福祉、保健医療、教育、雇用、住居、文化、環境などの分野で人間らしい生活を保障して、相談、リハビリ、見守り、情報の提供、関連施設の利用、エンパワーメントの促進、社会参加への支援などを通じて国民の暮らしの質が向上されるように支援する制度を示す。現在、この事業は、①高齢者総合見守り事業、②障害者の活動支援、③産婦・新生児コンパニオン、④家事・看病(介護)訪問コンパニオン、⑤発達・リハビリサービス、⑥地域特化事業(地域社会サービス投資事業)の6大「バウチャー事業」⁴²⁾が施行されている。既存の社会福祉サービスと比べ、サービスの対象、内容は拡大されて、費用の本人負担が一部発生するシステムに変化した特徴がある(表24)。

表 24 伝統的社会福祉サービスとの違い

	社会福祉サービス	社会サービス
対象	受給者等の貧困層	庶民・中間層まで拡大
サービスの内容	基本的な生活保障サービス	国民の日常生活の支援、人的資本の拡充のための様々なサービスまで含む
財政支援方式	供給者(機関)支援	利用者への支援も並行
費用の負担	主に政府	一部本人負担
サービス提供方式	施設保護中心	在宅サービスまで拡大

保健福祉部ホームページより

高齢者と障害者を中心とした社会サービスとして「高齢者総合見守り事業」と「障害者の活動支援」がある。まず、高齢者総合見守り事業は65歳以上の長期療養等級外の高齢者のうち、全国世帯平均所得の150%以下である世帯の老人を対象とし、在宅サービスやデイケアサービスなどを提供することである。経済状況による利用できるサービス額は表25のようである。

「障害者活動支援」は6歳以上から65歳未満の障害者福祉法上の1級～2級障害者および65歳以上の「老人長期療養保険」から脱落した1級～2級の障がい者のうち、活動支援サービス認定調査票による訪問調査を通じて1等級から4等級までと区分・選定される(表26)。

⁴²⁾ バウチャーは利用可能なサービスの金額や数量が記載された証(利用券)で、電子バウチャーは、サービス申請、利用、費用支払い/清算などの全課程を電算システムで処理する支給方法を指す。

表 25 高齢者総合見守り事業のサービス利用額(政府支援金および本人負担額)

単位：ウォン

サービス類型および時間		基礎生活 受給者	次上位 階層	次上位階層 ～100%未満	100%以上 ～130%未満	130%以上 ～150%未満
在宅サービス 及び デイケアサービス	27時間 (9日)	無料	18,000	37,000	42,000	48,000
	36時間 (12日)	8,280	24,000	49,000	56,000	64,000
短期家事サービス	24時間 (1ヶ月)	無料	16,000	33,000	38,000	42,000
	48時間 (2ヶ月)	無料	32,000	66,000	76,000	84,000

保健福祉部ホームページより

表 26 基本給与上の本人負担金

区分		本人負担率	4等級 (41万ウォン)	3等級 (61万ウォン)	2等級 (81万ウォン)	1等級 (101万ウォン)
基礎受給者		免除	免除	免除	免除	免除
次上位階層		定額	20,000	20,000	20,000	20,000
全国世帯 平均所得	50%以下 (237万ウォン以下)	6%	24,600	36,600	48,600	60,600
	100%以下 (474万ウォン以下)	9%	36,900	54,900	72,900	90,900
	150%以下 (710万ウォン以下)	12%	49,200	73,200	94,500	94,500
	150%以下 (710万ウォン以下)	15%	61,500	91,500	94,500	94,500

保健福祉部ホームページより

事業の対象になると、入浴・食事・室内移動支援のような身体活動支援、掃除・洗濯などの家事支援、登下校および出勤補助支援・外出のつきそいなどの社会活動支援、訪問入浴支援、訪問看護支援が提供される。なお、給与は認定点数によって1～4等級と区分し支援する‘基本給与’と生活環境及び自立活動によって算定される‘付加給与’がある。まず、基本給与は等級によって最大サービス利用額が41万ウォンから101万ウォンまで異なり、また世帯の所得によって本人負担額も無料から94,500ウォンまでと異なる(表26)。

ここでいう次上位階層は、認定された所得額が最低生計費の120%未満(100%～120%)の「潜在的貧困層」と、所得は最低生計費以下であるものの財産があるため国民基礎生活保護受給から脱落された「非受給貧困層」を合わせたことである⁴³。

⁴³ 次上位階層は、法的に基礎受給者にはなれないものの、貧困層と言える階層である。

5) 自活勤労事業

自活勤労事業は、低所得層に自活のための労働機会を提供し、自活基盤を備える事業である。特に、国民基礎生活保障受給者のうち、勤労能力のある者は‘条件付き受給者’と区別され、この事業に参加することを条件で国民基礎生活保制度上の給与を受けることになる。

この事業に参加する前、まずは「GateWay」の過程を通じて個人別に自活計画を設定することになっている。その後、参加者の自活能力などに合わせて①勤労維持型、②社会サービス型、③インターン・コンパニオン型、④市場侵入型(市場参入型)のいずれかに参加することになる。勤労維持型は現在の勤労能力や自活の意志を維持し、今後、自活事業への参加を準備する形態を言い、社会サービス型は社会的に有用な仕事提供事業で、市場進入型に転換が容易な事業を言う。さらに、インターン・コンパニオン型は自治体、自活センターなどでインターンの形で仕事をしながら自活を図る事業を表しており、市場進入型は市場への進入可能性が高く、条件付き受給者が参加できる企業(小規模がほとんどである)として創業が容易な事業を言う(図6)。

図 6 自活勤労事業のシステム



保健福祉部ホームページより

自活勤労事業に参加する人々はその事業類型によって、1日に19,600ウォンから35,550ウォン程度の賃金がもらえる。詳しくは表27のようである。自活給与の基準によると、勤労維持型の自活勤労事業に参加する者(国民基礎生活保障制度上の条件付受給者)の場合、1ヶ月に最大361,600ウォン程度を賃金でもらえる。

表 27 自活給与の基準

参加する事業の種類		賃金(1日/ウォン)			勤務条件
		計	給与	実費	
勤労維持型		22,600	19,600	3,000	5時間/日、4日/週
社会サービス型		30,300	27,300	3,000	8時間/日、5日/週、有給1日/月
インターン・コンパニオン型		32,870	29,870	3,000	8時間/日、5日/週、有給1日/月
市場侵入型	一般	33,550	30,550	3,000	8時間/日、5日/週、有給1日/月
	技術者	35,550	32,550	3,000	8時間/日、5日/週、有給1日/月
バウチャー型		時給 6,900ウォン以上			

保健福祉部ホームページより

2. 老人を対象とする主な社会福祉制度及び事業

1) 老人就労事業(老人雇用事業)

この事業は、労働市場から疎外された65歳以上の高齢者のため、高齢者向けの雇用を創出・提供することである。基本的には65歳以上の労働が可能な者が対象になるが、事業の種類及び運営形態によって60歳から64歳までの者も対象となる。しかし、国民基礎生活保障法による受給者及び政府省庁や自治体で推進中の雇用事業参加者は重複されるので参加できない。勤務基準は基本的に①1日3～4時間、②週に3～4日、③月13日(39時間)の勤務を原則とするが、運営機関や事業により、流動的に運営されている。事業は社会貢献型、市場進入型、市場自立型があり、賃金は類型によって異なるが、公益型の場合、月平均賃金は20万ウォン程度である。

主な運営機関として自治体、老人福祉館、大韓老人会などがあり、参加者の募集・管理などの実質的な業務を行っている。

表 28 老人就業事業の類型

類型		定義	雇用の例
社会 貢献型	公益型	自治体の業務領域で創出された雇用で、地域社会の発展・開発に貢献する公益性が強い雇用	文化財の管理、小学校の給食補助、図書館管理支援など
	教育型	特定分野の専門知識・経験の所有者が福祉施設や教育機関などで講義する雇用	文化財解説士、礼儀・書道・漢字の講師など
	福祉型	社会活動が困難な疎外階層の生活安定と幸福追求を支援する雇用	ケア、老人虐待予防など
市場 進入型	製造 販売型	生産品を製造・販売したり、サービスを提供する事業を運営しながら収益を創出	宅配、洗濯及び洗車
	共同 作業型	企業等と連携し、共同作業を通じて生産品、半製品、農産物を耕作・販売して収益を創出	ショッピングバッグの製作、豆・ワラビ栽培
	人材 派遣型	需要所の要求によって教育後に派遣し、一定の賃金をもらう雇用	受験監視官、家事手伝い、建物管理など
市場 自立型	シニア インターン シップ	老人が企業内の現場にインターンで参加できる機会の提供 (インターン型・研修型と分類)	販売員、物流管理、車両管理員、ホールサービングなど
	高齢者 親 和企業	高齢者向けの適合職種を開発し企業の設立を支援することによって市場での競争力と持続性を備えた高齢者雇用の創出	食品製造および加工会社、人材派遣会社など
	シニア 職能 クラブ	専門的な経歴を持っている退職者に才能の社会寄付の機会を提供	公団、公社など

保健福祉部ホームページより

2) 老人長期療養保険制度

老人長期療養保険制度とは、高齢や老人性疾病等によって一人で日常生活を遂行し難い老人等に提供する身体活動または家事支援等の長期療養給与に関する事項を規定して、老後の健康増進及び生活安定を図り、その家族の負担を減らすことで国民の生活の質の向上を図ることを目的とする」とされている。日本の介護保険法と類似した制度と知られている。

制度利用の申請資格は、所得水準とは関係なく、老人長期療養保険制度加入者(国民健康保険加入者と同様)とその被扶養者、医療給与受給者ならば可能である。

給与対象は、65歳以上の高齢者または、65歳未満の中で、認知症、脳血管性疾患、パーキンソン病など老人性疾患をもっている者であって、6ヶ月以上の間1人で日常生活を営む事ができないと認められた場合、心身の状態及び長期療養が必要な程度など等級判定によって判定を受けた者である。判定基準は、身体活動能力、認知能力など52項目の調査に基づいて、6ヶ月以上の期間に日常生活を1人で営むことができないと認めた場合、療養に必要な程度によって1～3等級と判定された者がサービスを受けるようになる。等級基準は表29のようである。

表 29 老人長期療養保険制度上の等級区分

長期療養1 等級	日常生活のすべてにおいて他人の援助が必要な者、長期療養認定点数が95 点以上、終日寝たきり状態
長期療養2等級	日常生活の相当な長期療養2 等級部分において他人の援助が必要な者、長期療養認定点数が75点～94 点
長期療養3等級	日常生活において部分的に他人の援助が必要な者、長期療養認定点数が55 点～74 点
等級外(軽症)	食事、排泄、着替えなどにおいてほぼ自立しているが、生活管理能力の低下によって時々支援が必要な者

国民健康保険公団ホームページより

認定及びサービス利用手順は、(公団の各支社別長期療養センター) 申請→(公団職員)訪問調査→長期療養認定及び等級判定及び標準長期利用計画書通報(等級委員会)→(長期療養センター) サービス利用と進んでいく。

給与内容は、在宅給与、施設給与、特別現金給与がある。在宅給与は訪問養護、訪問入浴、訪問看護、昼夜間保護があり、施設給与は老人医療福祉施設(老人専門病院を除く)に長期間入所し、身体活動支援、心身機能の維持及び向上のための教育・訓練などを提供する療養給与である。そして特別現金給与は家族療養費、特例療養費、療養病院介護費の三つがあるが、特例療養費、療養病院介護費は実行が留保され、現在、家族療養費のみ支給されている。家族療養費は長期療養機関が顕著に不足した地域に居住する者、身体・精神・性格などの理由で家族などが長期療養を受けなければならない者に支給されている。

国家支援は長期療養保険料の予想収入額の20% 負担(国庫)、医療給与受給権者の長期療養給与費用、訪問看護指示書発給費用のなかで公団が負担すべき費用及び管理運営費の全額を国家と地方自治体が負担する。本人一部負担は次の通りである。施設給与の20%(非給与：食材費、理・美容料などは本人負担)であり、在宅給与の15%を負担する。例外として医療給与受給権者等低所得層は各々1/2で軽減(施設：10%、在宅：7.5%)され、国民基礎生活受給者は無料である。

3) 基礎年金

基礎年金は65歳以上の老人人口の70%に毎月一定の給与を支給している制度である。財源は全額税金から調達している。支援対象は、65歳以上の老人でおり所得認定額が保健福祉部の長官が毎年決定・告示する金額以下である者である。この年金は子供などのような扶養義務者の所得・財産は調査対象に含まれなく、対象老人の所得・財産のみ調査する。2014年度現在、所得認定額は老人単身世帯の場合は87万ウォン、老人夫婦世帯は139万ウォンであり、この金額以下の世帯は支援対象となる。支援される年金額は、単身世帯の場合、最低20,000ウォンから最大96,800ウォンまでであり、夫婦世帯には最低40,000ウォンから最大154,900ウォンが支給される。

基礎生活受給者であっても基礎老齢年金受給資格に制限があることはないが、基礎老齢年金を受け

る場合は当該年金額が所得で算定され、基礎生活保障の生計給与から差し引かれる。

3. 障害者を対象とする主な社会福祉制度及び事業

1) 障害者年金

障害者を対象とする制度は、主に年金・手当、保育・教育、医療およびリハビリ支援、雇用・融資支援、公共料金の減免、免税及び減税などがあるが、ここでは経済的に直接支援している所得保障のうち、年金と手当について取り上げる。

障害者年金は、18歳以上の登録重度障害者のうち、本人と配偶者の所得認定額が選定基準額以下の障害者を対象とする。基礎年金と同じく財源は税金であり、選定基準額は配偶者のない障害者の場合は68万ウォン、配偶者がいる場合は108万ウォンである（表30）。

表 30 障害者年金支給額(単身世帯の場合)

単位：ウォン

対象者	年齢	基礎給与	付加給与	合計
基礎生活受給者	18～64歳	96,800	80,000	176,800
	65歳以上		170,000	170,000
次上位	18～64歳	96,800	70,000	166,800
	65歳以上		70,000	70,000
次上位超過者	18～64歳	96,800	20,000	116,800
	65歳以上		40,000	40,000

保健福祉部(2014b)より

支給額は基礎給与(96,800ウォン)と付加給与(表30)の合である。ただし、基礎老齢年金を受ける65歳以上の者は基礎給与は支給されない。このような基準に基づいて‘65歳以上の単身世帯’が支給される額は17万ウォンである。

2) 障害者手当

障害者手当とは、18歳以上登録障害者のうち、障害3～6級の国民基礎生活受給者及び次上位階層がその対象であり、支給額は国民基礎生活保障受給者(在宅)及その少し上の低所得層階層の場合、月3万ウォン、施設受給者の場合は月2万ウォンが支給される。

3) 障害児童手当

障害児童手当とは、国民基礎生活保障受給及びその少し上の低所得層階層である18歳未満の登録障害者を対象とし、障害の程度や世帯の経済状況によって20,000ウォンから200,000ウォンと異なっている(表31)。

表 31 障害児童手当(単位：ウォン/月)

	国民基礎生活保障受給者	次上位階層	施設受給者
重度障害児	200,000	150,000	70,000
軽度障害児	100,000	100,000	20,000

保健福祉部(2014b)より

4) 軽度障害手当

軽度障害手当は国民基礎生活保障法による受給者や次上位階層である18歳以上の3～6級の障害者を対象し、一定の手当を支給する制度である。基礎生活保護受給者および次上位階層には1当たり月3万ウォン、保障施設受給者は1当たり月2万ウォンの手当が支給される。

第三節 チョッパン居住者の利用できる主な社会福祉施設

ここではチョッパン居住者たちが主に利用しているか、利用できる可能性がある社会福祉施設および地域福祉事業について取り上げる。

1. 社会福祉施設の種類

韓国における社会福祉施設は、それぞれの法律に基づいて表32のように生活施設(入所施設)と利用施設とに区別される。施設の運営は自治体直営、民間直営および自治体から民間が委託をうけて運営している形態がある。予算は主に国と自治体の補助金で運営されており、施設の規模や利用者の人数によってその金額は異なる。

まず、社会福祉事業法に基づいた施設として、社会福祉館、結核・ハンセン病施設がある。

老人福祉施設は老人福祉法に基づき①老人住居福祉施設(療養施設、老人共同生活家庭、老人福祉住宅)、②老人医療福祉施設(老人療養施設、老人療養共同生活家庭)、③在宅老人福祉施設(訪問療養サービス、昼夜間保護サービス、短期保護サービス(ショートケア)、訪問入浴サービス、在宅老人支援サービスのうち、1つ以上のサービスを提供する施設)、④老人余暇福祉施設(老人福祉館、敬老堂、老人教室、老人休養所)、⑤老人保護専門機関が設置・運営されている。

障害者福祉施設は障害者福祉法に基づき①障害者類型別居住施設、②重症障害者居住施設、③障害乳幼児居住施設、④障害者短期居住施設、⑤障害者共同生活家庭のような生活施設と、⑥障害者地域社会リハビリ施設、⑦障害者職業リハビリ施設、⑧障害者医療リハビリ施設、⑨障害者生産品販売施設⁴⁴のような利用施設がある。

野宿人施設は、先にも一部述べたように、「野宿人などの福祉及び自立支援に関する法律」により①野宿人自活施設、②野宿人リハビリ施設、③野宿人療養施設のような生活施設と、④野宿人総合支援センター、⑤野宿人一時保護施設(シェルター)、⑥野宿人給食施設、⑦野宿人診療施設、⑧チョッパン相談所のような利用施設が運営されている。なお、国民基礎生活保障法を基にした地域自立センターがある。これ以外も、児童福祉法、精神保健法、乳幼児保育法などの法律を根拠とし、以下のような社会福祉施設が設置・運営されている(表32)。

⁴⁴ 障害者生産品販売施設とは、障害者が作った生産品の販売や流通を代行して、障害者生産品やサービスなどに関する相談、広報、情報提供などのマーケティングを支援する施設を言う。

表 32 韓国における社会福祉施設の種類

関連法	施設種類	細部種類		担当 部署
		生活施設(入所施設)	利用施設	
社会福祉事業法	社会福祉館 結核・ハンセン施設	・結核・ハンセン施設	・社会福祉館 ・相談保護センター	保健 福祉部
老人福祉法	老人福祉施設	・老人住居福祉施設 ・老人医療福祉施設	・在宅老人福祉施設 ・老人余暇福祉施設 ・老人保護専門機関	
農漁村住民の保健福祉 増進のための特別法	複合老人福祉施設	・農漁村地域に限り、老人福祉法第31条 老人福祉施設を総合的に配置した複合老人福祉施設の設置・運営 も可能		
児童福祉法	児童福祉施設	・児童養育施設 ・児童一時保護施設 ・児童保護治療施設 ・自立支援施設 ・共同生活家庭	・児童相談所 ・児童専用施設 ・地域児童センター	
障害人福祉法	障害者福祉施設	・障害者類型別居住施設 ・重症障害者居住施設 ・障害乳幼児居住施設 ・障害者短期居住施設 ・障害者共同生活家庭	・障害者地域社会リハビリ施設 ・障害者職業リハビリ施設 ・障害者医療リハビリ施設 ・障害者生産品販売施設	
精神保健法	精神保健施設	・精神療養施設 ・社会復帰施設のうち、 生活（住居）施設	・社会復帰施設のうち、利用施 設	
野宿人などの福祉及び 自立支援に関する法律	野宿人施設	・野宿人自活施設 ・野宿人リハビリ施設 ・野宿人療養施設	・野宿人総合支援センター ・野宿人一時保護施設 （シェルター） ・野宿人給食施設 ・野宿人診療施設 ・チョッパン相談所	
国民基礎生活保障法	地域自活センター		・地域自活センター	
乳幼児保育法	保育園		・保育園	
売春防止及び被害者保 護等に関する法律	売春被害支援施設	・一般支援施設 ・青少年支援施設 ・外国人女性支援施設	・自活支援センター	女性 家族部
性暴力防止及び被害者 保護等に関する法律	性暴力被害保護施設	・性暴力被害者保護施設	・性暴力被害相談所	
家庭暴力（DV）防止及 び被害者保護などに 関する法律	家庭暴力保護施設	・家庭暴力被害者保護施設	・家庭暴力相談所	
片親世帯支援法	母子福祉施設	・母（父）子保護施設 ・母（父）子自立施設 ・未婚母（子）施設 ・共同生活家庭 一時保護施設	・女性福祉館 ・片親世帯福祉相談所	
多文化家族支援法	多文化家族支援法		・多文化家族支援センター	

保健福祉部(2014 c : 4)

上のような社会福祉施設のうち、前述したチョッパン相談所を除き、他の施設の中でチョッパン居住者たちと密接に係わっていると考えられる、地域福祉事業として 地域自活センター、社会福祉館、障害者福祉館、老人福祉館について特に取り上げておく。

1) 地域自活センター

地域自活センターとは、国民基礎生活保障法第16条に根拠して設置され、受給者及び次上位階層の自活の促進に必要な事業を遂行する役割を果たすところである。1996年に「自活後見機関モデル事業」として開始し、法制化されて毎年拡大設置されている。現在、247カ所が国から委託され、次のような団体によって運営されている(2014年3月時点)。すなわち、地域社会福祉事業や自活支援事業の遂行経験及び遂行能力などがある非営利法人や民間団体によって運営されている(保健福祉部ホームページ)。

主な事業は、労働能力のある低所得層の自活意欲向上及び基礎能力の育成のための教育プログラム(ハングル学校、パソコン教室等)の開発・運営、自活のための情報提供・相談・職業教育、就業斡旋、生業(創業)のための資金融資の斡旋、創業支援及び技術・経営関連指導、自活企業(社会的企業)の設立・運営支援、基礎受給者・低所得層が共同体を設立して自立・自活することができるように支援している。なお、社会サービス支援事業(障害者、妊婦・新生児、老人見守りバウチャー事業など社会サービス委託遂行)及びその他の自活のための各種事業も行っている。釜山市には、18箇所が設置・運営されている。

表 33 地域自活センター現況(2014年5月時点)

(単位 : 箇所)

	計	ソウル	釜山	大邱	仁川	光州	大田	蔚山	世宗
2014年	247	31	18	9	11	9	5	5	1
指定	京畿道	江原道	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尚北道	慶尚南道	済州
現状	32	16	12	14	18	22	20	20	4

保健福祉部ホームページより

2) 社会福祉館

社会福祉館とは、社会福祉サービスのニーズを持っている全ての地域社会住民を対象⁴⁵にし、保護サービス、在宅サービス、自立能力の向上を図る教育訓練などの、彼らが必要な福祉サービスを提供し、家族機能の強化及び住民連帯感の向上を通じて、地域社会問題を予防・解決する総合的な社会福祉サービスの提供機構であり、地域社会住民の福祉増進のための役割を担う(保健福祉部2013 : 3)。

一般的に、個人及び家族問題等の相談、放課後児童プログラム(学童保育)、給食サービス、老人余

⁴⁵ 老人福祉法、障害者福祉法に基づき、特定の階層を対象とする老人福祉館、障害者福祉館とは違って社会福祉館は社会福祉事業法に基づき低所得層及び一般の地域住民を含んでいる総合的な福祉館である。

暇プログラム、青少年向け社会教育プログラム、就職・副業の斡旋などのような直接サービスの提供及び地域社会を組織し地域社会の福祉問題に対応する役割を果たす施設である(表34)。

運営に関しては、国、自治体、社会福祉法人、非営利法人、個人などの欠格項目がない限り誰でも社会福祉施設を設置・運営できる。予算は、保険事業で行われている‘長期療養保険事業’を除いては、主に‘補助金’で運営されている。補助金の額は社会福祉館の規模によって異なり寄付金の割合も5～15%程度を占めている。

韓国社会福祉館協会によれば、2014年4月時点で全国に441ヶ所の社会福祉館が設置・運営されており、その運営主体はほとんどが民間団体である。そのうち、社会福祉法人が318ヶ所と72%程度を占めており、財団法人が51ヶ所、学校法人が23ヶ所、公団が4ヶ所、社団法人が11ヶ所、医療法人が1ヶ所、公社が1ヶ所であり、自治体直営は30ヶ所で6.8%程度に過ぎない。

表 34 社会福祉館の主要事業

機能	事業分野	主な事業	主なプログラム
ケース マネジメント	ケース発掘 ケース介入 サービス連携	・ ケース発掘(アウトリーチ) ・ ケース介入 ・ サービス連携および提供	
サービス提供	家族機能強化事業	・ 家族関係の増進 ・ 家族機能の補強 ・ 家族問題の解決 ・ 扶養家族支援	・ 個人及び家族相談・治療 ・ グループ相談など
	地域社会保護事業	・ 給食サービス ・ 保健医療サービス ・ 経済的な支援 ・ 日常生活の支援 ・ 情緒サービス ・ 一時保護サービス	・ 給食サービス ・ デイサービスセンター運営 ・ 在宅サービスの提供など
	教育文化事業	・ 児童および青少年の生涯教育 ・ 成人の機能教室 ・ 老人の余暇文化 ・ 文化福祉事業	・ 老人余暇・文化プログラム ・ 児童・青少年社会教育プログラムなど
	自活支援など その他	・ 職業機能訓練 ・ 就職斡旋 ・ 職業能力開発 ・ その他の特別事業	・ 就職・副業の案内および斡旋 ・ 職業・副業機能訓練および共同作業場の運営など
地域組織化	福祉ネットワーク構築	・ 福祉サービスの効率性の向上	・ 地域社会連携事業 ・ 地域ニーズ調査 ・ 実習指導
	住民組織化	・ 住民協力の強化 ・ 住民意識の向上	・ 住民組織化事業 ・ 住民教育
	資源開発及び管理	・ 人的、財源などの発掘	・ ボランティア・寄付者の開発及び管理

保健福祉部(2014c)・釜山市庁ホームページより再構成

全国441ヶ所のうち、釜山市には53ヶ所の社会福祉館が設置・運営されている(韓国社会福祉館協会ホームページ)。

3) 障害人福祉館(障害者福祉館)

障害人福祉館(以下、障害者福祉館)は 障害者地域社会リハビリ施設の一類として、地域社会の在宅障害者を対象とし、障害の判定・評価、職業リハビリ、相談、特殊教育、医療リハビリなどの総合的なサービスを提供する福祉施設である(保健福祉部ホームページ)。2014年5月時点で全国には214ヶ所があり、そのうち釜山には14ヶ所がある。運営主体は社社会福祉法人、社団法人などの民間団体であり、国から委託されて補助金で運営されている(障害者福祉館協会ホームページより)。

4) 老人福祉館

老人福祉館は、老人を対象とし相談、健康の増進、教養、給食、レクリエーションなど、老人の福祉増進に必要なサービスを無料又は低料金で提供している(保健福祉部ホームページ)。現在(2014. 3)、全国に232ヶ所があり、そのうち釜山市には15ヶ所が設置・運営されている。

上の三つの福祉館の共通のサービスとして‘給食サービス’があげられる。社会福祉館と老人福祉館は低所得老人を対象としており、 障害者福祉館は低所得障害者を対象とし、自治体の支援で無料または低金額で給食を提供している。予算は自治体の支援が1人当たり2,500~3,000ウォン(1食)程度であり、施設別に人数もことなる。

給食サービスは、利用者の歩行能力によって二つの利用方法がある。たとえば、敬老食堂に来て利用するか、または配達サービスで提供する方式でサービスを利用する方法である。まず、敬老食堂の無料給食は、家庭の事情などで食事を欠くおそれがある60歳以上の低所得老人を対象とする。利用者の選定は、運営機関が相談を通じて選定し、週5~7回の昼食を無料で提供している。釜山市は、計82箇所を設置しており、その機関は福祉館(社会福祉館及び老人福祉館)が59箇所、宗教団体が7箇所、その他が16箇所である(2014年4月時点、釜山市庁ホームページ)。歩行が不自由で、敬老食堂が利用できない65歳以上の低所得老人には配達サービスで昼食を提供する「低所得欠食老人向け食事配達」事業を実施している。釜山市の場合、現在62箇所がこの事業を受託運営している。その運営機関をみると、福祉館(社会福祉館と老人福祉館)が47箇所、宗教団体が6箇所、その他の機関が9箇所である。食事(ほとんどが昼食)の配達は週5~6回、おかず配達は週1~2回程度で運営されている。予算は基本的に公的補助金であるが、受託運営している機関の給食利用人数が多かったり、給食の質を高めた場合は支出が増えるため、補助金以外に寄付金を加えて運営している機関も少なくない。なお、配達サービスの場合、配達する人のほとんどはボランティアたちの活動で行われている。

2. 釜山における社会福祉施設の現況

表35は、前述した表32の「社会福祉施設の類型」の施設について釜山市の現況を示したものである。社会福祉館53ヶ所、老人福祉施設141ヶ所、児童福祉施設41ヶ所、障害者福祉施設91ヶ所、精神保健施設48ヶ所、野宿人施設12ヶ所、地域自活センター18ヶ所などの施設が設置・運営されている。チョッパン相談所が該当する「野宿人施設」は、生活(居住)施設が8ヶ所、利用施設が5ヶ所で、計13ヶ所がある。

表 35 釜山における社会福祉施設の現況(2014年1月基準)

施設種類	個所	細部種類	
		生活施設(ヶ所)	利用施設(ヶ所)
社会福祉館 結核・ハンセン施設	53	・結核・ハンセン施設	・社会福祉館(53) ・相談保護センター
老人福祉施設	141	・老人住居福祉施設(3) ・老人医療福祉施設(61)	・在宅老人福祉施設(38) ・老人余暇福祉施設 (老人福祉館 15) ・その他(24)
児童福祉施設	41	・児童養育施設(19) ・児童一時保護施設 ・児童保護治療施設 ・自立支援施設 ・共同生活家庭	・児童相談所 ・児童専用施設 ・地域児童センター
障害者福祉施設	91	・障害者類型別居住施設 ・重症障害者居住施設 ・障害乳幼児居住施設 ・障害者短期居住施設 ・障害者共同生活家庭 /計24	・障害者地域社会リハビリ施設(20) ・障害者職業リハビリ施設(24) ・障害者医療リハビリ施設, 障害者生産品 販売施設(23)
精神保健施設	48	・精神療養施設, 社会復帰施設のうち、 生活(住居)施設(15)	・社会復帰施設のうち、利用施設(33)
野宿人施設	13	・野宿人自活施設(5) ・野宿人リハビリ施設(2) ・野宿人療養施設(1)	・野宿人総合支援センター(2) ・野宿人一時保護施設(シェルター)(1- 療養施設が並行運営) ・野宿人給食施設 ・野宿人診療施設(1) ・チョッパン相談所(2)
地域自活センター	18		・地域自活センター(18)
売春被害支援施設	8	・一般支援施設 ・青少年支援施設 ・外国人女性支援施設	・自活支援センター
性暴力被害保護施設	18	・性暴力被害者保護施設(2)	・性暴力・家庭暴力相談所(13)
家庭暴力保護施設		・家庭暴力被害者保護施設(3)	
母子福祉施設	11	・母(父)子保護施設 ・母(父)子自立施設 ・未婚母(子)施設 ・共同生活家庭 一時保護施設	・女性福祉館 ・片親世帯福祉相談所

釜山広域市社会福祉協議会及び釜山広域市庁ホームページにてに基づき再構成

第四節 韓国における地域社会福祉計画

1. 地域福祉計画の概要

韓国では、地域の実情に見合った地域社会福祉サービスを計画・実行し、地域福祉の向上と地域住民の生活の質を改善するため、「地域社会福祉計画(以下、地域福祉計画)」が策定・施行されることになっている。

地域社会福祉計画とは、一定の地域を単位とし、地域社会に居住している住民の社会福祉の増進のために目標を設定し、その目標を達成するための課題を探ることである(ガン・ヘギュウの他 2011)。

韓国における地域福祉計画は、2001～2002年に「地域社会福祉協議体モデル事業」を通じ、15の市・郡・区に計画を樹立するようにしたことから始まった(ジョン・ホンウォン、チェ・ファン 2014:19)。その後、「社会福祉の分権化」⁴⁶に基づき、2005年度の予算案から「福祉財政の分権化」が始められた。このような分権化の準備として2003年には社会福祉事業法が改定された。

改定された社会福祉事業法(15条の3～15条の6)により、市・郡・区単位 of 地域社会福祉協議体が設置されて、市・都及び市・郡・区単位 of 地域社会福祉計画の樹立(4年ごと)が義務化された(保健福祉部2006:36)。この改定法により地域社会福祉計画の樹立と施行の法的根拠が備えられ、市郡区基礎自治体は「第1期(2007年～2010年)地域福祉計画」を樹立・実行して、現在「第2期(2011年～2014年)地域福祉計画」が実行されている。

地域福祉計画は計画、実行、評価の3つの部分で構成されている。まず、「計画」の樹立においては、統合性(integration)、参与性(participation)、協力性(collaboration)の三つの次元から立体的な方向性を探る。統合性は中央政府と市・都などの上位計画と地域次元の事業が統合できるよう計画を樹立するべきであることを意味する。なお、参与性は地域住民の積極的な参与を誘導・促進することであり、協力性は公共と民間機関間の協力を意味する(保健福祉部 2013:9-10)。したがって、地域福祉計画は計画樹立の主体及び責任、計画の方針(統合性、参与性、協力性)を考慮しながら、計画作成の原則(地域性、科学性、一貫性、実践性)にしたがって計画を樹立しなければいけない。これを規範として樹立された計画上の事業を実際に「実行」し、その実行過程や結果に基づき、過程中心の評価と目標中心の総括的評価結果を導き出して地域福祉の改善に反映(feedback)することになる。

地域福祉計画の内容は、対象別事業計画、地域のインフラを整備する計画、行・財政計画、評価・進行管理の体制などを含むものとされている。対象別計画としては、低所得層、児童、青少年、老人、障害者、ホームレス、女性、ボランティアなどがあげられるが、どのようなことを取り入れるかは、当該地域が抱えている問題、いわゆる地域特性を反映することとされている(朴兪美 2008:63)。

⁴⁶ 「社会福祉の分権化」は地域の社会福祉ニーズに効果的に対応することが目的である(保健福祉部2006:36)。

2. 釜山広域市における地域福祉計画

第2期釜山広域市地域社会福祉計画(2011～2014)では、対象別計画を①公共扶助と低所得層の福祉、②老人福祉、③障害者福祉、⑤児童・青少年福祉、⑥女性・家族福祉、そして⑦地域社会基盤造成の6つに分けて樹立・施行している。そのうち、ホームレス及び浮浪者対策及び居住福祉分野は①の「公共扶助と低所得層の福祉」に含まれているが、第1期釜山広域市地域社会福祉計画(2007～2010)の評価では、「居住福祉分野の計画樹立過程から相当の協議が必要だった」と計画と実行の間に乖離があったことを指摘している。それを反映して、第2期の計画では、4大重点課題の一つとして「低所得層の住居福祉改善」を強調している。具体的には、買上・賃貸住宅の提供の拡大、循環式の賃貸住宅の導入のような「低所得者層向け住宅施設の多角化」を代表的な事業として掲げている(釜山広域市・釜山福祉開発院 2010:148)。

表 36 第2期釜山広域市地域社会福祉計画の重要推進事業

<input type="checkbox"/> 低所得層の市民福祉の増進 -低所得層の密集地域の共同体化 -低所得層の居住福祉の改善 -自活事業の充実 -社会サービス事業の広域化 <input type="checkbox"/> 老人福祉 -高齢者の所得保障 -高齢者向けの医療保障と健康増進 -社会参加 -社会安全網の構築 -高齢者向け産業の育成 <input type="checkbox"/> 障害者福祉 -障害者の社会参加と家族支援 -障害者の技能開発と就業拡大 -障害者向け便宜増進施策 -障害者福祉施設の拡充及び運営支援	<input type="checkbox"/> 児童・保育福祉 -児童の権利増進・安全保護 -家庭中心の福祉サービスの強化 -脆弱児童向け地域保護及び自立支援 -施設児童の保護・支援の強化 -保育の公共性強化やオーダーメイド型サービス提供 <input type="checkbox"/> 女性・家族福祉 -女性の地位向上及び社会参加の拡大 -女性の権益増進及び女性暴力予防保護 -子育てに良い地域社会づくり -脆弱家庭の福祉水準の向上 <input type="checkbox"/> 地域社会基盤造成 -協力を通じた統合社会福祉デリバリーシステムの構築 -地域社会福祉基盤造成 -分かち合いと敬いのある福祉共同体の構築 -福祉財政の拡充及び人材養成
--	--

釜山広域市・釜山福祉開発院(2010: ii)より

ところが、釜山に限らず、全国的に第1期と第2期の地域福祉計画の実行過程から、多様な問題点が指摘されている。地域福祉計画の樹立において、委託機関への依存度が高く、福祉ニーズの調査や地

域資源の調査が形式的に行われており、また予算問題、担当公務員の頻繁な交替によって地域福祉計画の実行が円滑に行われていない(チョ・ソンスク 2011:282)との指摘がある。なお、計画の内容においてもビジョンや事業などが地域間で類似しており、その地域の特性をきちんと反映していないことや、救護的な計画に留まる場合が多い(イ・ギヨンの他 2007:260)という指摘もある。さらに、地域福祉計画のほとんどの項目体系がマニュアルどおりに構成されている(朴愈美 2008:63)ように中央政府のマニュアルに依存する傾向が強く、計画の樹立と実行においても「評価の方法と内容」に影響を受けている(ジョンホンウォン、チェファン2014:31)という問題がある。つまり、計画の樹立の段階から「評価」にずれないように計画を立てているわけである。

第三章 散在型チョッパン居住者の生活

第一節 釜山市と散在型チョッパン

1. 釜山広域市の概況

釜山広域市は韓国の東南端に位置している釜山港を母体にして発達した韓国第一の港湾都市であり、東南の経済圏の中心都市である。さらに、首都ソウルに次ぐ韓国第二の都市として知られている。釜山広域市について述べる前に、まず韓国における行政区画に関して説明しておく。

韓国は実効統治する領域を 17 の第一級行政区画(1 特別市・1 特別自治市・6 広域市・8 道・1 特別自治道)に区分している。第二級行政区画に当たる市・郡、および特別市・広域市管下の区が基礎自治体である。

特別市(ソウル)・特別自治市(世宗)・広域市は日本の政令指定都市に相当し、道からは独立している。特別市・特別自治市と広域市は制度上同等である。また、特別自治道(済州)は自治権を拡大させた特殊な位置付けとなっており、道が基礎自治体となっている。特別市・広域市の下には区・郡が、道の下には市・郡が置かれている。基本的にはこれらが韓国の基礎自治体である。

「広域市」となるためには、市人口が 100 万人以上であることが要件である。日本の政令指定都市と似てはいるが、日本の都道府県に相当する広域地方公共団体である道の所属から独立する点、市内に郡を属させることができる点、この郡及び区は各々が自治体としての地位を持つ点などが異なる。制度的には特別区に近い。なお、韓国では人口が概ね 50 万人以上の市には区が設けられるが、こちらは自治権のない単なる行政区である。

「市」と「郡」は公選の首長(市長・郡守)と議会(市議会・郡議会)を持つ。なお、1995 年に行われた地方行政制度の改編によって、広域市の中に郡が属することができるようになった。特別市・広域市に属する区は、一般の市と同等の基礎自治体であり、公選の区長と区議会が設けられている。これは、日本の東京特別区と同様である。人口 50 万人以上の市は特定市で区が設けられているが、これは日本の政令指定都市の区と同様、自治権を持たない(公選の区長や区議会を置かない)行政区である。また、特別自治道の下にある 2 つの市は「行政市」である。特別自治道が基礎自治体であるため、行政市は自治権を持たず、市長は道知事が任命する。国会議員の選挙区も基礎自治体で区分けされており、甲乙丙で分ける選挙区もある。なお特別・広域市とほぼ同等の権限がある「世宗特別自治市」は行政区や行政群などは定めていない。

基本的に、市・区の下には「洞(ドン)」が、郡(グン)の下には邑(ウプ)・面(ミョン)がある⁴⁷。洞の下には統(トン)が、さらにその下には班(バン)がある⁴⁸。

韓国の各市道における市・郡・区の数表 37 のようである。このうち、釜山広域市は 15 の区と 1 の郡で構成されており、その下に 205 の洞と 2 の邑、3 の面がある(安全行政部 2014:4)。

表 37 各市道における市・郡・区の数(2013 年 12 月基準)

区分		市・郡・区				行政市・一般区		邑・面・洞			
		計	市	郡	区	行政市	一般区	計	邑	面	洞
合計		227	75	83	69	2	33	3,488	216	1196	2076
特別市	ソウル特別市	25			25			423			423
広域市	釜山広域市	16		1	15			210	2	3	205
	大邱広域市	8		1	7			139	3	6	130
	仁川広域市	10		2	8			147	1	19	127
	光州広域市	5			5			95			95
	大田広域市	5			5			78			78
	蔚山広域市	5		1	4			56	4	8	44
特別自治市	世宗特別自治市 ⁴⁹	0						11	1	9	1
道	京畿道	31	28	3			20	550	32	108	410
	江原道	18	7	11				193	24	95	74
	忠清北道	12	3	9			2	153	15	87	51
	忠清南道	15	8	7			2	207	24	137	46
	全羅北道	14	6	8			2	241	14	145	82
	全羅南道	22	5	17				296	33	196	67
	慶尚北道	23	10	13			2	331	36	202	93
	慶尚南道	18	8	10			5	315	20	176	119
特別自治道	済州特別自治道	0				2		43	7	5	31

安全行政部(2014:4)より

やや先走るが、本研究が対象とするチョッパンとの関係で述べれば、全国に 10 箇所あるチョッパン相談所の半分が特別市(ソウル: 5 ヲ所)に集中しており、後の半分は広域市(仁川: 1 ヲ所、大田: 1 ヲ

⁴⁷ 都市部に置かれた洞は日本の市町村内の町や大字に相当する。支所・出張所と公民館の機能を併せ持った「住民センター(旧洞事務所)」が置かれている。郡部に置かれた邑・面はそれぞれ日本の町・村に当たるが、自治権は持たない。邑・面にもそれぞれ、「洞事務所」と同様の機能を持つ「邑事務所」「面事務所」がある

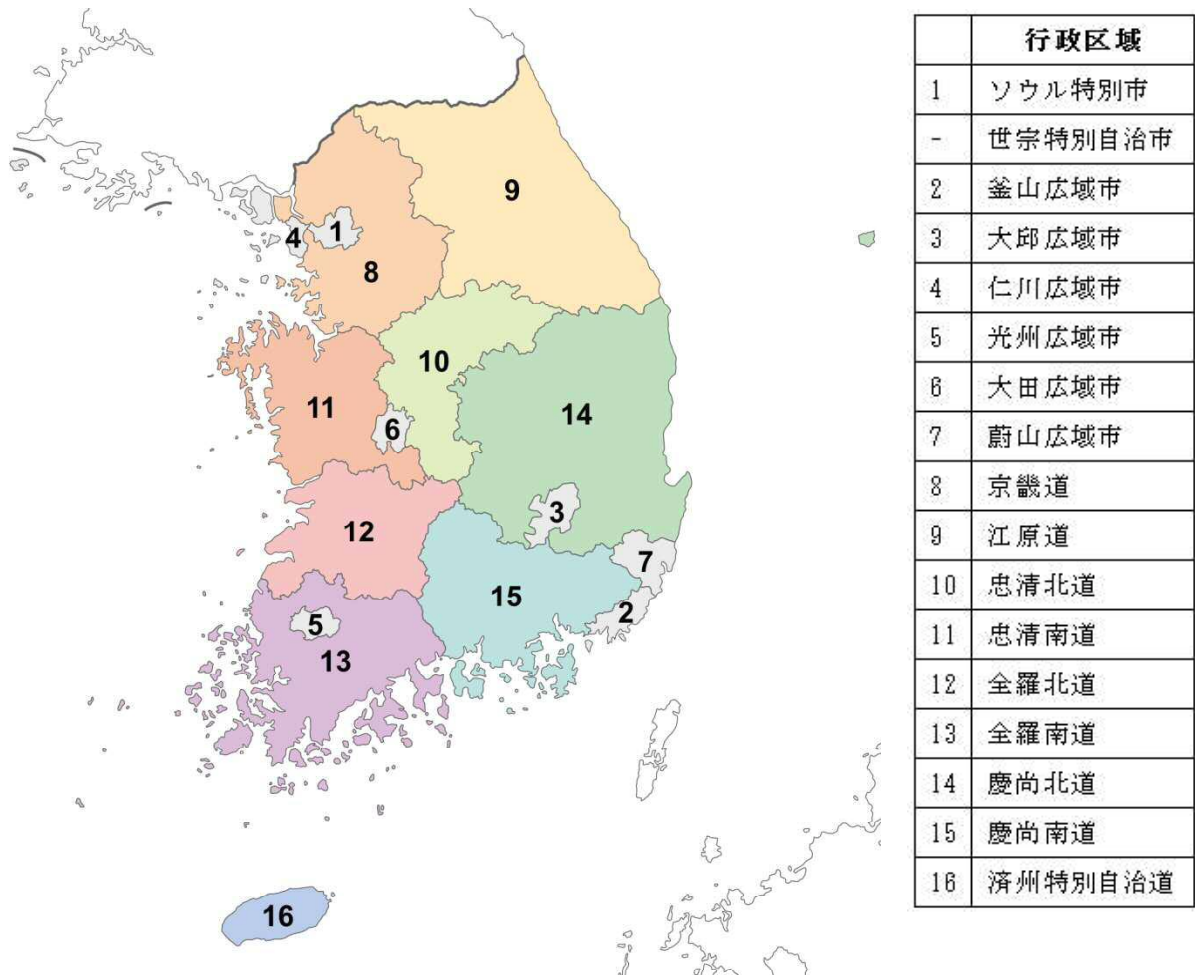
⁴⁸ 統は日本でいえば町内会・自治会に相当し、班は町内会・自治会内の班に相当する。邑・面の下には里(リ)」があり、これは日本の大字に相当する。

⁴⁹ 忠清南道の旧燕岐郡全域と公州市の一部や忠清北道の清原郡の一部を合わせて2012年7月1日に発足された。ソウル特別市、および主要都市の広域市とほぼ同じ権限を持っているため、道からは独立する行政となる。

所、大邱：1カ所、釜山：2カ所)にある。

韓国の行政区域を地図からみると図7のようであり、釜山広域市は「2」のところにあたる。

図7 韓国における行政区域



前述したように釜山広域市(以下、釜山)は韓国の東南端に位置している韓国第一の港湾都市であり、世界第5位(2008年基準)のコンテナ港湾である。面積は769.86 km²で国土の0.76%を占めている。人口は17の特別・広域市都のうち、ソウル、江原道に次ぐ3番目に多く(表38)、人口密度は二番目に高い(図8)。

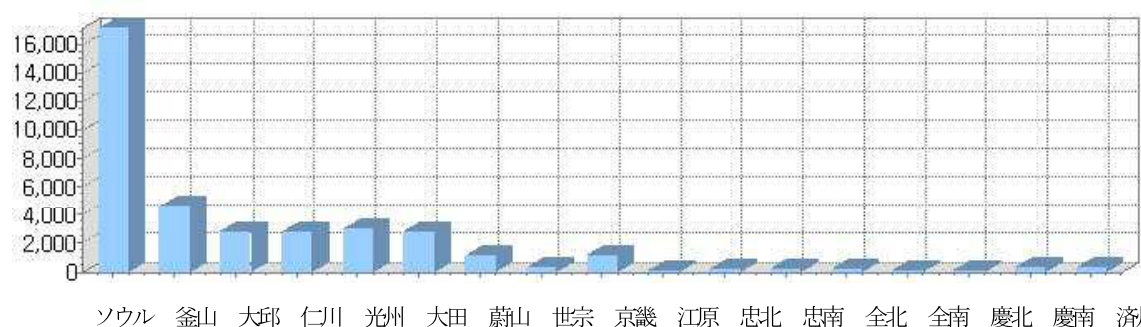
表 38 行政区域別 面積及び人口 (2014. 1. 1 基準)

区分		面積(km ²)	世帯	人口(名)
特別市	ソウル特別市	100, 305. 91	20, 456, 588	51, 141, 463
広域市	釜山広域市	605. 21	4, 182, 351	10, 143, 645
	大邱広域市	769. 82	1, 404, 663	3, 527, 635
	仁川広域市	883. 48	960, 265	2, 501, 588
	光州広域市	1, 040. 88	1, 118, 988	2, 879, 782
	大田広域市	501. 18	563, 599	1, 472, 910
	蔚山広域市	540. 21	584, 877	1, 532, 811
特別自治市	世宗特別自治市	1, 060. 46	431, 595	1, 156, 480
道	京畿道	464. 9	50, 045	122, 153
	江原道	10, 172. 16	4, 712, 324	12, 234, 630
	忠清北道	16, 872. 96	664, 913	1, 542, 263
	忠清南道	7, 406. 95	644, 062	1, 572, 732
	全羅北道	8, 204. 71	857, 699	2, 047, 631
	全羅南道	8, 066. 48	766, 699	1, 872, 965
	慶尚北道	12, 301. 00	815, 769	1, 907, 172
	慶尚南道	19, 028. 99	1, 139, 387	2, 699, 440
特別自治道	済州特別自治道	10, 537. 23	1, 320, 887	3, 333, 820
		1, 849. 29	238, 465	593, 806

安全行政部 DB より

図 8 人口密度(2013 年度)

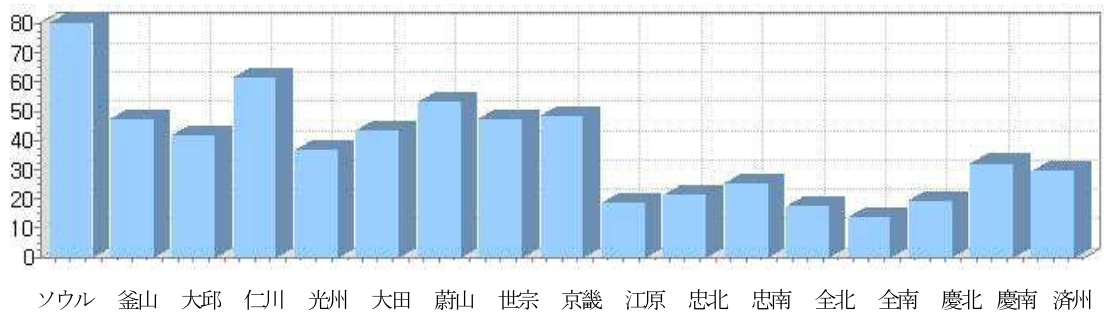
(名/km²)



安全行政部 DB より

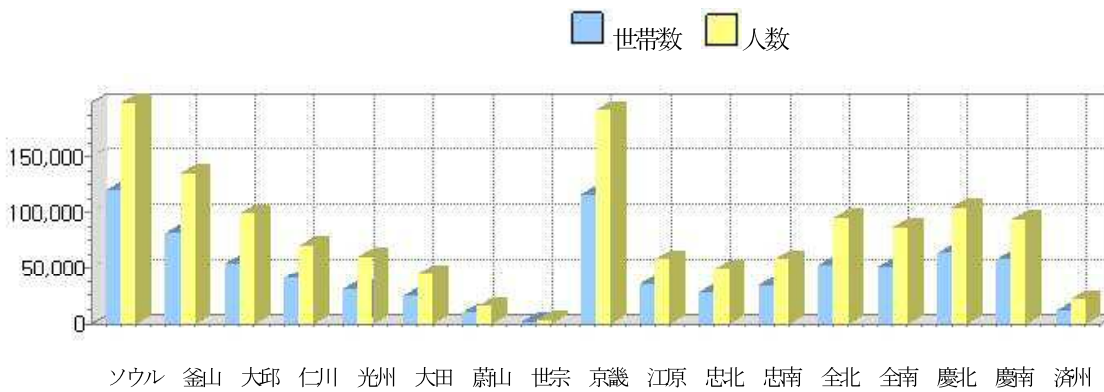
財政自立度は、ソウル特別市、仁川広域市、京畿道、蔚山広域市に次ぐ5位であり(図9)、基礎生活保障受給者は、ソウル特別市、京畿道に次ぐ3位である(図10)。

図 9 全国財政自立度(2013 年度)



安全行政部通計 DB より

図 10 全国基礎生活保障受給世帯及び人数(2012 年度)



安全行政部通計 DB より

図 11 釜山広域市の行政区域



釜山広域市ホームページより

釜山の行政区域は図 11 のように、15 の区と 1 の郡があり、その下に 205 の洞と 2 の邑、3 の面で構成されている⁵⁰。このうち、東区と釜山鎮区にチョッパン相談所が 1 カ所ずつ設置されている。

釜山の人口は海雲台区が最も多く、その次が釜山鎮区、沙下区の順であり⁵¹、人口密集度は蓮堤区が最も高く、水営区、中区の順である(表 39)⁵²。

表 39 釜山広域市における行政区域及び人口現況(2013 年度)

区分	邑面洞	面積(k㎡)	人口(名)	世帯数	人口密度(名/k㎡)
釜山	210	769.86	3,563,578	1,381,257	4,630
中区	9	2.83	48,614	23,284	17,239
西区	13	13.93	120,044	53,585	8,649
東区	14	9.73	97,450	44,192	10,015
影島区	11	14.13	137,437	58,584	9,727
釜山鎮区	23	29.69	391,957	159,915	13,202
東萊区	13	16.63	277,596	106,244	16,672
南区	17	26.81	295,195	113,583	11,011
北区	13	39.36	310,880	112,592	7,898
海雲台区	18	51.47	429,109	158,114	8,339
沙下区	16	41.72	353,243	133,869	8,471
金井区	17	65.27	256,015	98,005	3,927
江西区	7	181.63	74,765	27,325	412
蓮堤区	12	12.08	210,043	82,005	17,388
水営区	10	10.21	176,156	70,314	17,270
沙上区	12	36.09	251,014	96,840	6,955
機張郡	5	218.28	134,060	42,806	614

安全行政部通計 DB より

釜山の経済産業は‘港湾・物流’を中心とし発達しているが、1990 年代までの釜山の主要な成長産業は、靴、繊維などを中心とした製造業であった(釜山広域市ホームページ)。特に、靴産業は 1960 年

⁵⁰ 中区(Jung-gu、チュン・グ)、西区(Seo-gu、ソ・グ)、東区(Dong-gu、トン・グ)、影島区(Yeongdo-gu、ヨンド・グ)、釜山鎮区(Busanjin-gu、プサンジン・グ)、東萊区(Dongnae-gu、トンネ・グ)、南区(Nam-gu、ナム・グ)、北区(Buk-gu、プク・ク)、海雲台区(Haeundae-gu、ヘウンデ・グ)、沙下区(Saha-gu、サハ・グ)、金井区(Geumjeong-gu、クムジョン・グ)、江西区(Gangseo-gu、カンソ・グ)、蓮堤区(Yeonje-gu、ヨンジェ・グ)、水営区(Suyeong-gu、スヨン・グ)、沙上区(Sasang-gu、ササン・グ)、機張郡(Gijang-gun、キジャン・グン)

⁵¹ 人口数は、①海雲台区>②**釜山鎮区**>③沙下区>④北区>⑤南区>⑥東萊区>⑦金井区>⑧沙上区>⑨蓮堤区>⑩水営区>⑪影島区>⑫機張郡>⑬西区>⑭**東区**>⑮江西区>⑯中区の順である。

⁵² 人口密集度は、①蓮堤区>②水営区>③中区>④東萊区>⑤**釜山鎮区**>⑥南区>⑦**東区**>⑧影島区>⑨西区>⑩沙下区>⑪海雲台区>⑫北区>⑬沙上区>⑭金井区>⑮機張郡>⑯江西区の順である。

代以降、釜山の経済成長に重要な役割した。1965年の韓国と日本の国交正常化以降、日本の靴業界が低賃金労働力の活用が可能な釜山を生産基地としつつ、本格的な成長段階に入るようになった⁵³。その後1980年代まで持続的に成長し、釜山の代表的産業となった。ところが、靴産業は90年代に入り賃金上昇によって生産基地としての競争力を失い、さらに独自の商品やブランド開発に失敗し、衰退するようになった。人口も、1960年代からの経済成長政策で、農漁村人口の都市流入が増加し、1979年には300万を上回り、1994年には400万に迫った(釜山広域市ホームページ)。1995年以後の景気悪化及び出生率の低下により釜山の人口は徐々に減少している(釜山広域市・釜山福祉開発院、2010:54)。ただし、人々の従事する産業別に見ると、表40のように現在も製造業に従業している人数は、卸売り、小売業に次いで多いことが見て取れる。卸売り・小売業は事業所数も最も多く、この二つの産業の他、宿泊及び飲食業、運輸業などが事業所数、従業者数とも多くなっている。製造業に比べて、これらは比較的小規模な事業所あるいは自営業等を含んでいると考えられる。

表 40 釜山広域市の産業大分類別事業体及び従業者数(2012年度)

	産業	事業体数(個所)	従業者数(名)
		270,058	1,275,945
A	農業、林業及び漁業	90	3,845
B	鉱業	10	83
C	製造業	27,475	205,619
D	電気、ガス、蒸気及び水道事業	59	4,846
E	下水廃棄物処理・原料再生及び環境復元業	383	5,136
F	建設業	6,892	72,955
G	卸売り、小売業	77,909	212,551
H	運輸業	28,005	106,834
I	宿泊及び飲食店業	49,227	140,773
J	出版、映像、放送、通信及び情報サービス業	1,429	15,206
F	金融及び保険業	3,327	52,764
L	不動産及び賃貸業	9,042	33,112
M	専門科学及び技術サービス業	5,410	36,002
N	事業施設管理及び事業支援サービス業	3,844	70,757
O	公共行政国防及び社会保障行政	665	40,811
P	教育サービス業	11,816	97,500
Q	保健業及び社会福祉サービス業	7,435	88,302
R	芸術・スポーツ及び余暇関連サービス業	6,843	21,139
S	社協及び団体修理と	30,196	67,710

釜山広域市通計 DB より

⁵³ 特に、靴敷きのカットのような作業は家内でできる作業だったので女性などの家内制手工業の一環で多く働いていた。

区の財政自立度をみると、江西区が最も高く、次に機張郡、海雲台区の順である⁵⁴。なお、区の予算のうち、社会福祉予算の割合は、北区が最も多く、沙下区、影島区の順で示されている(表 41)⁵⁵。

表 41 財政自立度及び社会福祉予算の割合(2013 年度)

区分	財政自立度	社会福祉予算の割合
釜山広域市	51.81	30.27
中区	30	33.27
西区	13.64	50.5
東区	19.78	52.7
影島区	14.42	56.68
釜山鎮区	30.83	55.87
東萊区	25.89	52.8
南区	26.89	52.06
北区	15.93	64.19
海雲台区	34.13	55.99
沙下区	21.99	59.12
金井区	26.63	50.56
江西区	47.75	28.22
蓮堤区	32.33	49.47
水営区	26.13	48.23
沙上区	25.82	55.77
機張郡	37.39	27.85

安全行政部通計 DB より

老人の人口は釜山鎮区が最も多く、その次が海雲台区、南区の順であり、老人人口の割合は東区、中区、西区の順である。韓国の公的扶助制度である基礎生活保障受給者数は永久賃貸アパートが密集している北区が最も多く(釜山広域市・釜山福祉開発院 2010:67)、沙下区、海雲台区の順であり、受給者割合(保護率)は東区、西区、影島区の順に多い。なお、基礎生活保障受給世帯数でみると、北区、釜山鎮区、沙下区の順で多い(釜山広域市通計 DB)。

釜山市に2カ所あるチョッパン相談所が所在している釜山鎮区と東区を中心にみると、釜山鎮区の場合は老人、基礎生活保障受給者、受給世帯の数が多く、東区は老人、基礎生活保障受給者、受給世帯が占めている割合が高い、両地域とも釜山内では脆弱層が多く居住していることが分かる。

⁵⁴財政自立度は、①江西区>②機張郡>③海雲台区>④蓮堤区>⑤釜山鎮区>⑥中区>⑦南区>⑧金井区>⑨水営区>⑩東萊区>⑪沙上区>⑫沙下区>⑬東区>⑭北区>⑮影島区>⑯西区の順である。

⁵⁵社会福祉予算の割合は、①北区>②沙下区>③影島区>④海雲台区>⑤釜山鎮区>⑥沙上区>⑦東萊区>⑧東区>⑨南区>⑩金井区>⑪西区>⑫蓮堤区>⑬水営区>⑭中区>⑮江西区>⑯機張郡である。

表 42 釜山広域市の基礎生活保障受給世帯及び受給者(2011 年度)⁵⁶

区分	老人		受給者		受給世帯	
	名	割合(%)	名	割合(%)	世帯数	割合(%)
中区	8,850	18.69	2,290	4.70	1,589	6.82
西区	21,941	18.47	7,307	5.91	3,848	7.18
東区	18,734	19.51	7,089	7.06	4,543	10.28
影島区	24,625	18.13	8,043	5.62	5,161	8.81
釜山鎮区	54,218	13.91	12,630	3.20	8,355	5.22
東萊区	35,153	12.7	6,069	2.14	3,692	3.48
南区	40,543	13.9	7,096	2.40	4,482	3.95
北区	32,212	10.4	14,614	4.74	8,814	7.83
海雲台区	49,353	11.6	12,884	3.03	7,766	4.91
沙下区	40,007	11.46	13,896	3.91	8,314	6.21
金井区	34,397	13.57	7,958	3.12	4,584	4.68
江西区	9,947	14.24	2,247	3.47	1,203	4.40
蓮堤区	27,994	13.38	6,872	3.22	3,996	4.87
水宮区	26,394	15.07	4,678	2.65	2,996	4.26
沙上区	26,174	10.61	9,686	3.81	6,186	6.39
機張郡	16,874	12.73	3,664	3.39	2,240	5.23

安全行政部通計 DB より

⁵⁶ 人数と割合が多い順で並べ替えると以下のようである。

順位	老人		受給者		受給世帯	
	名	割合(%)	名	割合(%)	世帯数	割合(%)
1	釜山鎮区	東区	北区	東区	北区	東区
2	海雲台区	中区	沙下区	西区	釜山鎮区	影島区
3	南区	西区	海雲台区	影島区	沙下区	北区
4	沙下区	影島区	釜山鎮区	北区	海雲台区	西区
5	東萊区	水宮区	沙上区	中区	沙上区	中区
6	金井区	江西区	影島区	沙下区	影島区	沙上区
7	北区	釜山鎮区	金井区	沙上区	金井区	沙下区
8	蓮堤区	南区	西区	江西区	東区	機張郡
9	水宮区	金井区	南区	機張郡	南区	釜山鎮区
10	沙上区	蓮堤区	東区	蓮堤区	蓮堤区	海雲台区
11	影島区	機張郡	蓮堤区	釜山鎮区	西区	蓮堤区
12	西区	東萊区	東萊区	金井区	東萊区	金井区
13	東区	海雲台区	水宮区	海雲台区	水宮区	江西区
14	機張郡	沙下区	機張郡	水宮区	機張郡	水宮区
15	江西区	沙上区	中区	南区	中区	南区
16	中区	北区	江西区	東萊区	江西区	東萊区

釜山の住宅普及率は2012年度基準で102.4%であるが、中区、東萊区、沙上区、東区、蓮堤区は住宅普及率が100%に達していない。そのうち、釜山鎮区と東区は集合住宅である「多世帯住宅」の数が多い（表43）。

表 43 釜山広域市の住宅現況及び普及率(2012年度)

	合計(戸)	単独 住宅 ⁵⁷	多家口 住宅 ^{*58}	アパート ⁵⁹	連立住宅 ⁶⁰	多世帯 住宅 ⁶¹	非居住用 建物内の 住宅 ^{**62}	住宅 普及率 (%)
釜山市	1,302,002	466,005	(322520)	662,632	38,930	120,182	14,253	102.4
中区	18,893	8,267	(5020)	4,688	365	4,489	1,084	87.1
西区	48,293	29,915	(17300)	11,190	1,050	5,364	774	105.6
東区	37,335	25,440	(14951)	7,231	736	3,200	728	99.2
影島区	55,399	26,150	(15027)	24,718	1,235	2,693	603	105.9
釜山鎮区	149,059	57,010	(38258)	76,016	3,349	12,684	-	101.6
東萊区	94,215	34,658	(26671)	45,626	3,659	8,364	1,908	95.7
南区	112,992	40,703	(26913)	51,000	4,485	15,816	988	101.5
北区	110,913	21,064	(17219)	76,886	3,027	9,024	912	105.9
海雲台区	154,939	31,621	(24815)	105,215	2,740	12,999	2,364	102.4
沙下区	125,983	40,420	(30472)	70,064	6,413	7,761	1,325	101.8
金井区	97,116	40,807	(32326)	38,578	4,356	11,984	1,391	107.1
江西区	22,192	13,975	(4893)	7,785	101	54	277	112.9
蓮堤区	75,334	29,134	(20997)	37,610	1,228	7,362	-	101.3
水営区	68,251	24,443	(17707)	29,160	2,983	10,682	983	104.0
沙上区	88,671	30,170	(25156)	51,529	1,129	5,457	386	99.1
機張郡	42,417	12,228	(4795)	25,336	2,074	2,249	530	111.9

釜山広域市DBより

*多家口住宅は、「単独住宅」に含めた数値で、合計には含めてない。

**非居住用建物内のとは、住宅商店、工場などの営業用を目的として建てられた建物の内に人が居住できるように区画されたところで、住宅の要件を備えている。

⁵⁷ Detached dwelling(日本でいう一戸建て住宅)

⁵⁸ Multy famaily house

⁵⁹ Apartment(日本でいうマンション)

⁶⁰ Row house(小規模集合住宅の一種類)

⁶¹ Apatment nuits in a private house(小規模集合住宅の一種類))

⁶² Dwelling unts in the building not intended for human habitation

2. チョッパン相談所がある二つの区

前述したように、全国の10箇所のチョッパン相談所のうち、釜山には釜山鎮区と東区にチョッパン相談所が1箇所ずつ設置されている。ここでは、チョッパン相談所が所在しているその二つの区についてみてみよう。

まず、釜山鎮区(以下、鎮区)は、釜山広域市の中心部に位置し、交通・商業の中心地である、釜山で2番目に大きい区である。西面交差路を中心に、中央路、伽倻路、田浦路、セッサク路が四方に伸び、他地域に通じる道路があり、地下鉄1・2号線が交差する区間で、1日に通行人口が881,847人に至り、交通量は296,856台に及ぶ交通の要地である。なお、大型ショッピングモール(ロッテデパートなど)、大型市場と各種商店街及び衛生関連会社が密集している商業地域で、巨大な金融、業務、商圏、交通の中心圏が形作られている(釜山鎮区ホームページ)。

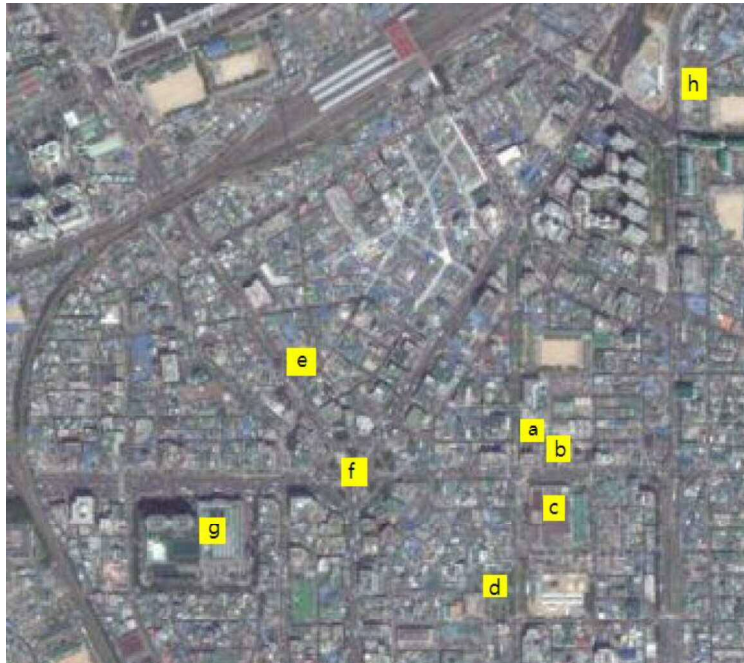
図 12 釜山広域市における釜山鎮区の位置



釜山広域市ホームページより

釜山鎮区チョッパン相談所は、鎮区の中でも最も繁華街である西面交差路から徒歩6分程度(398m)、地下鉄1号線と2号線の西面駅から7~8分程度の距離に位置している。相談所の近所には大型の大型ショッピングモール(Dcity、ロッテデパート)、大型市場、市立図書館などがある。特に、ホームレス総合支援センターは約1分(79m)、釜山鎮区老人・障害者福祉館は徒歩で約15分(949m)程度の距離に位置している。このような施設以外も前述したように西面ロータリーを中心に銀行、書店、レストランなどの商店街が広く形成されている繁華街である。

図 13 鎮区チョッパン相談所付近の地形図



- a. 釜山鎮区 チョッパン相談所
- b. ホームレス総合支援センター
(徒歩約 1 分、79m)
- c. ショッピングモール
(Dcity、徒歩約 2 分、121m)
- d. 市立図書館(徒歩約 7 分、401m)
- e. 釜田市場(徒歩約 11 分、753m)
- f. 西面ロータリー(徒歩約 7 分、402m)
- g. ロッテデパート(徒歩約 13 分、861m)
- h. 釜山鎮区老人・障害者福祉館
(徒歩約 15 分、949m)

図 14 鎮区チョッパン相談所付近の交通



:地下鉄1号線と2号線の西面駅からチョッパン相談所まで徒歩7～8分程度かかり、西面ロータリーは多数のバスが通る交差点である。

図 13、14 : グーグルの衛星地図上に該当施設を示したもの

写真 6 鎮区チョッパン相談所の外観



：バスが通る道路のすぐ路地にあり、建物の2階と3階を使用している。2階には事務室、相談室、洗濯機置場及びシャワー室、トイレがあり、3階は一つの多用途室(プログラム室)がある。

鎮区チョッパン相談所で居住脆弱層向け買上賃貸住宅事業などを運営している「居住福祉センター」の教務も委託運営しているので、外観に「居住福祉センター」の看板も掛かっている。

写真 6 釜山鎮区チョッパン相談所付近



一方、東区は、釜山港を中心とした「港湾・物流」の中心地であり、釜山が港湾都市と呼ばれるようになった発祥地として知られている。地勢が、海岸を組む‘背山臨水’の地形であるため、ほとんどが傾斜地帯であり、そのため平坦な市街地を形成することができなく、主に川と谷を中心に発展してきた。現在の市街地の1/3程度は植民時代(1909～1913年)に海岸を埋め立てて造られた地域である(東区ホームページ)。なお、ソウル駅(ソウル特別市)、東大邱駅(大邱広域市)に次ぐ、3番目に利用客が多い‘釜山駅’が位置している。

図 15 釜山広域市における東区の位置

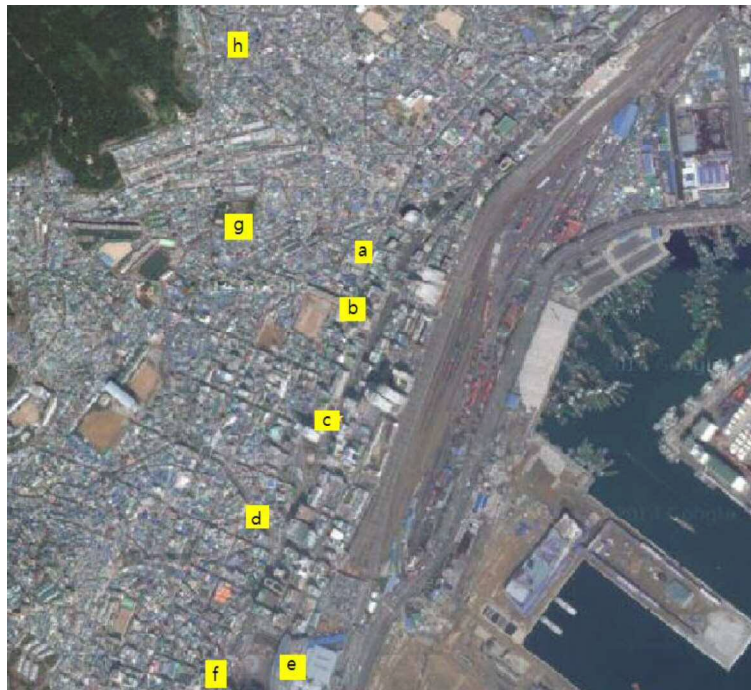


釜山広域市ホームページより

東区チョッパン相談所の付近には野宿者総合支援センター、東区老人総合福祉館、東区障害者総合福祉館、チョリャン駅、大型市場(チョリャン市場)、 KTX 釜山駅⁶³などが位置している。

⁶³ 韓国鉄道公社の鉄道駅である。全国の重要駅と繋がっており、日本の新幹線のような高速鉄道(KTX)もとまる駅である。

図 16 東区チョッパン相談所付近の地形図(相談所との距離)



- a. 東区チョッパン相談所
- b. 野宿者総合支援センター
(望み館、徒歩約 4 分、242m)
- c. チョリャン駅(徒歩約 10 分、628m)
- d. 大型市場(チョリャン市場
(徒歩約 16 分、1.0 km)
- e. KTX 釜山駅(徒歩約 19 分、1.29 km)
- f. 地下鉄釜山駅
- g. 東区老人総合福祉館
(徒歩約 9 分、594m)
- h. 東区障害者総合福祉館
(徒歩約 13 分、867m)

グーグルの衛星地図上に該当施設を示したもの

写真 7 東区チョッパン相談所付近



東区老人総合福祉館
(徒歩 9 分)



東区障害者総合福祉館
(13 分)



野宿者総合支援センター「望み館」
徒歩 4 分)

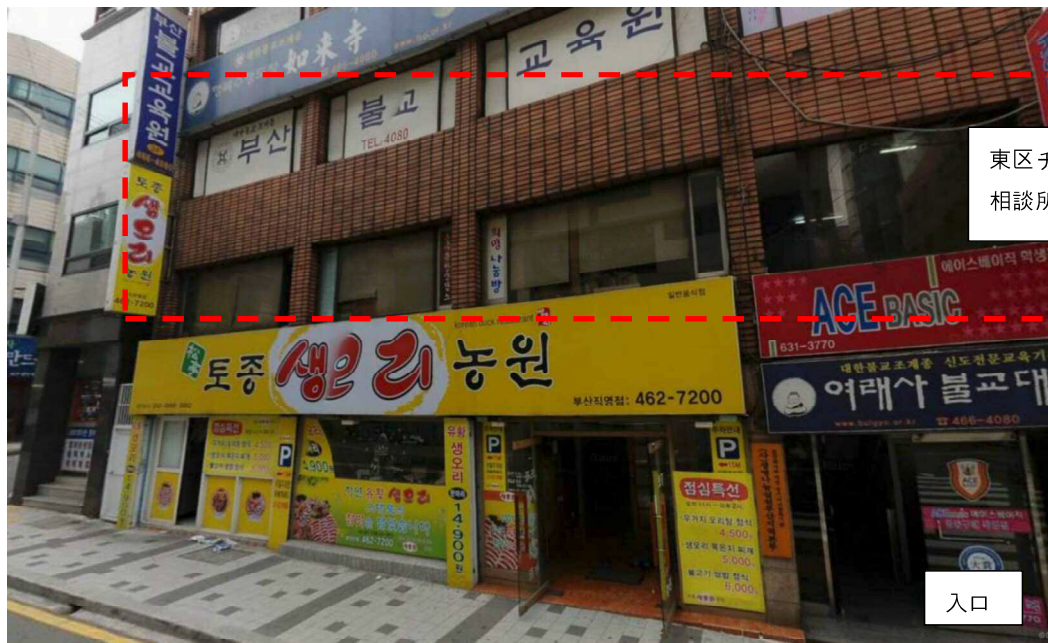


KTX 釜山駅(徒歩 19 分)



チョリャン市場(徒歩 16 分)

写真 8 東区チョッパン相談所の外観



グーグル衛星写真

： バスの通り道に位置しており、地下鉄(チョリャン駅)から徒歩 10 分の道路に位置している。
1 階は一般食堂があり、チョッパン相談所は 2 階を使っている。

写真 9 東区チョッパン相談所の内部の様子



←チョッパン居住者たちがここでテレビを見たり、昼間を過ごしている。
(写真：チョッパン相談所提供)

： 二つのチョッパン相談室両方とも、事務室がある場所にソファー、テーブルがあつて、チョッパン居住者たちが座ってテレビを見たりしながら、時間を過ごせるスペースがある。写真 10 は東区チョッパン相談所の事務室内にあるそのスペースであるが、鎮区チョッパン相談所はこれより狭い、5～6 人程度座れるスペースである。

3. 釜山市の「チョッパン」の散在性

次に、釜山地域のチョッパン及び居住者の現況をみよう。釜山広域支庁社会福祉課の内部資料によると、2014年6月現在、釜山地域には267軒のチョッパン建物があり、その内に911個の部屋、つまり911個のチョッパンがある。そこで809名が居住している。表44から東区に比べ鎮区の場合はチョッパン建物内にチョッパン(部屋)が多いことが分かる。居住者809名の居住者のうち、男性、基礎生活受給者の割合が高い(表45)。なお、チョッパンの暖房施設は表46のように、電気式床暖房が多く、まだ石油、煉炭を使っているところもある⁶⁴。

表 44 釜山のチョッパン現況(2014年6月基準)

	チョッパン建物(軒)	チョッパン数	居住者(名)
計	267	911	809
東区チョッパン相談所	212	382	382
釜山镇区チョッパン相談所	55	529	427

釜山広域市庁社会福祉課(2014)内部資料

表 45 チョッパン居住者の現況(2014年6月基準/単位:名)

	性別			住民登録現況			基礎生活保障現況			
	計	男	女	計	有	無	計	受給	非受給	未把握
計	809	659	150	809	796	13	809	579	228	2
東区チョッパン相談所	382	297	85	382	379	3	382	307	73	2
鎮区チョッパン相談所	427	362	65	427	417	10	427	272	155	-

釜山広域市庁社会福祉課(2014)内部資料

表 46 釜山地域チョッパンの暖房現況(2014年6月基準/単位:チョッパン数)

	計	都市ガス 及びLPG	石油	電気式 床暖房	煉炭	その他
計	488	88	32	325	33	10
東区チョッパン相談所	382	13	3	324	33	9
釜山镇区チョッパン相談所	106	75	29	1	-	1

釜山広域市庁社会福祉課の内部資料

ところで、上の釜山広域支庁社会福祉課の内部資料は、チョッパン相談所別の管理現況であり、洞別・区別の現況は把握していない実情である⁶⁵。そのため、区別現況は各チョッパン相談所が管理して

⁶⁴ 暖房現況は一部のチョッパンを対象としたため、チョッパン数が488となっている。

⁶⁵ 研究者が公式的に要請した「チョッパン及び居住者の洞別現況」について、「洞別管理現況ない」と返信(文書番号:社会福祉課-16733号)があった。

いる現況(チョッパン相談所内部資料)を参考とした。この現況は本研究のインタビュー調査が実施された同時期の資料である(2012年6月基準)。

各チョッパン相談所の区別チョッパン居住者現況は表 47 である。言い換えると、各チョッパン相談所でサービスを提供している人の区別現況である。表をみると、742 名のチョッパン居住者は、チョッパン相談所のある二つの区に多く存在しているが、その他の区にも広く分散してていることが分かる。たとえば、西区、沙下区、中区などである。

表 47 各チョッパン相談所がサービスの提供している区別チョッパン居住者現況

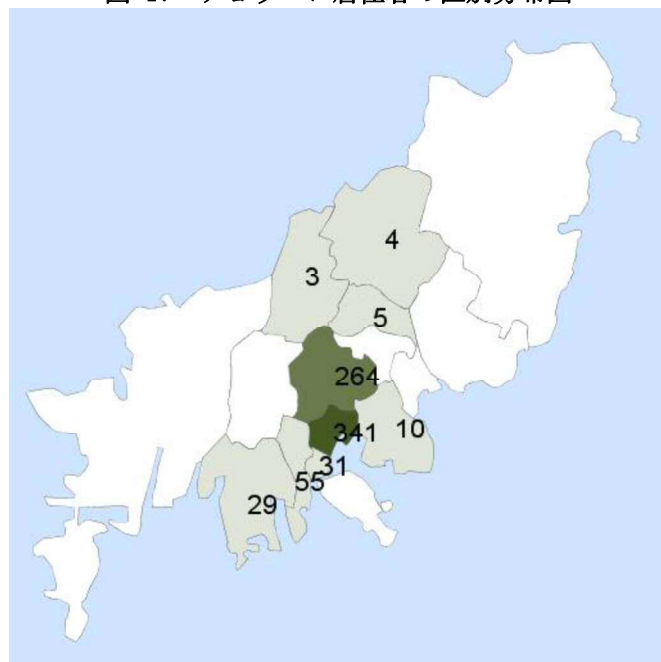
(単位：名)

東区チョッパン相談所		鎮区チョッパン相談所	
東区	341	鎮区	264
西区	50	西区	5
沙下区	18	沙下区	11
中区	31	南区	10
		北区	3
		金井区	4
		東萊区	5
計(名)	440	計(名)	302

各チョッパン相談所の内部資料より再構成

上の表 47 を図で表すと、以下のようである(図 17)。

図 17 チョッパン居住者の区別分布図



なお、チョッパン相談所がある区を中心に多数が居住しているとはいえ、表 48 のように同じ鎮区内を区分してみると、釜田洞が最も多いが、一般住宅を転用したチョッパンも含めると、他の洞にも広く分散していることが分かる。

表 48 鎮区チョッパン相談所がサービスの提供しているチョッパン居住者の区別・洞別分布

(単位：名)

区	洞	旅館・旅人宿転用	一般住宅の転用	計
鎮区	田浦洞	10	15	25
	釜田洞	102	2	104
	凡川洞	22	0	22
	付岩洞	9	13	22
	凡田洞	4	9	13
	伽倻洞	14	0	14
	開琴洞	19	7	26
	楊亭洞	6	7	13
	堂甘洞		15	15
	蓮池洞		10	10
西区	－	－	5	5
沙下区	－	－	11	11
南区	－	－	10	10
北区	－	－	3	3
金井区	－	－	4	4
東萊区	－	－	5	5
		186	78	302

鎮区チョッパン相談所の内部資料より再構成

しかし、釜山のチョッパンが散在的であるという意味は、このような行政区の中の分布というばかりでなく、むしろ序章の＜写真 2＞でみたように、同じ区、洞のなかにあっても、チョッパンが密集してはつきりそれと分かる地域を形成しておらず、商業地区や一般住宅街の中にチョッパンが単独で、あるいは数件で散らばっていることを指している。つまり、釜山市の中でも、チョッパンは鎮区、東区に多いし、鎮区の中でも釜田洞に多いのであるが、その存立形態が密集していないのである。釜山地域になぜチョッパンが散在しているのか、その形成背景及び過程について扱っている研究はほとんどない⁶⁶。ただ、全国の主なチョッパン地域⁶⁷を中心とし、チョッパンの形成過程を類型化したハ・ソングュ他(2005)の研究によると、釜山地域のチョッパンは「旅館・旅人宿がチョッパンへ変化した類型」が多いという。

ハ・ソングュ他(2005:16-20)は、チョッパンの形成過程の類型を次のように 4 つに区分している。

⁶⁶釜山地域のチョッパンについて、他の地域に比べ「チョッパンが散在されている代表的な地域である」との現状について述べている研究がほとんどである。

⁶⁷チョッパン相談所が所在しているソウル、仁川(インチョン)、大田(デジョン)、大邱(デグ)、釜山(プサン)を中心としている。

まず、売春街がチョッパンへ変わった類型が挙げられている。チョッパン地域の中には‘公娼’⁶⁸地域であったところがあるが、1961年度の売春禁止令によりその地域は衰退し始めた。売春ができなくなった売春婦などの人々が業種を変え、それが現在のチョッパンのような宿泊業になった類型である。ソウルの代表的なチョッパン地域であるドンイ洞、チャンシン洞、ヨンドゥンポ地域、東仁川駅及び釜山鎮駅の付近などは売春街があったところである。

二つ目は、本来、旅館・旅人宿だったところがチョッパンへ変化された類型である。ソウル、大田、大邱などの地域の一部チョッパンがこのような類型であるが、特に釜山地域のチョッパンはほとんどが旅館、旅人宿であったと言っても過言ではないという。都市化によって農村から都市へ流入された人々が多く利用した旅館及び旅人宿は、宿泊業の高級化・大型化のなかで次第に減り、特に資本が少ない下級の旅館・旅人宿の多くはチョッパンへ転換することになった。旅館・旅人宿は“建築法”による宿泊施設の一類型として、「客が泊まれるよう施設や設備などのサービスを提供すること(公衆衛生管理法第2条1項2号、建築法第2条2項15号)と規定されているため、施設・設備の規制もあり、税金納付の義務もある。そのため、施設・設備規制を備えられない場合、あるいは税金を避けるため、旅館・旅人宿の登録を取り消して未認可⁶⁹のチョッパンとして宿泊業を続けるわけである。

三つ目の類型は、畜舎、一般住宅、寮、労働者合宿所、工場などがチョッパンへ変換された類型である。さらに、最近ではゴシウォンが⁷⁰チョッパンの形態で使われているところも増えており、この類型を四つ目として挙げている。先の釜山のチョッパン分布表で一般住宅と書いてあるのは、このタイプである。

ハ・ソンギュの他(2005)の先行研究から、本来、一般宿泊業であった旅館・旅人宿のうち、下級の旅館・旅人宿が「未認可宿泊所」つまりチョッパンとして残され、釜山市においては、それがソウルなどのように中心駅周辺に密集して残ったのではなく、散らばった形で残されたと推測することが出来る。むしろ、元々旅館・旅人宿は人通りが多い繁華街、主要駅の付近であったため、釜山市においても残された旅館・旅人宿もその付近が多い。チョッパン相談所協議会(2009)によると、釜山地域のチョッパンは主要道路、鉄道駅、地下鉄駅の付近や交通が便利な草梁洞(釜山駅付近)、水晶洞(釜山鎮駅付近)、佐川洞(釜山鎮駅付近)、凡一洞(中央市場・デパート付近)、凡川洞、釜田洞、田浦洞などに広く分布している。また、釜山港に隣接している中区の中央洞、ヨウンジュドン、西区の忠武洞、草梁洞、南富民洞と快法洞(バスターミナル付近)、北区の龜浦洞(龜浦駅付近)などにも分

⁶⁸植民時代に導入された公娼制度は、解放以降に廃止されたが、暗々裏に売春街は形成されていた。

⁶⁹宿泊業とは、「客が泊まれるよう施設や設備などのサービスを提供する営業」である(公衆衛生管理法第2条)。宿泊業をするためには、公衆衛生管理法による公衆衛生営業の届け出を出して、衛生管理の義務を果たさなければならない。

⁷⁰ゴシウォンはその形が建築物の用途によって変わるが、一般的なゴシウォンは「建築法施行令3条」に該当する「第2近隣生活施設」にあたる。ここでいう第2近隣生活施設とは、一般飲食店、テニスコート、公演場、金融機関など、住宅街に隣接され住民生活に便宜を提供する施設を意味する。

散していることが分かる。

釜山の二つのチョッパン相談所の住宅類型による「居住者現況」からも、「旅館・旅人宿」で居住している割合がはるかに多く表れている。この現況からも釜山はチョッパンが旅館・旅人宿の形態で存在していることがわかる。

表 49 住宅類型別チョッパン居住者現況

	チョッパン居住者			買上賃貸住宅居住者	計(名)
	旅館・旅人宿転用	一般住宅転用	計		
東区チョッパン相談所	420 (95.5%)	20 (4.5%)	440 (100%)	16	456
鎮区チョッパン相談所	186 (61.5%)	116 (38.5%)	302 (100%)	79	381

各チョッパン相談所の内部資料より再構成

実際に、ソウル、大田のチョッパン密集地域と比べ、釜山のチョッパンは、未だに「旅館」または「旅人宿」の看板を掛けているところが多く目立つ。この後のインタビューでも、チョッパン居住者はチョッパンのことを「旅館」「旅人宿」と呼んでいることが少なくない。

これに対して、大田市は大田駅の付近の中央洞を中心に大規模のチョッパンが密集しており、一般居住地域及び旅人宿のような多様な形で形成されている(チョッパン相談所協議会(2009)が、大田チョッパン相談所の案内で訪ねたチョッパン地域にはほとんど「旅館・旅人宿」の看板はなく、まさに「チョッパン村(密集地域)」であった。なお、売春街の代表的な地域であったソウルの‘ドンイ洞’チョッパン村(密集地域)も大田市と同様に旅館・旅人宿の看板はほとんどなかった。これに比べ、釜山のチョッパンはほとんどが旅館、旅人宿の看板が掛けられていた。ソウル、大田、釜山の各チョッパン相談所の案内で訪ねたチョッパン及びチョッパン村の様子が写真10、11である。

写真 10 大田市とソウルのチョッパンの様子



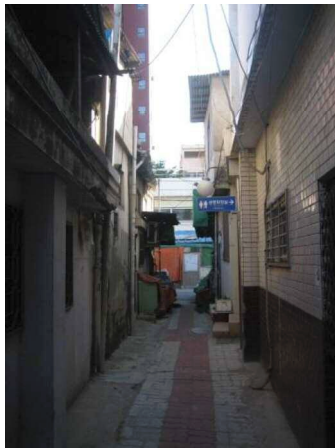
大田駅のすぐ裏(中央洞)にある
チョッパン



住宅街に密集している
チョッパン(大田市)



住宅街の大型倉庫を使ったチョッパン
(大田市)



チョッパンが住宅街に密集している地域内の公衆トイレ
(大田市)



ソウルのドンイ洞のチョッパン村の様子

筆者撮影(2012年7月)

写真 11 釜山市のチョッパンの様子



筆者撮影(2012年8月)

むろん、すべてがこのような形態ではない。前述したように、釜山の地勢的な特徴で海岸を埋め立てたところが多く(東区ホームページ)、そこに残されている老朽した一般住宅の一部が、現在チョッパンのような形で変化されたため、「旅館・旅人宿」の看板がないところもある。これも釜山の散在型形成の一因である。

以上のように釜山は全国のチョッパン相談所がある地域の中でも、代表的にチョッパンが「散在」されている地域と知られており、実際に多数の洞や区に散らばっており、いくつかのチョッパンの多い区や洞でも、密集せず、パラバラとあちこちに建っているのである。

第二節 過去:チョッパンに来るまで

散在型チョッパン地域におけるチョッパン居住者の生活を明らかにするため、前述したように本研究はチョッパン居住者のみならず、元チョッパン居住者、チョッパンと類似な環境に置かれている人もインタビュー調査の対象とし、それらのインタビュー記録からチョッパン居住者の生活を多角的に把握するという方法を探った。具体的なインタビュー対象者は、チョッパン居住者8名、ゴシウォン居住者1名、買上賃貸住宅⁷¹への居候1名、チョッパンから賃貸住宅へ転居した買上賃貸住宅居住者3名である。まず、それらの人々のプロフィールを簡単に示すと、表50のようである。チョッパン居住者の場合は、年齢から見ても、居住歴からみても、チョッパン居住者全体の特徴とかけ離れてはいない。Fさんのみ80歳代と高齢である。またチョッパンから「買いあげ賃貸住宅」へ転出した人々は、チョッパン居住者より若干年齢が高い。釜山市との関係では、釜山出身者と他地域からの流入者に分かれるが、チョッパン居住者では他地域から流入した人々が多い。2名のみ釜山出身者であるが、1名は全国を転々としてから釜山に戻ったというケースである。

本研究のインタビューは前述したように、過去、現在、未来という時間軸を設定して行なった。すなわち、彼らがチョッパンに居住することになった過去の経緯、現在のチョッパンでの生活をどのように営んでいるのか、これからの生活についてどう思っているのか、である。まず、チョッパンに来るまでのストーリーを、インタビューで語られた彼らの「言葉」で示してみたい。とはいえ、インタビューはインタビュアーとの「対話」であり、どのような「言葉」が示されるかは、インタビュアーである筆者の投げかける「言葉」によっても変わってくるにちがいない。そこで以下では、筆者の間かけと、かれらの返答といったぐあいに、記述していきたい。

⁷¹ ここでいう買上賃貸住宅とは、チョッパン、ビニールハウス、ゴシウォン、旅人宿に居住する者や犯罪被害者に対し、居住環境改善及び自活の土台を備えるため住宅を低価で賃貸する「居住脆弱層向け居住支援事業」の一類型であり、国土海洋部の主導で大韓住宅公社が集合住宅などのような既存住宅を買上げて入居対象者に賃貸することである。入居対象基準は①前年度の都市勤労者世帯の月平均所得の50%以下（‘13年基準：4,606,216ウォン以下/3人以下の世帯）、また財産基準では②5,000万ウォン以下の土地、及び③2,200万ウォン以下の自動車という3つの基準を満たす世帯が対象になる。契約期間は基本的に2年であるが、4回まで再契約（2年ごと）が可能であり、最長10年まで居住することができる。必要な費用として基本的に保証金（敷金）100万ウォンが必要である。家賃は地域別に若干異なるが、釜山の場合、月8～10万ウォン程度かかる。

表 50 インタビュー対象(概要)

調査当時基準(2012年9月)

居住類型		年齢	性別	野宿経験	居住歴	生活保護受給状態
チョッパン居住者	A	50代後半	男	なし	他地域出身、住宅居住⇒失業、借金により居住地喪失⇒入院(3ヶ月)⇒チョッパン生活(5年2ヶ月程度:他チョッパン3年+現チョッパン2年2ヶ月)	受給
	B	50代半ば	男	なし	釜山出身、元巫俗人。全国を転々。チョッパンへで生活:2年程度(1年半+現チョッパン6ヶ月)	受給
	C	50代後半	男	数日間	釜山出身、刑務所服役(3~4回) 住宅⇒離婚により生活不安⇒チョッパン生活(20年程度)	受給
	D	50代半ば	男	なし (シェルター生活:10年)	他地域出身、10代半ば頃に家族と釜山へ転居。母の死亡後、兄弟との関係悪化により家出⇒シェルタ(10年)⇒シェルタ閉鎖により、チョッパン居住(5年程度)	受給
	E	50代後半	男	なし	他地域出身、遠洋漁船(20年)⇒離婚⇒事故で手術・入院(1年以上)⇒借金⇒チョッパン生活(6年程度)	受給
	F	80代前半	男	なし	他地域出身、10代後半から釜山で生活。自営業(食堂)の失敗・離婚により借金発生⇒チョッパン生活(7年程度)	非受給
	G	50代半ば	男	あり (会社寮⇄野宿⇄チョッパン転々)	他地域出身。10代初に父母死亡。全国転々。会社寮⇄野宿⇄チョッパン転々。釜山のチョッパン生活(1ヶ月)	受給申請し、結果待ち中
	H	40代前半	女	なし	他地域出身、高校中退後、一人で釜山へ転居。住宅生活⇒離婚⇒チョッパン(2~3年程度)	受給
ゴジウオン居住者	I	60代前半	男	なし	釜山出身、未婚、全国転々。 住宅(姉と同居)⇒受給者を受けるため別居(旅人宿居住:6ヶ月程度)⇒ゴジウオン居住(2年)	受給
居候	J	60代前半	男	3年程度	他地域出身、孤児 公務員(5年)⇒離婚⇒会社寮と野宿生活転々(3年)⇒チョッパン居住(1年程度)⇒買上賃貸住宅の家で居候(6ヶ月)	受給
買上賃貸住宅居住者	K	70代半ば	男	なし	他地域出身、自営業(洋服店運営)⇒借金、離婚⇒チョッパン居住(1年)⇒買上賃貸住宅居住(2年)	受給
	L	60代前半	男	2~3年程度	釜山出身、離婚⇒野宿(2~3年)⇒チョッパン(12年)⇒買上賃貸住宅(1年程度)	受給
	M	50代後半	男	4年半	他市出身、住宅⇒失業、借金⇒野宿(4年半程度)⇒チョッパン(4~5年)⇒買上賃貸住宅(3年程度)	受給

彼らがチョッパン生活に至るまでには、様々なストーリーがある。店を経営していた人、会社員だった人、力仕事をしていた人、長期間に亘りホームレス施設で生活した人など、様々な人々が、様々な事情でのチョッパンへ流れ込んできている。彼らが語るチョッパンへの流入のストーリーは次のようである。

1. お金がなく、流れついたところ

まず、他市出身である A さんは、最初、失業による借金やその返還ができなくて、釜山へ逃げて来たという。その後、再び故郷に帰って暮らしたが、脳卒中による治療費などで生活が厳しくなったのにもかかわらず、助けを求めた兄弟に支えてもらえなくて、死ぬために釜山へ来たという。死ぬつもりで来た釜山だが、支援団体のサポートで基礎生活保障受給者になり、チョッパン生活を始めることになった。チョッパン、特に釜山地域のチョッパンに至るまで、A さんは失業、借金、病気、家族関係の断絶などを経験した。そのため、絶望的な状態で自分を助けてくれた支援団体のスタッフが勧めることなら、生きていくため「しはければいけない」と思っている。

◆ (Q. 健康管理はどうかしていますか?)

気を使おうとしているけど(ちゃんとしていない)。俺が病気(脳卒中)になる前までは、散歩が趣味だったんですよ。近いところはわざわざバスとか乗らずに歩いて通ったりしました。だが、病気になってからは、ちょっと歩いただけでも座りたくなったりして、それで最近は運動するのが大変ですよ。(あ、そうなんですか) 入社すると、クレジットカードなんか作ったりするんじゃないですか。俺も当時、5個作りました。路上とかで誘われたりして5個を作ったのですが、会社を辞めて1年くらい、再就職できなかったんです。その時、(仕方なく)貯めといたお金を使い切って、カードで生活してたが、使いすぎてしまって。酒好きだから。(カード借金が)約4千万ウォンくらになっちゃって、どうしても返す能力がなくて、それで逃げ出すように釜山へ来ました。

釜山に来てからは建設現場で働いたんです。だが、現場の係員が代わって、その人と気が合わなくてケンカして、そこ(寮)を出ちゃいました。だが、出てからは行くところがなくてね。それで東区に行くと、「望み館」⁷²というところがありますが、行き場のない人に炊き出ししたり、泊まらせてくれたりするところです。まあ、仕方なくそこで泊まりながら、お金がなくなったら日雇あっせん所(手配師)に行って一日働くと、5万ウォンくらい稼げるから、それなら10日くらいは生活できるよ。

釜山でそういう風に暮らして、また住んでた 00 市へ帰ったんです。だが、ある日、突然

⁷² 望み館は、①雇用支援(就職斡旋、公共勤労支援)、②無料侵食支援(給食支援(平日2食、土日祝日3食提供)、宿泊(14室、200人収容可能)、③専門相談(心理治療、生活相談など)、④医療及び福祉サービスなどを提供する野宿者支援施設である。

体が動けなくなつて。脳卒中だったんです。入院費がなくて退院して(病院から)出たんですが、家賃を払う金もなくて、兄弟に相談したら、みんな自分もお金がないって……。当時は本当に死にたかった。死のうとしても、〇〇市は故郷だから、死ぬ場所もなくて、それで(死のうと)釜山へ来たよ。釜山に来て、釜山駅前に行ったら、炊き出ししてて並んでいたら、知り合いにあつて、その人に事情を話したら、野宿者支援センターのセンター長を紹介してくれたよ。それで、センター長がどこかに連絡して私を入院させたんだよ。心配しないでつて。3ヶ月くらい(俺を)入院させて、その間に私を(基礎生活保障の)受給者にしてくれたよ。それで、「そう、この人が勧めることはしなきゃ」と思って、その人がいったとおりにして、旅人宿を(住民登録上の)住所にして、そこで住み始めました。(Aさん)

Bさんは、ボイラー設置、自営業(飲み屋)や巫俗⁷³人の生活をしていたという。10代半ばから働き始め、全国を転々したが、住んでいた家が道路の建設によってなくなり、釜山へ戻ってきてチョッパンで住み始めたという。つまり、急な居住地喪失によってチョッパンへ入ってきた場合である。普通、韓国では、運勢や四柱を占う占い師とは違って、「巫俗人、ムーダン(無党)」は「神懸かる人」を示しているが、Bさんはそれを「技術」と表現している。つまり、一般的に言われている「神懸かる」ムーダンではなく、生活をのために、「技術」として習ってやっていたという。自営業の失敗とそれによる借金、巫俗人生活による家族との疎遠、離婚によるアルコール依存とそれによる身体の衰弱などを経験しながら、チョッパンまで至った。

◆(Q. ここの生活はどのくらいなってますか?)

ここ(チョッパン)に来て、だいたい2年くらいなりますね。その前は田舎で住んでたよ。義兄が持っていた田舎の空き家を処分すると言って、それを修理して使ったんです。だが、そこに道路ができたせいで釜山(チョッパン)へ移ることになりました。釜山松島うまれで、影島育ちですよ。大韓民国あっちこっち行ってないところがないです。(どんなお仕事をされて全国を回ったんですか?)私が幼い頃に、12歳に習った技術が羊(飼育)。その次に習った技術が 巫俗です。(Q. 巫俗?)うん。ムーダン⁷⁴。それを16年間やってましたよ。坊の生活も1年間して、またその前はイエスを信じました。(Q. 他のお仕事は?)ボイラー(設置など)。その時、俺がこれで働き始めた時に、ボイラーという物が初めて出た頃だったんです。70年代末、80年代初めに。それが初めて出た時に私がボイラー技術を習って、しばらくやりました。簡単に稼いだお金は簡単にouchやうそうで、(稼いだお金で)私が2004年度に安東市(アンドン)で韓食堂もやってて、女5人雇って(スナックのような)飲み屋もしました。だが、

⁷³ 巫俗とは、韓国の民間信仰(シャーマニズム)である。職業的宗教者(多くは女性)が「クッ」と呼ばれる祭儀をつかさどり、激しい歌舞の中で憑依(ひょうい)状態となり神託を宣べる。クッには、個人の幸福を祈ったり、病気の治療、死者の供養、村の神様を祀るなど、様々な種類がある。

⁷⁴ 鬼神に仕えて吉凶を占って、儀式をするのを業とする者をいう。

欲を張って(運営して)、お金が足りなくてキャピタル⁷⁵から貸し出しをしてつかっちゃったて、それで…。

(Q. ご家族は?)妻と離婚したからだいたい5年ほど経ってます。俺、一人だよ。体が痛くて病院に通ってます。離婚したけど、俺が(妻に)何もしてあげなかったけど…その人(妻)に会わなかったら俺も酒に溺れずに、体もこんなに痛くならなかったのに。俺、(健康だったの)で病院自体に行ったことないほどだったの。その人に出会って、俺の身が傷んだのよ。それで酒で心をなぐさめて。妻に手出すと後悔するから、また家財を壊すと俺の金が損だから後悔するし。それで酒で解決しようと、そう思っていつも酒ばかり飲んでたら体がこうなっちゃたんです。今は酒は口にもつけないんだよ。(Bさん)

釜山出身であるCさんは、無許可の仮小屋で育てられ、一般住宅での生活は結婚直後の2~3年しか経験がなく、チョッパン・旅館・旅人宿を転々してきた人である。チョッパン生活をするようになったきっかけを聞くと、ごく当然な理由であるように、「金がないから」とストレートに答えている。住んでいたチョッパンが火事でなくなって、野宿もしたが、顔見知りだったチョッパン主に頼んで後払いすることにして路上からチョッパンへ入ったという。

◆(Q. 旅人宿生活(筆者註: チョッパンのこと。チョッパン居住者たちは自分たちが住んでいるところを「チョッパン」ではなく、むしろ「旅人宿」と呼ぶことが多い。前述したように、旅館、旅人宿がチョッパンへ変化した釜山のチョッパンのほとんどが旅人宿からチョッパンになっている。以下やりとりの中で出てくる旅人宿はチョッパンを指している)をはじめたきっかけとかは…?)

金がないからここに来たの(笑)。決まってるだろう。金があったら他の所に行っただろう。うちの母が生きてた時にも、契約書も許可もないところで住んでた。火事で全部燃えちゃって、その時から旅人宿の生活してる。(中略)だから旅人宿生活が20年も超えてるんだよ。(中略) 流れてきたの。仕事があれば働きに行ったりして。そんなふうに流れてた。他の理由はないよ。この町で生まれて、この町で育ったの。草梁1洞⁷⁶。釜山以外は行ったことがない。(中略)(Q. これまで野宿したことは?)野宿。野宿は何日間はやってた。(他のチョッパンで生活していた時に)知り合いに会って帰ってきたら、同じチョッパンの?ある女がタバコ吸ったために火事を出しちゃって(旅人宿も焼けてしまった)。その女も煙に焼かれて真っ黒になってその旅人宿前に座ってたの(笑)。突然で、お金もないのにどこへ行けるかい。当時は夏だったの。それで釜山駅に行って(路上で)寝た。炊き出してご飯たべて、そこでいたんだ

⁷⁵ 貸付けを専門とする会社を示す。法的にはクレジットカード会社とともに与信専門金融会社と分類される。

⁷⁶ ‘洞’とは、韓国の行政区域上‘区’より狭い単位として、日本の‘町’と類似した単位である。洞事務所(住民センター)は、町役場と類似である。

が、雨の日は体が痛くなってさ。それで、顔くらいは知ってた人(チョッパン主)に、“お金(受給費)が出たら払うから、ここ(チョッパン)で泊まらせてくれ”と頼んで、(野宿からチョッパンに入って)そこで何ヶ月も暮らしたよ。(Cさん)

Dさんは仕事先の寮とシェルターなどを転々してチョッパンに入ってきた人である。仕事があれば寮生活をしたものの、働いた期間よりは祈祷院⁷⁷やシェルターなどで過ごした期間が長い。暮らしていたシェルターの閉鎖により居住地を移すことになりチョッパンへ移ったという。ホームレスのシェルターで長期間暮らしたとの話に、野宿をしたこともあるかと質問したら、路上では寝たことないという。本人はホームレスではなかったことを強調した。

◆(Q. ここの生活はどのくらいなってますか?)

うーん…あそこ(チョッパン)に住んでたのが、だいたい5年?その前はさすらいました。寮生活しながら。力仕事もしてたし、また祈祷院でも暮らしたよ。ここ草梁洞に住んだのは、結構長い。母が亡くなってからすぐ草梁洞に来たな。野宿者シェルター、そこでだいたい10年いたよ。(Q. 野宿したことありますか?) いや。道では寝てないよ! シェルターあるんじゃない! 貧しい人らのシェルター。そっち行って10年いたの。教会でやってるところで俺もボランティアもやったりしたけど、結局その牧師が悪く(運営)するからそこがつぶれて、(住まいを)移したのよ。一緒にいる人が仕事しながら旅人宿に行ったり来たりするから、(その人をみて)そこ(チョッパン)を知ったの。(Dさん)

Eさんは、離婚後、自営業の失敗やケガなどで一文無しになって、入居に必要な保証金⁷⁸がなくてチョッパン以外は入居できなかったと言っている。つまり、金のない貧しい人々が選択できるもっとも安い住まいがチョッパンであったといえる。

◆(Q. ここでの生活はどう始まったんですか?)

話が長いですが、遠洋船の船長をしている叔父がいて、軍隊を出てすぐ叔父に付いて遠洋漁船に約20年程度乗りました。(中略)ある日、いきなり海が嫌になって。私の実家はポハ市の上にあるヨンドクなんです、船舶会社も釜山にあり、釜山をよく知っていました。それで、2002年度のワールドカップの時、市場の横に刺身屋を開いたんですが、(運営に)

⁷⁷ 神様あるいは絶対的存在に、望むことがかなわれるようにお祈りをするため建てられたところである(ブリタニカ百科事典2014)。主に宗教団体が建てて寄付金などで運営しているが、短期または長期間に亘り泊まることができる。

⁷⁸ ここでいう保証金とは、日本の‘敷金’と類似した概念である。しかし、その金額は住宅の水準によって高くなる傾向がある。たとえば、釜山地域のワンルームの場合、家賃の約10～12倍程度する。むろん保証金を上げて家賃を減らすか、または保証金を減らして家賃を上げたりすることは可能なのが、少なくとも300～400百万ウォン以上はかかる。

誰かの助けが必要だったのだけれど、(離婚したので)男一人ではダメだったんです。(中略)
食堂がつぶれてからは、力仕事したんですが、足にけがをして。(その当時、すでに国民健康保険料が払えなくて)保険も使えなくて、少し持ってたお金は入院費で全部使っちゃって、行くところもなく、一般住宅は(保証金が)だいたい1,000万ウォン要るから、何千万ウォンのワンルームみたいなのところには入れる状況じゃなかったから。それでこっち(チョッパン)に来ました。その時、最初にここに来る時には片足に松葉杖ついてました。あっちこっち流されてここまで来てるんです。(Eさん)

Fさんは、若い頃から釜山で生活してきた人である。食堂も運営していたから、ある程度のお金を持っていたが、浮気した妻がお金を盗んで家を出て、生きていく方法も氣力がなくなって、自殺しようとしたという。ところが、幸いに誰かに助けられ自殺せずにチョッパンへ入って来たという。

◆ (Q.釜山出身ですか?)そう。俺が18歳時から釜山で住んでるから。

(Q.釜山でどんなお仕事をされたんですか?)

若い時はいろんな商売もしてみても、食堂もしてみたんだよ。俺、障害者だから、歩きがちょっと不便でね。松葉杖ついて歩く…女(妻)が浮気をして(出た)。その当時は建物一軒くらいは買えるほどのお金があったよ。そのお金、そのまま持っていたら、今40~50億ウォンくらいはなるんだ。そのお金を(妻が)盗んで(浮気した男と)逃げて出た。子供は置いて。子供たちと食べていける方法も、何もなかったよ。部屋さえなかったから。本当にちょうどホームレス生活をするようになったの。冬に、酒をいっぱい飲んで夜12時ごろに、(死ぬつもりで)影島橋の上に立ったが、その日、寒すぎて車だけ通って、ひと通りは全くなかったよ。だが、(橋から)飛び降りようとしたとたん、誰かがちょうど俺をひっ捕らえたの。人通りはまったくなかったのに、珍しかったよ。それで、死ななかった。その時、この町(チョッパン)に入るようになった。(Fさん)

ところが、子どもたちは成長して就職もしているが、連絡はしていないという。Fさんは扶養義務者である子どもがおり、その収入も基礎生活受給の条件に満たさない程度に経済的な水準が低くなく、そのためFさんは受給を受けられていない。ところが、子どもと関係がよくなって子どもからは何の支援も受けていない。子どもからも政府からも支援はなく、現在はチョッパン相談所からの寄付金(月12万ウォン)を貰って生活している。

Gさんは、幼いころ親を亡くして、働くところを求めて、全国を転々した人である。仕事があるときには会社の寮や住み込みの生活をして、仕事がない時には野宿とチョッパン生活を繰り返しながら生きてきたと語っている。主にソウルで野宿生活をして、チョッパンや相談所などの情報はかなり持つ

ているほうである。釜山に来て、自らチョッパン相談所を訪ね、チョッパン相談所の紹介と支援(家賃)で現在のチョッパンで生活している。

◆(Q.生きてきたお話、聞かせていただけますか?)

幼い頃うちの親が亡くなって、俺は(児童)施設にも行ってないで、そのまま各地を転々しました。11歳の頃から。馬車も引いて、靴磨もして。(そこから)逃げ出してきて“ジェグンデ”でもやって見た。(Q. ジェグンデ?) 紙くず拾ったりすることをジェグンデと言ってるよ。それって、言葉では自活、自活勤労(と言うけど)。昔はリヤカーで拾ったりしたよ。それしたんだが、30歳になって、海老捕りの船に乗ったんです。その時は、そんな船を“モントングリ”と呼んでました。船で2年間苦労して、そこを出たよ。だが、また特別にやれることがないから、塩田でも働いて、とにかく苦労したよ。何もないから、さすらって、流れてきてみたらここまで来て。年にとって、今はやれることもないんです。それで、商売をやってみようと、貸し出しを受けようとしたところ、詐欺にあって(信用不良者になって)今は何もできなくて、ここ(チョッパン相談所)を訪ねて来たんです。

(Q. ソウルから釜山に来たワケのようなことは?) 働こうと思って(来た)。ソウルには、知り合いが(いるから)。そんな(野宿)生活すると、知り合いとか、まあ、そうだから。(俺を)知らないところに行きたくて(釜山へ来た)。来て、働こうとしたんだが、腰を痛めて、釜山医療院で手術まで受けましたよ。ソウルでも腰の手術うけて、ここ(釜山)でも受けて、2回も受けました。俺が元気に見えてもそうじゃない。死にそう。(Gさん)

離婚手続きをして別居し、家出をしたHさんは、夫や知り合いのいない、隠れて住めるところを求めてチョッパンへ入ってきたという。チョッパンは「お金がある人はいない」、ただ「匂いがしないように洗って寝泊りする」ところに過ぎないと述べている。

◆(Q.釜山出身でしょうか?)

いいえ。他の地域。釜山は嫁入りして(来た)。釜山に来て11、12年くらいなってます。この町(チョッパンがある街)に来て何年も経ってる。他の町でも何年住んでたよ。人が住んでるところだから、どこに行っても住めるよ。みんな行ったり来たり(転居)してるじゃん。(Q. そうですね。ここ(旅人宿)はどうして来るようになったんですか?) 知り合いの紹介で(知った)。私がこんなところ来たことあるわけがないでしょう。知らなかったよ。(夫と)暮らしたが、ダメだったからこっちに来たの。事情があって、家出してこっちに来たの。身を避けたというか。(Q. ここで生活するのはいかがですか?) こんな生活、火を見るより明らかでしょ。知ってるでしょ。お金がある人は(ここには)いないよ。まあ、匂いがしないように服洗濯して、まあ、寝泊りして、お金(宿泊料)払って。(ここの生活って)それしかない。(Hさん)

以上のように、彼らがチョッパンに至るまで様々なストーリーがある。これを簡単にまとめると以下
 のようである。

図 18 A さんのライフストーリー

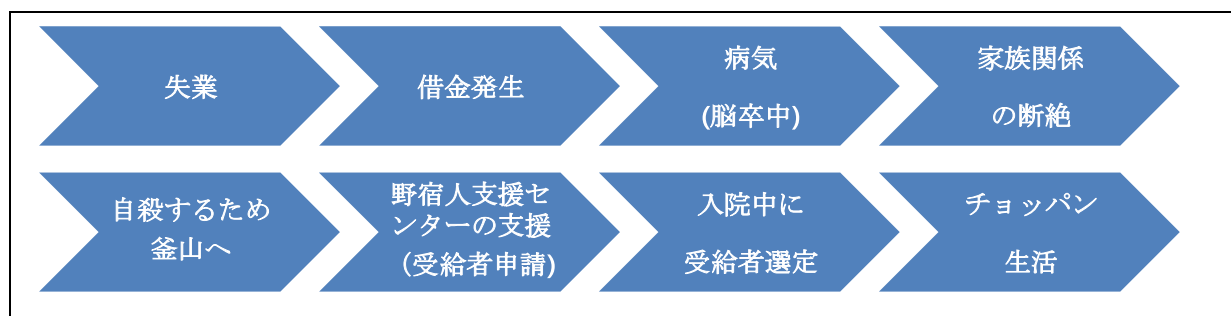


図 19 B さんライフストーリー

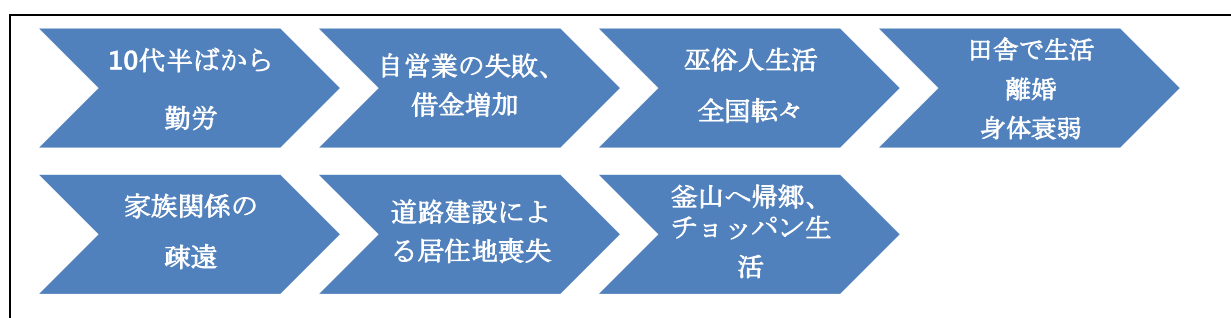


図 20 C さんライフストーリー

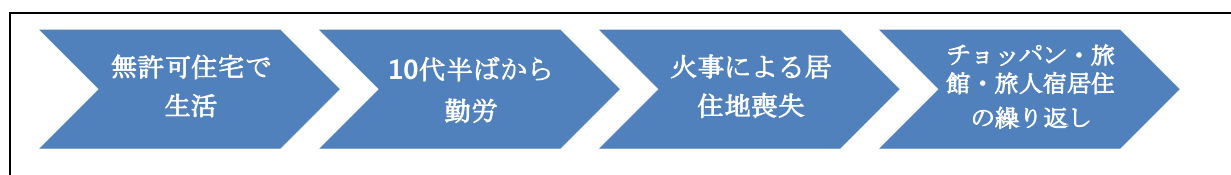


図 21 D さんライフストーリー

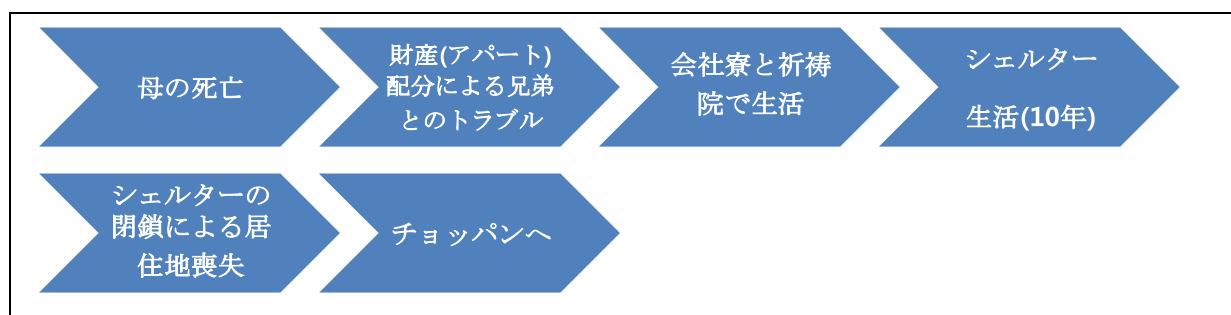


図 22 E さんライフストーリー

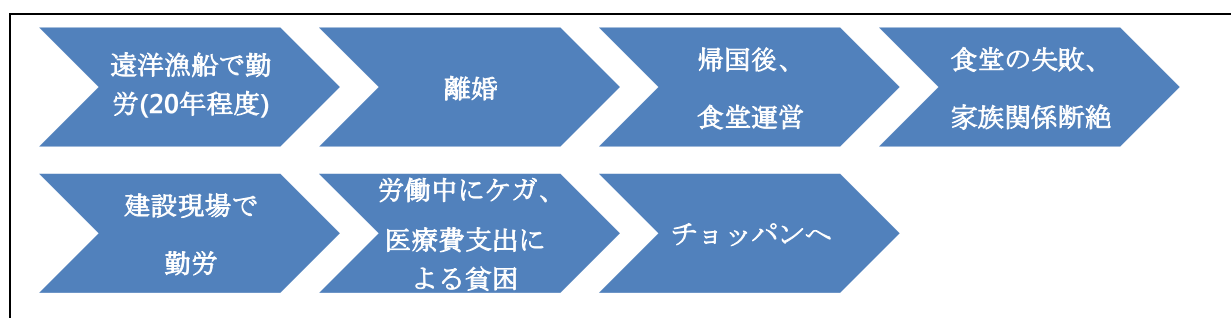


図 23 Fさんライフストーリー

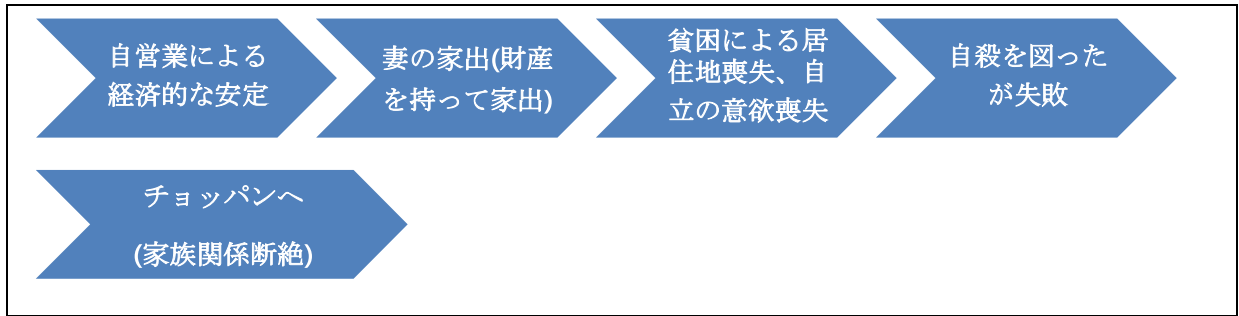


図 24 Gさんライフストーリー

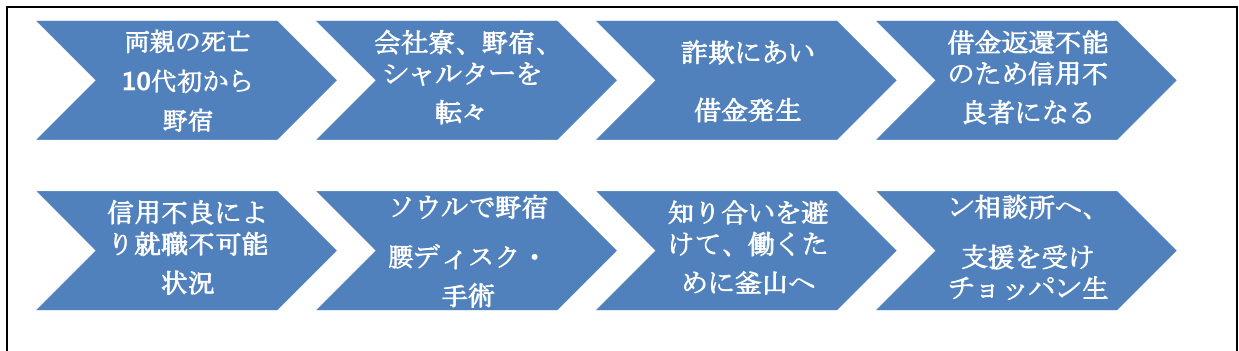


図 25 Hさんライフストーリー



このようにそれぞれの事情があるが、彼らの語りには二つの共通点がある。一つは、チョッパン生活を始めたのは「お金のない」状況だからであるということ、もう一つは、「流れついて」チョッパンへきたという「表現」をしていることである。これは釜山出身者にもいえる。

失業、借金、ケガなどによる貧困と、それによる生きるための意志喪失(Aさん)、道路建設による居住地喪失(Bさん)、火事による居住地喪失(Cさん)、暮らしていたシェルターの閉鎖(Dさん)、医療費支出による貧困(Eさん)、妻の家出による財産、居住地及び生きる意志喪失(Fさん)、孤児のように育てられいつも不安定な居住状態である(Gさん)、離婚するための家出(Hさん)まで、チョッパンへ来るまでのストーリーは様々でも、結局、彼らがチョッパンを選択するしかなかった主な理由は「お金がなかったから」である。路上生活を避け、金のない貧しい人々が選択できる屋根のあるもっとも安い住まいがチョッパンであったといえる。

また「流れついた」ことについて、Bさんは「大韓民国行ってないところがない」と表現し、Dさんは「さすらった」と言っている。また、Cさん、Eさん、Gさんは「流れてきた」と表現している。チョッパン居住者のうち、BさんとCさんは釜山出身であり、それ以外のA、D、E、F、G、Hさんは他の地域出身であるが、韓国の全地域を転々としたにせよ、釜山内で転々としたにせよ、「不安定な住居」を住

み替えたあげくにチョッパンへ来た点は共通している。Eさんが言うように、普通の賃貸住宅を借りるために必要な保証金を用意することができず、今のところ、他のところに引っ越す可能性もないという。

ただし、「野宿」に関しては、「野宿」を何度も経験している人がいる一方で、Fさんのように、釜山市内での生活が崩壊して自殺寸前のところを助けられてチョッパンに至ったような場合では、「野宿者」と一緒にされるのは嫌なようである。その意味でチョッパンは「野宿」よりは上、屋根があって、洗濯も出来、野宿者のような「匂い」がつかないところ、だと意識しているようである。

2. 情報—チョッパンを知った経緯

現在、暮らしているチョッパンをどう知ったのか、その情報の取得の経緯をみると次のようである。まず、泊まっていた旅人宿がいきなり売れてしまい、その部屋を空けなければいけない状況であったAさんは、今まで暮らしていたところが旅人宿であったので、類似した住まいを探すことがそう困難とも思われなかったが、チョッパンは“探し回っても見つからなかった”と語っている。これは散在型で、見えないところに位置している釜山地域のチョッパンの特徴でもあり、旅人宿居住者にも探すことは容易でないことが語られている。探し回っても見えないチョッパンの情報を、Aさんに提供してくれたのは、行き着けの飲み屋のホステスだったそうである。Aさんにとって彼女は、自分の状況を気軽に話せる人で、なおその人は、住むところがないAさんをチョッパンまで案内してくれたという。

◆(Q. 今住んでいるところにはどうやって入ることになりました?)

釜田駅⁷⁹の近くにいた時にその家(旅人宿=チョッパン)が売れて、出ないとだめだったの。その時よく行ってた居酒屋があったの。そこの娘たち(ホステス)が、俺が(基礎生活保障)受給者で、脳卒中が来たと(事情をはなした)。そんなこと全部話したのに、むしろ手伝ってくれてた。俺の状況、隠すこともないから。部屋を移さなきゃってなった時に、俺には部屋が見つからないと言ったらその中の娘の一人が「お兄さん、ここ釜田市場に行ったらチョッパンあったよ」って。どこにあるか行ってみようって、一緒に行ってみたところがこの家なんだよ。それで今までのいのよ。(Aさん)

チョッパン居住者が別のチョッパンへ転居する場合も見付けにくい釜山のチョッパンは、初めてチョッパン生活をしようとした人々にはもっともっと遠いところであったであろう。前述したようにHさんは結婚して釜山に来ているが、夫から離れるため家を出た人である、彼女は「こんなところ」(チョッパン)は自分は来たこともないところであり、知り合いの紹介で来たという。知り合いから聞いてきたのは釜山出身であるBさんも同様である。

⁷⁹ 釜山镇区の釜田洞にある駅で、釜山駅とは異なる。

◆(中略)(Q. そうですね。ここにはどうやって来るようになったんですか?) 知り合いから聞いて(知った)。私がこんなところ来たことあるわけがないでしょう。知らなかったのよ。
(Hさん)

◆(Q. チョッパンはどう知ったんですか?) 知りあいから(聞いた)。年下の人だったんですが、今はどこへ行ったのか分かりません。(Bさん)

ところが、知り合いから聞いたけど、Bさんが言うようにとこかに移ってもどこへ行くのかも知らないほどの薄い関係の知り合いであると思われる。

一方、Gさんのように野宿生活の経験があると、チョッパン相談所の情報をもっており、それを頼りにチョッパン生活を始めている。野宿時代に得ていた情報が、野宿からチョッパンへの移行の踏み台になったようである。しかし、「チョッパン相談所」に来るまでは、支援団体や施設がすぐ見えるソウルと違って、釜山は目立たないと言う。

◆(Q. 住んでいる旅人宿の家賃はいくらくらいするんですか?)

15万ウォン。00旅人宿です。俺がな、野宿してて、ここ(チョッパン相談所)に来て事情を話したの。野宿を続けるわけにはいかないから、部屋をちょっと貸してくださいと。‘チョッパン相談所’と書いてあって、それで話をしたの。そうしたら何日か後に‘来てください’と言われて。それで 6月20日にここで部屋を用意してくれたのよ。家賃15万ウォンも渡された。それがさ、元々はね、冬だけやってくれるようになってるんだよ。ソウルでは冬に寒いところで寝ないように3ヶ月から 5ヶ月までは延長してくれるの。ところでここ(釜山)は夏なのに仕事ができるよう(自活事業に参加させたて)、部屋を用意してくれるね。(Gさん)(Q. そこでの生活はいかかですか?) 楽ですよ。帰るところがあって、体の調子が悪かったら休めるところがあるから。(もうちょっと早く来てたら良かったのに) 知らなかったから。ソウルはすぐ見えるから行って(助けを求めたり)やってたけど、ここは見えないですよ。それで(最初は)‘まあ、釜山は(支援団体が)ないだろうな’と思ってたよ。釜山駅前の広場でテレビみて、11時になったらあそこの下(地下道)に降りて行って寝てしまった。(Gさん)

むろん、目に立たないところにあってよく見えてないとはいえ、知人の家を訪ねるため何回かこの地域を来たEさんは、すでにチョッパンを知っていたという。そのチョッパンの中から、特定のチョッパンに決める場合‘便利な交通と近い市場’と表現される生活の利便性が考慮されることもある

◆(Q. この旅人宿はご本人が選んだんですか?) はい。他のところは見てもなかったし、旅館の看板があるのを見て来ました。最初は、ここから遠くないところに旅人宿というところが

ありますが、そこで何日か泊まりました。(中略)昔、俺と一緒に船(遠洋漁船)に乗った人がこの近くにある小学校の裏側に住んでますよ。それでここ(この町)に何度来ましたが、地下鉄も便利だし、バスもよく通ってて、むしろ釜山駅の前のほう(のチョッパン)に行くよりはここが市場も近くて、こっちへ来ました。(Eさん)

Aさん、Dさん、Gさんのように、突然住む場を失ったときに、釜山ではチョッパンの所在を知ることが容易くないようで、知人などからの情報や紹介で、現在のチョッパンにたどり着いている。なお、チョッパン相談所やシェルターの存在など、居住脆弱層への一定の対策が、チョッパンへの移動を支えており、また全員が基礎生活保障受給者(生活保護受給者)であることが、チョッパン生活を可能にしている。

第三節 現在:チョッパン暮らし

1. 日課と生活圏域

チョッパン居住者たちは一日をどこで、何をしながら過ごしているのだろうか。この節ではその日課と彼らの生活圏域を通して、「チョッパン暮らし」の現在を描いてみたい。この場合、散在型としての釜山市のチョッパンの特徴を念頭においておきたい。

D、Eさんは、朝起きて運動兼、チョッパンの廊下や近所の公園を歩いてからチョッパン相談所や福祉館へ行って一日を過ごしている。

◆(Q. 日課というか、一日はどうすごされていますか?)

早く寝ついても12時くらいですよ。眠れない。朝の祈祷に行かなきゃならないのに早くには起きられないんです。朝の9時半か10時に起きて、目を覚まそうとゴロゴロしてたら11時半で、廊下を何回か行ったり来たりしてて、朝ご飯食べてからここ(相談所)に来るんですよ。ここに来てシャワー浴びて。あそこ(チョッパン)はシャワールームがないんです。トイレでシャワーができるけどさ。

ここでシャワーあびて、将棋や碁やってる人たちを見てたり、テレビ見たり、それで2時半くらいになって帰ったら、またテレビちょっと見て、腰痛いから横になってて、また起きて、その繰り返しです。また、ここでずっと座っていると眠いから、家に帰るんですよ。

(Dさん)

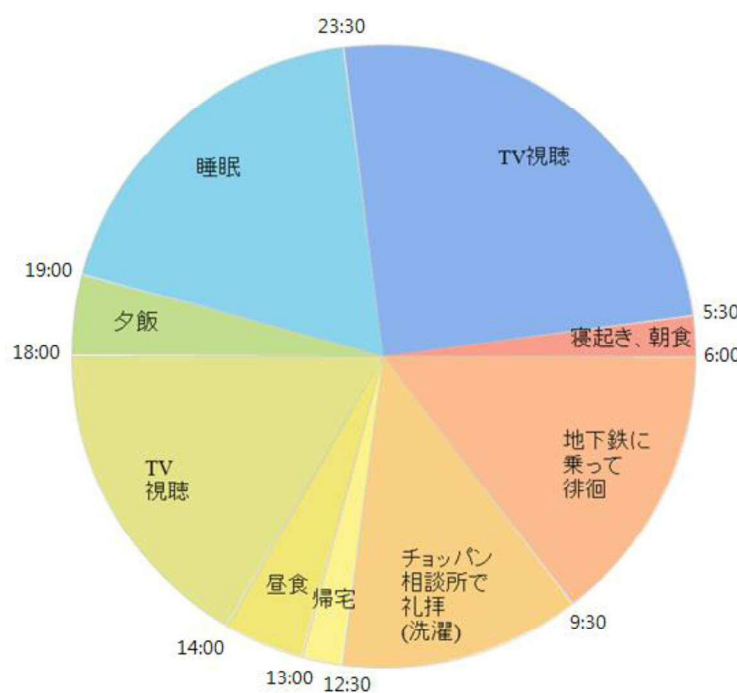
図 26 Dさんの一日



◆(一日はどう過ごされてますか?)

朝は起きたらすぐ前の公園に行ってちょっと歩いて、足が痛くても少しずつ回って来ます。帰ってきたら掃除して、顔洗って、時間になったらだいたい11時20分に福祉館で昼ご飯食べて、理学療法をしてもらって、お風呂の日は風呂入ったり、そうしてから1時くらいに福祉館を出たらもう何もないですよ。テレビ見たり、本読んだりするよ。それが一日の日課です。病院へ行く日だったら病院には欠かさずに行って(笑)。病院は一週間に一回行きます。(Eさん)

図 27 Eさんの一日



Aさんも、チョッパン相談所へ行くことが日課だが、チョッパン相談所の所長が牧師である教会に行く日曜日の大変さを話している。日曜日は教会の礼拝に行くため、早起きしなければならないのに、不眠症のAさんは、起きられるか心配で朝まで寝れずに、拝礼時間まで地下鉄に乗って時間をつぶしてチョッパン相談所に向かうという。

◆(Q. 一日はどう過ごされてますか?)

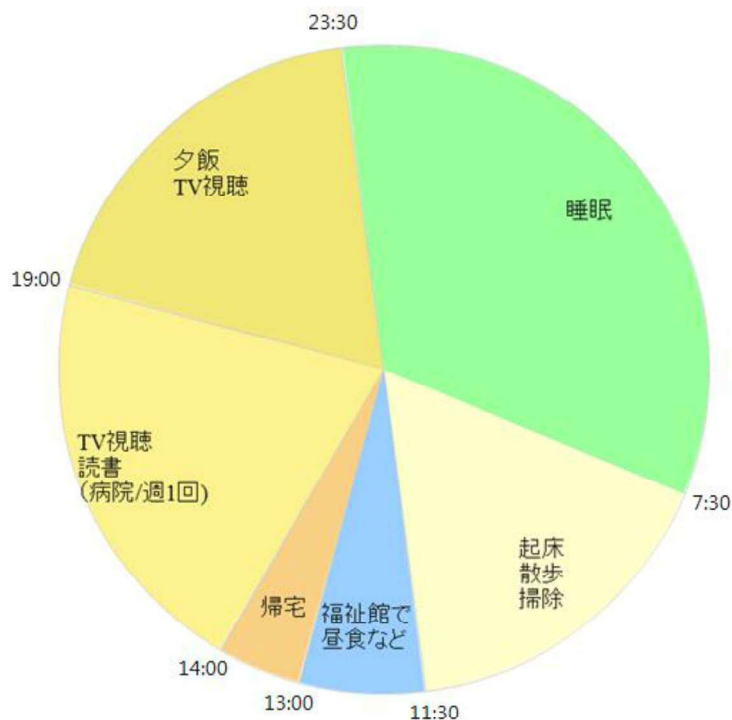
俺、不眠症があって夜眠れないのよ。普段目がいつも真っ赤になっているの。今もそうだろう。眠れないから。でもこれは病気なんかじゃないよ。普通昼寝しちゃだめなんだけど、日と夜が逆になっているの。所長、牧師がいるこの教会に通ってから長くなるけど、一番困るのが日曜日だよ。日曜日にここに来なくちゃいかんのに、一晩中全然寝なくて…もし寝

ちやって遅刻してあれだから心配でわざと寝ないまま朝の6時に出て地下鉄乗って海雲臺やら梁山やらくるくる回って…「時間つぶす」の。リュック背負って、洗濯物入れて…日曜日の礼拜の間に干したら乾くから。それだから持って来たりしてるの。(中略) 眠れなくて…眠れる日がめったにないのよ。一昨日も一瞬も寝てなくて…昨日は福祉館で昼食を食べて相談所に来たけど、水曜日の夕方に礼拜があるのに5時前に夕飯をここで食べてる時に、眠すぎて、目は真っ赤だし…それで帰ってすぐ寝たの。ずいぶん寝た。よく寝れたと思って目覚めて時計を見たら、夜の12時にもなってない。その時からまた眠れなかったの。

睡眠薬はずっと飲んでたよ。以前には1粒飲んでも良く寝たのに、今は2粒飲んでも眠くならない。ある時は3粒飲んだりもするよ。3粒くらい飲むと、まあ、夢の中をさまよう。(飲まないように)堪えてみている。今、約6ヵ月ぐらい飲んでない。だが、毎日飲まないわけではないんだ。何かあったりすると前日に十分寝ないといけなから、飲む時もある。その他には、昼はいつも(何の用もなく)遊ぶんだから‘昼に眠れば良い’と思って、わざと薬を飲まない。なるべく飲まないように、気を使っています。(Aさん)

Aさんの日曜日を図で現すと、以下のようなものである。眠ってしまっ教会に行けないかと思って、夜を明かしてしまうAさんの週末は、信仰というより、チョッパン相談所の所長が牧師であることが大きな意味も持っていると思われる。

図 28 A さんの一日(日曜日)



不眠症の問題はともあれ、A、D、Eさんの日課の中心はチョッパン相談所か福祉館、病院である。つまり、シャワー、食事、洗濯などを無料で利用できる福祉サービスの場所と医療サービスを中心に、彼らの日課は組み立てられている。チョッパン相談所や福祉館は、居住空間であるチョッパンでは自炊が難しい食事⁸⁰の無料提供があり、洗濯などの日常的なことを規則的に行う場所でもあり、ぼんやりテレビなどで「時間をつぶす」場所でもある。

それらの場所と釜山市に散らばっているそれぞれのチョッパンは、必ずしも距離的に近いとはかぎらないが、障害者・高齢者が多いため無料で鉄道を利用するか、または歩いて移動している。これらの歩きは「運動」として捉えられ、あるいはGさんが語っているようにただ「時間をつぶす」手段になったりもする。

◆ (Q. ほぼ毎日チョッパン相談所に来てるとおっしゃったんですが、住んでいるチョッパンがこの近所だったら良かったとは思わないですか?)

いや、大丈夫だよ。運動しなきゃ。あんまり時間かからないよ。ゆっくり歩いたら40分ぐらいかかるけど、急いで近道で来れば30分？ 歩いて行ってもそんなかからないの。他の人たちはもっと遠いところまで歩いて通ってるんだよ。ここからチャガルチ市場、それともヘウンデ海水浴場まで歩いて通ってるの。ゆっくり、休んだり…まあ時間つぶしで。そんなところに行ったらカラオケ大会とかそういうのやってるの見ながら過ごしたりするんですよ。 時間になったら帰ってきてご飯食べて… 本当に具合が悪い時には駅員たちが見ないうちに(ただ乗りで)こっそりすり抜けて来る。(Gさん)

他方で、C、F、Hさんの一日は、寝る時間、起きる時間、どこに行って、何をするかは、その日その日の、本人がしたいことによって変わる。チョッパン相談所や福祉館が日課の中心にあるのではなく、近くのデパートに行ってウィンドウショッピングをしながら一日を過ごしたり、以前に住んでいたところで、友人とお酒を飲んだり、花札をやって過ごしているという。

◆寝たかったら寝て、眠れなかったらテレビ見たりする。(中略)相談所は呼ばれたら行く。扇風機くれると貰いに行ったり。あそこにあるじゃん。(チョッパン相談所に行ってるのは)結構長いです。公園に座っていたが、“おじいさん、私と相談所に行きましょう” って。お金とか、何かもくれるって。それで(相談所のスタッフに)付いて行って、(相談所と繋がっている)(Cさん)

⁸⁰ 調理できる台所がなくて、狭い部屋のなかで簡単に調理し、食事を済ますことが一般できである。ドンイドンチョッパン地域の場合はこのようなチョッパンの施設上の問題できちんと食事ができなくてチョッパン居住者たちの健康に悪影響を及ぼしていると述べている。

◆仕事があったら出かけるけど、なかったら今のように近所で遊んでいるよ。お腹がすいたら帰って一口食べてたりする。(主にどこで過ごしていますか?)招いでいるところはないけど、行く所は多いよ。私は家(チョッパン)にはいられない。息苦しくて。どこへ行っても遊べる所は多いよ。近くのデパートに行ってウィンドウショッピングしながら遊んだりするのよ。必ず何か買わなきゃいけないとのルールはないんじゃない?デパートにいったらうろうろするのよ。私の運動だと思って。足の運動にもなるからね。(Q. チョッパン相談所はよく行ってますか?)またにあげるものがあたら電話が掛ってくるよ。それで、取りに行ったりする。(Hさん)

Fさんの場合は、チョッパンに来る前の知り合いたちがよく集まった場所に行って時間を過ごして帰ってきたりするが、生活の差が出てからは、行きづらくなっていると語っている。知り合いとの関係においては、貧しくなった自分の立場が嫌で誰々とは付き合わないという。また通っている病院で知り合いに偶然会うことさえ気まずいと言うほどであるが、病院を代える気はないという。高齢者であるため、どうせ交通費は無料なので移動することは問題なく、基礎生活保障(生活保護)受給者ではないため診療費はどこの病院を行っても自分が払う金額は同じなので、自分の体に詳しい病院を変える必要はないという。前述したように、Fさんは扶養義務者である子どもがいるなど、基礎生活受給の条件に満たさなくて受給を受けられなく、何の支援もなく、現在はチョッパン相談所からの寄付金(月12万ウォン)を貰って生活している。

◆(Q. 主にどこで時間を過ごしてるんでしょうか?)

西面に行ったら座って遊べる所が多いよ。そっち行って花札をするんだけど、行って遊んで酒も一杯飲んで帰ったりするさ。面白いことなんかないよ。何があるのよ。(中略)西面には知り合いの人が来て一杯飲みに行こうってなったらいくさ。金持ってる人たちだから。昔、俺もお金あった時に俺がよく面倒見てあげてた人たちなのよ。その人たちが飲もうと言ったら飲む。(この町の方々ですか?)違う。西面で俺が30年以上すんでたから。そこの人たち。

妻奪われたやつだと言ってうわさするからいつも朝早く出て夜遅く帰って来てたけど、それで子供たちの勉強もまともにさせられなくて…(中略)今は友達ともレベルの差があるからうまくいかないのよ。昔は俺のほうがもっと金持ってたのに。

調子が悪くて西面に通った病院に行ったが、久々に知り合いに会って食事に誘われたの。でも俺が気まずくて。

福祉館みたいなどころにも気楽にいけないの。居心地悪いから、そこも嫌。今日も西面の病院に行って来たけど、(Q. 近所の病院には行かないですか?)行かない。自分のことをよく知ってる病院のほうがいい。65歳越えて交通費も要らないから通った病院に行く。(Q. 他には行くところは?)チョッパン相談所に3~4日おきに行ってる。相談所から寄

付金が月に12万ウォン出てるから、それで家賃出してる。(Fさん)

一日をどう過ごしているのか、という問いに、Bさんは食事をどうするのかを中心に語っている。彼にとって‘日課’の大事なことは、食べて生きていくことである。彼は週末以外はほぼ毎日をチョッパン相談所で過ごしている。彼にとってチョッパン相談所は最も楽に一日が過ごせる‘避身处’⁸¹でもあり、‘口に糊する’ためおかずを貰いに来るところでもある。

口に糊するため、老人・障害者福祉館に無料給食利用の申請をしておいたけど、何ヶ月経っても可否に関する連絡もなく、チョッパン相談所からのおかず貰って暮らしている。つまり、福祉館の無料給食で食事をしたくても、許可の連絡がなくて‘仕方なく’チョッパン内で食事をすましていると、以下のように話してくれた。

◆ (Q. 一日はどう過ごされていますか?)

ご飯は自分で作って(食べてます)。おかずはここ(チョッパン相談所)で、水曜日の礼拝に参加する人には、礼拝が終わったらキムチくれて、そうじゃない人は木曜日の朝の9時10分になるとキムチを配ってあげます。俺はいつも(礼拝に)参加するから、(水曜日に)貰って帰ります。そうしてますよ。何とかして口に糊しなければならないじゃん。

土日は職員さんやここ(相談所)が休むから(来れないけど)。ここが一番安全な避身处だよ。避身处(笑)。相談所の職員の方が、暖かく相手してくれるから俺もだいぶ良い人になったよ(笑)。

(Q. 他によく行く機関とかありますか?) チョッパン相談所によく来てます。土日以外は来る(笑)。周りに老人・障害者福祉館があって、そっちに行って(事情を)話したけど、もう4ヶ月が過ぎてるのに、なんの連絡もないです。無料給食券がいつからできるのか、何も言わずに。(何の連絡もないのは)ダメじゃないか、もう一度訴えてみたいです。(Bさん)

Bさんのように、食事をどうするのかは彼らにとって、むろんきわめて重要なことであるので、それに関して、もう少し詳しくみていきたい。

まず、上のBさんのように、ご飯は自分でチョッパンで炊いて食べているがおかずは相談所等でもらうという場合から、おかずも市場で調達する人もいる。たとえば、Cさんの場合は以下のようである。

◆ (Q. お食事はどうしてるんですか?)

炊飯機あるから炊いて食べる。おかずなんかは市場で買って。キムチやら何やら売ってる

⁸¹ 後で述べる「人付き合い」のところから、Bさんはチョッパン居住者同士を避け、チョッパンから出かけ、相談所で一日を過ごしていることが分かる。つまり、ここで言う‘避身’は‘チョッパン居住者同士からの避身を意味している。

じゃん。知り合いが多いから 1 千ウォンで“豚肉ちょっとくれ”という(笑)。すると、(俺のことが)うるさくてあげるって(笑)。“おじさんは、なんで毎日 1 千ウォンだけ持ってて、くれと言うの”と文句言う。すると“店壊す前に肉切ってくれ”と言うと、くれる(笑)。その店の旦那と知り合いだから。仲いいからそうするんだよ。(Q. 福祉館のようなところで無料給食もやってるそうですが)ご飯貰い食いにそっちまで行くのは…。俺の米で自分で炊いたらいいじゃん。(洞事務所から)いい米くれるんだよ。俺の月給から抜いて、2 ヶ月ごとに 20kg の米を持ってきてくれるの。俺の月給から抜いて(笑)。受給者の月給から 2 万ウォンを抜くんじゃ(笑)。(C さん)

C さんは、基礎生活保障受給者であることや、その地域の顔なじみの商人たちとの関係を十分活用して食事をしている。C さんの言っている「いい米くれるんだよ」というのは、政府米割引支援事業による支援のことを指している。これは、糧穀管理法第 9 条(政府管理糧穀の販売)に基づき、基礎生活保障受給者および次上位階層に月 10Kg(1 人基準)の政府米を 50%割引価格で供給することである。たとえば、2013 年産(20Kg)の価格は農林部の告示によって 43,040 ウォンと決まったが、本人が 21,500 ウォンを負担すれば政府支援 21,540 ウォンが加わり、購入できる。人によっては質の低い米だと利用をしてない人もいるが、低額で購入できるので多くの基礎生活保障受給者が利用している。政府米(10 k g 基準)は、全国の供給事業で一括して申請を受け、保健福祉部は毎月、農林部から一括購入して 20 日～毎月末日の間に申請者へ配達することになっている(保健福祉部 2014:248)⁸²。20kg ずつ購入している C さんの場合は 2 ヶ月に 1 回配達されることになる。

この‘政府米割引支援事業’を通じて C さんは安く米を買っている。これに加えて、20 年も超える長いチョッパン生活で常に利用している近所の市場の商人はもう顔なじみになっており、それを活用して食生活を解決している。このインタビューの中で C さんは、基礎生活保障受給費の「生計費」を毎月定期的に出てくる‘給料’と表現しているが、これも興味深い表現である。

同じく H さんもチョッパン内で調理して食べている。前述したように、チョッパンは調理施設や設備がないのが普通であり、冷蔵庫も共用で使っているところが多い。H さんも類似したチョッパンで暮らしており、チョッパン内でバーナーで調理しているが、冷蔵庫は共用ではなく中古で買ってこっそり部屋内で置いて使っているという。どうせチョッパンの家賃に含まれている電気料、水道料なので、気を使わずに使っているという。

◆(Q. お食事はどうされていますか?)

そこで作って食べてるよ。ちっちゃなバーナーで。中古の冷蔵庫、5～6 万ウォンする冷蔵庫あるから。(冷蔵庫? 他のところより設備はよく出来てますね?) 主人(チョッパン主)が知

⁸² 保健福祉部(2014)『2014年度国民基礎生活保護事業案内』

らないように、こっそり使ってる。電気か、水か(こっそり)がががん使ってる。(Hさん)

Dさんもチョッパン内で自炊しているが、その理由として、自分が相談所でおかずなどを貰うと、その分誰かがも貰えなくなるからと述べている。だがDさんが言いたいのは、実は「現物」より「現金」給付を増やすべきだという、給付方法に関わることなのである。Dさんの説明は次のようである。

◆(Q. お買い物はどうなさってますか?)

そこ(チョッパン)から市場まで1分しかかからないです。何かなかったら、出かける際に覚えといて、帰りに買ってきます。(中略)他の人たちは、どっか行けば何かが貰えると言うけど、俺は行きたくないですよ。貰っても来ることはできるけど、例えば、俺がおかずを持って来ておかずがなくなったら、後で来た人は貰えないから、それを思うと気が重くなるよ。もちろん俺も貰って帰ると、生活費も節約できるし(良いけど)、それでも‘俺が窮したほうがましだ’と思います。

(Q. でも、Cさん、ご本人も要るのに…。足りない分はもっと増やす必要があるとか、そういうふうに思われてたことはないですか?) でも、俺もこの間知ったんだけど、洞事務所に行ったら文化バウチャーカードがあるそうですよ。そんなもんくれないで、そういうのを全部集めて受給者たちにたった10万ウォンでも現金でくれれば、生活がもうちょっとよくなるんじゃないかと思うんです。なんでそんな無駄なことをするんでしょうか。映画カードあげても、映画見に行く人がいるか。そうじゃないんですよ。その(映画)カードは他のところに持って行って、現金に換えるんですよ。5万ウォンもの(映画カード)なら1万ウォンは手数料で取って4万ウォンを現金に換えるそうです。俺も、そんな人たちがみたいにそうすることができんですよ。(俺ももう)やってるし。だから、そうじゃなくて受給費をもっとくれればいいんじゃないかなと思うよ。政治をする人たちは貧しい人を対象に政治しているわけではなく、お金持ってる人に合わせて政治をしてるんですよ。またおかずをあげるじゃないですか。冬はキムチをあげるし。だが、貰ったそのキムチ、全部食べるのか。そうじゃないんです。腐って捨ててるんです。‘食べれなかったら捨てれば良い’と簡単に考える人が10人のうち、5~6人はそうです。(Dさん)

現物で支援している総菜は言うまでもなく、バウチャーカードのようなものも、結局自分たちは換金してしまうのだから、はじめから現金で支援したほうが受給者には役に立つという意見である。なお、総菜は食べずに捨てる人も多いので、そのもったいない予算を受給者が必要な方式(現金)で支給したほうが良いのに、政治家たちは、お金のない、つまり政治的な力のない(powerless)受給者のニーズは見えていないと、サービス支援方式について不満を現している。

ここでDさんがいう、文化バウチャーカード事業は、基礎生活保障受給者および次上位階層などの、

経済的、社会的、地理的な困難で、文化・芸術を生活の中で享受することが難しい疎外階層が公演・展示・映画などの観覧、図書購入、国内旅行とスポーツの観覧を利用することができるカードを支援することである。これは、中央政府の文化体育観光部、韓国文化芸術委員会、17の広域市・都が主催し、企画財政部の宝くじ委員会の後援を受け、宝くじ基金・観光振興開発基金・競輪競艇公益事業の積立金などで運営されている。年間一人当たり5万ウォンを支援しているが、世帯別の最大支援金額は10万ウォンである。

このような考えがある一方で、すでにふれたように、A、E、F、Gさんは福祉館や相談所の無料給食や釜山駅前の炊き出しで食事をしている。ところが、Eさんは、無料で利用していた福祉館の食堂が有料化され、生活費を減らすため、仕方なく、チョッパン内で自炊することが多くなったという。

◆ (Q. 障害者だとおっしゃったんですが、障害者福祉館も利用してるんですか?)

今年の春までは(障害者福祉館で)無料で食事をしたが、そこにあまりにも人が多く来て、景気も良くなくて。一般は1,500ウォンを払って(食事して)、障害者は去年まではお金を払わなかったけど、今は500ウォン払うことになりました。(Q. 料理もなさったり?) できれば(材料を)買って来て料理して食べる場合が多いです。なるべく買って食べないように(自炊しています)。(Eさん)

反面、Aさんは敬老食堂で無料給食が利用できるが、そこまで行くのが大変で利用していないという。代わりに、おかずの支援を受けており、近くに市場もあって食事は作って食べているが、きちんとhした食事を作っているわけではない。他の人は食べないような物を‘好きだから’と言って買ってきて、大雑把に作って食べているという。そういう話は‘恥ずかしくて’他所ではできない、と付け加えている。

◆ (Q. お食事はどうされていますか?)

お昼は(鎮区老人・障害者福祉館の敬老食堂で)無料で食べるよ。朝食と夕飯はちっちゃいバーナーで、部屋で作って食べますよ。最初、部屋(チョッパン)に来た時に相談所で一個くれたんだよ。それで、もう5~6年目(使ってる)かな。壊れてもないんだよ(笑)。それでご飯たいて食べる。福祉館には(お昼食に)毎日行くわけじゃなく、そこ(福祉館)の看護師が俺の事情をよく伝えてくれて、おかずを週に1回くれるの。毎週の金曜日におかずをもらいに(福祉館に)行くの。原則は、おかずを貰う人はお昼が食べられないって。だが、俺は、看護師が面倒をみてくれて週2~3回はお昼食べても良いつて。しかし、冬は寒くて行きたくないし、夏は暑くて行きたくなくて、金曜日だけ(敬老食堂で食べる)。おかずをもらうついでに(お昼も)食べてくるの。たまに家に食べるもんがなかったら行くときもあるし。(敬老食堂に)週2~3回行く時もあるけど、普段は金曜日だけ、週1回行ってるよ。

(Q. 惣菜とか買い物はどこで?) 家(チョッパン)が釜田市場⁸³の入口にあるよ。そのすぐ前。だから買い物はすごく便利だよ。俺は味噌汁が好きで、みそだけ買ってきて大まかに作って食べたりする。キムチも、他の人には食べられないほどの酸っぱいものが好きだから、そんなもんでご飯に混ぜて食べる。(チョッパンに調理できる)施設がないけど(作って食べる)。(こんな話)恥ずかしくて他のところでは話せないけど…。(A さん)

買って食べるといっても、買えるものは限られているし、1 日 3 食をとることも難しい現実には、向き合っているのは G さんも同じである。まだ 50 代である G さんは老人福祉館の敬老食堂も利用できず、障害者でもないため障害者福祉館の無料給食も利用できない。なお、ソウルから釜山に来たばかりで、基礎生活受給の申請もしたばかりなので、買い物や調理をして食べるどころではない。そのため、ホームレス向けの炊き出しで食事をしているが、日 1 食(昼食)を提供している福祉館とは違って、炊き出しは夕食まで 2 食を提供しているので、そこで一日の食事をとっているそうである。ところが、C さんの場合、炊き出しをしている団体、特に宗教団体に強い不信感を持っている。

◆ (Q. 食事はどうされていますか?)

買って食べる(経済的な)状況じゃないですよ。昼と夕飯、1 日 2 食だけでも良いです。鎮駅前で炊き出しをやってるから、それで(すませている)。昼飯と夕飯、それぞれ違う団体が来てやってる。だが、宗教団体が‘助けてあげる’と言ってるけど、(宗教団体は)全部泥棒なんですよ。1 飯あげて、寄付金で土地や家を買ったりするのよ。そうやっちゃいけないのに。一飯あげて、その写真撮って、あっちこちに広報したりしますよ。(宗教団体は)みんな泥棒ですよ。助けてあげるなんって、ウソです。この人たち(チョッパン居住者)に、宗教団体が何をやってくれているのか、聞いてみてください。たまに果物 1 個くらいくれて、顔を立てるんですよ。それも、ある時は腐ったものをくれるたりします。どこでも同じですよ。ソウルでもどこでも。あいつらは俺たちを助けてあげてるって。写真だけで。(団体に)泥棒だと言うと、(宗教団体も)口もきけないです。宗教人なんか、くそ泥棒ですよ。ソウル駅前の炊き出しやっているとところがあるんですが、ある冬に、俺たちが鉄パイプで全部ぶっ壊して、破りました。(そうしても)誰がやったのか知らないから。(中略)

100 名に炊き出しやっても、200 名に膨らまして、(寄付金を騙したり)みんなペテン師なんです。俺がソウルの教会で警備員や執事をやったことがあって、教会なんか信じないよ。(G さん)

鎮区のチョッパンに住んでいる F さんは、東区と鎮区の両方の福祉館の敬老食堂を利用しているという。受給者ではないため敬老食堂を無料で利用することはその福祉館の事情によって決まるが、近

⁸³ 釜田(ブジョン)市場は、釜山のホットスポットである「西面」東区チョッパン相談所がある

くにある鎮区の福祉館の場合は有料であり、東区の福祉館の場合は無料で利用できる。ところが、無料で利用できる、歩くことが大変であり東区にある福祉館は利用していないという。

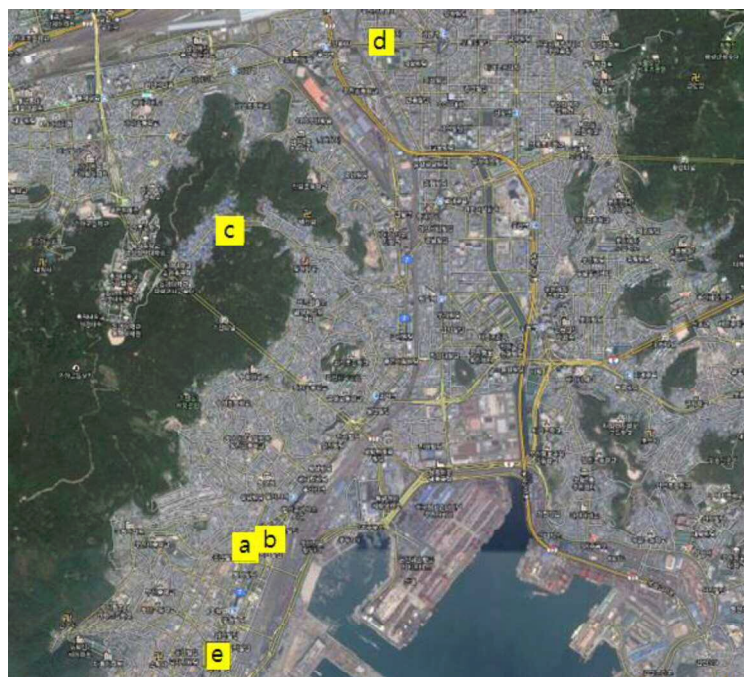
◆ (Q. お買い物はどうされてますか?) 買い物することも別にないよ。家で食べる場合があまりないから。夕飯はほとんど食べない。朝は少し食べて、昼は買って食ったりする。

(Q. 敬老食堂で?) 福祉館で 1,500 ウォン払って食べてる。東区と鎮区の福祉館、両方行ったり来たりするけど、どっちも 1,500 ウォンだよ。ここ(東区)は総合福祉館があるの。あそこ(鎮区)は俺が‘無料給食’になってるの。でも、お昼食べにあそこまで行かない。足も痛いから行けないんだよ。東口福祉館は 1,500 ウォン。隣にあるボンセン病院でやってるところも 1,500 ウォン。(F さん)

ところが、前述した‘日課’からみた F さんは“65 歳越えて交通費も要らないから”と言い、鎮区である西面に行って時間をつぶしたり、病院にいたりしていると言っている。つまり、知り合いが多い鎮区は、敬老食堂が無料で利用できるでもわざと避けているのかもしれない。

以上のような、彼らの日課のうち、日課を詳しく語ってくれた F さんと A さんのの生活圏を図で現すと次のようである。まず、F さんは主に、チョッパン相談所や 東区総合社会福祉館(敬老食堂)、西面ロータリー(診療、時間つぶし)であり、それを a、b、c のように図に表した。

図 29 F さんの主な生活圏



- ・ a : F さんの自宅 (チョッパン) 、
- ・ b : 東区チョッパン相談所
- ・ c : 東区総合社会福祉館 (F さんが有料で利用している敬老食堂)
- ・ d : 西面ロータリー近隣 (F さんが時間をつぶしたり、病院診療を受けに通っているところ)
- ・ e : チョリャン市場

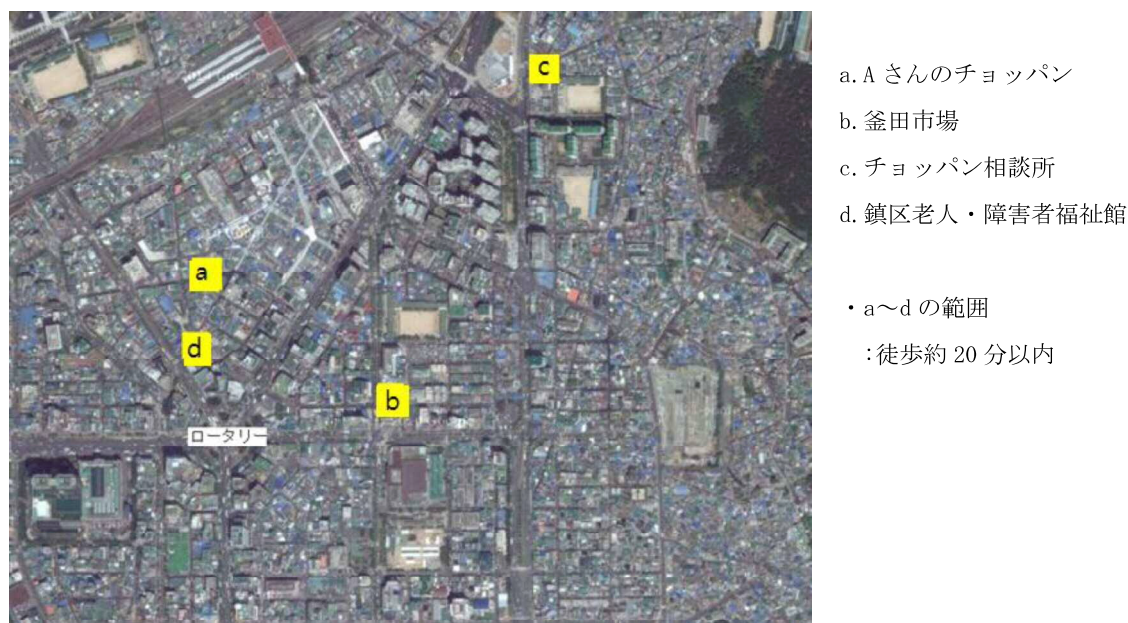
- ・ a⇔b : 約 5 分程度 (徒歩)
- ・ a⇔c : 約 25~30 分程度 (バス+徒歩)
- ・ a⇔d : 約 35~40 分程度 (バス+徒歩)
- ・ a⇔e : 約 15~20 分程度 (バス+徒歩)
- ・ c⇔d : 約 30~35 分程度 (バス+徒歩)

グーグルの衛星地図上に該当施設を示したもの

Fさんが主に利用している各場所間の所要時間は図29の左側に示したようであり、二つの区にわたり形成されている。Gさん、HさんもFさんのようにいくつかの区にわたり、やや広い生活圏が形成されている。

次はAさんの場合であるが、鎮区チョッパン相談所(日曜日は礼拝)や鎮区老人・障害者福祉館(敬老食堂)、市場(釜田市場)を中心としている。a～dの範囲は徒歩20～25分程度で、Fさんよりはやや狭い生活圏が形成されている。

図 30 Aさんの主な生活圏



グーグルの衛星地図上に該当施設を示したもの

日課に関する語りからDさん、EさんもAさんのようにチョッパン相談所を中心にやや狭い生活圏で暮らしていると推測される。

ところで、彼らのインタビューからは、“気が楽ではない場所”、たとえば、Fさんが“福祉館は楽ではない”と言うように、行きづらい特定の場所はあるが、行きづらい町のような表現は見られない。昔の知り合いに出会いたくないので、いきづらい方面はあるものの、昔から通っている病院は代えたくないともいう。こうして、知人に会いたくはないが、合うかもしれない場所も含めて、Fさんのように二つの区にまたがって、日々の暮らしが組み立てられている場合もあるし、Aさんたちのように、たまたまチョッパン相談所や福祉館、市場が近くにあり、それを中心に比較的狭い生活圏で暮らしている場合がある。

生活圏の広い狭いに関わらず、彼らの日課は、生活費を切り詰めるため、つまり「生計のため」、チョッパン相談所、福祉館(敬老食堂)のような福祉サービス機関への行き来が中軸になっており、ここに病院や市場が加わるという構成である。他方で、C、F、Hさんは、寝る時間、起きる時間、どこに

行って、何をするかは、その日その日の、本人がしたいことによって変わると述べていたが、Fさんの生活圏でもわかるように、やはり相談所や病院が主要な構成要素となっている。有料の福祉会館での食事から「自炊」に切り替えざるを得なかったり、ある程度市場の商人たちとの関係がある場合は、チョッパンと市場との行き来、チョッパンでのテレビ、炊き出しに並ぶこと、週に1～2回の福祉会館や相談所へ足を運ぶことといった構成になる。

生活圏内での行き来は、Gさんたちのように生活圏が広い場合には、「運動」と称して、わざと歩いたり、Fさんのように無料の地下鉄に乗って回ったりする。疲れれば、駅員の目を盗んで無賃乗車もする(Gさん)。だが、チョッパン相談所の廊下ですら「運動」するところと表現されるように(Eさん)、歩くこと、移動することを、そのように位置づけるしかないのかもしれない。また、この生活圏域の中での移動は、「時間つぶし」と誰もが言うように、食べたり、寝たり、洗濯したり、教会に行ったりする間の、持て余した時間の消費をも意味している。公園を歩いたり、デパートや市場を歩き回る、海辺のイベントをぼんやり眺めて帰る、など、さまざまに表現された「時間つぶし」のために、彼らはせつせと歩き回るのである。

もちろん、彼らがもっともよく通っている「チョッパン相談所」は、「生計」のため何かを貰いに行くところでもあり、「時間つぶし」のため行くところでもあり、また彼らが、他の人から避難して気楽に過ごせる安息所だともいえる。

2. 基礎生活保護者であること－仕事と健康

ほとんどが基礎生活保障受給者(生活保護受給者)である彼らは、この法律が認める「勤労ができない人」である。交通事故、あるいは仕事中にけがをするなど、健康状態が悪くて働けない場合が多い。特別な技術を持ってない彼らにとって、自分の肉体だけが主な収入源であったと言っても過言ではないだろう。Cさんの表現のように技術でもあれば誰か雇ってくれるかもしれないが、技術もなく、年取った彼らが雇用されるのは難しい。こうして、自分を雇うところはなく、健康上の理由で働けない、ということが強調される。自分は「目立たないけど働けない」と述べるのは、「働ける人」とみられてしまうことが不安なためであろうか。反面で、同じ環境にいる他の人は働ける人が多いという表現もされている。

まず、Aさん・Hさんは、目に立たないけど働けないことや身体が弱って働けないことを強調している。

◆(Q. お仕事は?)元々仕事はしないの。基礎受給者だから。働けなくて、また障がい持ちなんだから。昔に中風(脳卒中)で倒れて、最初はかなり悪かった。左側と足に力がなくて杖ついてて、言葉もまともに出なく、手も震えたりしたの。今はそんなには目立たないけど(仕事はできない)。(Aさん)

◆ (Q. お友達が多いですか?) 全部私より年上のお姉さんたちだよ。ここ(屋台)⁸⁴はたまにコーヒ一杯飲みにきてる。(お金がなくてもこのくらいの)コーヒ一杯くらいは私も飲んでる。コーヒ一杯飲んで、家(チョッパン)に帰る。体が痛くて働けないよ。糖尿病もあるし。糖尿病があるから歯が抜けてる。今、私が話していること、全部聞き取れる?(はい。大丈夫です(笑)。発音が変でしょう。糖尿病で歯が抜けて。

私、あっちこっちすべてが痛い。糖尿薬飲んで、虫歯もあってその薬ものんで。元は結構太ってたが、糖尿のため、(体重が)67、68kg だったのに、今は 20kg 以上痩せたよ。

(Q. お仕事は?) 体がしんどくて働けないよ。(Hさん)

Eさんは勤労中の事故で足にケガをしたせいで、まだ歩き方が不便で“何もできない”という。それに、離婚後、現在は子どもたちと連絡もしていないので、頼るところもなく、ただ基礎生計費で生活しているという。EさんもAさん・Hさんのように自分は働けないことを強調しているが、他の受給者のうち、実は働ける人が多いといっている。

◆ (Q. (勤労中の事故で足をケガしたといったので)今は歩くのははいかがでしょうか?)

介護者とかは要らないけど、たくさん歩いたら痛いですね。遠くのところに用があって出かける時には、ずいぶん歩けばベンチみたいなところに座って休みながら行くしかないんです。長く立ってれば大変だし、こうやって何もできないから。だとしても子どもたち二人が職場に通ってるのに何をしているのかも知らなくて、連絡もつかないし…連絡ができて、私が子どもたちをよく育てたこともないから、助けてもらうのも悪いんで。まあ今は政府から少し出てるお金で暮らしてるんです。(中略) 私も足がわるいから、まあ、政府から受給を切られてしまったら(大変)。でも、働ける人たちが多いんです。私が見たかぎり、十分働ける人たちが多くいますよ。体に全然問題もない人、多いです。

まあ、でも自分なりに腰が痛い人も、頭が痛い人もいて。こんな人は働けないけど。みんな事情があるでしょう。(Eさん)

Dさんは、チョッパン生活をいつからしているのかの問いに、仕事や健康について語った。彼の場合は、お金が必要なことが起きることに備えて、現在の受給費だけでは貯金ができず、健康がよくないにもかかわらず働いたりしたという。しかし、働いて結局、再発した腰の痛みで手術を受けることになり、貯めておいたお金を全部使ってしまうような状況になった。お金がなくて生活が不安だけど、働いても健康を失ってしまうという悪循環になると心配する。Eさんの表現からみると、Dさんは当時は“働ける受給者”に当たったかもしれないが、働くことによってかえって健康を害してしまい、蓄えたお金も使ってしまう事態になってしまったと述べている。

⁸⁴ Hさんの希望により、インタビュー場所は旅人宿の近所にある屋台の横の路上で実施した。

◆健康も良くないし、仕事もできないから祈祷院で過ごしたりしながら、完全に渡り者だよ。そんな生活をして来たのよ。受給受けてからは、もうこれじゃダメだと思って仕事をしたの。体は良くないけど、仕事して貯めたお金で、今度、腰が悪くなってまた手術受けたのよ。手術してお金が120万ウォンいるからもう空っぽになったの。今は仕事ができるという保証もないけれど、健康が許す限りは仕事をしたほうがいいんだよ。急にお金が必要になったら使えるから…そのようにしたいんだけど、それが思った通りにはならないから苦しいんだよ。
(Dさん)

若い頃、港で苦勞しながら働いたけど低賃金であまり稼げなかったというCさんは、今は体も弱って、技術もなくて働けないという。

◆(Q. どんなお仕事されたんですか?)

若い頃は棧橋(港)で、だいたい10年働いたよ。コンテナが海におぼれないように縛る仕事をやってた。たいてい10年やったの。今時は時代がよくなって金たくさん儲けるけど、その時は苦勞ばかりして金稼げなかったよ。(中略)率直に、仕事…大変でできないんだよ。土方は大変だよ。それに車に轢かれて、足を骨折して手術も受けたの。今もちょっと重いもの持ったら足がしびれるの。歩くのは支障はないけど、重いもの持ったら足が痛くてできないのよ。障害者手帳はまだないけど。(Q. 暇つぶしの仕事みたいなことはなさってないんですか?) ないの。まあ年もとってるし、技術もないし、誰が雇ってくれるかい。技術があればな。(Cさん)

幼い頃、親がなくなり、小学校も卒業できずに一人であちこちを転々としたGさんは、住み込みで働いたのに、給料も貰えなかったという。給与体系さえどのようになっているのかよく分からないで、ただお金を稼ぐために働いたけど、結局給料も出なかった経験がある。

◆働いても、お金もらってないのも多いです。手配師を通じて働きに行ったんですよ。売られて行ったりもしてたのよ。よく分かんないから…稼げると言うから言ったんだけど…泊めてあげたと、給料で引いて(貰わなかった)。今は分かるから行かないんです。(Gさん)

Bさんは、働けなくて基礎生計費だけで暮らすことがどんなに厳しいかについて語っている。

◆(Q. お仕事は?)

仕事できないよ。基礎生活費42万ウォン、障がい者手当 3万ウォン、それで家賃16万ウォ

ン払って携帯代やあれこれ出すと、ようやくご飯食べて生活できるくらいなの。(Bさん)

チョッパン居住者の多くは基礎生活保障受給者であるか、あるいは受給者ではなくても、働けない状態の人々なので、彼らの収入のほとんどは、消費にまわされ、貯金はできない。

A、Cさんはついで来月の生計費が出るまで生活しているという。掛けの主な店は飲み屋である。Aさんは飲み屋の掛け金を返すと、残りのお金がなくて貯められないという。Cさんも収入の全部である生計費の1/4に該当する金額を飲み屋で使っている。飲みすぎで体が悪くなり定期的に病院を通っているにもかかわらず、Cさんにとってお酒は生きていく楽しみであり、止められない。

◆(Q. お酒は飲めますか?)

帳付けで飲む店があるから、受給費がでたらそれ返すんだよ。そうしてる。それ返してるから、貯めるお金がないのよ(笑)。(Aさん)

◆(Q. 生計費はどのくらいですか?) 45万ウォン。他はないです。そのお金だけです。給料(生計費)が出たら掛け金返しに行く。また、家賃払って。寝ることも食べることも全部帳付けなんです。受給費が出れば全部返して、残り何万ウォンしかない。それもなかったらまた帳付けする。ずっと(そうしている)ですよ(笑)。(Q. 帳付け金額はどのくらいですか?) ひと月にだいたい十万ウォンくらいなる。酒ガンガン飲むから。(それで)胃、胃も痛いし、肝も良くないから、胃腸薬、肝腸の薬と。受給者だからタダじゃん。病院に行って、1ヶ月分の薬貰って来るんだよ。ひと月に一度行くの。

(Q. お体もよくないのに、禁酒しようとしたことはないですか?) お酒飲まないと楽しくないから。飲まないと、何を楽しみに生きていけるの。毎日飲んでるわけでもないし…実は、体にちょっと無理がある。もう老けてるから気力もないし、誰が何をしようがほっとくんだよ。俺の事じゃなきゃ気にしない。同じ可哀相な人たち同士で注意するようなことする必要ないんだよ。ひと月に一回騒ぐかな。そのくらいなんだよ。酒飲んだら、またかーと、何も言わないの。(Cさん)

Eさんは酒は飲まないけど、月に5-6万ウォンはタバコ代で使っている。生計費40万ウォンのうち、家賃を払って残った23万ウォンで生活するEさんにとって5-6万ウォンはかなり大きな金額である。つけをする生活はしない程度の自分なりに支出の管理はしているが、その費用は支出せざるを得ない項目のようである。

◆(Q. 受給はいつから受けてますか?) 受給者になったのは3、4年くらい経ってます。

(Q. でしたら、チョッパンに暮らし始めて約3年くらいは受給者じゃなかったから、生計費も

出てなかったのに、どう生活しましたか?) 昔と一緒に船で働いた人たちとか、知り合いに助けてもらって。今は受給費でだいたい40万ウォンもらってます。家賃17万ウォン払って、おかず買ったりするんです。人って、一人で住んでも家族と一緒に住んでも、必要なものは一緒です。またタバコ代で5-6万ウォンくらい使ってるし、たまには集まりもあるし。病院は無料で利用できるけど、リングルとかは自腹ではらわなきゃならないから、そういうのに使って。それでもいつもありがたく思ってます。そう思わなきゃな。(Eさん)

彼らが、ことさらに病気や障害、高齢について言及するのは、基礎生活保障だけがたよりだからである。実際、彼らは、主に肉体労働者として、低賃金労働に従事して来た人々である。労働中の事故にあった人(Eさん)、幼い頃に両親を亡くして、売られるようにして働いてきたGさんのように、働いても給料さえ貰えなかった人も存在している。そのような経歴もあって、現在は病気や障害⁸⁵、高齢などで働けないことを証明しなければ、主な収入源である生計費が切られる不安感が強い。他方で、基礎生活費は決して十分ではないが、酒やタバコだけは断てない、屋台の1杯のコーヒーぐらいは許されるだろうと、ツケでの綱渡りのような暮らしを続けている人もいる。この点は、また将来の生活展望のところで触れてみたい。

3. チョッパンの選択、チョッパンの隣人や家主との関係

チョッパン居住者たちがチョッパンに来る経路は、前述したように様々である。不安定な居住状態に置かれているが、その経路は先に述べたように、一般住宅から何らかの理由で「転落」してチョッパンに来る人々と、小さい頃から貧しく野宿とチョッパン生活を行き来する人々の2つに分かれる。前者はチョッパンが野宿を防止する役割をしている例とも考えられるが、後者は必ずしも、野宿から一般住宅への踏み台になっているかどうかはわからない。そこで、彼ら自身が、今住んでいるチョッパンや、チョッパンで暮らす隣人たちをどう見ているのかについて触れておきたい。

一般住宅からチョッパンに来たBさんは野宿をしている人たちを見ながら、彼らよりは自分がましだと、感謝して暮らしているという。

◆(Q. チョッパン生活の不便なところとか、良いところとかは?)

そこ(チョッパン)の良い点は…共用だけど、冬にはシャワールームでお湯を使えること。お湯で頭洗えることと、洗濯機で洗濯できることだよ。そこじゃないと相談所に洗濯機あるから。いいところはそれだよ。他はない。(中略)野宿したことはない。こんな人たち…地下道通る度にみると、あんな人たちよりは俺のほうがましだと、雨風を避けて暖かくねむれる

⁸⁵ インタビューしたチョッパン居住者のうち、Aさん(身体障害3級)、Bさん(身体障害4級)、Eさん(身体障害3級)は登録されている障害者である。

し、そういう考えでありがたく思ってるよ。(Bさん)

Hさんは、チョッパン生活を始めた時は、劣悪な環境に適応できず大変だったけど、釜山駅近くの旅館よりは自分が居住しているところが良いところだから、幸いだと考えながら生活しているという。チョッパン相談所がサービスを提供しているほぼ同じ程度の生活状況におかれているけど、自分は「旅人宿」ではなく「旅館」に居住していると考えており、また、釜山駅近所ではないということから、その程度の劣悪な生活はしていないと認識し、安心しているようである。Hさんにとって、釜山駅近所の旅人宿に住んでいる人は身体も洗っていない汚い人達だという認識が強い。

◆(Q. 他の旅人宿で泊まったことはないですか?)

ないよ。ここが初めて。ここに来て最初は本当に死ぬかと思ったよ。住宅に住んでてこっち来て初めての時はまったく…。(中略) 私は、釜山駅、そういうところは行きたくないよ。あの人たちは汚いじゃん。私も言うほどじゃないけど。あそこは汚いよ。ここは少しはましだろうな。部屋に洗面台があって洗ってるから。旅人宿みたいところは身体も洗うにもちよつとあれじゃない。あんなところ(旅人宿)はよくないよ。(Hさん)

BさんやHさんとは異なって、野宿とチョッパン生活を繰り返しているGさんにとってチョッパンは「楽な所」である。現在居住しているチョッパンへは、チョッパン相談所を通じて居住し始めたという。Gさんは、チョッパンだけでなく、必要なサービスがあれば関連団体や施設に尋ね利用している。そのように必要なサービスを積極的に利用しているGさんにとってチョッパンは帰ることが出来、身体を休められるという意味で「楽な所」なのである。

◆(Q. その洞は初めてでしょう?そこ、どうですか?)

楽ですよ。帰るところがあることと、体調が悪かったら休めるところがあるから。ソウルは(支援団体や施設が)すぐ見えるから寄って相談してたんだけど、釜山は見える施設がなかったから、ないだろうなって思った。釜山駅の広場でテレビ観て、11時になったら草梁洞のあそこ(地下道)に降りて寝てた。(Gさん)

相談所からチョッパンを紹介されたGさんの場合は、市の予算による家賃を相談所が代納している。このような代納のようなやり方は、チョッパン相談所から紹介されて、チョッパンの選択に本人の意思があまり反映されない場合が多い。むろん地下道で寝ていたGさんにとって、紹介されたチョッパンは「楽な所」で満足しているようであるが、Gさんとは異なって、本人が家賃を払っている場合はほとんどが居住地(チョッパン)を本人が選択をするようになる。現在居住しているチョッパンを選択した理由について彼らは以下のように語っている。

◆(Q. 旅人宿を変えた理由は？)

ここは出入口がチョッパン主と別だからいい。俺たちは後の門を使うから、主人とのトラブルが起きないんだよ。前に住んでたところは主人の部屋を通らないと入れないから、主人が酒飲んで来たと文句を言うの。で、俺も悪口を言って“お前が酒買ってくれたか”、“ここじゃなくても行くところあるから”と叫んで移ったりした。

(Q. どこからここについて聞いて移ったんですか？) あ、ここは主人は専用の門があるし。ここは静かで、酒を飲んでも飲まなくても主人が分かるわけがないし、あいつらは別の門を使うから。主人は俺が酒飲んでるのを分かるかも知れないけど(別に何も言わない)。酒を飲んだらやっぱり少しはうるさくはなる。歌一曲くらい歌わないと(笑)。前住んでたところは、主人がうるさくて移った。‘くそ、ここじゃなくても旅人宿はあるさ’と言って出た(笑)。それで移った。

(Q. その他の居住者たちとのトラブルとかは？) そんなのはなかったけど、主人がうるさくて(笑)。(中略)もう移りたくない。死ぬまでここに住むつもりだ。ここは静かで、俺がちょっと騒いでも、主人は何にも言わないから。俺、元々大人しい人なんだけど、酒一杯飲んだら叫んだりするのよ。んで“あの人、また始まった”と思っても、何にもいわない(笑)。(Cさん)

◆(Q. ここは一時的に泊まったりする人はいないですか？)

いないですよ。(中略)静かなところに入りたがってる人が多いですよ。ここ(相談所)に来ると(情報が)全部入ってくるから分かるよ。(誰かが騒ぐので)住んでる人が移ろうとすると、静かにさせるからって、主人が引き留めるんですよ。しかし、変わらないですよ。静かにするよう注意させるって言っても、うるさくて、出て行くんです。今住んでいるところが一番静かなんです。酒飲んで騒ぐ人もいないし、けんかする人もいないし、誰が住んでるのかと思うほど静かですよ。だから満室で、今の人たちも出るつもりもないんです。やむを得ない事情がある場合じゃないと、出ないですよ。(Dさん)

◆(Q. この旅人宿はご本人が選んだんですか？)

はい。他のところは見てもなかったし、旅館の看板があるのを見て来ました。最初は、ここから遠くないところに旅人宿というところがありますが、そこで何日くらい泊まりました。あの時は俺が金もちょっと持っていて、その旅人宿のおばさんに100万ウォンくらい貸してあげたが…金銭問題のトラブルでそっちから出たんです…それに半地下だから空気も良なくて、どっか移る部屋を探してみようかと思って、少し下ったところにここがあったから。それでその日にすぐ出たんです。(Eさん)

C、D、Eさんのチョッパン選択の基準は「静かな所」である。Eさんの場合は酒も飲まず、うるさくしないほうだけど、Cさんの場合は本人が現チョッパンでは「うるさい人」であるにもかかわらず、「静かな所」を優先しているという。Cさんにとって、現チョッパンは、自分がうるさくしてもチョッパン主が小言を言わないところだから死ぬまで移らなくても良い、というほど、本人にとって暮らしやすい住まいなのである。初めてチョッパン生活をするようになったのはお金もなく、行くところもなかったからであるが、チョッパンに住み始めた彼らにとってチョッパンの「劣悪な環境」よりも、隣人や家主がうるさいことが、大きな問題のように思われている。

お金がないからチョッパンに住むことやチョッパンの劣悪な環境はすでに受け入れなければならないことであるが、騒がしい人たちがいるところを避けることは選択ができる。そのようなストレスを堪えながら居住する必要はないと考えている。

したがって、チョッパン居住者たちが他のチョッパンへ転居する主な理由は、チョッパン主⁸⁶との関係に問題があるか、同じチョッパン建物に住んでいる人々と問題があるなどの、人間関係ストレスである。そして、これらの転居には一日もかからない。買わなければならない家具や保証金が要らないチョッパンの特性上、チョッパン間の移動はそれほど難しいことではないからである。

それでは、チョッパンを選択するにあって重要な要素である同じチョッパンの隣人たちについて、彼らはどのように考えているのだろうか。あらためてその点に焦点をおいて、彼らの意見を聞いてみよう。

◆(Q. ここの居住者同士と、仲はどうですか?)

皆が受給者。ほとんど受給者ですよ。受給者じゃない人は一人か二人。(同じチョッパンに)住んでも話なんかしない。ドアを全部閉めて生活するから。話したくてドアをたたいても、“何ですか”って。お互いにドアを閉めとけばちょっとつまないからちょっと話がしたくてノックするのに、“何ですか”と、こんなんだから。

この前に、ここ(相談所)で食べ物をちょっともらって、他の人と分かち合おうと思ってドアをたたいたら “何ですか” って。慌てて何も言えなかったの。何も言えずに食べ物だけあげて出たの。それで、もうそうしたくないって思うよ。毎日目覚めたら会う人たちなのに。そうじゃない人は3人しかいないよ。部屋が1階に5室、2階5室ある。この間、一人と仲悪くなってね(笑)。夜11時 10分頃にパンをちょっと焼いて食べたが、一人が匂いがすると大騒ぎをしたの。トーストあるじゃないですか。匂いがするって。だってその人は朝も夕方もテレビ大きくつけといて、自分の部屋でも匂いがするのに俺に文句言うから。それで仲悪くなった。それからもう一言も話さないの。その前はよくしゃべってたよ。何か食べ物でも作ったら分け合ったりして、向こうもそうするくらいだったのに。ところが、その1回のことで、

⁸⁶ チョッパン居住者たちはチョッパン主を主人と呼んでいる。

一切話さない。夜中の1時に焼いたことでもないし、腹が減って焼いて食べたのにあいつが何で文句言うの。主人も何にも言わないのに。

何か話せば、けんかになるから、俺も黙ってたのに…。(Dさん)

◆ここに初めて来て感じたのが、盗まれるものも何もないのに、この夏の期間にドアを絶対に閉めていることです。心のドアを開けようとしません。ここの人たちが。

俺は、夏にスイカでも一固まり買って来たら一緒に食べようとするのに、あげても嫌やがるし、そうなんだよ。ここに暮してる人たち。心のドアを閉めてる。そうなんだよ。俺はおかずでも作ったら、一緒に食べたいけど、煩わしがるから。気を使う必要もなくなって(もうそうしないです)。そうなんです。(Eさん)

◆(Q.今のところ、生活するのにどうですか？うるさくはないですか？)

ここは静かなの。知り合いはお姉さん(チョッパン主)しかいないから、良い。私が他人を知る必要がある？(Q.話したくなる時はないんですか？)あまりない。悩み苦しんだらビールみたいなもんそれを3〜4瓶買って、私の好きなつまみ一つ食べて、片付けちゃうの。独りでいるのが楽なの。(Q.女性の方は多いですか？)お姉さん(チョッパン主)と私くらいかな。よく分からないの。そこの人たちとよく会わないから。そこに居ても、用があつたらようやく話す程度だから、よく分からないの。知る必要ないでしょう。(Hさん)

チョッパンで生活を始めてから、居住者たちと付き合おうとしたD、Eさんは、今はもう他のチョッパンのドアを叩いていないという。同じところに住む人たちだから、話かけたけれども、返ってくる反応は冷たかったからだ。これ以上は自分もそんな冷たい視線を受ける筋合いはないということである。

Dさんの場合、その中でも仲が良かった人に、トーストの匂いがするとの小言を言われて、そのただ一度の口げんかで、お互いに声かけないほどになったというから、隣人関係は、ちょっとしたことで崩れてしまうのだろう。Dさんの表現のように、自分も言いたかったことがあったけれど、言えばけんかになるから我慢していたという表現は、チョッパンで住み続けるための、彼らの人間関係についての戦略になっているようである。

G、Hさんも同じく、細かいことでけんかになりやすいチョッパン居住者たちだから、むしろ話をかけないほうが、気楽に生きていく方法であると言っている。

Bさんはチョッパン居住者に話をかけないこととともに、話かけられることさえ嫌だと言う。

◆(Q.居住者同士とお話とかはしないですか？)

しゃべらない。しゃべりたくても、ここ(相談所)でも人の顔くらい見てる。深い話はしな

い。しゃべったら、くだらないことでけんかになるから。例えばハングルの書き方一つ間違ったことでもけんかになる。(Gさん)

◆(Q. 不便なこととかはないですか?)

不便な点とか、そんなのないよ。ここは、私が人に何も言わないと、誰も私に文句言わないから。(Hさん)

Bさんは、以前に住んでいたチョッパンで、呼んでもいないのに自分の部屋に勝手にきてお酒を飲んで帰る人達に迷惑をかけられたので、チョッパンを移ったそうである。Bさんは次のようにその経緯を語っている。

◆(Q. 他の旅人宿で住んでたこともありますか?)

影島区にも住んでみたし、草梁洞、凡一洞でも暮らしたの。最後に来たのが 鎮区釜田1洞。
(Q. 転居した理由は?) 引っ越しをした理由は全部酒のせいだった。自分の身すら信じることができない世の中なの。ところで他人をどう信じます? みんな私の部屋に尋ねて来ては酒ばかり飲んでて、全部ちらかして。体も不自由なのに俺が全部片付けなきゃダメだし。俺が呼んだわけでもないのに、兄さん、弟と言いながら来たりする。来る人を追い出すわけにはいかんけど、具合が悪くて今日はちょっと休みたいと追い返す。そうしないと、来る人を止められないから。でもまた8時半ぐらいになると、(隣チョッパンの)人たちが仕事から帰ってきて、早く眠る人もいるのに、俺の部屋に来て(騒いでるから迷惑になる)。話相手に来れば喜ぶだろうが。もちろん何か得があるから人とつきあうというわけではないよ。でも全部(俺に)迷惑ばかりかけるから。(Bさん)

Aさんは好意から出た行動で、「怖い人」に巻き込まれそうになったことがあり、それからは知らない人とは付き合わないという。

◆(Q. お酒飲まれますか?)

. 一人で飲む。部屋ではまずくて飲まない。飲み屋にひとりで行く。ひとりで行くのも魅力ある(笑い)。隣り部屋に住んでた人々…。誰かが階段を下るのに足が不自由で歩きにくそうで…かわいそうで俺がどこか痛そうですねっと声掛けたら、俺にタバコ一箱だけ買ってくれと頼んで。それで買ってあげたんだが、その時から私に知ったかぶりをするの。そいつ、酒を飲んだら狂人になるのよ。飲んだら。

それで、ここの所長(チョッパン相談所)に聞いてみたところ、その人と付き合うなって言われた。その人、以前にも刀を持って大騒ぎして刑務所で2年服役して出てきたばかりなんだ

と。今度出てきてこっち(チョッパン)に来たって。それを聞いてからは、知らない人とは付き合わないようにしてる。

Fさんは、チョッパンを最悪の人たちが集まって住んでいるところ、「ゴミの町」と表現している。下品な人々が住んでいる町だから、この町の人とは関わらないという。

◆(Q. お酒飲まれますか?)

楽しいこともないから、酒で心を慰めるが、飲みすぎると病気になる。一昨日に飲みすぎて、今日病院に行ってきた。(Q. 誰と飲まれましたか?) 知り合いが来て。お金ある人だから(奢ってもらった)。(Q. 隣人とお酒飲んだりはされませんか?) (居住者同士とは) 飲まない。全然。親しくない。また、その人たちはおとなげない。(沈黙) ここ、最悪の「ゴミ」の町だよ。昔は売春する女も多かったし、くだらないものが多い町なんだよ。うち(チョッパン)に住んでた人のなかで、叫んで盗んで、そんなやつがいたけど、どうやっても出て行かない。ケンカになって人がたくさんけがをしたの。この町。(Q. 旅人宿の主人とは?) 主人とは親しい。(Fさん)

他方で、D、Eさんたちは、チョッパン居住者たちが置かれている状況は同程度で、お互いにすこしずつ配慮すれば良いのにと考えている。

◆(チョッパン生活するのに) 不便なところはあるけど。お互いに、貧しい人たち同士で住んでるから、それを何やかんやいう必要もないし、お互い一歩だけ譲ったら楽になるなのに。(Dさん)

◆(Q. ここは一時的に泊まったりする人はいないですか?)

ここ(チョッパン)に来る人たち…いきなり来るようになることじゃなく、こういう旅館みたいなところ、旅人宿、チョッパン生活してる途中で部屋が空いたら引っ越して来るから…だからここに来る人たちもほとんど同じなんですよ。(Eさん)

同じような境遇だという理解をする人もいるが、それでもつきあうのが難しいのである。チョッパン居住者の中にはお酒を飲んで騒いで他人に迷惑をかける人と、そうではない人の二つのタイプに分かれているようであるが、後者のFさんの場合でも話しかけるのは喧嘩になる可能性が高いため、お互いに声をかけるのも、掛けられるのも嫌がっているという。

◆酒飲んで来たら静かに通らなきゃ。知らん。住んでる人たちに興味もないし。前に酒飲

んで若いやつらが俺をいじめたり、なぐったりもしたの。俺が訴えたけど、ともかく人扱いしないのだから。主人もそんな人たち追い出しちゃった。今は大人しい人3人しかいない。

(Fさん)

このように、チョッパン居住者同士はお互いに無関心を装って、衝突を避けようとする。喧嘩の種類になる人々はチョッパン経営者から追い出されることもある。だから、居住者同士は同じような境遇なのに、ほとんど交流がないというわけである。

それでは、近隣の住民または商人については、どう思っているだろうか。繰り返し述べるように、釜山のチョッパンは、普通の民家や商店の中に、散在している。市場も近い。

Eさんは、住んでいる町のイメージは良いし、市場の人たちも良い人たちだと言う。

◆ (中略) 不便なことは何もないです。この町。市場が近くて、すぐ前が区役所で、不便なことは別にはないですよ。そして、ここの市場の商人たちがみんな本当に良いです。お正月とかお盆には餅屋で餅を作って、一袋ずつ統長(民生委員と類似)を通じて渡してくれたりします。市場の人たちが本当に良いです。たまには、貧しい人たちを集めて、ここの食堂で食事をご馳走してくれるんです。ここの市場の人たちがいいです。(Eさん)

Bさんも町の不便さはないという。ただチョッパンの隣人と関わらないようにしているけど、悪口を言われたりして、それだけを避けていると述べている。

◆ この町に不便なところはないけど。(ため息)。でも、隣人たちの悪口もすくなくないし、俺は誤解されることが多いの。(それでつらい)。そんな状況なんだよ。(Bさん)

チョッパン主、または運営者との関係については、これまでの話にも示唆されているように、F・Eさんのように“親しい”、“良い人”と表現されている場合と、Cさんのように無関心な場合がある。しかし、これは、チョッパン主・運営者が小言を言うてうるさかったり、気に入らなかつたりすると、すぐに移ることが出来るチョッパン居住の特徴から、みんな気に入るところに移っており(C・F・Eさん)、またはチョッパンを変えるほどではない状況(Aさん)ことの結果に過ぎないとも言える。現在のチョッパン主を“良い人”と表現しているEさんもその直前に泊まったところはチョッパン主とのトラブルで出て、今のところへ移ったことである。

◆ (Q. 旅人宿の主人とは?) 主人とは親しい。(Fさん)

◆ (Q. 旅人宿の主人とは?) おばさんが俺よりひとつ上かな。けちん坊なの。俺がここ(相談

所)で何かもらったら、(チョッパン主に)パンとかあげたりする。そうすると向こうも汁とかくれたりするけど、けちん坊だからそれが憎たらしいんだよ。(Aさん)

◆大家さんとは仲いいんです。(ここで暮らしたのが)6年くらいになるが、本当にいい人なんです。おばさん、こんなに貧しい人を、旅館の主人だったら無視したりするのに、そういうのがないんですよ。おばさんも昔は銭湯の垢すりしてたそうですよ。だから、(私たちの)事情が分かるんです。助けてあげようとしてくれている。(Eさん)

◆おばさんとは、家賃払う時だけ顔見せるから。まあ(笑)。いつも外で遊ぶから(会わない)。大家さんが亡くなったのよ。ここ来て、5年くらいになったが..(Cさん)

4. 転居：買上賃貸住宅への転居意志

家賃の何倍から何十倍もする保証金を要する韓国の賃貸住宅契約の特徴から、まとまった金がないチョッパン居住者たちにとって「一般住宅への転居」することは現実的に難しい。そのため、政府は前述したようにチョッパンやビニールハウス居住者等の住居脆弱階層向け「買上賃貸住宅事業」を実施している。家賃はチョッパンより安い8~10万ウォン程度で、保証金100万ウォンがあれば、チョッパンより良い環境である住宅に転居できる。したがって、この事業を通じて、買上賃貸住宅へ移動することが、チョッパン居住者たちが一般住宅へ転居できるもっとも現実的な方法であるといえる。

それでは、低廉な家賃・保証金で入居できる買上賃貸住宅への転居意思が彼らにあるのだろうか、あるならばどんなところを好むかについて聞いてみた。その結果、主に二つのタイプに分かれた。

まず、転居したくても、保証金を用意する可能性すらなく、また家具、光熱水費そのほかの経費の必要を考えると転居が不可能だと考えている人々である。もうひとつは、そもそも転居を考慮の対象にしていない人々である。その理由は、ずっと転々としてきたので、もう転居自体が嫌だとか、逆に転々としてきた生活だから今更安定してもという場合もある。また現在の地域での社会関係が貧しい生活を支えているので、転居は考えられないという場合もある。

◆(Q. ここで何年くらい暮らしてるんですか?)

この旅人宿に住んで、今年で6年になります。この部屋で。不便なこともなく、なにより住宅に移ろうとすると、保証金を何百万ウォンも出さなければならないけど、そんな状況じゃないから…(Q. 買上賃貸住宅は?)相談所で賃貸住宅のことを言ってた。また、この前には住宅公社から誰か来てその説明もしましたよ。けど、引っ越しをするんだったら、保証金100万ウォンだけではなくて、家具も買わなきゃならないし、俺がいくら計算しても、タンスでも一つ買おうとしたらだいたい3~400万ウォンは要るんです。今はお金がないから、ここから出れないんですよ。

俺も環境的に、きれいなそういうところに引越したいですね。でも、そんな状況じゃないから仕方がないじゃないですか。金さえできたら引越しますよ。でもそんな状況にはならないから… (Eさん)

◆(Q. 賃貸住宅への転居は思ったことないですか?)

賃貸住宅も金がないと入居できないよ。それも保証金(敷金)100万ウォン必要だから。俺、100万ウォンがなくて入れない。そして家具とか買わないと。100万ウォンじゃダメだよ。ここ(チョッパン)は布団とか家具がただで使えるから。

ゴシウォンもここより家賃が高い。(ゴシウォンでは)炊飯機にご飯炊いてあるからご飯は自由に食べられるけど、おかずは自腹だし、高いの。ここ(チョッパン)が一番やすい。

俺はどこへ行っても構わないけど、持ってる金がないからどこに行けるか。各区ごとに福祉館は全部ある。私も障害者だから他の福祉館も利用できるけど、(引っ越しをするお金がない)。(Fさん)

買上賃貸住宅事業を通じて、チョッパン居住者たちをより良い環境の住宅に転居できるよう支援していても、E、Fさんは入居の際に必要なお金がなくて移れないと言っている。保証金100万ウォンだけではなく、そのほかにも家具などの用意しなければならないものが多くて、転居はとうてい考えられないというのである。

◆(Q. 買上賃貸住宅への転居とか、引っ越しについて考えたことはないでしょうか?)

引っ越し…引っ越ししなきゃ…でもそこは(賃貸住宅)行こうと思うんだけど。この先生(相談所のスタッフ)が俺のこと良く考えてくれてるのか保証金さえ早く貯めれば、部屋はいつでもあるから貯めろっていうのに…貯めようという気になれば良いけど…体調が悪くて何も楽しみがないから酒を飲んじゃう。タバコは吸わないけど、酒も普段は飲まないけど一度飲んだら暴飲するから。一回飲んだらもう飲みすぎるから飲み代がすごい出てる。(Aさん)

◆(Q. 買上賃貸住宅への転居については?)

前に引っ越してみようと洞事務所に申し込みを出しておいたんですよ。6ヶ月か8ヶ月ぶりに部屋が出たと連絡があったんだけど、お金がなかったです。元気な時は仕事をするけど、体調が悪い時はやめて休まなきゃならないんですよ。病院も通いながら。だから儲ければ儲かった分、使ってしまうから貯めるお金がないです。お金があつたら行ってみたかったな…ところが、そこは管理費やらガス代やら全部で17万ウォンかかるって。受給費40万ウォンもらって、それじゃ(生活にならないでしょう?)。ここでも生活するのにいっぱいいます

よ。一万ウォンで何日間も暮らしてるのに、どんなに計算しても足りない。だから行けないんです。（Dさん）

このように、転居意向はあるけど、まず保証金が貯められないのである。飲み代やタバコなどの生活習慣でお金を貯められなかったり、病院代がかかるという人もいる。あるいは、入居申請まではしたが、計画的に貯められなかったという人もいるわけである。

そこで、チョッパン相談所は月に何万ウォンずつ、本人たちが貯められる金額を定め、収入が入ってくると、まずその金額を先に貯めるように金銭管理のアドバイスをしている。しかし、A、Cさんにとっては、もっときれいな環境への転居より、楽しみのない人生のなかでの唯一の喜びであるお酒の方が魅力的なのであろう。

チョッパンに住んでいる他の人たちのせいで、暮らすのがつらいというBさんは、相談所の勧めで引っ越しをするため2ヶ月前から月5万ウォンずつ貯めているという。しかし、月5万ウォンは、生計費40万ウォンのうち、家賃を払ってから残る20万ウォンの1/4を占める大きな金額である。

うるさい隣人たちのせいで、チョッパンで暮らすことがつらくて転居したくても、月5万ウォンを貯めることは、チョッパンで暮らすことと同じぐらい大変なことになる。

◆(中略)ここ(チョッパン相談所)の所長の牧師が俺が病院にいる時に見舞いに来てくれて、早くお金貯めて寒くなる前に、冬になる前に早く家を移りましょうって。それで6月から5万ウォンずつ貯めてます。まだ2ヶ月分しか貯めてないが、残りの金で暮らすのは厳しすぎるんですよ。100万ウォンのその保証金…(沈黙)今、(チョッパンの家賃で)ひと月に16万ウォン払ってるが、(チョッパンは)周りからけんか仕掛けてくるし、我慢も限界があるんだけど、(貯金には)耐えられないんですよ。（Bさん）

Eさんも同様である。月5万ウォンを貯めたら生活ができず、また月2、3万ウォンずつ貯めたら3、4年もかかるので、そこまでして転居する意志はないという。現在のチョッパンの生活に満足しているからではなく、貯めることができないので、現在の生活に甘んじるしかないのかもしれない。

◆(Q. 買上賃貸住宅について聞いたことがありますか?)

はい。相談所から聞きました。(中略) だが、俺のこんな生活に、月に10万ウォン、20万ウォンを貯められますか? 何もしないで使わなくても、1ヶ月にだいたい5万ウォンくらい貯められるか…5万ウォンずつ貯めるとしても2年近くかかるし。だが、こんな暮しで5万ウォン貯めること、厳しいんです。他の人の話も聞いてみたら、2万ウォンとか3万ウォンも貯めたりする人もないことはないけど…そこまでして行くことは…。(Eさん)

もし保証金が用意でき、転居が可能な状況ならば、どのようなところを好むかについて、下記のよう

◆相談所によく来て、牧師の祈祷(聞いてます)。水曜日、日曜日に。それ聞いて助かるの。ありがたいね。子供が親に頼るように…(中略)転居に他の条件はない。遠くても、近くても(構わない)。地下鉄に乗って(相談所に)来ればいいから。地下鉄一日中乗っても俺はタダだから。(Bさん)

障害者であるAさんは交通費が無料なので、チョッパン相談所に来られるところならどこに転居しても構わないという。Bさんも同じく、他の地域へ行っても構わないと言っているが、彼らが言う「どこでも」は、福祉サービスが利用できる場所でなければならないとの条件を含んでいる。

◆あそこの福祉館(老人福祉館)で理学療法室の看護師が教会に通ってるらしいが、俺は今旅人宿にいるって言ったら、100万ウォンあれば賃貸住宅に入れるから一生懸命貯めて転居できるようにしましょうって。でも100万ウォンところじゃなくて、布団も要るし、鍋だつて必要だし、ご飯炊くガスレンジや、中古でもテレビも一つないと。何もかも金かかるから、100万ウォンだけでは足りないと言った。だったら、保証金さえあれば自分が教会にお願いして冷蔵庫と洗濯機、テレビ全部用意してあげるから、部屋だけ借りてって言うのよ。それ聞いたらちょっと心強くなった。金貯めようと思ってるんだよ。(中略)希望するところは… どうせ一人だし、一人でここに来たからまあどこでも(良い)。ソウルにもこのようなこと(相談所、福祉サービス)があるのか誰かに聞いてみたの。そしたらソウルでは、もっとよくできてるって。それで… どこでも、他のところでも住んでみたいし。馴染めるとか、そういうのはまあ(構わない)。(Aさん)

Eさんも同様に、転居の条件には福祉サービスを利用できる場所を前提としていう。彼らにとって、無料で利用できる福祉サービスは、少ない基礎生活保障制度の受給費での生活の中で、支出の多くの部分を補ってくれているため、重要な意味をもっている。したがって転居先の選択にとっても決して無視できることではない。なお、このような経済的な節約だけではなく、福祉施設・団体のスタッフは頼れる者がいないA、Bさんにとっては心理的に大きな助けとなっていることも看過せない。

◆転居するなら、この町で6年間ずっと住んでたから、この町なら良い。けど、この町がダメだったら仕方ないから、他の町に行くしか。

他の町に行けば、またその町で馴染んで住めるでしょう。だけど、同じ家賃だったらこの

町のほうが良いんです。別に行くところもないけど、この町は交通も便利だから。また、ここに障害者福祉会館もあるし、助かります。毎週 2回は風呂に入るし、お昼食べて、理学療法も受けれるし、得することが結構あるから。そんなこと考えると…

他の区の場合もそんなところあるけど、ないところが多いですよ。障害者福祉館が。だからこっちが良いです。（Eさん）

上のような福祉施設・団体があるかということだけでなく、今のところから動きたくない、という人々もいる。

◆お金があったら（買い上げ住宅に）行ってみたいと思ったこともあるけど、お金があっても今は行きたくないんです。これ以上移りたくないですよ。

（Q. 他の町への引っ越したいと思ったことないですか?）

ないです。なぜならこの草梁洞が好きです。今住んでる旅館もいいけど、俺は草梁洞が好きなんです。他のところに行きたくないです。転々すること、もうやめたいんで。他のところに行こうと誘ってる人がいるんですよ。ひとりで移ると、話相手がいないから一緒に行こうと誘ってるんです。話相手がいれば…いろいろと良いじゃないですか。だから俺を誘うけど、行きたくないです。何回も誘われて、ムカついて結局、電話も掛けないって言いました。（Dさん）

10年以上シェルターなどで居住して、5年程度チョッパンで生活しているDさんは、お金ができるとしても、もうこれ以上は移りたくないという。たとえば買上賃貸住宅に入ると、特別な理由がない限り、最長10年まで居住することができる、むしろチョッパンより安定的な居住ができるにも関わらず、「現居住地域から離れたくない、これからは転々としたくない」という。転々すること自体が嫌になったDさんには、良い環境と長期的な安定性より「今の安定」がより大事なのであろう。

釜山出身であるCさんは、釜山の同じ区内の旅人宿などを転々としながら暮らしているが、他の区には行かないという。すでに住んでいる区で、市場の商人たちなどと、掛け買いができる関係が形成されているので、遠くにいく理由がないということである。つまり「帳付けで生計を維持している生活」は、現在住んでいる区内ではなければ成り立たないので、他の所への転居は検討の対象にならないというわけである。

◆この前、他のところに行けって言われたよ。でも俺は草梁洞を去ったら…

影島区に行けって。そう言ってるが、“俺は草梁洞から出て行かない。お前ら（役所公務員）いじめるためにも行かないよ”と言った(笑)。

引っ越そうと思っても金がないからできないし、まあ…どこに引越すんだよ。他の所に行っ

て何するんだよ。ここは知り合いも多いから…ここで長く住んでるから市場に行っても“ばあちゃん、帳付けにして”と言え“いくらでも持って行け”となるから。行き付けだからそうしてくれるんじゃないくて、受給者だから。

受給者だから“もうけているから、いくらでも持って行っていい”って。(笑) 受給費もらったら精算するからな。貧乏なやつが‘信用’されている。そうしないと食っていけないんだよ。(Cさん)

ここで、商人が表現している“もうけてるから”の意味は、稼いでいるとの意味ではなく‘受給者’であるので、国から定期的に生計給与(生活扶助)を貰っているから’の意味である。。また、Cさんがいう‘信用’は、掛け買いしても生計給与が出ると‘必ず返す’ことも意味している。つまり、Cさんのように、この地域では‘受給者’であることは、定期的な収入があることを意味していて、それなりの信用関係ができていくわけである。

Hさんも、転居にあまり興味をもっていない。チョッパン相談所から買上賃貸住宅について情報を提供してもらったけど、関心を持たず、「忘れてた」と述べている。Hさんの表現からは、現状を変える意欲がなさそうである。流れ者だから、また何かあったらその時に移せば良いと述べている。

◆それ(買上賃貸住宅)、みんながいっぱい申請して、溜まってると聞いたんだが、それ(買上賃貸住宅)って、あんまり良くないんじゃないの？相談所が説明はしてくれたけど、行ったことないからよく分からない。どうしようかな。家があったら精神的に楽だろうな。(買上賃貸住宅)話をしてたの。相談所の職員たちが説明してくれたけど、よく聞いてなかったの。忘れてたよ。渡り者の人生だから。なんか安定した生活をしたいとは私も思うのよ。でも、なければならないままで、あればあるように生きて行けばいいから。(Hさん)

この二つの類型は異なっているようでもあるが、結局のところ、転居に必要なわずかな金でも貯めることが大変な彼らの厳しい生活状況が、転居に無関心を装わせ、現在のチョッパン生活を受容するしかないようにしているとも捉えられる。

5. 家族関係

チョッパン居住者たちの中には、家族との連絡も絶つなど家族関係を維持できていない人々が多い。Gさんのように幼い頃両親が死亡して、孤児で生きてきた場合もあるが、ほとんどは家族がいても連絡せずに過ごしている。

◆幼い頃うちの親が亡くなって、俺は施設にも行ってなくて、そのまま各地に転々として

た。 11歳の頃から。(Gさん)

Bさんは、家族が自分の生き方を嫌がっていて、連絡もできないという。

◆(Q. ご家族との連絡は?) しないです。俺が家の1男2女の中の一人息子なんだけど(子供
がいないから) 我家の子孫が絶えてしまうから、そんな俺を(家族は) 見たくもないって。
また俺が巫俗の生活をしてるから、嫌やがってるし、仕方なく生きているんだよ。(Bさん)

母と兄弟、Dさんのお金を足して買ったアパート(日本のマンションのような住宅)を母の死亡後、貸
し代金の返還などで失い、裸同然で家を出てシェルターなどを転々としたDさんは、兄弟が会いたがっ
ているとの連絡をうけ、会いに行ったが、兄嫁に乞食取扱いされ、離れるようになった。そのような
兄弟をDさんは 他人よりも劣る人たちであると言っている。

◆ 14 歳ごろにソウルから釜山へ来ました。その時から働き始めましたよ。合板を作る工
場で働きましたが、給料をもらったら母にあげたんですが、兄のお金、俺のお金、母親のお
金を全部合わせてアパートを買ったんです。名義は兄と私の共同名義にしました。誰でも(勝
手にアパートを)売ったりできないように。

母親が“私が死んでも二人がそのお金は分けて使いなさい”と言ったんですが、私が“俺は
要らないから、兄にあげよう”と言ったんですよ。母親が“だけど、あんたもお金がなければ
いけない”と言ったのに。俺が歳を取ってみたら、母親の言ったとおりだと思うよ。今は、
(その時に)お金を貰ったほうが良かったと(思う)(笑)。(中略)兄が(アパートを担保にとつ
て)お金を少しずつ借りたものだから、結局はアパートが消えてしまいました。今は兄は、
女に会って、まあ、(結婚して)暮らしています。だが、その女…この前に(兄が)俺のこ
とを探していると聞いたので、俺が挨拶しに行ったんですが(兄嫁が)、俺を完全に乞食取扱
いをして。お互いに初めて対面したのに、そうしちゃいけないんじゃないですか。それで、
俺が行くところではないところに来たような気がして、それで(今は連絡しない)。(中略)
(兄弟は)みんな釜山に住んでるよ。地下鉄に乗れば 30 分なら行けるけど、それでも兄弟
でも他人より劣るんだよ。

◆ (Q. 今、兄弟とは連絡はされてないですね?) しません。(中略)俺、兄弟が多いです
よ。3 番目の兄嫁は優しいほうです。だが、俺が訪ねようすると、向こうもおかず一つで
も用意しなければいけないから、俺の気が重くなります。だから、(気兼ねして)わざと行
かないです。俺がお金があって(兄弟に)あげればいいけど、俺の生活がこんなに厳しくて…。
(D さん)

Fさんは兄弟がみんな社会的な位置もある人々なのに、自分だけ兄弟から疎外されているという。

◆やれやれ、兄弟が他人より劣る。兄弟たちがとんでもない金持ちなの。一人は弁護士、一人は医師…兄弟たちもみんなうまくやってるのに、何年に一度連絡するだけだよ。(中略)俺、(家族から)いじめられてる。疎外されてる (Fさん)

Aさんも、窮乏状況なのに助けてくれなかった兄弟に怒りを感じて連絡を絶った。最初はそういう風に連絡を絶ったが、現在は自分が兄弟たちの役に立たないだけでなく、むしろ迷惑になると徐々に自らが連絡をしないようになったという。

◆病院に診療を受けに行ったんだが、薬代が半月8万ウォンだったの。しかし、それ払うと、生活ができないから生きて行けない。それで病院に財布を持ってこなかったと嘘ついて、弟に電話して金ちょっと送ってくれと言ったら、みんな厳しいって、結局、金貸してくれなかったの。旅人宿にも半月経ったらまた家賃払わなきゃいけないのに…

一人ですごい歩いた。率直に言うとお金に困るがましだと思ってた。(中略)今考えてみると、家族って、自分の妻と子供が家族なの。それに気づくのが遅かった。母さんとおやじが生きてる時には兄弟も家族だったと、みんな結婚してからは(もう家族ではない)。

それでも俺、病気の時、倒れた時には弟が(金)出してくれたりもしたのよ。それで今、たまに、母さんの命日には行くけど、金がないから行きづらい。(Aさん)

家賃や薬代を払うお金もない困った状況だったのにもかかわらず、自分を助けてくれなかった弟は家族ではないと思ったけど、ふりかえてみると、自分が倒れたときに助けてくれたのは結局、弟だったという。助けてくれなかったその当時は連絡もしなかったけど、今は両親の祭祀⁸⁷の日には弟の家に訪ねたりもしている。しかし、最近は、祭祀に行きたくても、お金がなくて行けなくなっているという。韓国の場合、祭祀時には祭祀の準備をした兄弟にお金を渡す習慣があるが、Aさんは出すお金がなくて結局行くこともできない。

これは、E、Hさんも同様である。兄弟たちに連絡すると、Eさんは貧乏な暮らしをしている自分がお金や何かを求めて連絡したと誤解されるため連絡できないと言う。Hさんも自分が連絡をすれば家族に心配かけることになるので連絡はしないほうが楽だという。

家族に会いたくても、家族に恥ずかしくない程度の生活ができないから、自ら家族との連絡を避ける

⁸⁷ 祭祀(チェサ)は本来、神様や亡くなった祖先を祭ることを言う。しかし韓国人が「祭祀をする」と日常で使う場合には、日本語の「法事をする」に近いニュアンスであり、神様でなく亡くなった祖先を祭るという意味で話されることがほとんどである。故人の命日に親戚一同が本家に集まり執り行われるが、普通長男の家で行う。祭祀の時、特別に準備する料理をチェス(祭羞)という。

ようになっていくようである。

◆(Q. ご家族とは連絡は?) まあ、お互いに(しない)。俺から連絡をしたら俺がこんなんだから助けてくれみたいと思われるか気になって。まあ、電話もしないの。姉さんたちはそう思わなくても、自分がそう思ってるかも知らんけど… (Eさん)

◆(Q. ご兄弟は?)

妹と弟がいる。母、おやじがいて。でも私は故郷にほとんど行かない。行きたくないし。こんな所に住んでいるから…
行こうとしても、金でもちょっと持って行かなきゃな…もちろん人に頼るようなことはなく、俺も(少しは)持ってるけど、それでも行って迷惑はかけちゃいけないんだろう。何年ぶりに急に顔出せば母、おやじが何だと思うだろうな。(中略) 連絡あんまりしないよ。私の弟たちは、私の連絡先も知らないから。教えてあげなかった。行かないのに電話番号とか教えたら心配するだろう。会わないほうがいい。(Hさん)

ひとりになった彼らは、ひとりで良かったと言っている。ひとりだから‘こんな生活’をしている。子供がいなくてむしろ幸いというC、Hさんは、次のように述べている。

◆(Q. ご結婚は?) 結婚はしたよ。 だが、長くは続かなかった。収入が少ないとうるさくして。最初は何千万ウォン持ってたの。結婚する時は、金も持ってたのに… (中略) 1年も一緒に住んでなかった。子供いなくて良かったな。子供いたらどっかの刑務所に入ってるだろうな。強盗して(笑)。子供がいなくて幸いだろう。俺、こんなんだから。
分かんない。子供がいたら妻子のために一生懸命働いたかも。
離婚してからは楽しみもなくて、酒ばかり飲んで。年月早いな。(Cさん)

◆子供はいない。いないからこうしてるの。子供がいたらこんなところじゃだめなの。大変だよ。恥ずかしいんじゃない。迷惑だし。子供が泣き出したら。主人が嫌がるんだよ。だから。私一人だから、食べたい時に食べて、遊びたかったら存分遊んで帰ったりそうすればいい。(Hさん)

6. 人付き合い

チョッパンの隣人同士の付き合いは、ほとんどない。喧嘩にならないように、互いに避け合うわけである。他方で‘こんな生活だから’家族とも連絡しづらい。では、それら以外に気楽に話しかえる相手がいるのか、あるいは心配事に相談できる相手がいるのだろうか。チョッパン居住者たちは、人

付き合いについて、以下のように語っている。

◆(隣人とは)話したくない。他人も同じくそうなの。自分の友達とか会ったら話すけど、じゃないと絶対話しはしない。

(Q. お友達は?) 友達いるよ。草梁2洞に。似たもの同士で集まるもんだから。同じ年齢のおっかない人間たち同士で集まって酒飲んで、交番いじめに行くさ(笑)。そっちの飲み屋に行ったらいつもいるの。(Q. 他の所は?) 居酒屋変えることあるか。帳付けできるのがそこしかないんだから。まあ…約束なんかそういうのはしなくても、仕事に行ったやつらは遅れて来て、眠気がしたら…冬は寒くて眠れないけど、夏はどこでもこぞを敷いて、庭も広いから。そこで寝るさ。そうしたら起こしたりもしない。酒飲んで酔ってたら酔ったなって(笑)。(中略)ここの人(相談所に来る人)とは話さない。(Cさん)

◆ここ(チョッパン)に俺より4、5年上の兄さんがいるんですよ。その人も俺と同じ船に乗ったことがある。どうやら船に乗る人同士は話しても豪快だから、その一人とは親しいです。それでも、まあ、(別の)知り合いのほうが(気楽です)。俺がこんな生活してるの分かるから、分かるから…急にお金は何十万ウォンずつ必要な時があったりするんです。その時はここにいる人たちにお金何十万ウォン貸してくれって頼んでも、まあ自分たちもひと月にお金何十万ウォン貰って生活しているから。結構、生活がキツクなると、(チョッパン居住者ではない)友人たちに助けてもらったりします。友人たちが気楽ですよ。そして地元の友達も釜山に何人いるから。(Eさん)

C、Eさんは友達がいるという。Cさんが言う「友達」は、幼なじみを意味している。幼なじみも類似した境遇で育ち、チョッパンと類似した環境で生活している場合がほとんどである。ところが先にも述べたように、類似した境遇におかれている同じチョッパンの隣人たちは話相手でも、友達でもないのである。

Eさんは同じチョッパンの建物に居住している人々のうち、親しい人がひとりいる。その人はチョッパンに来る前の知り合いである。また、お金が必要な場合、自分と同じ境遇であるチョッパン人たちには助けてもらえないことは自分の生活からわかるので、生活に困った時に気楽に相談できる相手は幼なじみなどの知り合いや、友達であるという。

◆話し相手? いないの。いない。ここの事務室(チョッパン相談所)に来て(話す)。旅人宿がすぐこの道の向かい側なんだけど、俺が一番近いんだよ。だから来て、浄水器あるから、その水をくんで一本持って帰って。本読んで、帰ったりするの。他の人たちとぶつかりたくないから。(Bさん)

◆いないですね。ここにたまに来て先生(職員)らに言ったり…

ここに来る人達に話しかけると、聞いてくれれば良いのに、そうじゃないから。傷つけられたくないんです。(中略) いないんですよ。なぜかと言うと、友達に騙されたことがあるからあんまり付き合おうとしないんです。友達にお金貸してあげたのに、後でホームレスになって帰って来るから、どうしようもないんです。ぶっ殺すわけにもいかないし。それで距離を置くんです。何か話しても知らん振りして。(Gさん)

◆話し合う人？ 別にいないな。(Fさん)

友達だと言える対象もないB、Gさんにとって、話相手はチョッパン相談所のスタッフである。チョッパン相談所に来て一日を過ごし、スタッフたちとする会話がすべてである。チョッパン相談所に来ていても、そこに集まっている他のチョッパン居住者たちとは話をするつもりもなく、ただ相談所で「時間をつぶして」帰るだけという。

第四節 未来:今後の生活について

1. 心配事

これからの生活において心配していることは何かについて、チョッパン居住者たちは大きく健康と金、居住に関することの三つを挙げている。

◆健康…です。坂道、階段に上がるのも大変です。腰が切れそうに痛いです。体調が相当良くない時は…釜山医療院みたいなところあるんじゃないですか。そこに入ってしまうばいいですよ。病院嫌だけど、年取ったら仕方がないでしょう。その時は、国がやってる病院だからそこにいればいい。俺が痛くて起きられなかったら、周りが電話してあそこに運んでくれるから。（Dさん）

病院が嫌いなDさんにとって、最も大きな悩みは健康である。痛みで苦しむことも問題であるけど、頼れる者がいないDさんにとって健康はもっとも大事なことであり、できれば嫌いな病院へ入院せず生活できるように健康を守るのが最も大きな関心事である。

◆健康がよくないこと…また、お金のこと。家賃払えてないから。お金がなければ昼も食べられないでしょ。お金が心配なの。（Fさん）

◆離婚後の生活が心配だよ。今も別居中なんだけど、だけど(夫から)お米代くらいは貰ってる。月10～20万ウォンくらい(夫に)貰ってるが、離婚したら、そのお金が貰えないから。まあ、食堂で皿洗いでもしなきゃ。そうしないと、生活できないからね。相談所のおじさんたち(スタッフ)も私にいつも何かくれるわけもないじゃない？相談所もあげるものがなくなると、あげないから。（Hさん）

Fさんも健康と金銭的な問題が最も心配だという。家賃を支払わず、食事を欠くことが起こることが一番心配である。女性のHさんも、別居中の夫との離婚後の金銭的なことが心配だという。AさんもFさんと同様に、健康や居住問題が心配だと語っているが、同時に「死んだほうがましかな」とも語っている。Cさんも「早く死んだ方がまし」という。

◆心配事。心配になるのは、健康。まあ…酒で体壊すことだろう。体が悪くならないようにしないと。俺、臓器提供も申請しといた。人生って、死んだらそこで終わりだろう。寄贈もしといたし…別に…まあ…。

ある時はこんなこと思うの。テレビで誰か死んで目をふさいでいる場面を観ると…その人がそんなに楽に見えちゃう。そんなの見てる時に。俺も死んでしまおうか思ったり、死ねばあんなに楽になるのに、そんな気になるのよ。まあ…心配は早くお金を貯めて、ここから出ることだけだよ。それだけでいいさ… (Aさん)

◆心配事ないの。そんなのない。早く死なないことくらいかな。長く生きて何するの。早く死んだほうが(良い)。 (Cさん)

Aさんは「死んだほうが楽かもしれない」という表現をしているが、それでも、心配事もあり引越したいとの希望もある。Cさんは生きる楽しみも、心配事もなく、ただ死ぬほうがましだと言っている。Cさんは、先にお酒を飲むこと以外は楽しみがないといていた人である。お酒で紛らわしているだけで、何も楽しみのない生活だと言いたいのであろう。そこまでは考えておらず、家族との関係もいまいちおうあるEさんは、祭祀日が気にかかる。

◆まあ…心配ごとはないです。だけど、節日が近付いてくると心配が多いんだよ。俺を生んで育ててくれた親に…俺がこんなところに住んでるけど、ナムルーつや魚一匹でもおいて祭祀でもしなきゃ。最近祭祀用のもの買おうとしたら、物価が高いすぎて、節日頃にはそれの心配だよ。 (Eさん)

前述した「家族関係」から、チョッパン居住者のほとんどは家族と連絡をしていないことをみた。ところが、EさんのようにAさん、Hさんは家族が嫌で連絡をしていないことではなく、家族に迷惑になるか、自分が家族になにもくれることがなくて、また「こんな生活」を見せたくなくて、自ら連絡をしていない。

2. 希望していること

これからの生活で希望することや、あるいは求めていることなどについての質問には、答えられなかったり、言ってもダメだから言う必要がないとの反応が多かった。福祉サービスへの希望だけでなく、今後の自分の生活の希望についても、彼らは語ろうとしない。

◆(Q. 何か必要なこととか、希望していることとかないですか？たとえば、相談所に希望していることとか？)

チョッパン相談所に…そうですね(笑)。希望事項は多いんですよ。多いけどいちいち言えないから。やってくれば良いけど、まあね… (Dさん)

◆支援してくれれば良いけど、まあ…俺だけに支援するわけでもないから。誰か言ったように、どっかでキムチでも貰って来ても、他のおかずはいいからキムチだけでももらえても(助かる)…障害者福祉会館、あそこはキムチみたいなものちょっとずつ分けてくれるけど、多くもないし、たいてい(障害)3級までの車いすの人は支援が多いが、俺は5級だから。相談所から扇風機、電気マットも貰って…相談所から支援をたくさんもらってるんです。たまには米もくれるし。ありがたいですよ。(Eさん)

◆言えば全部やってくれるの?できないでしょ?(笑)言うこともない。要ることとか、望んでることあっても…。言っても無駄だから。(Fさん)

彼らが希望を語ろうとしないのは、上で述べているように、希望しているサービスなどがあっても‘言ってもやってくれない’と諦めて言わないことのようなのである。「諦め」が希望を口にさせないのである。ところが、Bさんは具体的に、希望を語ってくれた。Bさんが望んでいることは、「楽に休める住まい」であり、その住まいを借りられる「お金」であった。

◆(Q. 心配ことはないですか?)

心配ごとは特別なことはないの。まず一番目に望んでいるのは俺が楽に休める場所。ここ(チョッパン相談所)で100万ウォンがあれば良いというんだけど、ひと月にいくらずつそれを貯めるのか…俺が一番必要なのは金じゃなく、俺が楽に休める住まい。それだよ。(Bさん)

第四章 散在型チョッパン居住者の生活Ⅱ

この章では、チョッパン居住者の生活をより多角的にみるため、チョッパンから買上賃貸住宅へ居住向上した元チョッパン居住者たちや、チョッパン居住者の身近なところで日常的に彼らに出会っているチョッパン運営者、チョッパン相談所のスタッフを対象として実施したインタビュー、および相談所やチョッパン付近での参与観察を利用し、彼らから見たチョッパン生活を示してみたい。

第一節 元チョッパン居住者たちが語るチョッパン生活と現在

チョッパンから買上賃貸住宅へ転居した元チョッパン居住者たちは、いわゆる、チョッパンから、それを「踏み台」にステップアップした人々といえる。ここでは、彼らのチョッパン時代の生活と現在の生活を比較して、どのようにステップアップしたのか、また現在の買上賃貸住宅での日課や人付き合いなどについてみていきたい。

1. チョッパンへの流入

先に示したように、インタビュー対象者のうちチョッパンから買上賃貸住宅へ移動した人は、Kさん、Lさん、Mさんの3人である(表51)。まず、3人の転居までのいきさつを簡単に記してみよう。

Kさんは、若い頃、洋服屋を運営してある程度の財産を貯めたが、離婚の際、慰謝料と子供の養育費で洋服屋を除いた全財産を妻に渡したという。その後、大型企業の洋服事業への参入などで店の赤字が増え、親の遺産分配の問題で兄弟との関係が悪化し、互いに連絡もしなくなった。つまり、離婚とその後続いた経済的な問題、そして遺産問題のもつれなどで、妻、子供、兄弟とは離れることになる。結局洋服店もつぶれて、チョッパンで一人で生活するようになった。チョッパンでは1年ほど生活したが、他のチョッパン居住者から買上賃貸住宅の情報を聞いてチョッパン相談所を訪ね、買上賃貸住宅に入居し2年程度経っているという。

釜山出身のLさんは、離婚後、家族と別れて釜山駅前で2～3年程度野宿生活をしたことがある。実は、その当時、日雇労働で働いていたので収入もあり、駅の近所のチョッパンを借りて家賃も払っていたという。しかし、「お酒と友達が好き」で、チョッパンに泊まらないで駅前で野宿をしたという。当時はチョッパンの家賃は払っていても、住所はない状態であった。その生活からチョッパンに住民登録をしてチョッパンで12年程度居住して、1年前に買上賃貸住宅に転居した。

Mさんは、失業・借金で住まいを失い、野宿生活を4年半程度したという。野宿生活からチョッパンにきて4～5年程度生活して、3年前から買上賃貸住宅に転居して生活している。Mさんが10歳と15歳

の時、父と母が相次いで死亡したため、学校をやめざるをえなくなり、その頃から働き始めた。兄弟がいたが、両親の死亡により兄弟も学校を辞め、ごろつきのような生活をしたという。そのため、Mさんは兄弟が怖くなって、連絡が少なくなったという。野宿へ至った決定的な理由は失業による借金と離婚であった。

L・L・Mさん、3人とも基礎生活保障受給者である。

表 51 買上賃貸住宅居住者の概要

居住類型		年齢	性別	野宿経験	居住歴	受給状態
買上賃貸住宅居住者	K	70代半ば	男	なし	他地域出身。自営業(洋服店運営)⇒赤字による借金発生。離婚⇒チョッパン居住(1年間)⇒買上賃貸住宅居住(2年間、雲台区に居住)	受給
	L	60代前半	男	2～3年程度	釜山出身。離婚⇒野宿(2～3年間)⇒チョッパン(12年間)⇒買上賃貸住宅(1年程度、鎮区居住)	受給
	M	50代後半	男	4年半	他市出身。住宅⇒失業、借金⇒野宿(4年半程度)⇒チョッパン(4～5年間)⇒買上賃貸住宅(3年程度、鎮区居住)	受給

彼らのうち、野宿経験がある人と、ない人がある。まず、野宿経験があったMさんは野宿からチョッパンへの転居とチョッパン生活を、以下のように語っている。

◆(Q. チョッパン生活はどうやって始めたんですか?)

(他のチョッパン居住者たちと)類似してます。共通して。(中略) IMFの時、株式に投資してたがそれが失敗して借金ができて。それに、IMFで(企業が)すごい解雇したんだが、俺も、首になって。そのショックで入院をしました。精神的な治療も受けたり、約半年くらい。その当時、野宿者に関するニュースが結構出たんですが、テレビみながら、俺も‘なんで(野宿者たちは)そういうふうにしてるのか’と思ってました。俺もやられたのに。

野宿者がなんなのか知らなかったです。なぜそうしてるのか、そう思いました。その時は、俺は病病気で入院してたから、別に気にしなかったんです。だが、退院して、頼れるところもなかったし(野宿することになった)。野宿を何年間したんだけど、最初は食べ物もない生活だったから、他人の視線とかは気にしなかったんですよ。だが、何年経ったら、こういう風に生きていたらダメだと、突然気が変わったんだ。最初は路上で寝ても、人たちが見ても気にしなかったんだけど…。(中略) 失業、借金で、彼女とも別れて全てを失って…再就職をしようとしてもだめだったし。最初は(野宿をし始めた時)、炊き出しの列に並ぶことも出来なかった。‘(食べるために)並ばないと’は思ったけど、怖かったの。食うために並んでいるその人たちと、そこに並んでいる俺も、可笑しかった。6日振りに(炊き出しで飯を食っ

た)。その時から1日に1食は食った。相談所に何回かきて、シャワー浴びて、助けてもらって(基礎生活保障)受給者になって、旅人宿に来るようになりました。賃貸住宅に入って3年くらいなってます。(中略)1年、2年経つうちに、恥ずかしいと思いました。また、野宿者のなかでは悪い人もいて、その人が弱い野宿者を苛めることをみながら、ダメな人(悪い人)とは付き合わないようにして、また俺ももっと強くならないと、と思いました。(中略)そんな(他人の)視線、最初は感じられないですよ。最初はひもじい腹を満たすことが先だから。(Mさん)

Mさんは4年半程度を野宿生活をしたが、その生活中に突然、人々の視線が感じられ、これ以上はどのように生きていくのはタメだと決心してチョッパンに入ったという。どういうわけでその視線が気になり始めたのだろうか。Mさんは、野宿生活になって食べ物さえなかった当時は、「飯を食うこと」が優先的なことであり、他人の視線は気にしなかったという。ところが、炊き出しなどで一応空腹問題が解決され、少しずつ人の視線が気になり始めたのである。

Mさんは野宿者に対する非野宿者たちやマスメディアの視線、支援サービスなどの不満を以下のように語っている。

◆(Q. 野宿生活する時に、他の人たちとの関係はどうでしたか?)

タイプが、2つあった。自分の区域を作って、その内だけでいる人、例えば、釜山駅だけでいる人がいて、他のタイプはあちこちにいて、良かったのか悪かったのかはわからないが、他の野宿者とも付き合うタイプ。私は後者ですね。ササン駅にも行って見て、駅という駅はすべて行って見て。

ところが、これ(酒)はしていません。(野宿者同士なのに他の野宿者のうち)障害者らのものを奪ったりする人たちは人間でもないですね。

一般人たちがみると、自分たちもお酒を飲むのに、道で座ってお酒飲んでいる人(野宿者)をみて‘あんな人に金をあげると(お酒ばかり飲んで)悪化させる’と、こんな風に言うのよ。自分がやるのはOKで、他人がすればダメだと、私はこの人より上だと。その人々は勘違いするんです。マスメディアも(野宿者を)良くみてなくて。(中略)俺は、野宿そんなに長くなかったです(笑)。30年くらい野宿してた人もいるから、俺の4、5年程度は(長くない)(笑)。(野宿者たちが)なぜそういう風に生きているのか、そんな視線…最初は知らないよ。最初は腹を拵えることが先だから。ある人は(野宿者を)犯罪者だと言っているけど。社会的なショックを受けて精神的に弱って、こう(野宿)なった人がおおいですよ。ここは、犯罪者とは違います。(中略)心理的な治療、精神的な治療をしてくれないといけません。(中略)駅前に来て“うちの施設に来てシャワー浴びてご飯食べなさい”と言ってるけど、それは意味がないですよ。宗教団体でしているシェルターあるんじゃないですか。食べさせて、泊まらせてる

けど、それだけではダメです。動物じゃないのに、1食食べさせたから、一晩泊ませたから、一人で生きていきなさいというのは…動物のように…それじゃないですか？宗教活動しなさいというし、バカにするし、人格的なそんなこと、多いですよ。(Mさん)

Mさんは、社会的原因で失業するなど“社会的なショック”のせいで野宿になった人が多く、そのため、寝食だけではなく心理的な治療・援助が必要だという。

それでは、Mさんのように野宿の経験があったLさんはどうしてチョッパンへ入ることになったのだろうか。

◆(Q. 野宿したことありますか？)

野宿してたよ。離婚して生計もダメだったし。(中略) 野宿する時、働きながら野宿しました。俺も友達(野宿者)も、お酒が好きで、釜山駅前の旅人宿(チョッパン)を借りておいても、野宿したりしました。釜山駅前で炊き出ししているのに(炊き出しには行かないで)買って食べたの。もし、そこで食べると誰かに見られるかもしれないから、昔の知り合いとか誰かに見られるかもと思って。(中略)だが、体調が悪くなって病院に行かなきゃいかなかったのに、受給者じゃなかったからすごい診療費がかかったよ。それで、旅人宿(チョッパン)に入って、住所を作って、受給者になった。(Lさん)

Lさんは野宿はしたものの、はじめは日雇労働で収入があったため、必要な時は釜山駅前のチョッパンで泊まることができた。ところが、野宿していた飲み仲間と酒を飲むため、結局野宿をすることが多かったという。その後、健康悪化で働くことが難しくなる一方、医療費の負担は増え、結局、基礎生活保障を受けるため、住所が必要だったのでチョッパンに住民登録をし、暮らし始めたという。

基礎生活保障受給を受けるためにチョッパンで暮らし始めたLさんは、何年間か住んでいたチョッパンから他区のチョッパンへ移住している。その主な理由のひとつが、Mさんと同様に‘人々の視線’や酒仲間と出会うことを避けるためであったという。‘他人の視線’や知り合いの存在がLさんにとって第2の故郷だいう町を離れる要因になったわけである。なお、‘炊き出ししていたところも移っちゃって’とも述べていたので、チョッパンで暮らしていた地域の福祉サービスのメリットが弱くなったことも転居に影響を及ぼしたのではないかと思われる。Lさんが別の区へ引っ越した理由は次のように語られている。

◆(Q. 東区から鎮区へ引っ越したワケは？)

(チョッパンに住民登録して)最初は東区に住んでたが、そこで長く住んでたら、まあ、知り合いによく会うし。会うと、またお酒飲んだりするから。それで、もうダメだと思って

(他区のチョッパンへ転居した)。部屋(チョッパン)を借りといても(酒と友だちが好きで)釜山駅前野宿してたが、それが長くなったら嫌になって。(それに)釜山駅の野宿者たちもみんな出て行って、それで炊き出ししていたところも移っちゃって。(東区を)第2のふるさと思う町なんだけど、(買い物にいくと)市場の商人たちがじろじろ見るし、それでここ(東区)はダメだと思って、西面(鎮区)に来たの。(Lさん)

野宿を経験せず、一般住宅からチョッパンにきたKさんは、“お金がなかったから”と、簡単にチョッパン居住の理由を述べた。それでは、チョッパンでの彼らの生活はどうだったのか。チョッパン生活について、Mさん、Lさんとも隣人と家主が‘うるさくなければ’チョッパンは長く居住ができる場だという。これは前述したように、現チョッパン居住者たちのインタビューにおいても出てきた点である。しかし、Mさんの場合は、特に家主との関係を隣人関係より重きをおいている。家主の小言が嫌でチョッパンを移したこともあるが、チョッパンのうるさい隣人たちを自分で追い出し、むしろ家主との関係が良くなったこともある。

◆(Q. 旅人宿生活はどうでしたか？隣人とか主人とは？)

野宿してからここ(チョッパン)に来た時、最初は良かったです。泊まれるところがあったから。(チョッパンが)うるさくても、初日一晩は天国でした。しかし、私は酒を飲まなのに、隣人たちが酒飲んで叫んだり、足で蹴ったりすると、いらいらするじゃないですか。俺、短気だけど、ずっと我慢しましたが、結局、うるさい人々、私が整理をしました。そしたら家主が喜んでましたよ(笑)。家主とは仲良かったです。旅人宿は1回移しました。最初に住んだところの家主は、水を節約しろって小言言ってストレスがたまったんです。二番目の旅人宿の家主と気があったんです。私が掃除もしてあげたし、うるさい人がいたらタッチして(黙らせた)。まだ家主の電話番号も知ってます。たまに連絡もする。(Mさん)

チョッパン居住において、気を使ったことは、3章と同じく‘基礎生活保障受給’を維持することである。そのため、転居をしても、なるべく区の移動はしない。なにより住民センター、つまり行政側から移動しないようにという要求があるからだとしてLさんは述べている

◆(Q. 旅人宿を変えたりしたことは？)

食堂の隣にある部屋(チョッパン)で、そこで何年間もずっと住んでた。(中略) その家主、人がいい。別にタッチもしないし、何人かの人たちは4、5年も住んでた。ここに住む人たちは、一度住み始めると動かないで住んでる。だいたい受給者だから。役所から“移転せずにそこでずっと住みなさい”と言われたし。移せば、受給書類の処理などで面倒くさくなるから。それは私たちも同じく面倒くさいから、できれば私たちも移さない。(中略)ここ(チョッ

パン)に住んでる人らが、まあまあ良ければ、旅人宿には家賃だけちゃんと払えば、気にすることないから、できれば転居しないで住む。20日に家賃払えば、ほかは気にすることないのよ…家主が私に‘代わりに家賃をもらっとけ’って言って、俺が集めてあげたりもしたよ。今のところ(買上賃貸住宅)に移って、もう5~6年になった。(Lさん)

2. 買上賃貸住宅への転居と、そこでの生活

次いで、チョッパン生活中にどのようなきっかけで買上賃貸住宅へ転居したのか、そして転居後の現在の生活をどう営んでいるかについてみていきたい。まず、買上賃貸住宅への入居のきっかけについて、Lさんは以下のように述べている。

◆(Q. 買上賃貸住宅はどう入ることになりましたか?)

チョッパン相談所が住宅公社⁸⁸に(買上賃貸住宅を)申請してくれたよ。

受給費が出てくると少しずつ貯めて、保証金(敷金)100万ウォン用意して(賃貸住宅に入った)。今、この隣の00アパートに住んでる。

(Q. どんな理由で買上賃貸住宅の入居申請をしましたか?)

住宅(買上賃貸住宅)は、2年に1回、再契約して最長10年間住めるよ。俺が、月に5万ウォンずつ、10年間貯めるとだいたい600万ウォンになる。10年間ここ(賃貸住宅)で住んで、お金貯めると、そうすると住宅公社の市営アパートに入ることができるのよ。市営アパートに入るためには300万ウォンくらい要る。(だけど)市営アパートに入れば、そこで一生住める。(永久賃貸住宅は)申請すればすぐ入れるんだけど、これ(お金)がないから、貯めないと。今住んでところが保証金100万ウォンで家賃が6万ウォン程度。電気料、水道料をたすと8万ウォン程度かかる。冬にはお湯使うから旅人宿と同じくらいの15万ウォンほどかかる。今は、都市ガス料が1,630ウォンで電気料が5千いくら。電気料は受給者だから割引してくれる。まあ、最近金は余るほどだよ(笑)。(中略)市営アパートは部屋もきれいだし、カビが生えたら住宅公社に電話すれば、修理してくれるし、都市ガスも使えるし、楽だからみんな行きたがるよ。(Lさん)

上のようにLさんは契約満了や再契約の不安の少ないところを求めて、買上賃貸住宅で生活している。チョッパンより安定的な買上賃貸住宅に住んでいるが、究極的には「永久賃貸アパート」に入りたいと言っている。買い上げ賃貸住宅は、永久賃貸アパートの入居条件を満たすため入居しているわけである。Lさんが表現している‘市営アパート’は永久賃貸アパート(または、住宅)を示すが、国民基礎

⁸⁸ 大韓土地住宅公社(LH公社)を示す。韓国土地住宅公社法(法律第9706号)に基づいて設立され、土地の取得・開発・備蓄・供給、都市の開発・整備、住宅の建設・供給・管理業務を行う。資金は、資本金と積立金、. 政府又は金融機関からの借入金などで構成されている(大韓土地住宅公社ホームページ)

生活保障受給者が優先順位が高く、入居すると自分で転居を希望したり、特別な事情がなければ、期間の限定なく居住できる住まいである。安定的に居住ができる永久賃貸住宅に入居するためには保証金をもっと要るが、そのお金を貯めながら賃貸住宅で生活をしている。それでも、チョッパン生活と比べ、居住費が減って“金が余るほど”とLさんは表現している。

Kさんも住んでいたチョッパンより安い家賃で住めるところを求めて買上賃貸住宅に入った。同じチョッパンの隣人が安い保証金で転居することをみて、相談所から買上賃貸住宅の情報や支援をうけ、入居したという。

◆(Q. 買上賃貸住宅の情報はどこから聞かれましたか?)

同じ旅館に住んでいた人が引っ越すって。どこへ行くのか聞いたら、その当時、50万ウォンの契約金を払ってどっか行くって。その時、家賃を17万ウォン払っていたが。それで(チョッパン相談所に来て)相談をしたの。その当時は(買上賃貸住宅を申し込む)申請者があまり多くなかったよ。それで相談所から家を紹介してもらって、すぐ引っ越したの。

(Q. 住んでいる賃貸住宅はどうですか?) 4世帯が住んでる。13坪くらいある。家賃は7万ウォンもしない。生計費を貰うと一番先に払う。残りはおかずやお酒買ったりする。(Kさん)

K・Lさん同様に、Mさんも、チョッパン相談所に助けてもらって買い上げ住宅へ入居している。

◆(チョッパン相談所から)助けてもらって引越しました。チョッパンより良いですよ。

(Mさん)

つまり3人とも買上賃貸住宅へ引っ越す際に、チョッパン相談所がその手続き、住宅紹介などの支援を行っている。前述したように居住脆弱所向け買上賃貸住宅事業は、大韓土地住宅公社(LH公社)及び住民センター(旧洞事務所)で申請ができるが、3人はその事業の運営機関⁸⁹として選定されているチョッパン相談所を通じて申請したわけである。

Lさん、Mさんの場合はチョッパン相談所から情報を得て転居するようになり、Kさんは同じチョッパンに居住していた人から聞いてチョッパン相談所に相談に行っている。いずれにしても、買上賃貸住宅への転居においては、チョッパン相談所が重要な役割を果たしている。

転居後の生活について、チョッパンとの比較で、3人は以下のように語っている。

◆(Q. 旅人宿生活はどのくらいなさったんですか?)

⁸⁹ 釜山市に6ヶ所の運営機関があり、2ヶ所のチョッパン相談所がその機関として選定されている。他の4ヶ所はホームレス支援に関する施設である(大韓土地住宅公社ホームページ2014.5.1)。

ここ鎮区の旅館に1年くらい住んだ。実家は他の市なんだけど、サンドンネ⁹⁰で賃借りして住んだり、旅館に住んだり、あちこち転々とした。(でも)今は不便なことなんかないよ。旅人宿と比べると、ここはホテルだよ(笑)。山があるからね。散歩コースがあるからいいのよ。

(Kさん)

◆(Q. 買上賃貸住宅はどうですか?)

チョッパン生活よりはるかに良いよ。環境が良いから、極端に違う。 野宿と旅人宿生活も環境ががらっと変わるから。 (Mさん)

K・Lさんは、居住費が大幅に減ったことを強調している。冬は暖房費の支出でチョッパンの家賃とほぼ同じ程度かかるが、その以外の季節は二人とも、水道・光熱料を含んでもチョッパンの家賃より8～9万ウォン程度の支出が減ったという。なお、K・Lさんは良くなった住宅環境にも満足している。チョッパンと比べ、“ホテル級” “はるかに良い”と住宅環境への満足度は高い。その上、Kさんは散歩ができる周辺環境にも満足している。ところが、実際に彼らが住んでいる買上賃貸住宅は、後でチョッパン相談所のスタッフのインタビューにも出ているように、一般的には決して良い住宅環境だとは言えない。普通の住宅市場に出しても競争力の弱い物件と思われるところが多い。K・Lさんの高い満足度は、却ってチョッパンがどんなに劣悪な環境だったのかを証明しているとも言えよう。

それでは、以上のように満足している買上賃貸住宅へ転居するため、彼らは何をどのように備えたのかについてみよう。Lさんは買上賃貸住宅へ引っ越しをするため、2年間に亘り保証金を貯めたという。そして、その保証金を貯めるため、無料で利用できるサービス提供先を探して回ったという。こうしながら少しずつ貯めて賃貸住宅へ引越して、以前より家賃も安く、経済的に安定した生活を営んでいる。4年間の野宿生活、そして4～5年間のチョッパン生活からステップアップしているLさんは、厳しい生活の中でも生計を切り詰めながら、今後さらなる居住向上を目指している。その居住向上の意欲にもっと影響を及ぼしたことは、買上賃貸住宅への転居を通じて‘貯蓄’が以前より容易になったことである。

◆(Q. 保証金を用意するのにどのくらいかかりました?)

100万ウォン貯めるのに2年がかかったな。月5万ウォンずつ貯めたから。その時、受給費⁹¹を24万ウォンもらって、それで生活したが、旅人宿費(家賃)を14万ウォン払ってから、

⁹⁰直訳すると「ダルドンネ」とは月のまち、「サンドンネ」とは山のまちを意味する韓国語表現である。前者は月に最も近いということを、後者は高い丘陵地の斜面に林立しているということを比喩しており当時の代表的な都市貧困層の集住地を象徴している。ほとんどの場合は国公有地の割合が高く、それを無許可で占有していた(全 2004)。

⁹¹ 生計給与(生活扶助)をいう。

10万ウォンでの生活したのよ。お金がないから(タダで利用できることを)あっちこっちに捜し回った。そうやってたら、他の人たち(チョッパン生活者)が俺について来たのよ。そんなところに行くとお金も一文くれるし、(無料で)飯も食えるから。俺も3年くらいそんなところを探し回ったわ。(Lさん)

むろん、転居後に居住環境が少し上昇したという理由で、受けていたサービスが減ったことへの不満もある。直前まで居住していたチョッパンと同一区内での買上賃貸住宅へ転居したが、転居による支援が減り、その差をLさんは“雲泥の差”と表現している。

◆(Q. 相談所以外に他のところから訪問サービスを受けたり、または行ったりするところはないですか?) 保健所でたまに訪問してくれて血压や血糖もチェックして行って、栄養剤も半月に一度持ってきてくれたりするよ。他のところ、特に洞事務所、こんなところは全然こない。私たちが訪ねて何か言ったりしないと。ここは老人が多いから、米ちょうだいと言っても私たちに何もくれない。釜山市内でここ(現居住地)が年寄りが一番多い区だよ。2年前に住民センターから電話があって“来てくれ”と言われて行ったら、ラーメン…ラーメン一箱渡されたのよ。他の区は米もラーメンも渡したり、お盆には商品券も3~4枚渡すのに、ここはそんなこと一切ない。年寄りが多くて俺らに渡す余裕がないみたい。(中略) 他の区に引越したくても、この家の契約期間中には住まなきゃ。ナンチョン洞とかサジック洞みたいな金持ちの町に移りたいな… そんな町には受給者があんまりいないのよ。だからあいつら(公務員)が直接(支給品を)持って(チョッパンに)訪ねるって。鎮区は受給者が多いからな。(中略) 旅人宿生活する時は、たまにはちょっとだけでも貰ったが、賃貸住宅に住んでからはそんなものない。何もない(笑)旅人宿に住んでた時は、ラーメンとか米とか、持って行けと(連絡もあったし)、(暖房用の)練炭もくれたりしてた。でも、そっちに引っ越してからは(そんな支援がない)。雲泥の差だよ(笑)。(Lさん)

先にも述べたように、Lさんは東区のチョッパンから鎮区のチョッパンに一度引っ越している。ところが、今回、Lさんが鎮区から離れなかった理由はLさん自身が面倒だったからということもあるが、住民センター(洞事務所)からの‘なるべく転居しないように’との要求もあったので同じ洞内で転居したという。だが、同じ区内の買上賃貸住宅へ転居後にサービスが減り、これからまた他の区へ転居を希望している。以前から基礎生活受給者であって洞事務所からの要請は同じだったかもしれないのに、どうじて転居にたいするKさんの態度は変わっているだろうか。それは、洞事務所の要請より、無料で利用できる施設を転々しているLさんの生活戦略が、そのような変化をもたらしているのではないだろうか。東区から鎮区へ転居する時には‘他人の視線が気になって’と述べていたが、これに加えて前述したように東区の福祉サービスより鎮区へ転居することにメリットがあったわけである。チョッ

パンから買上賃貸住宅への転居においてはそれほどサービスの差があるとは思わず、鎮区内で転居したのだが、買上賃貸住宅転居後は鎮区のサービス‘雲泥の差’になってしまったので、また支援のメリットがより高い区へ転居を希望していると考えられよう。

上のように、住宅をより向上させようとの意欲から、メリットの高い地区への転居をも厭わないLさんに比べて、Mさんは転居に関してはまだ計画はない。これからのことについて心配はしているけど、現在も未来も‘不安な状況’なので、計画をしてもそうできないからと事前に諦めているような表現をしている。

◆(Q. これからの転居とかの計画は?)

これからは…よく分かりません。住宅がどうなるか…(Q. 心配事とかはないでしょうか?)
これからどうなるか(のこと)…今50代なんだが、60、70になるとどうなるのかのこと…社会的な変化にもよるけど、今のこの状況が不安ですよ。‘こうしたい’と思っても、そうできることでもないし。希望も大きくないですよ。ただ普通に生きてみたい。働きながら、家庭ということを作ってみたい。愛する人と暮らすこと。

(Q. なにか計画していることはありますか?)

借金も多いし、そうなんだから…意志はあるけど、(雇われても)言いつけにしかがわれないから(笑)。お金があれば、商売でもやってみたい。社会から助けてもらったから…あげることがないから、臓器提供でもしようと思っている。(Mさん)

このように、不安な生活のなかでこれからのことにが心配だけど、家庭を作って、働きながら‘普通’に生きてみたいとの希望を語っている。その場合、Mさんは雇われて働くことよりは商売を望んでいる。そこで、働いた時に納めた「国民年金」の早期受領か貸出が出来るか問い合わせたが年齢(65歳)になるまでは受けられないことで、“ダメな法”と怒っている。

◆(中略)俺、国民年金を1500万ウォンくらい出しました。生きていくために、その年金の半分くらいでもくれと(国民年金公団の係員に)訴えたけど、くれなかった。65歳以上になると貰えられるが、貸出はしてくれなかった。でも、これは間違ってるんじゃないですか?たとえば、受給者だけど年金を納めた人に限っては…俺も今受給なんかいらんよ。受給受けなくてもいいから、それよりは(出した)年金1500万ウォン貰って生きたい。年金って30~40年後に貰えると言ってるけど、それはそのときのことだから。現在が重要でしょ。(必要な国民にはくれないのに)国はそのお金でどこかに投資もしてると聞いたんだが、それは矛盾じゃないですか? (国民も自分なりの)計画があるのに…65歳になると(年金が)出てくるけど、明日でも死んだらそれで終わりなのに。それに俺は(死後にあげる)子どものいないのに、ほんとにダメな法じゃないでしょうか。(Mさん)

韓国の国民年金⁹²の場合、毎月支給される「年金給与」と清算的に支給される「一時金給与」がある。そのうち、国民年金の基礎となる給与は、年金給与の一種類である「老齢年金」であるが、これは加入期間が10年以上で60歳になった場合に支給される。ここでMさんが言っている年金は一時金給与にあたる「返還一時金」を示している。これは年金が受けられなかったり、これからは加入できない場合に清算的性格として支給する給与である。つまり、加入者が①60歳になった場合、②死亡した場合、③国外移住などで国民年金にこれ以上加入できなくなった場合、これまで納付した保険料に利子を加えて一時金で支給するが、Mさんの場合はその条件を満たしていないので、国民年金からの給与はない。子どもや遺族になる人もいなく、いつ死ぬかもしれない不安な生活をしているMさんにとっては、未来よりは「現在」の生活が先なのである。

それでは、買上賃貸住宅へ転居した後の生活はどうか、まず、日課を中心にみよう。

◆(Q. 日課は?)

日課は別にないです。昼飯食べてから午後1～2時くらいなところ(チョッパン相談所)に来て時間つぶしたりする。交通費で月に3万ウォンくらいかかる。来るときは歩いて、帰るときはバスに乗るから。あいつら(チョッパン居住者たち)と西面に出て時間つぶしたりする。それとも保健所に行くと薬をもらえるからそっち行くことも。(Lさん)

◆(Q. 日課はどうなりますか?)

日課なんかないよ。日課なんかあるわけないでしょ。俺が元気で仕事をしてる訳でもないし、朝明けたら起きて暗くなったら寝て、それだけ。ここ(相談所)に来ることだけだよ。あそこ(買上賃貸住宅)で2年住んでも、ここ(相談所)ばかり来るから、あの町はよく知らない。この辺に戻って来たくても仕方がないね。10年間そこ(賃貸住宅)に住むしかない。まあ、どこで住んでもかまわない。電車乗っても金がかからないし、不便なことなんかないよ。(Kさん)

⁹² 韓国における国民年金の種類

年金給与(毎月支給)		一時金給与	
老齢年金	国民年金の基礎となる給与 ： 加入期間が10年以上で、60歳になった場合に支給 →老後の所得保障のための給与	返還一時金	年金が受けられなかったり、これ以上加入できない場合の、清算的性格として支給する給与
障害年金	障害による所得の減少に備えた給与	死亡一時金	遺族年金、または返還一時金を受けられない場合の、葬儀補助・補償的に支給する給与
遺族年金	加入者の死亡による遺族の生計を保護するための給与		

国民年金管理公団ホームページより

◆(Q. 今住んでいるところはどこですか?)

住んでいるチョリャン洞まで歩いて行くと40分ぐらいかかります。土日は来ないで、火曜日以外は平日は毎日来てます。月水金はここでヨガ講座があるから来てるが、(参加者が)私ひとりしかいない…誰もいないです。事務室の先生(相談所のスタッフ)たちと私だけ(笑)。木曜日はオカリナの練習しにきてるし。(Mさん)

以上のように3人とも買上賃貸住宅へ転居したにもかかわらず、依然として現在もチョッパン相談所に通っている。その理由として、仕事もなく、チョッパンに来たら何か一つは貰え、話相手がいるためだという。ということは、現チョッパン居住者たちの日常と変わらないとも言える。

自治体によって一部異なるが、釜山の場合、障害者及び老人は地下鉄の利用が無料である⁹³。基礎生活保障受給者はそれは適用されない。基礎生活受給者であっても、障害者または老人ではなければバスの利用は有料である。そのため、60代前半、50代後半のLさん、Mさんは受給者であっても交通費は掛り、非受給者でも70代であるKさんは無料で地下鉄が乗れる。地下鉄や徒歩で約一時間掛るけど、Kさんは経済的な負担がなくて、ほぼ毎日に来ている。むろん、Lさん、Mさんも交通費が掛るにも関わらず、毎日のように相談所に来ている。ここでMさんが言う“土日は来ない”ということは、チョッパン相談所が休みのため‘来れない’ということである。K・Mさん、二人とも交通費を減らすため、片道または往復を徒歩で通っている。

では、ほぼ毎日のように通っているチョッパン相談所を、彼らはどう位置づけているのか、彼らはチョッパン相談所を以下のように語っている。

◆酒飲んで騒いだりするやつらはここ(チョッパン相談所)に来れないの。ここから首になったら来れない。木曜日にはオカズくれて、米かなんかくれたりするし。ここで風呂とか洗濯もできるが、ここから出されたやつらは苦勞するよ。ここから追い出されると路上で寝泊りすることになっちゃう。そしたらで受給も切られる。

もちろん、ここから出たからといって全部がそうなることはない。酒のせいでそうなるのが多いね…酒のせいで追い出されるんだよ。(Lさん)

◆(Q. 広安里(Kさんの居住地)から相談所まで結構遠いのに、不便ではないですか?)

ここに来るのに不便なことなんかないよ。遊び半分で行ったり来たりするから。いつも来ると何か貰うし。ここはどこから金を貰って運営してるのか、いつもそれが気になる。聞いても教えてくれる訳ないから聞かないけど(笑)。ここ…俺にだけじゃなくて皆を助けてくれる。(Kさん)

⁹³ 高齢者(65歳以上)、障害者(1-3級の場合は保護者1人含む)、功労者(国家有功者(1-7級)、独立有功者、5・18民主者)は無料で地下鉄が利用できる(釜山交通公社ホームページ)

Lさんが語っている「チョッパン相談所」は現チョッパン居住者のインタビューと同様に生計と生存のため必ず関係を維持しなければならないところである。むろん、チョッパン居住者の中にはチョッパン相談所のサービスを利用していない人もあり、また相談所との関係にあまり囚われない人もいる。しかし、Lさんにとってチョッパン相談所との関係断絶は極端に言えば「野宿」に陥ることを意味する。Mさん、KさんにとってもLさんと同様に、チョッパン相談所は関係を維持しなければいけないところである。なにより、自分を信じて買上賃貸住宅を借りてくれて、頑張って生きていけるように支える心理的な支持をもらっているところでもある。このような理由で、彼らは転居し距離が遠くなっても、相談所に依然として通っているのである。

ところで、他区に住んでいるKさんの場合、現居住区にも老人福祉館のような福祉機関がある。福祉館の場合、利用対象が全地域住民となっているが、主な利用者は低所得層である。現チョッパン居住者たちも昼食を利用するため老人福祉館の敬老食堂をよく利用している。Kさんの場合は、老人福祉館が自宅から距離的に相談所より近い。だが、Kさんにとってその区の福祉館を利用することは、他の利用者たちのまなざしが気になるし、萎縮してしまう場所である。Mさんも現居住地の近くに福祉館はあるけど、費用も掛り、講座形式の余暇プログラムが多くて1～2人しか参加していないが、対話はすくなくとも、チョッパン相談所のプログラムに参加するほうが楽だという。

◆(Q. その町にも福祉館とか、ありますよね?)

福祉館みたいところは通わないの。年を取ってもまだ自尊心があるのか分からないけど、そっちは嫌いね。ここが楽だよ。一番楽。実家みたいだ(笑)。(Kさん)

◆今住んでるところも福祉館みたいところあるけど、自腹だし… ここはともに協働することだから。今、相談所の音楽活動に参加したりするが、ここは意欲みたいな…張りがでるし… (Mさん)

では、現在の買上賃貸住宅での隣人関係はどうなのだろうか。

◆(Q. あその隣人とは?)

住んでいるところには知り合いはいない。毎日ここ(相談所)に来る。決まった時間もないよ。毎日来るから。面倒くさいくらい来てる。来ても何もしないでいて、帰るの。ただ座ってるだけ(笑)。(中略)今の町…そこに3、4人くらい、挨拶くらいしかしない。話し合うんだったらここ(相談所) 来れば室長とか、ここに来てしゃべる。(Kさん)

Lさんの場合は、前からの知り合いが、現在の買上賃貸住宅にることと、それ以外の人たちとも掃除

ぐらいは一緒にすることもあるという。

◆(Q. 今、どの辺に住んでいますか?)

この近所の00アパートに住んでる。そこの受給者たち4人は知ってる。ここ(チョッパン)から移したから、元々知り合いなんだけど…他の人は知らない。あいつらはあいつらだけで話し合ったりするから。まあまあ静かなの。俺がたまに階段掃除すると、そんな時は一緒に掃除したり、まあ…掃除終わったら俺は俺の、あいつはあいつの部屋に入っちゃっう。それで終わりだよ。(中略)ここ(相談所)に来ると親しい人が多いよ。俺が先輩なの(笑)。また、昔から一緒に生活したやつら(野宿者)もこの町に居る。(中略)(チョッパン居住者たちと)会えば、‘誰か最近見ないな’とか、‘最近あいつ病院に行ったかーそれとも死んだのか’とかこんな話するよ。ここで会えなかったら、入院か刑務所に入ってたかったら、亡くなったか。そんな話して夕方になったら、やけ酒一杯するか、それとも5時ごろに帰る。テレビ観て、夕飯食べて寝る。(Lさん)

Mさんは、さらに積極的に今の隣人ともつきあっていると語っている。

◆(Q. 今のところの隣人とはどうですか?)

今の町ね。警備員さんも皆知ってる。挨拶もして。ちょっとした会話も交わして。そういう風に暮してる。同じ住宅に9世帯12人が住んでるが、私が今全部管理してる。管理費を集めることや掃除、全部やってる。‘俺がやる’と手上げたの。皆、自分は“できない”と言うから。(住宅を管理することが)ストレス溜まることもあるけど、大丈夫。ここ(チョッパン相談所)が、うまく生きて行くために住宅も借りてくれたから…私のことを信じてやってくれたから、そうしなきゃ。(Mさん)

このように、3人の買上賃貸住宅での人間関係の有り様は、若干違うようである。それでも日課の中心は、元のチョッパン相談所へ通うことにある。もちろんこれは、たまたま今回のインタビュー対象がチョッパン相談所からの紹介だったということが大きく影響しているかもしれない。だが、買上賃貸住宅へ移動して何年もたつのに、依然チョッパン相談所が日々の生活の中心にある人々も存在しているということは確かであろう。しかし、チョッパン相談所利用者同士の関係が深いというわけでもなさそうである。

◆(相談所に来ている人たちは)年齢的に俺より上だったりそれとも下だったりする。友達はいないです。心を開こうとする人もいればそうじゃない人もいて…会っても対話は単純です。私だけじゃなくて、ここ(チョッパン)の方々はだいたい食事問題、生活安否、昨日

何があったか…この程度です。まあそういうことです。深い対話はしないで…今後のこういう計画があるからやってみようという…そんなのはないです。（Mさん）

第二節 チョッパン運営者が語るチョッパン居住者たち

ここでは、チョッパン居住者と同じ建物で暮らしながら、彼らといつも出会っているチョッパン運営者たちが語っているチョッパン居住者の生活を描写してみよう。

まず、インタビューを実施した2人の運営者のうち、Nさん(50代前半)は、経済的な問題で4、5年前から母が運営していたチョッパンへ入り、母と同居していた。約5、6ヶ月前にチョッパンを運営してきた母が死亡し、母の代わりにNさんがチョッパンを運営している。現在、チョッパンの建物を傳貰⁹⁴で借りて運営しているが、最近、建物主から契約が終わる2年後には再契約しないで建物を空けてほしいと連絡を受けたという。運営中のチョッパンは、釜山駅から徒歩10分以内のところで位置しており、2階建ての、15部屋(チョッパン)があるが、ほとんど満室である。

Oさん(60代前半)は、20年間チョッパンを運営しており、13年前チョッパン建物を買ひ、自分が建物主でもある。子供たちは結婚していて、現在、Oさん一人でチョッパンで生活しながら管理している。運営中のチョッパンは釜山駅から徒歩15分程度掛かり、2分ほどの距離に市場がある。2階建てであり、部屋は6つある。他チョッパンよりも建物が老朽化しており、6つ部屋のうち、現在3つが空いている。家賃は2ヶ所とも15万ウォンである。分かりやすく、写真を添付する(写真13、14)。

写真 12 Oさんが運営しているチョッパン近所の市場



筆者撮影 (2012年8月)

⁹⁴ 第一章で既述したように、傳貰(チョンセ)とは韓国における不動産賃貸の一形態である、オーナー側が賃貸料として「傳貰金」を受け取り、一定期間不動産を使用させた後、不動産が返還される際に、傳貰金を返す制度である。

写真 13 Nさんが運営しているチョッパン



↑2階建ての1階にチョッパン運営者が居住しているが、この廊下の一番奥に居住している廊下の両方にあるドアが個室(チョッパン)である。



↑Nさんが運営しているチョッパンに居住している者の部屋⁹⁵

筆者撮影（2012年8月）

まず、NさんとOさんのチョッパン運営状況は若干異なっている。2ヶ所とも釜山駅がある鎮区に位置しているが、前述のようにNさんのチョッパンは満室、Oさんのチョッパンは空室率が高いほうである。それはOさんのチョッパンが老朽化していることがひとつの理由であろう。しかし、もうひとつは、Oさんのチョッパンは、家主であるOさんの部屋が出入口にあつて居住者と顔を合わせる頻度も多い。これに対して、NさんのチョッパンはNさんの部屋が奥にあつて居住者たちと対面することが少ない。特に、Oさんは、合う度に声を掛けたりすることが多いという。自分は居住者たちを考えてアドバイスをしていると述べているが、チョッパン居住者たちのインタビューからみると、運営者の部

⁹⁵ 居住者本人の承諾を得て撮影した。

屋が入り口にあり、しょっちゅう顔を合わせて何か言われるのは、居住者にとっては‘小言’が多い‘うるさい家主’と見られ、敬遠されることが多いと考えられる。

◆(Q. 長期間居住している人のほうが多いですか?)

他のところはどうなってるのか分からないけど、我が家(チョッパン)は長く住んでいる人が多い。よくわからないけど、他のところは1~2ヶ月もいられないみたい。いちいち小言言うから。私は電気、水、使うことに干渉しないから、一度ここに来ると、平均的に2~3年くらい、長く住んでる人は7、8年も住んでる。おじさんたち(チョッパン居住者たち)、受給者だからかわいそう…。(運営において)私が損してもいいじゃない。(中略)部屋は18個だけど、3個はうち(Nさんと夫、子供2)が使っていて、15個貸している。(中略)うちの部屋が一番奥にあるから、おじさんたちとはよく顔合わせることはないよ。わざわざ用がなければ奥まで入ってこないから。(Nさん)

◆(Q. この建物、ご本人の名義なんですか?)

うん。私の名義。でも、建物だけなの。古い建物だから、売れないし、売ってもお金にならない。(中略)この家(チョッパン)、13年くらい前買ったの。当時は、いつも人が入っていて空き部屋もなかったの。なのに、今はこんなところはもうダメだ。ワンルームマンションとか、そんなところができているから、ここはもうダメ。稼げられる人はそんなところに行っちゃうから、野宿者とか、仕方ない人々たちなんかがこういうところに来て住んでるの。市場は近いけど、2階にはトイレもなく、正直不便な点もある。だけど、受給者たちね、月35万ウォン程度しか貰わないの。そのお金では生活もできないのに、そんなところ(ワンルームマンション)に行くのよ。

市場も近いし、自分たちも私に(家賃で)15万ウォン払って、(残りで)暮らしたらいいのに、出て行っちゃうから(私が)生活ができないの。来たら1ヶ月泊まる人もいるし。一昨日は病院に行くと言ったのに、そのまま出ちゃったの。そうする人もいるし、一ヶ月、二ヶ月泊まって出たりするから、(チョッパン)運営ができないの。もちろん何年も住んでいる人たちもある。だけど、泊まる人が変わりすぎるから、収入が少なくて(私の)生活もできないね。部屋は2階に4つ、1階に2つ、全部で6つある。長く住んでる人はもう4年くらい経ってる。一番長く住んでるね。でも1ヶ月、2ヶ月で出たりするから、空き部屋が多くて…今日、チョッパン(相談所)が一人連れてくるって⁹⁶。本当に連れてくるかどうかはわからないけど、連れて来ても、みんな野宿者だから荷物なんか持って来ないし、来ても何も言わずに出ちゃう。

(Q. うして出て行っちゃうんでしょかね)わからない。私は私なりに(やさしく)やってあ

⁹⁶ 野宿している人のうち、チョッパン居住が必要であるか、チョッパン入居を希望している人をチョッパン相談所が入居斡旋及び家賃支援をしている。

げたのに…あその部屋に住んでた人も相談所を通じて来たんだが、糖尿病で大変だったから、病院に行くときは、“気をつけて行ってらっしゃい”と言ったり、“まだ受給者になってなかったから、なるべく受給者になってから出て行って”と気を使ってあげたのに。“どうしてもいられない”って。出て行っちゃたの。出て行きたいというから、仕方ないじゃない(笑)。釜山駅で野宿してた女を相談所が連れてきて2ヶ月暮らしたの。“酒飲まないで、お風呂も入ってきれいにしろ”と宥めたんだけど、2ヶ月間部屋の掃除もしなかったの。その2ヶ月のうち、半分は路上で寝たみたい。(Oさん)

チョッパン管理において、酒を飲んだり、騒いだりする居住者は運営者がためらうタイプである。しかし、N、Oさんの二人とも‘可哀そうだから仕方なく’あるいは‘受給者になるまで泊まらせてもらいたい’とのチョッパン相談所の依頼のため、このような人も受け入れているという。

◆(Q. うるさい人はいないですか？お酒のんで叫んだりする人とか？)

お酒飲んだりする人もいるが、追い出したいけど、そうできないのよ。おじさんが酔っ払っても365日、毎日酔っ払いじゃないですよ。十日くらい普通にいて、また一週間酔っていて…追い出しても戻ってきて、“ここから出ると行き場がないです。勘弁してください”と言うから、仕方がないです。だけど“もうダメだ”と、鍵をかけときますが、そうすると数日部屋の前に立ってて…受け入れるところもない人たちだから、他の人たち(チョッパン居住者)が“その人、追い出せ”と言っても、仕方がないですよ。お酒飲んだりする人はいるけど、叫んだり苛めたりはしないから。(Nさん)

◆お酒飲んだりする人は受け入れない。でも、チョッパン相談所から来る人は事務室との関係があるから受け入れるよ。なぜなら、受給を受けるためには住所が必要だって。それを考えるとお酒飲んだりする人でも、受け入れるしかない。酒を飲んでも“おじさん、お酒を飲まないで。受給者になるまでは、酒のまないで、おとなしくしていなさい”となだめるの。だが、受給者になると、他のところに行ってしまうんだよ。どこへ行くのかわからないけど、行くんだ。(ここより)良い所に行くだろう。それでも15万ウォンで、我が家(チョッパン)のように台所、トイレを備えてるところは、あんまりないのよ。そのお金では、どこに行っても同じだよ。少なくともここは市場も近くて、洗濯機もあるから洗濯も楽なのに…(出て行っちゃう)。(Oさん)

チョッパン居住者たちの建物内での人付き合いについて、運営者である自分たちとも、居住者同士とも同様に相手に関心もなく、対話もしない、ただ“寝泊りするだけ”と述べている。Nさんは“元々そんなところがチョッパン”だと言っている。

◆(Q. お母さんがいなくなって…?)

お婆さん(元チョッパン主)が見えないって。(お母さんが)亡くなったのに…。言わないと分からないよ。ここで住んでいても、覗き込まなければ分からないよ。ここのおじさんたち、知らないんだよ。ここで何年も住んでた人たちなのに、(お母さんが)亡くなって3、4ヶ月も経っても…まあね…お婆さん亡くなったねって。それだけ。

ここのおじさんたち、自分たち同士でも親しくもないし、良いことも悪いこともなく、ただここで住んでることだけ。それしかないよ。そうじゃない人は何人かしかない。チョッパン自体が、元々そうなのよ。(Nさん)

◆(Q. 住んでいる人々と話したりもされますか?)

ここの人々とはあまり話さないよ。私も話かけないし、お互い、まあね。(Q. 住んでいる人々をみるとどう思いますか?)まあね、(チョッパン居住者たちを)お客さんだと思ってる。家賃払って暮らしてるから。これも商売だからお客さんだと思っているよ。(Oさん)

しかし、チョッパンはもう稼げる商売ではないようである。建物を賃貸して運営しているNさんは、もう利益は期待できなく、契約が終わる2年後の自分たちの生計をどう営むかが心配である。Nさんはチョッパンの運営収益を期待するより、自治体の‘再開発事業’の対象になり、補償金を受けることを期待している。基礎生活保障受給者ではないけど、運営者たちも毎月の生計を心配している低所得世帯なのである。

◆(Q. 運営するのはどうですか?)

母が運営し始めた時は、けっこう稼いだそうです。(中略)2年後にはこの建物、空けなければなりません。お母さんがいる時は何も言っていなかったのに、私には2年後には空けてって。この建物、建てかえてオフィステルにするって。再開発の話が出てから。最近は公共料金も全部上がって、これ運営しても得することがないです。2年後はどうなるか…(中略)うちの末っ子が今小学校6年生なの。私と夫が働けるから基礎生活保障の受給はできないが、お金がなくて学校育成会費なんかなどは出せなくて学校からは低所得と区分されている。(中略) 私が食堂とかで働けば月100ウォンは稼ぐのに、ここ(チョッパン)を管理しなきゃいけないから、出ないですよ。これより、外で働くのがお金になる。(Nさん)

◆(Q. ここに来る人々はどう来るんですか? 自ら来る人が多いですか?)

自ら(ここ(の)チョッパンに)訪れる人はあまりいないよ。昔はけっこう多かったのに。自ら入ってきた人は何年も暮らしたりしたけど、相談所は野宿者をなくすために一応野宿者たち

を連れてくるから、そんな人々は半月か、長くても一ヶ月、二ヶ月くらい暮らして出て行っちゃうから…一部屋で月15万ウォン貰ってるが、生活ができない。あちこち痛いから、薬代で月10万ウォンくらい使ってるから、本当に足りないんだ。いつ再開できるのか…何年前からその話でてるのに…。(Oさん)

チョッパン居住者の生計について、Oさんは、彼らのために政府が働き場も作り出しており、通勤バスで送迎もさせてあげるのにもかかわらず、働いていない、つまり「頑張らない人々」と表現している。

◆(Q. 昔と比べてここで住んでる人々の違いとかありますか?)

(中略)1ヶ月くらい泊まった人がいたんだが、ビニールハウスで働いたの。だが、暑くて働けないって。仕事やめると、収入がないじゃん。それで出て行っちゃったの。

ここの人々ね、遊びたくなると遊んで、寝たくなったら寝ればいいと、自分勝手に生きているから働かないと思う。政府があんな人々を減らすために努めているわけだし、自分たちもそんな苦勞を乗り越えて生きていけばいいのにね。働くとも月70万ウォンくらい稼げるから、家賃で15万ウォン払って、節約しながら暮らせれば10万ウォンでも貯金できるじゃない?なのに、そうしない。暑いって。土日は休みで、週5日働いて70万ウォン貰うと多くない? 私たちなら、そう働きながら暮らすのに(居住者たちは)頑張らないみたい。(Oさん)

このように、チョッパン運営者が語るチョッパン居住者たちの生活は、居住者同士や運営者とも交流のない、ただ寝泊りする場所の意味しかなさそうである。運営者にとってチョッパン居住者たちは、追い出しても行くところのない、かわいそうな人々であり、しかしながら‘働けない’怠け者であり、自分たちの生計のための‘お客さん’である。

第三節 ゴシウォン居住者と居候の場合

ここでは、チョッパンと類似な住まいで暮らしている I さん、J さんを通じ、彼らの生活とチョッパン生活をみていきたい。

居住類型		年齢	性別	野宿経験	居住歴	受給状態
ゴシウォン居住者	I	60代前半	男	なし	釜山出身、未婚、全国転々。 住宅(姉と同居)⇒受給者を受けるため別居(旅人宿居住：6ヶ月程度)⇒ゴシウォン居住(2年)	受給
居候	J	60代前半	男	3年程度	他地域出身、孤児。 公務員(5年)⇒離婚⇒会社寮と野宿生活転々(3年)⇒チョッパン居住(1年程度)⇒買上賃貸住宅の家で居候(6ヶ月)	受給

ゴシウォンで生活している I さん(60代前半)は、結婚を約束していた彼女が事故で死亡し、現在まで結婚せずに全国を転々しながら生活したという。転々しながら建設現場で主に働いていたが、健康保険料もきちんと納められず、診察も受けていない状態であった。体が弱ってきて、診察をうけようとしたが、医療費の負担があまりにも高くて、基礎生活保障受給申請をした。しかし、その当時、体をこわしたため、転々とした生活を終え、ひとり暮らしの姉の家へ入り同居することになった。ところが自宅であった姉の家が、I さんの同一世帯の財産ととらえられ、基礎生活保障受給が受けられなかったという。仕方なく、ひとりで旅人宿へ転居し世帯を分けた後、受給者と認められ生計費などの給与(給付)を受けながら生活していた。しかし、住んでいた旅人宿がなくなってしまったので、保証金がないゴシウォンへ転居したという。

◆(Q. 今、どこで住んでいますか?) ケグム洞のゴシウォン。 ゴシウォンは、旅人宿(チョッパン)とは違うよ。(中略)住んでいた旅人宿が急に無くなるって。行くところがないから、探してみたんだが、月払いで行けるところは、ゴシウォンが多いって。それで、ゴシウォンがどういふところか行ってみたんだ。昔は学生たちが勉強するところだったって。家賃は月18万ウォンで、ゴシウォンにいるよ。(中略) 私はチョッパン生活はしたことない。ただ、(チョッパン相談所に)助けてもらうためにこの町に訪ねたりするね。この町ではまだ暮らしたことはないよ。(I さん)

I さんは旅人宿からゴシウォンへ転居した現在の生活について、家主も優しく、いつでもご飯が食べられることやチョッパンより支出が少ないことなどでゴシウォンがチョッパンよりマシだという。

◆(Q. ゴシウォンに若者も多いですか?)

ゴシウォンに住んでいる人たちは、最近はそんなに若い人じゃなく、普通 40-50 代、30 代から 50 代前後が多いよ。女性の部屋が 1 フロア、男性の部屋が 2 フロアあるみたいです。部屋はフロアに 25 室ずつ 50 室程度。でも、満室ではない。(入居者が)少なければ少ないほど、私たちには得だよ。(中略)ゴシウォンのおばさん(家主)はやさしいですよ。元々ゴシウォンの家主が一番嫌がっている人は、年取った人やお酒を飲む人なんだよ。だけど、(私も)年をとってるけど、私にはやさしい(笑)。

あの旅人宿(チョッパン)に暮らしている人に聞いてみたらほとんど(家賃が)15 万ウォン、17 万ウォンするって。それなら 18 万ウォンのゴシウォンで暮らしたほうががマシでしょ。ゴシウォンは部屋は(チョッパンより)ちょっと狭いけど、ゴシウォンがマシだ。ご飯を無料でくれるから。ご飯は 24 時間、炊飯器にあるから、自分が食べたい時に取って食べても何か言われることもないし、市場がすぐ近くにあるから、市場に出ておかず買って食べればいい。家賃はチョッパンより何万ウォン高いけど、(ご飯が無料だから)計算してみるとチョッパンより安いよ。(I さん)

I さんもチョッパン居住者と同じく「居住脆弱層むけ買上賃貸住宅」の入居対象になり、入居申請もしておいたという。ところが、今のゴシウォンより月支出が増えると思い、転居しなかったという。I さんの場合は、住宅環境条件より、支出を抑えることを優先してゴシウォンを選んだようである。

◆(Q. 買上賃貸住宅への引っ越しは考えたことないですか?)

賃貸住宅、申請はしていた。(入居できる)部屋が出たが、気に入る部屋がなかったよ。賃貸住宅は、一度入れば自分勝手に転居できることじゃないから…旅人宿のようなところは気に入らなかったら移ればいいけど、賃貸住宅は良かれ悪かれ特別な事情がなければ移ることが難しいから…一番気に入らなかったのが、ガスボイラーじゃなくて石油ボイラーだったこと。石油ボイラーは、つけるとお金がすごくかかる。それに、その石油ケースの購入費も自腹だし、また(石油ボイラーは)政府の減免も受けられないし。お金を節約しようとボイラーをつけないと、また冬にはすごく寒いし、お湯が出ないからジャワー浴びることもできないし…(中略)ゴシウォンが家賃は高いけど、暖房もあるし、シャワーも浴びられるから…(この前、紹介してもらった買上賃貸住宅より)もっと良い部屋が出たら行けばいいから、転居しないことにした。(I さん)

最近の I さんは一日を老人福祉館で過ごしているという。支援を受けるためにチョッパン相談所に来て、壁に貼ってあった老人福祉館のチラシを見て無料で昼食を食べるために行ったことがきっかけになり、現在は一日を福祉館で過ごしている。

◆ (Q. 日課はどのようなんですか?)

最近(老人)福祉館で一日を過ごしている。完全にわが家みたいに(一日を過ごしている)。歩いて1時間半くらいかかるけど、運動だと思って。お医者さんが歩いたり、運動しなさいって。別の人たちは9~10時になると家を出て11時になって(老人福祉館に)着くけど、俺は朝7~8時になると起きて、福祉館まで運動兼、歩いて行く。それで福祉館に着いてからも、福祉館のなかにあるジムで運動する。運動して、3階の図書館で本を読んだりする。それから(敬老食堂で)お昼食べて、余暇プログラムに参加して友だちと話し合ったり、初めて会った人と友だちになったりする。(中略)福祉館でできた友だちが私の事情を聞いて‘お金が要る場合は言って’って。本当に貸してくれるかどうかわからないけど、優しい人たちだな。相談所は用があれば来ている。(中略)他人に見せるため生きていくことじゃなくて、俺、自分が満足するため生きていくことだし、自分が楽しければ良いのよ。(Q. 住んでいるところに他の福祉機関はないですか?福祉館とか?)住んでるところに福祉館はあるよ。最初は福祉館があることも知らなかったし、福祉館でお昼が食べられることも知らなかった。私は、福祉館って遊びに行くところだと思ってたからよく知らなかった。相談所に来たら、この区の老人福祉館でお昼が食べれると、また受給者はタダだと、貼ってあるチラシを見て知った。あっち(老人福祉館)に行く前は、龜浦(地域名)の橋の下でお昼飯を食べた。進級したよ(笑)。(Iさん)

最初、Iさんは福祉館は遊びに行くところだと、自分が行くところではなさそうな考えで興味がなかった。しかし、生計のために無料給食ができる福祉館を訪ね、余暇プログラムに参加しながら人に出会い、友だちも作ったりしている。橋の下での炊き出しで昼食を食べたが、今は福祉館の敬老食堂で食べていることを‘進級した’といっているが、‘進級して’利用している老人福祉館では人付き合いも円滑で、ただテレビをみながら時間をつぶしているチョッパン相談所での日常とは違う日々を過ごしているようである。

ゴシウォンで暮らしているIさんは、実は「元チョッパン居住者」であったともいえる。ゴシウォンへ転居する前、住んでいた‘旅人宿’は実はチョッパン相談所がサービスを提供していた対象者が多く住んでいた‘チョッパン’であり、相談所が支援のために訪ねていた旅人宿であった。上のIさんの語りから分かるように、Iさんはチョッパンはチョッパン相談所の近隣にある部屋と認識している。したがって、チョッパンには住んでないけどチョッパン相談所には来ていると言っており、チョッパン居住者ではないことを強調している。

チョッパンから買上賃貸住宅へ転居し生活している人の家で居候をしているJさん(60代前半)は、記憶がないほどの幼い頃に親が死亡し、兄弟たちと孤児院で育てられた。中学校を中退しお金を稼ぎ始めたが、兄弟とはあまり繋がりもなく、自然に連絡が途絶えたという。結婚後には消防士、引越会

社で運転手などの仕事をしていましたが、離婚や失業で、放蕩な生活を始め、野宿にまで至り 3 年程度路上で生活をしたという。野宿生活中に、突然こういう風に生きていってはいけないと思い、建設現場の日雇労働を始めた。ところが、仕事帰りでお酒を飲んで道路を横断しようとした時、交通事故にあって足に大怪我をして約 2 年程度を入院したという。ところが、その事故が J さんに責任のある事故富みなされ、何の保障も受けられず、持っていたお金を手術費や入院費で使い切って、部屋を借りることができなく釜山駅の近くを転々するようになったという。当時に釜山駅で野宿していた知り合いから‘チョッパン’について聞き、自らチョッパン相談所を訪ね、チョッパンを紹介してもらい暮らし始めたという。ところが、最初は 15 万ウォンだった家賃が、家主が 17 万ウォンと値上げをして、J さんの生活が厳しくなった。その時、チョッパン相談所のスタッフから、買入れ賃貸住宅に住む元チョッパン居住者である高齢者の家で居候しながら世話をして、家賃にかかるお金を減らす方法はどうかと提案されたので、住み込みを始め、現在 6 ヶ月程経っている。

◆離婚して、失業して…酒に…放蕩な生活が始まりました。

その生活中に突然倒れて、目覚めたら病院だったよ。20 日ぐらい病院に入院しました。退院後に釜山へ来て野宿しました。(中略)交通事故で 2 年くらい入院しました。(中略)日曜日になると 3、4 ヶ所の教会を回ると何万ウォンを貰いました。お寺は、現金はくれなかった。お米でくれるから、貰った米は釜山駅前に持っていくと、とそれ(お米)を買い取るおばさんがいるが、そのおばさんに売って暮らしたよ。(中略)地下鉄に一回乗ると、(物乞いすると)10 万ウォンくらいは儲けました。いつ、どこに行けばいいのか、把握できましたよ(笑)。

昨年からチョッパンで住んでいます。(お金とか)何もないから。また野宿はちょっと…それで釜山駅の後輩たち(知り合い)がチョッパンに行ってみなさいって。私はチョッパン相談所が部屋(チョッパン)をタダで貸してくれると思って来ました。相談所が旅人宿(チョッパン)を紹介してくれた、旅人宿で約 1 年ぐらい住んでいたが、(私が)真面目だから、あっち(買上賃貸住宅で居候しながら)でお手伝いをしてあげればどうかと誘われて、入ることにしました。(J さん)

居候する前に、その住宅に行き、‘一般住宅’の良さや家賃にかかるお金を減らせるメリットがあって転居したが、思ったより高齢者である同居人の世話をするのは大変だという。しかし、より安定した買上賃貸住宅に転居する方がよいというチョッパン相談所のスタッフのアドバイスもあり、転居手続きをせず、まだチョッパンに住所を登録しておいたままである。6 ヶ月程度経っている現在の生活を維持できるか本人も心配している。

◆(Q. あそこの生活はどうですか?)

お手伝いしながら泊まるのが大変ですよ。部屋の掃除、食器洗い、洗濯…あの方(同居人)

が便秘で浣腸をしなければならないです。お年寄りってそうじゃないですか。ちょっと汚いし…入らないほうが良かったなと思います。

入る前に家(買上賃貸住宅)に言ってみましたが、家がきれいで良さそうだったんです。旅人宿で15万ウォンだった家賃が17万ウォンになっちゃったから、家賃払って、タバコ代で使うとお金が余らないから…家も良さそうだし入ったけど…今は(家賃で)5万ウォン出しています。2LDK。チョッパン相談所から色々ともうけてもらっています。お米も、5kgだったかな、それもくれて。冬には服もくれるし、色々くれます。

だが、あっちに転居届は出してないです。まだ旅人宿(チョッパン)に住所はそのままであるよ。買上賃貸住宅の入居申請をするためには、住所があっち(チョッパン)じゃないと、ダメだから。相談所(のスタッフ)からそういわれました。私の書類(買上賃貸住宅の申請書類)が土地住宅公社(LH 公社)の審査が終わるまでは転居手続きはしないでって。

だが…(お手伝いしている今の生活が)大変ですよ。最初、掃除を一週間もしました。冷蔵庫、キッチン、床、汚くて、ゴキブリや虫、カビ…表現できないほどでしたよ。相談所(のボランティアさんが訪問して)たまに掃除もしてくれるけど…

一般住宅だから良さそうで入ったけど、大変だよ。(Jさん)

ところが、Jさんは、次のようにも言うのである。

◆死んだら、何ができますか？できることないですけど、目もまだ良いし、体を寄贈しました。臓器提供…そのセンター(臓器提供センター)がチョッパン相談所すぐ近くにあるよ。自ら申請してきました。人生の最後…良いことしたくて…死んだら、まあ…(Jさん)

臓器提供の話は、買上賃貸住宅のMさんの話にも出てきている。何も社会へ「良いこと」が出来なかったから、せめてこの体を、ということなのであろう。贈与されるばかりの自分にも、最後は贈与が出来ると、考えるのは、野宿やチョッパン生活を経してきた人々にとって、なにがしか救いになることなのかもしれない。

第五節 ある日のチョッパン相談所とその周辺

チョッパン居住者だけでなく、買上賃貸住宅へ転出した人びとにとっても、チョッパン相談所は、彼らが生きていくための重要な「場所」であり、相談所との関係を維持していくことが重要であることが、これまでの記述でも明らかである。それでは、具体的にチョッパン相談所で彼らはどのように過ごしているのだろうか。また散在型である釜山の特徴として相談所の周辺の様子、市場等についての観察も加えて、ある日のチョッパン相談所を観察してみよう。

以下は2012年8月に、釜山にある二つの相談所とその周辺について、それぞれ一週間ずつ訪問し行った参与観察の記録である。

まず、チョッパン相談所について若干説明すると次のようである。

既述したように、釜山には二つのチョッパン相談所がある。まず、鎮区チョッパン相談所は、ロッテデパートや大型のショッピングモールが密集している繁華街である西面に位置している。地下鉄を降りて徒歩10分以内であり、3階建ての2階に事務室や相談室、洗濯機置き場やシャワー室がある。3階にはプログラム室があり、そこで禁煙教室、オカリナ教室などのプログラムを実施している。東区チョッパン相談所はKTX⁹⁷が止まる釜山駅の近くに位置している。2階建ての2階に事務室、相談室、プログラム室、洗濯機置き場、シャワー室がある。二つのチョッパン相談室両方とも、事務室がある場所にソファ、テーブルがあつて、チョッパン居住者たちが座ってテレビを見たりしながら、時間を過ごせるスペースがある。写真15は東区チョッパン相談所の事務室内にあるそのスペースであるが、鎮区チョッパン相談所はこれより狭くて5～6人程度座れるスペースである。なお、二つのチョッパン相談所があるすぐ近くにホームレス総合支援センターが位置している。

まず、鎮区チョッパン相談所でのエピソードである

◆Episode 1. 音楽教室での様子(1時間半ずつ、2回観察)

>> 観察1回目

：開始時刻より20分経過したが、チョッパン居住者は1人だけ参加している。チョッパン相談所のスタッフ2人と居住者1人がオカリナ楽譜を見ながら、どう吹くのかについてお互いに教えてあげたりして学んでいる。チョッパン居住者がスタッフに吹く方法を教えたら、スタッフが、居住者に上手だと褒めた。褒められた居住者は恥ずかしそうに笑う。30分が過ぎてもう1人の参加者が着き、終わるまで4人でお互いに教えあつて、学んでいる。熱心に学んで、年末には、昨年のように他の所での公演もしてみようとスタッフが行ったら、居住者たちが去年の公演について話し始めた。専門講師がいるわけではなく、居住者とスタッフが話しながら練習している様子である。

⁹⁷ ソウル～釜山をつなぐ高速鉄道である。

>> 観察2回目

： 次回の授業にも2人とスタッフ2人が参加している。今回参加した2人は、先週に欠席した人々である。一人は20代後半の男性で、もう一人は50代の女性である。10分ほど遅れて着いた女性は、スタッフや、他の参加者に喜んであいさつして話をかけている。女性に声かけられた男性は笑って答える。

◆Episode2. 12:50分頃、チョッパン相談所の入り口での様子

： 5人のチョッパン居住者が相談所の前の道に立っている。昼休みにはチョッパン相談所の門を閉めるため、事務室に入れない。ドアを開ける1時まで事務室の前で待っている。簡単におじぎをした5人は互いに話しはせずに10分程度待っていた。チョッパン相談所のドアが開くと、事務室の中に入り、各々ソファに座る。特別な会話はせずに一人は隣の本棚から本を取り出して読み始め、同じ年齢代の3人は安否を問うなどのわずかな会話を交わしている。

◆Episode3. 3時頃、チョッパン相談所の事務室

： 相談所のスタッフが事務室のソファに座っている居住者に「パンがあるよ」と声をかける。寄付されたパンがあって、来ている居住者たち何人かに渡した。残りのパンは、スタッフが包んで、持ち帰るように再び渡している。ある居住者が“これはあまり好みじゃないから-”と言われ、スタッフと（観察者が）パンがはいっているビニール袋の中を探し、好みのパンを取り出して渡す。ソファに座ってパンを食べている。隣の机に座っていたスタッフは買上賃貸住宅に住んでいる人々に電話をかけて、家賃をきちんと払っているのか確認している。安否を聞いて、優しく、支払い日には、きちんと家賃を払うように促している。

◆Episode4. 夕方頃、チョッパン相談所

： 4時を過ぎたら、座っていた居住者たちが相次いで立ち上がる。帰りにおかずを受け取って帰る。

事務室でテレビを視たり、本を読んだりしながら静かに過ごしている人々の雰囲気と、音楽教室での雰囲気はかなり異なっている。音楽教室では全般的に自由で、参加者間にも、参加者とスタッフの間も安否を聞いたり、挨拶をしながら相手に声をかけたりする様子が見られた。寄付されたパンを支給する時には、貰う方のチョッパン居住者が自分の好みも気楽に言って、スタッフもそれに合わせて探してあげている。

次は、東区チョッパン相談所でのエピソードである。

◆Episode5. 2時頃、チョッパン相談所の事務室

： 2時ごろ、相談所のソファに座っている人は6人程度であり、そのうち、2人はソファに座って居眠りしている。 2人は囲碁をしていて、ほかの2人はテレビを見たり、囲碁をしている2人を見ている。囲碁をしている人に、それを見ていた人がアドバイスをするが、返事もせず、碁を打っている。

すぐ隣の小さなプログラム室では、ドアを開けたまま禁酒教室が行われているが、参加者は2人しかいない。詳しい内容までは聞こえないが、ソファに座っている人々にも声は聞こえるほど近いところで禁酒講義が行われているが、こちらは、禁酒教室には興味なさそうに、テレビを視たりしている。

◆Episode6. 3時頃、チョッパン相談所の事務室

： 40代後半とみられる女性が相談所に入ってきて、すぐにスタッフがいる方に行く。事務室内のソファにチョッパン居住者たちが座っていたが、そちらには全然目を向けずに、すぐスタッフへのところに行って、買上賃貸住宅の申請について10分ほど話をする。話が終わって相談所を出た女性が5分後に再び事務室に入ってきてスタッフに飲み物をひとつずつ渡して、すぐ帰る。

◆Episode7. 4時頃、チョッパン相談所の事務室

： テレビを観ていた一人が帰りの時間になり、立ち上がってスタッフ一人ひとりに挨拶をしてから帰る。

◆Episode8. チョッパン相談所の事務室

： 事務室の奥にある相談室内で研究者とスタッフ(仮名. アさん)が話し合っている時に、チョッパン居住者一人が買上賃貸住宅に関して問い合わせるため事務室に来てスタッフ(アさん)と面談を希望した。それを他のスタッフ(仮名. ウさん)がアさんに知らせた。ところが、アさんが“なんで今日来たの！忙しいのに！明日来なさいと言って”と、面談を断った。腹をたて面談を断るアさんの反応にウさんと研究者が困っていたら、アさんが面談するため相談室を出た。面談を希望していた居住者に会って、約10分後に事務室内の相談室に戻ってくる。

以上のチョッパン相談所での様子は、インタビューを通じてみたことに似ている。利用者同士はお互いに安否確認のような簡単な話はするが、別にそれ以上関わることなくテレビを見たりしている。それに対して、利用者とチョッパン相談所のスタッフには少し話し合ったりする様子があり、チョッパン居住者が「気を利かせて」スタッフに飲み物のようなものをあげたりもする。ところが、二つのチョッパン相談所の雰囲気、つまりチョッパン相談所のスタッフの態度による相談所内の雰囲気の差

が若干見られる。

鎮区チョッパン相談所の場合はスタッフがチョッパン居住者たちに声をかける場合が多く、寄付品を渡す場合も居住者の好みについて話したりした。また、少数しか参加しないプログラムではあるが、音楽教室等はスタッフも参加し、居住者たちと教え合ったりする様子があった。これに比べ、東区チョッパン相談所は、来ているチョッパン居住者の人数は多いほうだったが、居住者同士や相談所のスタッフとの話しかけが少ない。ただし、両方の相談所とも、チョッパン居住者たちの多くは、特別なプログラムに参加することなく、テレビなどで昼間を過ごしているのはほとんど変わらない。

次は、調査のため訪問したチョッパンやチョッパン近隣でのエピソードである。

◆Episode8. 昼2時頃、チョッパンA

： 昼2時頃、チョッパンを訪ねたが、チョッパン入口にある部屋で2人がお酒を飲んでいて、すでに酔っ払って発音も不正確な状態である。チョッパン運営者へのインタビューを終えて部屋を出てきたら、お酒を飲んでいた居住者がインタビューーに何か話をかけたが、チョッパン運営者が話を切って“頭がおかしい人々だから、気にしないで。無視してもいい”と言いながらインタビューーを急いで見送りだす。そのようなチョッパン運営者の行動に、“なぜ我々をバカにするのよ！”と酒を飲んでいた2人が声をあげる。運営者がインタビューーを送りだしてドアを閉め、自分の部屋に戻って入る様子が見える。

◆Episode9. 4時頃、チョッパンB

： 4時頃に訪れたチョッパンの各部屋のドアは閉めてある。5時過ぎに、1、2人ずつ帰ってきてシャワーを浴びるため、共同シャワー室に入ったりするが、下着だけ着たまま行ったり来たりする様子で、運営者が“服くらいは着て通えばいいのに”と独り言を言っている。

◆Episode10. チョッパン近隣の道

： 訪問インタビューをするためにチョッパンの周りで道を探していたインタビューーに旅館主とみられる60代ほどの女性が“市役所からきたか”と声をかける。違うと返事しても、再開発のために調査しにきた者ではないかと、インタビューーに再び聞く。

◆Episode11. チョッパン近隣の市場

： 昼間にもかかわらず、市場内の小さな飲み屋でお酒を飲む姿が見られる。チョッパン直近の市場の場合は、平日の昼間は人が込むけど、週末はむしろ開かない店も多く、人通りがまばらである。午後1-2時頃だが、酒に酔って市場内の路上で寝転んでいる人が見えるが、すぐ横で市場の商人たち4人は平気でおしゃべりをしている。

調査のために訪ねたAチョッパンでは昼間にお酒を飲んでいるチョッパン居住者とその人々を‘頭がおかしい人々’と言っているチョッパン運営者があり、Bチョッパンでは共同生活をしているのに下着で生活している居住者に対する文句を独り言でいう運営者がいた。運営者たちは居住者たちがお酒を飲んだり、下着で生活したりする、生活様式に不満を持っている。運営者の立場からは、共同生活をしているからチョッパンを管理するためある程度のルール、規制が必要かもしれないが、Aチョッパン運営者の場合はそのことより、居住者たちを蔑視している傾向がみえる。なお、チョッパン近隣の市場内で、酒に酔って路上で寝転んでいる人を気にせずにおしゃべりしている商人たちの様子があったが、そのような光景は商人たちには日常的なことなのであろう。

集中型チョッパン地域の場合、見えないバリアに囲まれ、その見えないバリアの中にあるチョッパン居住者たちは、その地域内にある小さなあずま屋に集まってお酒を飲んだりする光景がよくあるが(キム・ヒョジン2009)、散在型チョッパンでは近隣で集まっている光景はほとんどみられなかった。

なお、チョッパン近隣ではチョッパン運営者にみえる女性がインタビューに再開発のために調査しにきた行政の者なのかを問うていたが、お客さんより再開発を待っているよう様子が興味深い。

第四節 チョッパン相談所のスタッフが語るチョッパン居住者たち

それでは、以上のようなチョッパン相談所での彼らの日常を支えているチョッパン相談所のスタッフは彼らをどう思っているのか。ここでは、チョッパン相談所のスタッフの表現でチョッパン居住者たちがどうとらえられているのかをみてみたい。

まず、インタビューは釜山にある二つのチョッパン相談所のスタッフのうち、異なった相談所の3名に対して行った(表52)。

3名はすべて社会福祉士であり、そのうち二人は大学を卒業してすぐチョッパン相談所に就職し勤めている人である。チョッパン相談所の平均勤務年数より長いほうである。釜山にある二つのチョッパン相談所の場合、運営主体が宗教法人(大韓プロテスタント長老会)であるので、その特性がスタッフの構成にも少しみられる。

表 52 インタビューしたチョッパン相談所のスタッフの概要

チョッパン相談所		チョッパン 相談所経歴	参考
東区チョッパン相談所	P	11年	社会福祉士、他施設での経歴なし
鎮区チョッパン相談所	Q	3年	社会福祉士、牧師
	R	7～8年	社会福祉士、他施設での経歴なし

1. チョッパンの生活、そして買上賃貸住宅への転居

Rさんは、チョッパン居住者たちの地域内の生活、地域住民との関係について次のように述べている。

◆旅人宿(チョッパン)に暮らすと、一般地域住民と交じわる機会もあまりないです。旅人宿に閉じこもって、あるいは、00書店前(西面の繁華街)か駅前とか、おじさん(チョッパン居住者)たちがよく集まる場所があるんですが、そこでお酒飲んだりするくらいです。旅人宿で暮らしている方々は一般の地域住民と交じわることは…少ないです。そして、旅人宿自体が一般住宅街にあまり位置してないですから…駅周辺とか、商店街にあるから、一般住民たちと付き合う機会もないです。その町の小さな店の場合は、おじさんたちがお酒買いに寄るから顔くらいは知ってるけど。チョッパン・旅人宿に住んでいる方々は、そこに住んでいる居住者同士でも仲が良くない場合が多いです。自分もそこで暮らしているのに、隣に住む人たちを軽蔑する場合も多く、関わらないようにしている人も多かったです。

おじさんたち…‘チョッパンに定着している’と表現できるかな。ちょっと表現に語弊があるかもしれないですけど、おじさんたち自分の住居環境で、それなりに楽しく暮らそうと

している方々が多いです。(Rさん)

つまり、Rさんはチョッパン居住者たちが劣悪な居住環境に置かれているけど、自分なりに楽しく生活しようとしたり、実際にそう暮らしている場合が多いという。‘チョッパンに定着している’という表現は印象的である。もちろん、地域住民やチョッパン居住者たちとの関係は、交わる事もなく、親しくない。Rさんは、居住者たちがよく集まって酒を飲んだりするところがあるけど、チョッパン相談所やチョッパン近隣ではなく、大通りの書店前とか近所の駅前などのような広い場所で集まるという。

自分なりにチョッパンに慣れて楽に暮らしている人もいるが、Qさんはなにより彼らが劣悪な居住環境から脱して、より快適な場所へ転居し、その居住環境を変えなければならないことを強調している。チョッパンに居住すると生き方を変えることが難しいから、居住環境を変え、チョッパン居住者たちともあまり関わらないことが必要だという。しかし、Qさんの支援戦略とは違って、前述した買上賃貸住宅居住者たちはチョッパン地域、チョッパン相談所を離れようとしていない状況があった。

◆人って、環境に支配されますよ。暗いところで、すさんだ環境で住むと、心もくすんでしまうんです。そして‘私がここから抜け出すことはできない’という挫折感で、うつになったり、寂しくなったりして、隣にいる人たちに一杯しようと誘って朝からお酒飲むのよ。チョッパンという構造上の問題が、こうなんです。この人たちの生活がよくなるわけがないでしょう。毎日、そういうふうにごろごろしてるんですよ。

それで私がいつも言ってることがあります。もっとも重要なのは自分の心、考え方を変えるのだと。心や考えを変えるのが第一で、二番目に環境を変えてあげなければならないことです。考え(生き方)が変わったとしても、環境を変えないと、依然として以前と同じ状況になったら、染み込んだ習慣があるため、それについていくのが人間だからね。それで私は“チョッパンから出て行け”と、“チョッパンから離れてここの人(チョッパン居住者)を少し遠ざけて、独立した空間できれいに暮らせ”と言います。きれいな環境で暮らすと自分も知らないうちにきれいになりますよ。ところで汚いところに行くと、自分がいくらきれいに暮らそうとしても、汚くなるから。(Qさん)

チョッパン居住者たちが、チョッパン相談所のある付近を離れない理由をQさんは、このあたりが他より福祉施設が多く、何よりすでにこの付近では、サービスの利用にあたって「声」を出すことができるため、この付近を離れようとしない場合が多いという。

だが、実際にはチョッパン相談所付近に特に福祉施設が密集しているということはない。福祉館などの施設は他区にもある。だが、他区と比べ、チョッパン相談所とホームレス総合支援センターが同

一区にあることがチョッパン居住者にとって重要な意味があるとみられる。

◆ところで、遠いところへ行こうとしない人が多いです。ここを離れようとしません。でも、ここ(相談所)は地下鉄に乗ると、すぐ来られる交通の中心地にあるから、“ちょっと遠くても大丈夫だ”と、最近は認識が変わってますが…

鎮区には家(買上賃貸住宅)が数軒しかありません。この方たちがなぜ離れようとしませんかという、ここは(福祉)利用施設が多いからです。給食施設も多く、タダで貰えることも多く、それに自分たちのナワバリというか、これとかがあるからね。たとえば、不満が生じた場合、区役所に行って脅かししたりしたこともありましたよ。ところで、転居しちゃうと、既存の自分たちが受けたものが受けられなくなっちゃうから、だから離れないのですよ。(Qさん)

もちろん、買上賃貸住宅へ転居をしてもチョッパン相談所は転居者に継続的にサービスを提供している。彼らの居住環境は変わっても、安定的な地域生活をするためには継続的なサービスが必要な社会弱者であり、このような点はチョッパン相談所のスタッフも十分に承知してアフターサービスを提供している。

◆元々は買上賃貸住宅に転居すると、相談所のサービスは切れるんですよ。本来は切ることになっていますよ。行政的にも。しかし、居住環境は良くなったんだけど、その人々の生活自体が良くなったわけではないですよ。相変わらず、働けない状況で、受給者として生活しているから。だから、サービスも切れないんですよ。(Qさん)

◆市庁からは、チョッパンに住んでいないからサービス対象じゃないと、その人々に対する支援に関する予算はくれないって。だが、チョッパンには住んでいないけど、生活がきびしいことは同じだから、サービスは切れないですよ。(Pさん)

このように、他の地域へ転居した後、その地域に定着するまでチョッパン相談所の支援は続いている。なお、チョッパン居住者に買上賃貸住宅事業の情報提供及びその手続きの代行をしているのにもかかわらず、転居に対するチョッパン居住者たちの反応は思ったより鈍く、他人の申請につられて申請しても、準備が出来ない人も少なくないという。また、買上賃貸住宅にはチョッパン居住者が望んでいる条件の住宅がほとんどなく、そうした条件を強調する人びとへの対応は難しいという。

◆買上賃貸住宅の入居申込書を出す人の中に“この方は本当に入居するかも”と思う方は10人のうち、約5人程度です。他の人が申請するから一応、自分も申請はしますが、本当に

入居しようとする方々は“月にいくらずつ貯めなければならない”と、自分なりの計画を立てます。それに、自分には、いつ入居できる住宅の情報が入るのか、自分は何を用意すればいいのか、申し込んでから自分なりに計画を立てるんです。ところで、他の人が申し込むから、尻馬に乗って申請した方は、順番になって入居できますと言っても、“もう？”との反応です。他には、なにになに洞じゃダメ、階段があっちゃダメ、などの条件が多い方もいますよ。だがそんな家はほとんどないですよ。そんな家だったら、買上賃貸住宅の形じゃなく、一般契約で貸してあげればいいから、そんな条件の良い住宅はあまりないんですよ。それで、そんな事情を説明するんですけど、“はやく進んでない”と言われます。私なりには頑張ってるのに…(Pさん)

Rさんは、買上賃貸住宅へ入居申請した人々のうち、実際に転居する人とそうではない人は、結局、支出をどう抑え、貯めるかの違いだと言っている。

◆買上賃貸住宅を申請する人と、しない人、詳しいことまではよく分からないですけど、転居する方々は、支出管理ができる人みたいです。つまり、収入が増えて貯金するというよりは、一定の受給費から、お酒を断ったとか、他の支出を減らしながら貯める場合が多いです。また、福祉館や炊き出し、無料食堂のような所の情報を活用しながら、支出を減らして集める場合があります。(Rさん)

2. チョッパン居住者たちの勤労・自活

チョッパン相談所のスタッフたちがチョッパン居住者の生活支援において重点を置いていることは‘居住向上’に加えて、彼らの勤労と自活に関することである⁹⁸。

自治体によっては、チョッパン居住者のような受給者・低所得層を対象とした働き口を提供しているが、一般的に彼らが勤労できる仕事とは‘特別な技術がない者も働ける仕事’であり、たとえば「段ボールを折ったり」、「封筒の封をする」ような単純労働である。しかし、Pさんによると、そこに1日参加しても実際の収入は月20～30万ウォンであり、あまりメリットがなく、参加者がいない状態であるという。前述したチョッパン運営者のインタビューのなかに‘頑張らない人’との表現があったが、Pさんはなぜチョッパン居住者たちはこのようにメリットもない事業に参加すべきか反問している。

◆自活・自立ということ、そのアプローチがちょっと易しくなったらいいなと思います。

⁹⁸ 全国のチョッパン相談所の共通事業として、①チョッパン生活者の野宿予防、②生活安定、自立・自活のための事業である(ジャン 2012)。

他の相談所、野宿人自立センターなどで最近、‘人文学⁹⁹’が流行ってるんですが、流行ってるから、(釜山の)行政側もやってほしがってるんです。が、正直、効果があるか疑問です。自活というのが、あいまいな点が多いと思います。普段、野宿者、チョッパン居住者を対象とした自活事業は、「作業場」での作業を言っているんですが、その仕事のほとんどが段ボールを折ったり、封筒を封することのような(座ってる)仕事です。もちろん、立ちっぱなしの仕事よりよさそうだけど、一日、ずっと座っているのも大変な仕事ですよ。それに、おじちゃんたちのうち、脊椎疾患者たちが半分以上だから、そんな仕事、キツイですよ。

しかし、そんな事業を施行する人たち(行政側)は、タダで就職させてあげて、中食も提供してあげているからと、そういう風に思っているんですよ。事業の趣旨は分かります。でも、実際に申請する人たちがいないです。もちろん、こうした事業を企画する人を無視してということはないです。だが、現実がわからないみたいです。うちのおじさんたちの実像がわからないみたいです。その仕事やっても、受給費から勤労収入の分で控除されて、週5日間働いても月10~20万ウォンしか増えないですよ。この人たち、‘10~20万ウォン稼げられるなら、どこでも行く’人々じゃないんですよ。私たちと同じですよ。たとえば私達、月に10~20万ウォンの給料で紙袋折りに行く人はあまりいないじゃないですか。お年寄りならいくかもしれないですけど、30、40、50代の方は行かないんです。実際に区役所で数日前に、‘この事業を実施するから対象者を推薦してくれ’と連絡があったんだけど、誰も参加しないですね。特に、‘やってみた’という人が‘そりゃ、きつくてできない。やってみただけど、やめた’と。仕事もキツイし、1か月働いても10、20万ウォンだから…しないですね。(Rさん)

ところが、Pさんは彼らの‘働かない’ことには、怠惰なところが一部あるという。受給者であることは同じだけど、お金を貯める人は計画を立てて支援が貰えるところを歩きまわるが、そうではない人は動かず、ただ受給費を貰っているだけだという。

◆(働かない理由は)健康上の問題もあるけど…正直に話すと、若いのに厳しい生活をしている人を見ると、本人たちが怠惰なところが正直にあるよ。それが、不憫だと思いますよ。怠惰なことが、あるところではくせとか、習慣みたいなことです。動くと、習慣になって動いたりします。私たちもそうじゃないですか。朝起きるのが習慣になると、寝坊しても良いのに目が覚めるのに。ところが、おじさんたちも見ると…それなりに計画を立てて、朝あつちに行くと炊き出ししているとか、そっちに行くと500ウォンでも貰えるとか…こんなの

⁹⁹ 「人間の生の意味と価値」に関する学問である人文学を、1995年にアメリカの人文学者であるEarl Shorrisがホームレスを対象とし彼らが人間らしい生活ができるよう、文学、哲学、歴史などの大学水準の人文学を教えることを提案したことから始まった。最近、韓国でも導入されホームレス分野の多数の施設で実施されている講座である。

あるじゃないですか。自分なりの計画がある人は受給費と、そんなところに歩き回ってお金を貯めます。でもこれもあれでもない、単に受給費だけを貰っている人たちは…動きたくないから…お金が貯まらないです。同じ条件だが、ある人はお金を貯めて賃貸住宅に行き、ある人はお酒も飲まないのに何にもないですよ。後者はただ何にもせずに、ご飯買って食べて、家賃出してるだけだから、そんな差があります。(Pさん)

自立、自活のための事業について、Rさんは、彼らの‘自活’を‘労働を通じた自立、つまり勤労に焦点を合わせて運営されている事業’の効果に疑問を呈している。なお、チョッパン居住者たちの多くが経験しているアルコール依存問題に対応する事業として禁酒教室(禁酒講座)を行っているが、参加している者もごくわずかであり、参加すべきと思われるアルコール問題がある者はむしろ参加していないという。それでPさんは彼らがまずはチョッパンから外に出て、お酒を飲むこと以外に楽しめる事が必要だという。

◆自活って、必ず‘作業、労働、仕事、労働’を通じてしかできないとは思いません。もちろん、最終目標はそんな自活だけど、ひとまずは、うちのおじさんたちをちょっと楽しくしてあげようと思いました。率直、(私たちも)勉強なんか嫌いじゃないですか。禁酒教育とか、うちの相談所でも実施しているけど、つまらないと思う時が多いです。まずは、(彼らが)楽しんでもらいたいですね。

私は教育、作業場のようなそんなこと、あまり意味がないと思いますよ。最近、人文学教育も外部的にはすごく成功的な事例として挙げられているけど、私は人文学教育だけでは懐疑的で、面白くなければおじさんたちも参加しないんですよ。それで私たちなりに、オカリナ教室とか、歌教室のような、気楽に遊びに来られることを考えました。おじちゃんたち、遊ぶのが得意だから(笑)。まだ、不十分ですけど、自ら少しずつ達成感を感じられるように支えて行っています。

おじさんたちお酒を飲む大きな要因の一つが、やることがないからです。働くこともなく、余暇生活をすることもなく、集まってお酒を飲むこと以外は特にありません。だから(笑)。何かやることを作ってあげて、お酒飲む機会を減らさなきゃ。(Rさん)

◆禁酒教室とか行っているけど、実際、参加すべき方たちは来ないですよ。参加してほしい人は来なくて、普通の方々が参加する場合があります。(Pさん)

チョッパン居住者のなかには野宿をした人も多く含まれている。それで、チョッパン相談所でも野宿者をチョッパンへ入居させ受給申請をするなど、野宿者もその対象になっている。そこで、ホームレス関連施設と関わる場合も頻繁にあり、関連機関との協力も必要である。だが、人数によって補助

金を受けている生活施設の場合、利用者数は補助金と直結されるので、利用者がチョッパン相談所に訪ねることにクレームをつけたりするなど、機関間の協力連携はそれほど円滑ではないという。

◆相談保護センターや野宿人支援センターは業務内容は似てるんですけど、うちの事務室(チョッパン相談所)はあの施設とそんなに関係が悪くないですけど、普通は？それぞれお互いにあまり関係がよくないみたいです。(Q. 理由は?)それはよくわかりませんが、(関係が良くないことは)他の地域も同じです。釜山だけじゃなくて、同じく仲がよくないみたい(笑)。私が考えてみると… チョッパン相談所は運営形態が違うけど、あの施設は‘一人あたりいくら’と補助金を貰っている生活施設だから、補助金とか予算のことで、敏感になっているのではないかと思いますよ。自分たちの施設に所属(登録)されているおじさんなのに、なんでチョッパン相談所に通っているのかと(ホームレス生活施設から)聞かれたこともありますよ。それで、“ここ(相談所)に来たいと言うおじさんに、また、友だちに会いに来たおじさんに‘来ないでください’とは言えない”と返信したこともあります。こんな件でもめたりしました。

補助金がちょっとおかしいです。たとえば、猛暑でチョッパンで眠れないおじさんたちのために、ここ(相談所)を24時間開放しました。職員が夜勤までしながらね。なのに、電気代で6万ウォン貰いました。夏の何ヵ月間、電気代6万ウォン。他の(生活)施設はこれより多かったみたいです。同じく24時間運営したのに、他のところよりいつも(支援額が)少ないです。(Pさん)

終章 散在型チョッパンの生活と地域福祉の課題

第一節 考察

チョッパン散在型地域である釜山市のチョッパン居住者の生活を、彼らへのインタビュー、さらに彼らの生活に関わる多様な人々へのインタビュー及び参与観察を通じて記述してきた。終章では、これまでの記述をもとに、あらためて散在型チョッパンに住む人々の生活の特徴と、彼ら自身がチョッパン生活をどう考えているのかを検討する。ここでは、序章で述べたように三つの視点、すなわち‘居住と地域福祉’という視点、‘社会的排除’のプロセスの視点、三点目はチョッパン居住者自身の‘生活戦略’という視点から考察を進めてみたい。

考察の順序としては、まずチョッパン生活の特徴を、特にサンドラ・ウォルマンのいうハードな資源：土地（住宅）、労働、収入と、ソフトな生活資源：時間、情報、アイデンティティの6つの枠組みおよび生活主体の戦略をあてはめて、チョッパン生活の特徴を明らかにする。次いで、釜山の散在型チョッパンに住む人々の生活圏の意味を示し、またチョッパンという劣悪な居住からの脱出＝居住向上をどう考えているのかに焦点を当てる。最後に彼らが自分自身を排除するに至ったプロセスを解釈し、同時に今後のひとり暮らしの心配のあれこれの意味を検討する。これらの考察の上にたって、釜山の散在型チョッパンと地域福祉の課題を検討してみたい。

1. 「働くこと」と制度及び福祉資源の活用

チョッパン生活にとって基本となるのは、チョッパンという住居とは言えない住居と、基礎生活保障制度による最低生活費の確保という二つのハードな資源である。

彼らにとって基礎生活保障受給費は、毎月入る‘お給料’である。そこからチョッパン代をまず支払い、その残りで日々の生活をたてていく。とはいえ、それで十分であれば、上の述べたような‘節約’は必ずしも必要ではない。足りない理由は様々であろう。借金やアルコールの問題、家族とのわずかなつながりの維持、さらには買上住宅のための貯金等々。むろん、基礎生活保障の水準が低いために、「貰う」ことは最低生活の条件でもあるのかもしれない。

このような基礎生活保障に依拠するのは、自分が「働けない者」だからだと、チョッパン居住者たちは強調する。実際、彼らの年齢やネガティブな経験の果てに心身を病んでいることを考えれば、「働けない者」であることはそのとおりであろう。とはいえ、就労のあつ旋もある。しかしそれらは、彼らには‘キツイ’仕事ばかりで、しかも給料が少ないため働かない場合もある。チョッパン相談所の

スタッフの中には、労働にあう給料でない条件の勤務は、誰でも働きたくないはずだと、理解を示す人もいる。他方で、チョッパン運営者やほかのチョッパン相談所のスタッフは彼らを‘働けるのに、働かない者’と認識することも少なくない。他のチョッパン生活者がそう思っている場合もある。

‘政府があんな人々をへらすために努めているのに、頑張らない’というチョッパン運営者の表現のように、外部のこのような視線の中には、彼らの制度や福祉資源の活用に対する態度への批判が含まれていると思われる。実際、先に述べた‘お給料’という感覚は、彼らの制度への依存を示しており、こうした態度が、彼らへの批判を増幅させていく傾向がある。これは基礎生活保障だけでなく、チョッパン相談所で洗濯をしたり、シャワーを浴びたり、福祉館で無料給食をするなどの福祉資源の活用にも通じる。

むろんかれらはそれらの助けを‘ありがたい’と表現している。しかし、彼らにも言い分はある。外部からは‘国や支援団体などが助けてあげている’と言われているけど、彼らの中では、そうした制度や資源は自分たちのニーズに合わせたものでないと感じている人も少なくない。また、たとえば映画券のような文化バウチャーのような現物支援は、結局換金されてしまう。それだったら現金支給の方が有り難いという。また、一晩の寝食させることだけではなく、もっと心理的な支援が続くべきだと述べた人もいた。‘助けてあげているのに頑張らない’ことではなく、その助けが適切ではないといたいわけである。

この点について、4章で述べた、チョッパン相談所スタッフ R さんの指摘は核心を突いているように思われる。重要なので再び引用してみたい。

「自活って、必ず‘作業、労働、仕事、労働’を通じてしかできないとは思いません。もちろん、最終目標はそんな自活だけど、ひとまずは、うちのおじさんたちをちょっと楽しくしてあげようと思いました。率直、(私たちも)勉強なんか嫌いじゃないですか。禁酒教育とか、うちの相談所でも実施しているけど、つまらないと思う時が多いです。まずは、(彼らが)楽しんでもらいたいですね」。

彼女は、役所の作るプログラムは、彼らの現実の生活を反映していないという。だから、相談所ではオカリナ教室とか、歌教室のような、気楽に遊びに来られることを考え、楽しみながら参加することを通して「不十分ですけど、自ら少しずつ達成感を感じられるように支えて行っています」と述べている。負の経験の果てに流れ着いてきて、お酒ぐらいにしか楽しみのない彼らを、いきなり労働や自活プログラムに結びつけるのは非現実的だと言いたいのである。

2. チョッパン生活者の生活戦略：‘節約’ ‘時間つぶし’ ‘情報’

「労働できない者」と自覚するチョッパン居住者たちには、日々やるべき仕事がない。朝起床してから夜就寝するまで、その間の時間をどうにかやり過ごさなければならない。「日課は？」と聞かれても彼らは返答に困る。特に就労しているわけではないので、長い一日の時間管理を、彼らは、一様に‘時間つぶし’と表現することになる。つまり‘時間をつぶし’が出来る場所を探して移動するのが日課になる。

ただし、彼らの‘時間つぶし’の場所は、敬老食堂、炊き出しなどのような無料給食所で無料でご飯を食べたり、病院で治療を受けたり、チョッパン相談所で無料で洗濯をしたり、知り合いが集まる所でタダで酒をおごってもらうことのように、できるだけ支出を節約する方向で行われている。つまり、生計維持のための‘節約’と‘時間つぶし’をする「場所」を移動して回ることが、彼らの生活の現実的戦略であり、チョッパン生活者の特徴と言える。この場合、そうした場所や時間の情報を得ていること、それを前提に、それなりの「目的」があつて‘時間つぶし’と‘節約’に励んでいると考えることが重要である。

特別に決まった仕事がないので、起床・就寝時間も規則的である必要はない。そのためか、チョッパン居住者の中には不眠症で苦労する人も少なくなかった。彼らは不眠症を防ぐため、昼に居眠りしないように努力したり、体を動かしたりするなど、自分なりの方法を探る。不眠症ではなくても、特にやることのない、無為な彼らの日常の中で‘運動’という名目は「積極的」な日課として意識されることがある。市内に散らばったチョッパンから、相談所、病院、敬老食堂のある福祉館等までの移動を、片道は徒歩で行くと語った人は多い。その理由も‘運動’になるから、と言うのである。どうせ‘時間つぶし’のための場所を探し回るのならば、そこに‘運動’という意味を付与するわけである。おそらく、‘運動’は現代社会ではポジティブな意味を持ち、何もやることのない日々の‘時間つぶし’ではあるが、‘運動’と自らに言い聞かせることは、無為な日常に、なにがしかの積極性を与えることになっているのかもしれない。

不眠症に関して言えば、もちろん単に不規則な日常だけが原因ではない。チョッパン生活はやることとなすこと思いどおりにいかない人生の終着駅でもあり、その中で身体的・精神的にも疲れ果てて、精神科に通う人々も少なくない。「うつ病は…まあ…やること全部がうまくいかないから…家庭も(離婚などで)そうだし、私が旅館で、チョッパンで住むことは想像すらできなかったのに」と語ってくれたBさんのように、やることとなすことが、‘ネガティブな方向’へ進んだあげく、たどり着いたのがチョッパンだったというわけである。Bさんだけでなく、チョッパン居住者には、この‘ネガティブな方向’の終着駅として、チョッパンにたどり着いたと語った人々が多い。つまり「否定的アイデンティティ」である。この点は、すぐ後でもう少し詳しく考察してみたい。

ところで、チョッパン居住者の中には熱心に教会へ通う人々がいる。うつ傾向があつたり、無為な日々を過ごす彼らに宗教は心理的な慰めになり、生活の大きな支えになっていることは事実であろう。だが同時に、チョッパン居住者たちにとって宗教、とりわけキリスト教会へ通うことは、支援を受けるための手段であり、そのため適切な関係を維持すべき対象でもある。つまり、これも先に述べた‘節約’手段である。それゆえ、キリスト教会だけでなく、なにかを貰うためにあちこちの場所を探し回る生活は、彼らにとって特別な精神生活を意味するというより、生計維持のためになさねばならない「現実の生き方」なのである。この点をEさんは率直に「(教会に)行くと、お昼もくれるし、千ウオンでも一枚ずつ貰って来るから。千ウオンでも貰うためには、一応は1時間ちかくは礼拝をしなきゃ(笑)。行けば、お昼やお金くれるというわけではない。一応、礼拝を1時間くらい参加してから、なにかは

貰えるから。良かれ悪しかれ、礼拝はしなければ」と語っている。

本研究で対象としたチョッパン相談所はその運営法人が教会であるため、教会へ通うことと、相談所に顔を出すことは一体として捉えられている。チョッパン相談所が、チョッパン生活者にとって‘時間つぶし’と‘節約’の双方を満たす、なくてはならないところであるとすれば、その背後にある教会もまた彼らが無視できない場所なのである。さらにいえば、それらはたんに場所だけではなく、相談所スタッフとの関係を円滑に維持して行くことをも意味している。

多くのチョッパン居住者や、元チョッパン居住者まで、自分たちより年下の職員たちを‘先生’と呼びながら、あたかも‘出勤’するように、チョッパン相談所に通っている。‘チョッパン相談所から追い出されると野宿者になる’という表現は極端にきこえるかもしれないが、追い出されないようにしなければならないという意識は強い。むろん、チョッパン相談所に毎日通わない人もいる。そのような場合でも、何かを貰いに’時々チョッパン相談所に行っており、また、何よりもスタッフとの関係が絶されないようにしているように見える。

むろん、このような状況は教会やチョッパン相談所に限らない。Iさんのように自分のことを面倒を見てくれる老人福祉館で‘家’のように過ごしている人もいるなど、生計を維持するのに必要なところなら、どこでも‘顔出し’をしなければならないし、そうやってあちこちを回って行くことが‘運動にもなる’というわけである。

このように見て行くと、チョッパン生活における時間の管理はたんに‘時間つぶし’ともいえなくなる。彼らがチョッパンを基盤に生きていくためのひとつの生活戦略でもあり、‘時間つぶし’と称して通っている相談所も、そのスタッフとの関係が、彼らの日々の生活維持の命綱であることを、しっかり把握しているからであろう。

なお、チョッパン生活を支えるそれらの場所や制度についての有益な情報は、隣人からもたらされる場合もあるが、圧倒的にチョッパン相談所に依拠している。ぼんやりテレビを見ている人にとっても、何かのときにはチョッパン相談所に相談し、制度利用の方策やその他多様な生活情報を得ている。相談所への‘通勤’は‘時間つぶし’と‘節約’以外に、そうした日課を支えている基礎生活保障制度やその他多くの情報を得ることのできる場所なのである。

3. 散在型チョッパンと生活圏の‘個別形成’

釜山市内に散在するチョッパンに居住する人々の日々の行動範囲、すなわち生活圏は人によって異なる。チョッパンが集中しているわけではないので、かならずしもチョッパンそれ自体の周辺ではなく、無料で利用できる所、特に保健および福祉サービス機関、中でもチョッパン相談所を中心にやや広く形成されている。高齢者、障害者の場合は無料で地下鉄に乗ることができるため、この制度利用者の多いチョッパン居住者たちは無料で電車に乗ることができる。そのため、無料移動手段(徒歩あるいは無料の電車)を利用して、彼らの生活圏は様々な洞を超えて形成されている。釜山の場合、チョッパン居住者たちにとって‘チョッパン村、チョッパン地域’という認識はなく、‘チョッパン、旅館’

のように‘住んでいる建物’として認識されるのが普通である。それゆえ、チョッパン地域とその以外の地域という区分がなく、生活に必要なところ(施設、病院など)にはどこへでも行くというような、広域的な生活圏の形成が行われている。この点が、ソウルなどの集中型チョッパンとは異なる。とりわけ、彼らのインタビューからは“気が楽ではない場所”、たとえば、Fさんが“福祉館は楽ではない”と言うように、行きづらい特定の場所はあるが、行きづらい町のような表現は見られない。このよう傾向はチョッパンから買上賃貸住宅へ転居した居住者の生活からも見られる。徒歩、または電車で1時間程度かかるにも関わらず、賃貸住宅居住者たちもチョッパン相談所へ出かける。転居してもその地域にある福祉機関よりチョッパン相談所が心理的に気楽なので、近くの福祉施設に行かずに、通っているのである。

だが“気が楽な場所”あるいは‘時間つぶし’や‘節約’のために通う場所、とりわけチョッパン相談所と彼らの住むチョッパンの間には、それぞれの比較的規則的な生活圏が形成されている。したがって、それを釜山の目に見えない‘チョッパン地域’と表現することも出来るかもしれない。釜山には集中したチョッパン地域は形成されていないが、個々の居住者たちは、個別的に、それぞれのチョッパンと利用できるいくつかの場所をつなぐ生活圏＝個別的な‘チョッパン地域’を形成しているとも考えられるわけである。だが、それはソウルのように空間的に明白な地域ではないところに、釜山の特徴がある。

4. チョッパンからの居住上向の可能性： 二つの生活戦略

チョッパン居住者の中には、チョッパンからの脱出＝居住向上を目指している人々とそうではない人々の2つのタイプがある。チョッパン相談所のスタッフが言うように、居住向上を目指している人々は支出を減らし、転居するための費用(保証金など)を貯めるため、誰よりもあっちこっちを歩き回って無料の食事等を利用して‘節約’と‘運動’に励んでいる。代表的には、チョッパンから買上賃貸住宅へ居住向上をしたにも関わらず、さらにより安定的な永久賃貸住宅へ転居を希望しているLさんの場合、今も支出を減らすためチョッパン生活と変わらない生活を送っている。Lさんの場合は、居住向上のため、誰にどうみられているのかの現在のプライドより、将来の安定的な生活を優先した生活戦略をもっている、といえるかもしれない。

だが、多くのチョッパン居住者は、そうした将来を見据えた戦略はとりたくない、またはとれないと思っているようである。全国を、または釜山を転々としたあげく、あるいは急に住居を喪失して、さらには家族と別れて、彼らがチョッパンへ来た最終的な理由は、お金がなく、行くところがなかったからである。いわば下降する水のように「流れついて」チョッパンで暮らすようになった。そうした負の経験の積み重ねの果てに、心身の状態も不安定になって「流れ着いた」チョッパンは、むしろ客観的には十分な居住の場ではない。だが彼らはチョッパンに来る直前にも旅館で暮らしたり、他人の家に転がり込んで暮らしたり、仕事を探してあちこちに転々するなど、すでに「不安定な居住状態」に置かれていた。野宿の経験者も多い。

こうした不安定な居住状態による頻繁な居所変更・転居の経験が、すでに中高年に達した彼らにとって、さらに転居することを躊躇させ、今後、よりよい住宅へ移動しようとする人は少ない。むしろ今住んでいるチョッパンに慣れて楽になったということがある。また、どこへ行っても大きく変わらないだろうと達観してしまったところもある。もともと仕事を求める人々の‘一時的な住まい’として知られたチョッパンであるが、ここでインタビューしたチョッパン居住者たちはすでにチョッパンを一時的な住まいとは考えていない。もうこれ以上転々としたくない、チョッパンで十分だと思っている人が少なくないのである。それはチョッパン密集地域内での安らぎ（キム・ヒョジン 2009）というチョッパン密集地域における特性とは若干異なる。地域内に安らぎがあるのではなく、野宿まで経験した人々にとってはとりわけ、屋根があって、誰にも文句を言われず、ドアを閉めて自分の部屋で寝ることの出来るチョッパンという建物にとりあえず満足しているわけである。

彼らは‘居住脆弱階層向け住居支援事業’を通じて保証金 100 万ウォンがあれば、チョッパンより家賃(月賃)も安く、より良い居住環境である住宅へ引っ越すことができる。ところが、賃貸住宅へ転居する人々は少ない。保証金 100 万ウォンと家具、生活備品などの購入費は現在も基礎生活保障の生計費でようやく暮らしている人たちにとって、食費やその他の必需品を切り詰めて、1 カ月に 5 万ウォンずつ貯めても、約 2 年間で貯めなければならないほどの大きな金額である。たしかに現在、負担している家賃より少なくとも 6~8 万ウォンほど安い賃貸住宅に入居し居住費の支出を減らすことができれば、その分、生活費に使える金額が増えることになり、今より生活に余裕ができるかもしれない。このような事実は知っているにもかかわらず、‘今’でも無料の昼食などに頼ってチョッパンで暮らす彼らにとって‘低廉な水準の保証金 100 万ウォン’は、けっして低廉な金額でない。

このように、ずっと転々としてきたので、もう転居自体が嫌だとか、逆に転々としてきた生活だから今更という場合のように転居を考慮の対象にしていない人々があり、同時に転居したくても、保証金を用意する可能性すらなく、また家具、光熱水費そのほかの経費の必要を考えると転居が不可能だと考えている人々がある。この二つは異なった理由ではあるが、結局のところ、転居に必要なわずかな金でも貯めることが大変な彼らの厳しい現在の生活状況が、転居に無関心を装わせ、現在のチョッパン生活を一見積極的に受容する態度になって現れているとも捉えられる。これは、現在を見据えた現実的生活戦略と言えるかもしれない。さらに知り合いに会えることが気になって無料で利用できる敬老食堂を避けたり（F さん）、お金を貰うため歩きまわることにより‘そこまでして（買上賃貸住宅に）行くことはない’と言ったり（E さん）のように、現在のプライドにこだわる人もいる。

チョッパン相談所のスタッフは、住んでいるところの環境が変わるとその人生が変わると述べたが、この現実重視のチョッパン居住者たちはそう思っていないようである。居住環境が変わっても、人生に変化を期待することは難しい現実を彼らのほうがよく知っている。居住地が変わると健康になって働けるようになる、または雇われる、という生活の大きな変化は期待できず、依然として基礎生活保障の生計費でようやく暮らしていくと自分たちもそう思いこんでいる。

5. 誰かを遠ざける：自分自身の排除

チョッパン居住者たちのほとんどが家族との連絡が絶たれている。外洋船に乗って子供の養育費を稼いだが、そのため父親の役割をきちんと果たせなくなって、離婚後に子どもたちとも疎遠になった人、一人息子であるが、巫俗人の生活をしながら家族の期待に応えなくて家族と離れた人、経済的な問題で家出をし転々とした人など、チョッパン居住者たちが生きてきた人生は異なるが、家族と断絶された現在の状況は同様である。

基礎生活保障受給者であるが、急にお金が必要な場合などには国の支援だけでは対応することは難しい。離婚後、頼れるところが兄弟だけだったチョッパン居住者の場合、兄弟たちに助けてもらえなかった経験は、家族から捨てられたとの心の傷を残している。最後の頼りであった家族から疎外され、その傷から、今は家族から連絡が来ても、自ら家族を遠ざけているという。

連絡が途絶えていた兄弟から、親の祭祀に來いという連絡があった人の場合、韓国の慣習からも‘手ぶら’で行くことはできない。行きたくとも、お金を借りることもできなければ、行けない現実がある。こうして、家族との縁はますます希薄になっていく。このように、家族関係の回復を改善できない主な要因も、結局のところ‘経済的な貧困’に行き着く。基礎生活保障が主な収入源であり、貧困から抜け出すことの可能性が稀薄な彼らの貧しい生活は、結局ふたたび家族との縁を繋ぐことを妨害しているのである。

誰かを遠ざける傾向は、家族関係だけでなく、同じチョッパンの建物に居住する人たちとの関係の中でもみられる。チョッパン居住者ほとんどが同じチョッパンの建物に住んでいる人たちと話すらせず、ドアを閉めて暮らしている。インタビューした居住者D、Eさんのように、彼らも最初からドアを閉めて暮らしていたのではない。チョッパンの隣人たちとは細かいことでけんかになりやすく、自分の人生に役に立たない人々という認識ができてしまったからである。このような認識はチョッパン生活の経験を通じて学習されたものである。このため、彼らの関係の質はいつでも断つことが可能な‘軽い’関係に留まる。そのため、細かい口げんかで、簡単に関係を断つ生活が繰り返され、そのうち関係を維持する努力さえしなくなっていく。‘元々貧しい家’で生まれ、自分たちは‘お金のある人とは違う’と自己認識しているが、反面で‘貧しい人たち’が住んでいるチョッパンの人々とは話もしないように、チョッパン居住者たちはチョッパン住人たちを‘われわれ’の範囲とは考えず、ゴミの町に住んでいる下品な人たちだから、親しむこともなく‘友達’の枠内にも入れない、というようなアイデンティティの混乱もある。

彼らはチョッパン居住者たちだけでなく、知り合いとも、会いたくないと言っている。無論、居住者のうち、チョッパンに来る前の知り合いと連絡している人もいるが、彼らが知り合いと会う理由の一つが、急にお金を借りるか、お酒をおごってもらうなどの何かしらの‘必要なこと’と関連がある。気楽に話す相手がいないという彼らも、知り合いから‘助けてもらった’‘役に立った’という表現で、なんらかの関係を示唆することがある。それは、お金を借りるか、現物を貰うことだけではなく、情報を得ることまで幅広く、助けてもらえる人との関係を指している。しかし、こうした「助けても

らえる人」との関係は、その場その場で終わってしまっている。特に情報についていえば、彼らがチョッパンを知ったのは、行き着けの飲み屋のホステスが教えてくれたり、あるいは同じシェルターで暮らしていた人がチョッパンで泊まるのを見て分かるようになる、というような具合に、誰かの情報や手助けに依拠している。かれらの家族や深い人間関係の不在は結局、情報獲得においても限界をもつ。彼らはどこかでそれを自覚しているのであろう。だから、かかわりたくないチョッパン隣人であるものの、現在の生活において最も生活にやくにたつ情報を持っていれば、教えてもらう。さらに、チョッパン相談所は、親しい関係から自らを遠ざけている彼らにとって、必要な情報を得るために気軽にいけるきわめて重要な場所である。だから、チョッパン相談所のスタッフとの関係だけは、特に気を使っているようである。

チョッパン集中型地域の場合、見えないバリアに囲まれていると言われる。「隣人たちと互いに支えながら共同体を形成していく(チョ・ンヨジュ、キム・チョンドック 2013)」という結果や、「居住者は社会的排除と心理的な断絶感、疎外感を感じているが、接続性の高い内部の空間構造はこのような断絶感を感じる居住者間の帰属意識と連帯意識の形成に影響を及ぼし、強い連帯意識を持っており、チョッパン地域を自分の生活空間として認識している(キム・ヨンウ、クジョ・ヒウン 2012)」という。しかし釜山の散在するチョッパンに住む人々の社会関係の有り様は、この研究の限りでいえば、密集地域を中心とした先行研究とはかなり異なる。ここには強い連帯感は少なくとも不在である。将来を見据える戦略にたつにせよ、現在の「それなりの安定」の維持に気を配る戦略にせよ、彼らは必要な範囲でしか他者と関わっていないように見える。

なお、彼らのインタビューには「死んだほうが良い」「死ねなくて生きている」との表現が出ており、自分の生の意味がないと考えている様子が見えている。「否定的アイデンティティ」あるいは先に述べた、自ら誰かとの関係から遠ざかる＝「自分自身からの排除」の究極の言葉であろう。

自分自身からの排除について湯浅(2008)は、「何のために生き抜くのか、それに何の意味があるのか、何のために働くのか、そこにどんな意義があるのか。そうした「あたりまえ」のことが言えなくなってしまう状態を指すという。教育課程からの排除、企業福祉からの排除、家族福祉からの排除を受け、しかもそれが事項責任論によって「あなたのせい」と片付けられ、さらには本人自身がそれを内面化して「自分のせい」と捕らえてしまう場合、人は自分の尊厳を守れずに、自分を大切に思えない状態にまで追い込まれる(湯浅誠 2013 : 61)」と述べている。岩田(2010)も、次のように「社会的排除」のプロセスのなかで、自分で自分自身を排除することが含まれていると述べている。

「社会的排除」は、様々な不利の複合という見方で、問題の連鎖を視野に収めるわけだが、このことは「社会的排除」という概念が、「ある状態」というよりは「プロセス」なのだ、ということの強調へ結びついていく。「社会的排除」という言葉は「誰かが誰かを排除する」といった「動詞」として捉えられ、また、ある人の人生の軌跡の中での排除のプロセスとして理解される。この中では、自分で自分自身を排除する、というプロセスも含まれることは重要であ

る（岩田正美 2010：13）。

集中型チョッパンより、はるかに近隣関係が薄く、家族からも遠ざかる散在型チョッパン居住者たちの一部は自分自身の究極の排除に向かう危険性をいつも内包している。

6. これからも‘一人暮らし’：心配事

チョッパン居住者たちは依然として一人で、これからの人生を生きていかねばならない。今後どう生きていくかは、彼らにとっても心配事である。まず、健康と関連した心配事が挙げられる。彼らには入院時に必要な‘保護者欄’にサインしてくれる人がいない場合が多く、いても気楽に頼める関係の人があまりいない。そのため、チョッパン居住者のほとんどがチョッパン相談所から入院依頼書を受け、入院している。さらに、そのサイン欄を書いてもらえる人がいなくて、体が痛くても誰かに頼んで直接入院するよりはよいと放置した結果、周囲の人が救急車を呼んで入院している場合も少なくない。痛くても介護をしてもらう人がいないため、退院後の生活も心配である。このため、健康を維持することは、彼らが今後も一人で生きていくための必要条件であり、大きな心配事である。先に述べた‘運動’は、何かを貰える場所への移動の意味付加であるだけでなく、本当に健康維持の手段と考えている側面もある。

なお、‘経済的な問題’はこれらの暮らしのあらゆる面にわたって影響を及ぼしていることはすでに述べてきた。今のひっ迫しているこの生活は、これからも変わらないと思っている。日々の生計維持は、今も、これからも彼らの心配事である。さらに、福祉機関の支援にも限界があると思っており、今後の心配は尽きない。

◆相談所のおじさんたち(スタッフ)も私にいつも何かくれるわけでもないじゃない？相談所もあげることもなくなると、あげないから。(Hさん)

‘死んだら終わり’だし、‘死んだほうがまし’ではあるが、死ぬまでは周りに迷惑にならないため、健康に気をつけなければならない。一見矛盾するような「死への願望」と「健康維持」は、奇妙なことだが、チョッパン生活者の現実的戦略の中で、いつも隣り合わせにある。また印象的なことは、社会から助けてもらっているのだから、死後でも‘誰かの助けになりたい’と死後臓器提供の登録をしておいたという人が複数いたことである。いつも「貰う」ばかりの彼らの人生の最後は価値のある人生でありたいという願いかもしれないし、それしか社会貢献の手段はないのかもしれない。さらに考えてみると、葬祭を頼む人がいないチョッパン居住者の現実的な死後対策でもありともいえる。何も考えずに、無為に1日を過ごしているように見えて、彼らはあれこれ心配し、考えるべきことは考えているのである。

第二節 地域福祉としての課題

本研究で行った釜山のチョッパン生活者と彼らを取り巻く人々や制度の記述結果に基づいて、分散型のチョッパン居住者の生活の質を向上させるためには、どのような政策、とりわけ地域福祉の実践が必要だろうか。最後にその点を考察してみたい。

まず、チョッパン居住者のための、ハードな資源である基礎生活保障水準の低さとサービスの総量の小ささが課題として挙げられる。彼らは様々な社会福祉の対象者の中で最も支援の必要な存在であり、最も包括的なニーズを持っている対象であるといえる。たしかに、彼らは基礎生活保障水準とチョッパン相談所などの福祉資源に依存して、なんとかチョッパン生活を維持している。だが研究結果を通じて明らかになったように、日々の生活維持は無償の食料供与などにも支えられており、それを探し歩く日々でもある。またこうした経済的貧困によって、彼らは家族関係や他の人間関係を断っており、そのことによって、貧困と排除の循環から抜け出せないでいる。経済的支援水準を上げることは、チョッパン生活者のみならず、韓国の市民生活の最低限を上げていく、最も基本的な課題であるとともに、地域福祉にとってもその基礎となるものである。

第二に、散在型チョッパンの場合、チョッパン地域が集中的に形成されていない代わりに、チョッパン相談所の存在の意義が大きい。彼らは自分のチョッパンから、徒歩や無料の電車で、チョッパン相談所へほぼ毎日のように‘通勤’し、食事や洗濯、情報の提供、教会活動など、多くの日常生活をこれに依存している。彼らの日課や生活圏は、相談所を中軸に形成されていると言っても過言ではない。2012年6月に「ホームレスなどの福祉や自立支援に関する法令」が制定され、チョッパン相談所が制度内に含まれるようになったが、設備基準や人的基準の以外は規定されておらず、その内容も室長1人、行政責任者1人(室長兼任可)、相談員2人で、既存のチョッパン相談所の運営形態をそのまま法制化したものにすぎない。つまり、法が制定されたとはいえ、スタッフ人数、予算、施設基準などは既存の運営形態からほとんど改善されていないのである。しかし、釜山の散在型チョッパンに暮らす人々にとって、チョッパン相談所が主要な役割を担っているのは何度も述べたとおりである。広域的な生活圏も、結局のところこの相談所を中心に形成されている。何よりも、チョッパン居住者たちにとって、チョッパン相談所は、他の福祉施設より地理的・心理的な接近性が高い。たんに相談所に‘通勤’させるのではなく、まさに相談所として機能していくためには、チョッパン相談所の強化が課題となる。

その強化の内容は、物資の提供だけでなく、むしろRさんが述べていたように、利用者が喜んで参加できるようなプログラムの工夫であろう。それは自らを遠ざけようとしながらも相談所に通ってくる居住者たちの自尊心を取り戻し、アルコールでは得られない楽しさを体験させるようなものでなくてはならないはずである。また、本研究のひとつの焦点は、彼ら自身の生活戦略を見いだすことであった。一見無為に見え、‘時間つぶし’をして、タダの食料に依拠している人々と考えてはいけな

ではないだろうか。相談所への‘通勤’や彼らのそうした日常は、現在を生きて行く上での彼らのひとつの生活戦略なのである。さらには、彼らはそれなりに死後のことまで気にしている。このような生活主体としての居住者への深い理解が、相談所強化の基礎に置かれる必要があるだろう。

第三に、チョッパン相談所と他の地域社会福祉機関との連携強化が課題として挙げられる。チョッパン居住者や買上賃貸住宅居住者など、彼らの生活にチョッパン相談所が‘気楽なところ’であることは述べてきたし、彼らの心理的な安心感のためにも相談所からの支援は持続すべきであるも当然なことである。ところが、ゴシウォン居住者のように福祉館のサービスを通じ、チョッパン相談所では施設的な限界などで行うことが難しいサービスなど、より多様なサービスの利用が可能となっていることが分かる。他方で、散在型チョッパンの場合、集中型のような明確な‘チョッパン村’の改善や、相談所を中心とした福祉ネットワークの強化だけではすまない。チョッパン相談所の機能強化は、チョッパンの立地している地域の福祉館等で、多様なプログラムに参加する途を拓いて行くことを含んで行われていかないと、現在のような点と点をつなぐような広域的な生活圏を‘時間つぶし’と‘運動で移動している人々を、居住地域の一員として参加させていくことは困難であろう。チョッパン居住者の中には、福祉館へ行くことに抵抗を感じている人々もいるが、そうしたものを取り除くような方向を検討して行くには、チョッパン相談所と地域福祉館など多様な地域福祉機関とが、互いのプログラムや利用者について意見を交換するような協議の場をもうけることが、まず必要ではないか。現在このようなつながりは薄い。

第四に、以上は、生活圏と居住地域という地域空間の問題とともに、社会関係の側面の重要性を示唆している。チョッパン居住者たちの‘時間つぶし’の日常生活や、チョッパン居住者同士の関係の薄さを、どのように変化させていくことが出来るだろうか。散在型チョッパンの場合、この課題が最も困難な点である。福原宏幸(2007: 16-17)は、「排除された人々」において、社会的孤立、自尊心や動機づけの低下などは「否定的アイデンティティ」を形成させることになるという。さらに、包摂へ向かう過程は、経済的・社会的・政治的次元の諸要因を克服するマクロ的な制度・施策を必要とするが、同時に排除された個人のレベルに注目するなら、自己の尊敬に向けた肯定的アイデンティティの再確立のための支援策が求められるという。これはRさんの述べたことと同じである。チョッパン居住者たちが地域社会の一員として自己認識することができる、‘生きがい’を感じることができるような地域福祉の実践が模索されねばならないが、その核となるのは「社会活動への参加が欠けた状態」の解消であろう。高齢であれ、障害を持っていようと‘時間つぶし’と表現される日々は、自己肯定感を更に引き下げて行かざるを得ない。チョッパン密集地域とは異なる散在型チョッパンの場合でも、相談所への‘通勤’だけでなく、自己意識も、外部の「視線」をも変えていけるような、地域貢献活動が、それなりの報酬を動機付けとして開拓されることが、とりわけ大きな課題となろう。なお、この場合の地域とは、釜山のチョッパンの場合、当面はかなり広域的に考える必要があるが、買上住宅などへの転居を契機に、居住地域への参加を促していくことも、すでに述べたように重要である。

第五に、チョッパン運営者のインタビューに出ていたように、釜山のチョッパンは散在しているが

ゆえに、都市再開発等によって簡単に取り壊される危険が大きい。経営難の運営者はむしろそれを望んでいるようにも見えるだけに、放置しておけば、今後チョッパンは減少して行くであろう。欧米のホームレス研究にもあるように、都市のジェントリフィケーションは、ようやく手に入れた彼らの「安定」を壊して、野宿者を増やして行くかもしれない。地域福祉は、こうした都市計画の中に、居住脆弱層が安心して住む場所の確保や、入居条件の敷居を低くすること、「きれいになった都市」から、彼らを排除しない方策を取り込むような政策を提言する役割がある。なお、日本の「寄せ場」の近年の動きのように、老朽化したドヤを NPO が買い取ったり、ドヤ経営者が福祉住居を志向する可能性もある。チョッパン運営者自身も低所得層であることも少なくない釜山の場合、こうした人々も巻き込んでいくような地域づくりが求められているといえよう。

<引用文献>

1. 日本語文献

- Ajit S. Bhalla・Frederic Lapeyre(2004) POVERTY AND EXCLUSION IN GLOBAL WORLD, 2nd edition (= 2005. 福原宏幸・中村健吾翻訳『グローバル化と社会的排除—貧困と社会問題への新しいアプローチ』昭和堂)
- James P. Spredley (1980) Participant Observation (=2010. 田中 美恵子・麻原 きよみ 翻訳『参与観察入門』医学書院)
- Sandra Wallman(1984) Eight London Households (=1996, 福井正子『家庭の三つの資源—時間・情報・アイデンティティ ロンドン下町の8つの家庭』河出書房新社)
- エドワード・ファウラー著；川島めぐみ訳(1998)『山谷ブルース：「寄せ場」の文化人類学』洋泉社
- ジェイムズP. スプラッドリー 著、田中美恵子・麻原きよみ 翻訳(2010)『参加観察法入門』医学書院
- ホームレスの実態に関する全国調査検討会(2013)『平成24年「ホームレスの実態に関する全国調査検討会」報告書』
- ポール・E. ウィリス (1996) 『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房
- 江口信清 編集(1998)『「貧困の文化」再考』立命館大学人文科学研究所
- 江口英一・西岡幸泰・加藤佑治編著(1979)未来社(専修大学社会科学叢書 no. 2)
- 岡本 祥浩(2010)「居住福祉の実現を目指したまちづくりの課題—社会的排除から居住福祉へ」寄せ場 No21、30-42
- 岡本祥浩 (2010) 「居住貧困と居住福祉政策」社会政策 1(4)、41-50
- 堀川勝史他(2008)「寄せ場型地域における自立支援機能を有する共同住宅の居住実態—大阪あいりん地区における居住施設改善に関する研究3」日本建築学会
- 宮崎理 (2014) 「ヨーロッパにおける社会的排除概念：ポストコロニアルな議論との関連において」北星学園大学大学院論集第5号、34-47
- 磯部力ほか(1999)『山谷対策の今後のあり方について』山谷対策検討委員会
- 磯村英一(2010)「社会福祉の 圏外の人々」岩田正美 監修『日本の社会福祉 2 貧困と社会福祉』日本図書センター 269
- 磯村英一(1956)「社会福祉の圏外の人々—あるドヤ街の話」『生活と福祉』第2号、社会福祉調査会、1956年、2-3
- 箕浦康子 (1999) 『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房
- 箕浦康子(2009)『フィールドワークの技法と実際(2)；分析・解釈編』ミネルヴァ書房
- 大橋薫(1962)『都市の下層社会：社会病理学的研究』誠信書房
- 渡邊 勉 (2006) 「地域に対する肯定観の規定因：愛着度、住みやすさ、地域イメージに関する分析」地域ブランド研究 2、99-130
- 稲田七海・水内俊雄(2009)「ホームレス問題と公的セクターおよび民間・NPO セクターの課題—「もう一つの全国ホームレス調査」を手がかりに」『季刊社会保障研究』No45(2)、145-160
- 都築光一 (2007) 「現代地域福祉の理論」都築 光一 編著『新しい地域福祉推進の理論と実際』中央法規出版
- 鈴木亘 (2010) 「無料低額宿泊所問題とは何か」ホームレスと社会 vol. 2、22-27
- 滝脇憲 (2010) 「地域協働型「支援付き住宅」制度化の道程」ホームレスと社会 2010vol2、28-37
- 牧里毎治(2011)「研究の課題と展望」野口定久、平野孝之 (2011) 『リーディングス 日本の社会福祉 6 地域福祉』日本図書センター
- 米野史建(2010)「住宅弱者に対するさまざまな居住支援の取り組み」ホームレスと社会 vol. 2、38-47
- 朴兪美(2008)「韓国と日本の地域福祉計画比較—政策意図と評価動向を中心に」日本福祉大学社会福祉論集 特集号、63-79
- 福原宏幸(2007)「社会的排除/包摂論のパースペクティブ」福原/宏幸編(2007)『社会的排除・包摂と社会政策』法律文化社、11-39
- 福原宏幸・中山徹(1999)「日雇労働者の高齢化・野宿化問題」社会政策学会 編『日雇労働者・ホームレスと現代日本』御茶の水書房
- 飛永高秀(2008)「社会福祉における「住」の意味づけと検討枠組：居住を捉える視点」純心人文研究 14、77-86

- 社会政策学会編(1999)『日雇労働者・ホームレスと現代日本』(社会政策学会年報通巻第43号) ミネルヴァ書房
- 山田 壮志郎(2009)『ホームレス支援における就労と福祉』明石書店
- 西岡幸泰・加藤裕治・江口英一・大山博・市原聰子・浜岡政好・国松久弥・中村陸英・岸本重陳(1974)『日雇労働者—山谷の生活と労働』専修大学社会科学研究所 社会科学年報第8号 未来社
- 西澤晃彦(1995)『隠蔽された外部—都市下層のエスノグラフィ—』彩流社
- 西澤晃彦(2010)『貧者の領域—誰が排除されているのか』河出ブックス
- 小田川華子(2008)「居住と地域福祉」井岡 勉(監修), 牧里 毎治(編集), 山本 隆 (編集)『住民主体の地域福祉論—理論と実践—』法律文化社
- 狩谷 あゆみ、中根 光敏、山口 恵子、北川 由紀彦 (2006)『不埒な希望—ホームレス/寄せ場をめぐる社会学』松籟社
- 狩谷あゆみ編(2006)『不埒な希望 : ホームレス/寄せ場をめぐる社会学』松籟社
- 矢田部 圭介・山下 玲子 (著)(2012)『アイデンティティと社会意識—私のなかの社会/社会のなかの私』北樹出版
- 阿部志郎(2011)「セトルメントからコミュニティ・ケアへ」
- 阿部浩己(2006)「人間の権利としての『居住権』」隅谷 三喜男、阿部 浩己、早川 和男、吉田 邦彦『居住福祉学の構築』信山社
- 岩田正美(1995)『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』ミネルヴァ書房
- 岩田正美(2000)『ホームレス/現代社会/福祉国家—「生きていく場所」をめぐる』明石書店
- 岩田正美(2008)『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣
- 岩田正美(2010)「社会的排除ワーキングプアを中心に」日本労働研究雑誌 No597、10-13
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房 14
- 桜井厚・小林寿子 編著(2005)『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房 16
- 野口定久(2008)『地域福祉論—政策・実践・技術の体系—』ミネルヴァ書房
- 五石敬路(2013)「韓国における国民基礎生活保障法の給付水準の決定及び改定方式」貧困研究 Vol110 34-37
- 玉井金五(1998)『大転換期の日雇労働者問題』大阪市立公文書館『紀要』第10号
- 右田紀久恵(1973)「地域福祉研究の基本的視点—その概念設定をも含めて」住谷磐・右田紀久恵編『現代の地域福祉』法律文化社、1-13
- 右田紀久恵(2011)「分権化時代と地域福祉—地域福祉の規定要件をめぐる」平野隆之、山口稔、宮城孝 編(2008)『コミュニティとソーシャルワーク—地域福祉論 (社会福祉基礎シリーズ)』有斐閣
- 原口剛・白波瀬達也・平川隆啓・稲田七海 編(2011)『釜ヶ崎のススメ』洛北出版
- 日本建築センター(2013)『A QUICK LOOK AT HOUSING IN JAPAN』
- 全泓奎 (2004)「居住貧困層の社会的包摂と地域包括型対応に関する研究 - 韓国、ソウル市を中心として」、東京大学博士論文
- 全泓奎(2006)「韓国の貧困層コミュニティにおけるコミュニティ参加の展開」日本都市計画学会都市計画論文集 No 41-3、635-640
- 全泓奎(2007)「韓国都市部の社会的不利地域における包摂的な地域再生と居住支援」住宅総合研究財団研究論文集 No. 34-2 243-254
- 全泓奎(2011)「韓国におけるワーキングホームレスの現状と居住福祉の課題」総合社会福祉研究 第39号、75-84
- 鮎川 潤(1989)「ドヤ街・寄せ場の社会学的研究序説」金城学院大学論集. 社会科学編 31, 29-50
- 早川和男(2011)「生活空間の使用価値と居住福祉資源の構造」東京経済大学経済学会 269号
- 早川和男(2012)「基本的人権としての「居住の権利」」居住福祉研究 14、39-46
- 株式会社日本総合研究所(2011)『ホームレス等生活困窮者の支援の現状に関する調査事業報告書』
- 竹原健二(1992)『現代地域福祉論』法律文化社
- 中根光敏(1993)『「寄せ場」をめぐる差別の構造』広島修道大学総合研究所 研究叢書 第75号
- 中島 明子(2005)「「ホームレス」支援における居住支援—“ハウジング・ファースト”アプローチ(特集 都市におけるホームレス問題)」都市問題研究 57(11)、43-54
- 中島明子・阪東美智子・大崎 元・丸山 豊・安江鈴子 (2013)『東京都ホームレス地域生活移行支援事業 2004—2009—自立支援と結合したハウジング・ファースト・アプローチに着目した分析—』ハウジング・ファースト研究会
- 中村健吾(2006)「社会理論から見た「排除」—フランスにおける議論を中心に—」経済格差研究センター(CREI) Discussion Paper Series

津田真澄(1972)『日本の都市下層社会』ミネルヴァ書房
 萩原愛一(2010)「住宅セーフティネットは機能しているかー住宅弱者に対する政策と課題ー」国立国会図書館調査及び立法考査局 レファレンス 平成 22 年 3 月号
 湯浅誠(2008)『反貧困ー「すべり台社会」からの脱出』岩波書店
 阪東美智子(2007)「ホームレス等住宅困窮者に対する住宅問題と住宅扶助のあり方」helter-less No32、183-194
 平野隆之、山口稔、宮城孝 編(2008)『コミュニティとソーシャルワーク ー地域福祉論 (社会福祉基礎シリーズ)』有斐閣
 下田平裕身(1988)「雇用変動時代の中の寄せ場」『寄せ場』No1 現代書館
 横山源之助(1949)『日本之下層社会』中央労働学園
 厚生労働省(2009)「社会福祉法第 2 条第 3 項に規定する無料低額宿泊事業を行う施設の状況に関する調査の結果について」
 厚生労働省(2011)「住居のない生活保護受給者が入居する無料低額宿泊施設及びこれに準じた法的位置付けのない施設に関する調査結果について」
 厚生労働省(2014)「重層的な住宅セーフティネットについて」
 厚生労働省職業安定局(2007)『住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査報告書』

2. 韓国語文献

イ・テジン(2008)「住居福祉の現在と改善法案」韓国保健社会研究院
 イ・ギヨン、ベ・ウンソク、パク・ヘグン(2007)「都農複合地域の老人福祉比較研究：地域社会福祉計画報告書を規範として」地方政府研究 11(4)、247-263
 イ・ソジョン(2006)「板子村からチョッパンまで：我が国における貧困層居住地の変化過程に関する研究」社会福祉研究 No29、167-208
 イ・ヒョンジュ、アン・キドク「チョッパンに住む女性独居老人の生に関する研究」保健社会研究 33(2)、33-62
 イ・ヒョンジュ、オン・ミョンヨン(2013)「チョッパンを管理する女性独居老人のチョッパン村での居住経験と意味」韓国家族福祉学 vol139、143-176
 ガンヘギウの他(2011)『地域福祉活性化のための公共部分の役割と戦略研究』保健福祉部・韓国保健社会研究院
 キム・ギョソン(2009)「地域貧困の格差と要因に関する研究」韓国社会福祉学
 キム・ソンヒ(2011)「チョッパン居住者の社会的支持と自己効能感との関係研究」カトリック大学社会福祉学科修士論文
 キム・ソンミ(2007)「チョッパン住民のニーズに合わせる居住支援策の模索」全国チョッパン再生フォーラム『チョッパン住民の居住安定のためのフォーラム』5-41
 キム・ソンミ(2011)「チョッパンなどの低価居処に対する地域再生的短草」『2011 居住福祉コンファレンス』
 キム・ヒョジン(2009)「永登浦チョッパン村の住民の暮らしと都市貧民空間としての機能」漢陽大学大学院 修士論文
 キム・ヘスン(2012)「住宅政策と居住福祉」『居住福祉の新しいパラダイム』社会評論、73-97
 キム・ヨンオック、ジョ・ヒウン(2012)「チョッパン居住者たちの連帯意識と生活の仕組みとの相互関連性に関する研究」韓国都市設計学会 2012 年度秋季学術大会
 グォン・ジソン(2008)「チョッパン居住者の日常生活に関する文化記述誌」韓国社会福祉学 vol160, No4、131-156
 グォン・テスン(2007)「チョッパン相談所の現況と方向」全国チョッパン再生フォーラム『チョッパン住民の居住安定のためのフォーラム』61-84
 ジャン・ミンチョル(2011)「チョッパン相談所の役割と課題」『都市と貧困』23 号、8-25
 ジョ・ヒウン、キム・ヨンウク(2012)「チョッパン居住者たちの連帯意識と空間構造との相互関連性に関する研究」韓国都市設計学会 2012 年度秋季学術大会
 ジョン・ナムイル(2007)「社会史的な観点から見た韓国の都市貧民の形成背景と居住文化」韓国住居学会
 ジョンホンウォン、チェファン(2014)「地域社会福祉計画の意義と第三期計画の樹立方案」保健福祉フォーラム、18-31
 ジン・ミユン(2013)「最近の居住貧困の様相、どのような対策が必要なのか？」保健福祉フォーラム第 197 号、2013. 3、42-55

ソ・ジョンギョン(2012)The 2nd East Asia Inclusive CITYNet Workshop 資料、154-181

ソウル市(2013)『非住宅居住世帯向け居住支援方案に関する研究』

ソウル市・保健福祉部(2000)『チョッパン地域実態調査および効率的政策開発』 韓国都市研究所

チョンソンスク(2011)「大邱地域社会福祉計画の問題点と改善課題」社会科学論叢 30(1)、267-284

チョン・ヨジュ、キム・チョンドック(2013)「チョッパン地域に居住する男性老人の人生に関する根拠理論アプローチ」社会科学研究第 24-2、295-322

チョンヨンジュ(2009)「釜山地域のチョッパン居住者の社会福祉サービスの利用と自己効力感の関係に関する研究」仁済大学大学院修士学位論文

ナム・ウォンソップ(2006)「都市貧民居住地の空間的な再編と意義」文化科学 39 号

ナム・ギチョル(2006)「社会両極化と社会福祉実践」『状況と福祉』71-115

ナム・ギチョル(2012)「民間の地域社会保護」『居住福祉の新しいパラダイム』社会評論、244-275

ナム・チョルカン(2007)「非営利民間団体の居住福祉活動の必要性と課題」『都市と貧困』韓国年研究所、5-15

ナム・チョルガン(2009)「脆弱階層の居住福祉政策の現況と課題」『福祉動向』

ハ・ソンギョウ(2007)「不良居住実態と政策課題—チョッパンを中心に」『韓国社会政策』韓国社会政策学会 13 号、124-168

ホ・ソヨン(2010)「チョッパン地域の一人暮らしの男性老人の生の経験」韓国老年学 Vol30、241-260

ホン・インオク(2006)『地域社会と住居福祉』 韓国都市研究所

ヤン・マンゼ(2012)「地域社会福祉の正体性に関する批判的分析—『地域社会福祉論』教材の理論的な地域と価値を中心に」批判社会政策

ユ・ヨンウ(2009)「住居権と最低住居基準未達層人権改善のための政策討論会」

居住福祉財団(2011)『2011 年度賃貸住宅入居者のための福祉マニュアル』

国家人権委員会(2004)『社会的排除の観点から見た貧困層の実態調査』

国家人権委員会(2008)『非住宅居住民の人権状況実態調査』 韓国都市研究所

国政調整会議(2007)『チョッパン及びビニールハウス村の住居実態調査報告書』

国土開発研究院(1989)『都市貧困層の対策に関する研究』

国土研究院(2006)『居住両極化の現況及び課題』

国土研究院(2010)『韓国の都市化過程と政府政策に関する研究』

国土海洋部(2009)『チョッパン及びビニールハウス居住者住居支援業務処理指針』

国土海洋部(2007)『最低居住基準未達世帯に対する支援対策』

金・ミョジョン(2007)「社会史的観点からみた都市貧民の形成と居住文化」韓国居住福祉学会論文集 vol118、79-88

大韓住宅公社(2005)『ビニールハウス村の住民居住実態及び居住安定対策に関する研究』

朴・シンヨン(2009)「居住福祉政策の評価と民間活動」『居住福祉コンファレン』30-48

保健福祉部(2006)『市・都地域社会福祉計画の樹立マニュアル』

保健福祉部(2009)『チョッパン居住者のための支援対策』

保健福祉部(2013)『第 3 期(2015-2018)地域社会福祉計画の樹立マニュアル』

保健福祉部(2014a)『2014 年度基礎生活保障制度案内』

保健福祉部(2014b)『2014 年度障害者福祉施策案内』

保健福祉部(2014c)『2014 年度社会福祉館の運営規定』

釜山広域市(2014)「チョッパン現況(2014 年 6 月時点)」社会福祉課内部資料、社会福祉課-16733 号

釜山広域市・釜山福祉開発院(2010)『第二期 釜山広域市 地域社会福祉計画(2011~2015)』釜山広域市

安全行政部(2014)『2014 年地方自治団体行政区画及び人口現況』

全国チョッパン相談所協議(2009)「各チョッパン地域の特徴」内部資料

全国チョッパン相談所協議会(2011)第 4 回定期総会資料

全国チョッパン相談所協議会(2012)第 5 回定期総会資料

韓国都市研究所(2004)「野宿経験があるチョッパン居住者の定着のための課題」

韓国都市研究所(2000)『チョッパン地域の実態及び政策開発』

韓国都市研究所(2005)『住居貧困層の住居安定対策に関する研究 2-チョッパンを中心に』

韓国都市研究所(2011)『居住脆弱階層全国実態調査』保健福祉部

韓国都市研究所(2012)『居住福祉の新しいパラダイム』社会評論

韓国保健社会研究院(2008)『社会統合のための社会的排除階層支援方案研究』韓国保健社会研究院

- 이태진(2008) 「주거복지의 현재와 개선방안」 한국보건사회연구원
- 이기영,배은석,박해금(2007) 「도농복합지역의 노인복지 비교연구 : 지역복지계획 보고서를 기반으로」 지방정부연구 11(4),247-263
- 이소정(2006) 「판자촌에서 쪽방까지 : 우리나라의 빈곤거주지 변화과정에 관한 연구」 사회복지연구 No29.167-208
- 이현주,안기덕(2013) 「쪽방에 거주하는 여성 독거노인의 삶에 관한 연구」 보건사회연구 33(2),33-62
- 이현주,엄명용(2013) 「쪽방을 관리하는 여성독거노인의 쪽방촌 거주경험과 의미」 한국가족복지학 vol39,143-176
- 강혜규 외(2011) 『지역복지 활성화를 위한 공공부문의 역할과 전략 연구』 보건복지부·한국보건사회연구원
- 김교성(2009) 「지역빈곤의 격차와 요인에 관한 연구」 한국사회복지학
- 김성희 (2011) 「쪽방거주자의 사회적지원과 자기효능감 관계 연구」 카톨릭대학교 사회복지학과 석사논문
- 김선미(2007) 「쪽방주민의 니드에 맞는 주거지원정책 모색」 전국쪽방재생포럼 『쪽방주민의 주거안정을 위한 포럼』 5-41
- 김선미(2011) 「쪽방 등의 저렴거처에 대한 지역재생적 단초」 『2011 주거복지컨퍼런스』
- 김효진(2009) 「영등포 쪽방촌 주민들의 삶과 도시 빈민공간으로서의 기능」 한양대학교 대학원 석사학위 논문
- 김혜승 (2012) 「주택정책과 주거복지」 『주거복지의 새로운 패러다임』 사회평론,73-97
- 조희운 `김영옥(2012) 「쪽방거주자들의 연대의식과 생활구조와의 상호관련성에 관한 연구」 한국도시설계학회 2012 년도 추계학술대회
- 권지성 (2008) 「쪽방주민의 일상생활에 관한 문화기술지」 한국사회복지학회 vol60,No4,131-156
- 권태순(2007) 「쪽방상담소의 현황과 방향」 전국쪽방재생포럼 『쪽방주민의 주거안정을 위한 포럼』 61-84
- 장민철(2011) 「쪽방상담소의 역할과 과제」 『도시와 빈곤』 23 호,8-25
- 조희운 `김영옥(2012) 「쪽방거주자들의 연대의식과 생활구조와의 상호관련성에 관한 연구」 한국도시설계학회 2012 년도 추계학술대회
- 전남일(2007) 「사회사적인 관점에서 본 한국의 도시빈민의 형성과정과 도시문화」 한국주거학회
- 정홍원,최 환(2014) 「지역사회복지계획의 의의와 제 3 기 계획 수립 방안」 보건복지포럼,18-31
- 진미윤(2013) 「최근 주거빈곤의 양상, 어떤 해법이 필요한가?」 보건복지포럼 제 197 호(2013.3),42-55
- 서종균(2012)The 2nd East Asia Inclusive CITYNet Workshop 자료,154-181
- 서울특별시(2013) 『비주택 거주가구 주거지원 방안 마련을 위한 연구』
- 서울시·보건복지부(2000) 『쪽방지역실태조사 및 효과적인 정책개발』 한국도시연구소
- 조성숙(2011) 「대구지역 지역사회복지계획의 문제점과 개선과제」 사회과학논총 30(1) `267-284
- 정여주, 김정득(2013) 「쪽방지역에 거주하는 남성 노인의 삶의 과정에 대한 근거이론 접근」 사회과학연구 제 24 권 2 호, 295-322
- 전영주(2009) 「부산지역 쪽방거주자의 사회복지서비스 이용과 자기효능감의 관계에 관한 연구」 인제대학교 대학원 석사학위논문
- 남원섭(2006) 「도시빈민주거지의 공간적 재편과 의의」 문화과학 39 호
- 남기철(2006) 「사회양극화와 사회복지실천」 『상황과 복지』 71-115
- 남기철 (2012) 「민간의 지역사회보호」 『주거복지의 새로운 패러다임』 사회평,244-275
- 남철관(2007) 「비영리민간단체의 주거복지활동의 필요성과 과제」 도시와 빈곤,한국도시연구,5-15
- 남철관(2009) 「취약계층의 주거복지정책의 현황과 과제」 복지동향
- 하성규(2007) 「불량주거실태와 정책과제-쪽방을 중심으로」 『한국사회정책』 한국사회정책학회 13 호 ,124-168
- 허소영(2010) 「쪽방지역에 홀로 사는 남성 노인의 삶의 경험」 한국노년학 Vol30,241-260
- 홍인옥 (2006) 『지역사회와 주거복지』 한국도시연구소
- 양만재 2012 「지역사회복지 정체성에 관한 비판적 분석: 『지역사회복지론』 교재의 이론적 지식과 가치 중심으로」 비판사회정책
- 유영우(2009) 「주거권과 최저주거기준미달층인권개선을 위한 정책토론회」

주거복지재단(2011) 『2011 년도 매입임대주택입주자를 위한 복지메뉴얼』
 국가인권위원회(2004) 『사회적배제 관점에서 본 빈곤층 실태조사』
 국가인권위원회(2008) 『비주택거주민의 인권상황실태조사』 한국도시연구소
 국정조사회의(2007) 『쪽방 및 비닐하우스촌 주거실태조사보고서』
 국토개발연구원(1989) 『도시빈곤층 대책에 관한 연구』
 국토연구원(2006) 『주거양극화 현상 및 과제』
 국토연구원 (2010) 『한국의 도시화 과정과 정부 정책에 관한 연구』
 국토해양부 (2009) 『쪽방 및 비닐하우스 거주자지원처리지침』
 국토해양부(2007) 『최저주거기준미달가구에 관한 주거대책』
 김요정(2007) 「사회사적관점에서 본 도시빈민의 형성과 주거문화」 한국주거복지학회논문집 vol18,79-88
 대한주택공사(2005) 『비닐하우스촌 주거실태 및 주거안정대책에 관한 연구』
 박민영(2009) 「주거복지정책의 평가와 민간활동」 주거복지컨퍼런스,30-48
 보건복지부(2006) 『시·군 지역사회복지계획 수립 매뉴얼』
 보건복지부(2009) 『쪽방거주자를 위한 지원대책』
 보건복지부(2013) 『제 3 기(2015-2018)지역사회복지계획 수립 매뉴얼』
 보건복지부(2014a) 『2014 년도 기초생활보장제도 안내』
 보건복지부(2014b) 『2014 년도 장애인복지시책안내』
 보건복지부(2014c) 『2014 년도 사회복지관 운영규정』
 부산광역시(2014) 「쪽방현황(2014 년 6 월시점)」 사회복지과 내부자료 `사회복지과-16733 호
 부산광역시·부산복지개발원(2010) 『제 2 기 부산광역시지역사회복지계획(2011~2014)』
 행정안전부(2014) 『2014 년 지방자치행정구역 및 인구현황』
 전국쪽방상담소협의회(2009) 「각 쪽방상담소의 특징」 내부자료
 전국쪽방상담소협의회(2011)제 4 회 정기총회 자료
 전국쪽방상담소협의회(2012)제 5 회 정기총회 자료
 한국도시연구소(2004) 「노숙경험이 있는 쪽방거주자의 정착을 위한 과제」
 한국도시연구소(2000) 『쪽방지역의 실태 및 정책개발』
 한국도시연구소(2005) 『주거빈곤층 주거안정대책에 관한 연구 2-쪽방을 중심으로』
 한국도시연구소(2011) 『주거취약계층 전국실태조사』 보건복지부
 한국도시연구소(2012) 『주거복지의 새로운 패러다임』 사회평론
 한국보건사회연구원(2008) 『사회통합을 위한 사회적배제계층 지원방안 연구』 한국보건사회연구원

3. 電子資料

韓國土地住宅公社居住福祉處(2010) (http://www.lh.or.kr/lh_html/lh_stability/stability_2_2.asp
 2013. 10. 31)
 国民健康保険公団(2014) 「老人長期療養保険制度について」
 (<http://www.longtermcare.or.kr/portal/site/nydev/>. 2014. 1. 30)
 国民建団保険公団(2014) 「医療給与受給者の本人負担額について」 ([http://www.nhis.or.kr/2014. 4. 5](http://www.nhis.or.kr/2014.4.5))
 国民年金管理公団ホームページ(http://www.nps.or.kr/jspage/info/easy/easy_04_01.jsp. 2014. 1. 30)
 大韓土地住宅公社(2014) 「買上賃貸住宅の入居手続きについて」 ([http://myhome.lh.or.kr/welfare/support/ty
 pe01.asp](http://myhome.lh.or.kr/welfare/support/type01.asp)2014. 5. 1)
 文化芸術委員会ホームページ「文化ヌリカードについて」 (<http://www.arko.or.kr/business/page0501.jsp>. 201
 4. 1. 30)
 保健福祉部 (http://www.mw.go.kr/front_policy/jc/sjc0106mn.jsp?PAR_MENU_ID=06&MENU_ID=060604
 保健福祉部(2012) 「野宿者などの福祉及び自立支援に関する法令」 施行令および施行規則([http://www.mw.go.kr
 /front_new/al/sal0301vw.jsp?PAR_MENU_ID=04&MENU_ID=0403&CONT_SEQ=266885&page=1](http://www.mw.go.kr/front_new/al/sal0301vw.jsp?PAR_MENU_ID=04&MENU_ID=0403&CONT_SEQ=266885&page=1) 2014. 3. 30)
 保健福祉部(2012) 「野宿者などの福祉及び自立支援に関する法令」 施行令および施行規則([http://www.mw.go.kr
 /front_new/al/sal0301vw.jsp?PAR_MENU_ID=04&MENU_ID=0403&CONT_SEQ=266885&page=1](http://www.mw.go.kr/front_new/al/sal0301vw.jsp?PAR_MENU_ID=04&MENU_ID=0403&CONT_SEQ=266885&page=1))
 保健福祉部(2013) 「野宿人などの福祉及び自立支援に関する法令について」

保健福祉部 (2014) 「2014 年度基礎生活保障法について」 (http://www.mw.go.kr/front_new/jc_m/sjcm0101ls.jsp?PAR_MENU_ID=06&MENU_ID=06230901&SUB_SEQ=1521 2014. 4. 5)

保健福祉部 (2014) 「2014 年度基礎生活保障法について」 (http://www.mw.go.kr/front_new/jc_m/sjcm0101ls.jsp?PAR_MENU_ID=06&MENU_ID=06230901&SUB_SEQ=1521 2014. 4. 5)

保健福祉部 (2014) 「緊急福祉支援制度について」 (http://www.mw.go.kr/front_new/jc/sjc0125mn.jsp?PAR_MENU_ID=06&MENU_ID=062801, 2014. 3. 12)

保健福祉部 (2014) 「社会サービスについて」 (http://www.mw.go.kr/front_new/jc/sjc0108mn.jsp?PAR_MENU_ID=06&MENU_ID=060801, 2014. 3. 12)

保健福祉部 (2014) 「自活勤労事業について」 (http://www.mw.go.kr/front_new/jc/sjc0125mn.jsp?PAR_MENU_ID=06&MENU_ID=062502, 2014. 3. 12)

釜山広域市 (2014) 「釜山広域市の住宅現況及び普及率」
(http://stat.kosis.kr/statHtml_host/statHtml.do?orgId=202&tblId=DT_901&conn_path=I3, 2014. 2. 3)

釜山広域市 (2014) 「釜山広域市の産業大分類別事業体及び従業者数について」 (http://stat.kosis.kr/statHtml_host/statHtml.do?orgId=202&tblId=DT_C90101&dbUser=NSI_IN_202#, 2014. 2. 20)

釜山広域市 (2014) 「釜山広域市の一般現況について」 (<http://www.busan.go.kr/SubPage.do?pageid=sub040401>, 2014. 3. 30)

釜山広域市東区 (2014) 「東区の一般現況について」

釜山広域市社会福祉協議会 (2014) 「釜山広域市の釜山広域市社会福祉機関現況について」 (<http://www.bswin.net/02/02.php>, 2014. 2. 15)

釜山交通公社ホームページ、https://www.humetro.busan.kr/korea/01/04_01.php)

安全行政部 (2014) 「2012 年度基礎生活保障受給世帯及び人数について」 ([http://www.laiis.go.kr/pegasusIndex.do?athena.pegasus.menuid=AHlbAAAAHDAPgBt\\$\\$\\$__system&detailPage=/gov/mogaha/lips/web/lbi/lbi1060200/Lbi1060200Action.do?method=selectNI1060200&idx_cd=1060200&dist_cl=000000000000&AgsSelPos=left&AgsSelCont=AHlbAAAARKSbCQB0\\$\\$\\$__system&AgsSelPosRoot=MiddleTopMenu_Lips&dynamic=false&fromtop=true&menuIdToBeExtended=AHlbAAAAHDAPgBt\\$\\$\\$__system](http://www.laiis.go.kr/pegasusIndex.do?athena.pegasus.menuid=AHlbAAAAHDAPgBt$$$__system&detailPage=/gov/mogaha/lips/web/lbi/lbi1060200/Lbi1060200Action.do?method=selectNI1060200&idx_cd=1060200&dist_cl=000000000000&AgsSelPos=left&AgsSelCont=AHlbAAAARKSbCQB0$$$__system&AgsSelPosRoot=MiddleTopMenu_Lips&dynamic=false&fromtop=true&menuIdToBeExtended=AHlbAAAAHDAPgBt$$$__system), 2014. 6. 1)

安全行政部 (2014) 「釜山広域市の財政自立度について」 (<http://www.laiis.go.kr/gov/mogaha/lips/web/lfi/lfi3010100/Lfi3010100Action.do?method=selectNI3010100>, 2014. 6. 1)

安全行政部 (2014) 『2014 年地方自治団体行政区画及び人口現況』

障害者福祉館協会 (2014) 「全国障害者福祉館現況について」 (<http://www.hinet.or.kr/2014.5.1>)

韓国土地住宅公社 (2013) 「居住福祉事業について」 (http://www.lh.or.kr/lh_html/lh_stability/stability_2_2.asp 2013. 10. 31)

韓国土地住宅公社 (2013) 「韓国における居住福祉事業について」 (http://www.lh.or.kr/lh_html/lh_stability/stability_2_2.asp 2013. 10. 31)